

【日記翻刻】 奥田八二日記（1988・89年）

奥田，直美
奥田八二氏長女

橋口，甚之輔
元自治労福岡県本部執行委員長

藤岡，健太郎
九州大学大学文書館：准教授

<https://doi.org/10.15017/2230528>

出版情報：奥田八二日記研究会会報．2，pp.1-312，2019-03-25．奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン：

権利関係：

【日記翻刻】

奥田八二日記（1988・89年）

翻刻 奥田 直美（1988年）

橋口甚之輔（1989年）

校訂 藤岡健太郎

凡 例

1. 原文は一部を除き縦書きであるが、横書きに直した。
2. 漢字の旧字体および異体字は固有名詞や漢詩の引用等を除き、常用漢字体または印刷標準字体に直した。また原文に「𠄎」と記されたものはすべて「經」とした。
3. 明らかな誤字・脱字については適宜修正した。疑問のあるものについては「ママ」を付した。判読できなかったものは「^(不明)□」とした。
4. 踊り字のうちくの字点は文字に直して表記した。
5. 原文の振り仮名はそのままとした。
6. 原文では句点と読点が明確に判別できない書き方がなされているため、本翻刻においては文脈等から適宜句点・読点を判断した。
7. [] で記されたものは原文の記述である。
8. 日記本文記入欄以外に記入されたものは【欄外記入】とし、各日の末尾に掲載した。各巻末に記載された記事については【「○○欄」への記載】とした。
9. 原文中に差別用語等がみられるが、歴史資料としての意義に鑑み、すべて原文のとおりとした。
10. 日記に貼付または挟み込まれている新聞記事等については、その記事名・掲載紙の情報等を【 】で記し、文面については掲載しないこととした。
11. 翻刻は原則として日記全文を対象としたが、研究会の判断により省略した部分がある。

1988年

新年の所感

ゼロシーリングとかマイナスシーリングでの財政運営がつづいたが、昨年九月の緊急経済対策で六兆円もの内需拡大策がとられ、年末の政府予算案でもシーリングがはずされ、特に公共事業は二〇%も積み上げられたので今年は経済に活気が出そうだ。どこまで息がつづくのかわからないが、当面はよさそうだ。県税収入も予算以上に伸び十二月議会では一五〇億円余の基金埋め戻しをすることができた。辰年であるから昇龍になぞらえて主体性を軸に、今年は景気が出せる年で、年末から「挑戦と実行」の年と自から規定づけたのであった。二一世紀へのプラン第一次実施計画二年目だし、「ニュー福岡」も二年目になった。仕事はうんとあるし、やればできる年といえそうだ。今年はソウルオリンピック、来年は福岡市のアジア太平洋博、再来年は福岡県二巡目の国体が待っている。これらビッグイベントへの準備がなされるので、それだけでも景気にはずみがつく。知事の海外出張も今年が潮時だという人がある。但し海外旅行は日程がぎっしり組まれるから希望することはない。健康にどう注意すればよいか、毎日のテーマだ。

1月1日（金）

まずはめでたい迎春

サリが一年十ヵ月になる。カタコトを前から盛んにきかせ、全く理解ができなかったのに、近頃は少しわかる発音も混ってきた。直美は相かわらずの自我の強さを見せている。久美と麗衣はすすく伸びて快活にみえる。何か身につけるよう心懸けてくれればよいと思う。受験競争の渦に単に呑み込まれてはいけない。啓二は、この円高で仕事が減ったと慨いている。ユーザーが仕事を外注する傾向があるためらしい。年末は、一ドル二〇円代にまで上って年越している。一二〇円をきるなら大騒ぎになるだろう。私の手許には今六〇〇ドルほどあるが、これは一五四円三〇銭のレートで、八月下旬北欧旅行した時の余りである。四ヵ月の間に三四円の円高。七七・七%ドル安である。ドル安と世界的な金融恐慌がおこりそうだというのが今年の課題。そうした中で、孫たちがすすく育ってほしい。お蔭で、みんな健康で新年を迎えることができた。まずはよいとせねばなるまい。

1月2日（土）

教育県民運動をおこすべき

協会系の人達が十一時頃から年始の集りに来た。社会問題研究所も協会も同様に、経営、活動の面で沈滞困難を抱えている。労働戦線の沈滞、再編が進んでいて、古い体質の運動指導では大衆に与えるメリットある活動にならないからである。発言力も発言の場も縮小

を余儀なくされている。高教組から出ている県評の大塚君に私はいった。県政推進の上からも高等学校教育の役割の重要性に注目したいが、今の県教育委員会を包む雰囲気にして、高等学校における管理体制にして、その課題に応えるだけの自覚も体制もないことは明らかである。高教組は何とか考えを改めて体制づくりに力を注げないものか。協会運動もここに着眼して新しい地域運動の創造を戦略目標にできないものか、と、私の問題提起に今日来た人達（八丁、衣笠、大塚、高崎、馬原、林、熊谷はうなずいてくれた。協会の活性化こそが課題なのだ。

1月3日（日）

健康でなくてはならない

一彦は早朝、直美は夜、新幹線と航空便とで別々に帰京した。親子といっても昔と違って互にドライになっている。親は子の世話になるまいとするし、子は親の面倒を見まいとする風潮がわが家にも例外でないことがわかる。尤も精神的なものというよりは生活振りといった方がいいだろう。健康でなくてはすべての基礎は崩れてしまう。病気なのに面倒は見ないとはいうまいが、病気ならそれだけに相手に遠慮することになるろう。「お元気でネ」と軽く言うが、この言葉が腹の底から出た願いであることを反芻したい。朝起きた時、今日も一日無事健康で過ごしたいと祈るのである。子がいるからいいとは決して思わないことが必要であろう。先日、刀出に行った時、七二兄と同年齢に達し、近い親族の中でこれでも最長寿になろうとしている。有難き幸せというしかない。よくよく無理をしないよう今後は留意していきたい。

1月4日（月）

新鮮味のない新年

「おめでとう、本年もよろしく」の連発であるが、どうも近頃は新年という感がうすらいだ。年があらたまるから新年という事実直面するが、めでたいとか、今年こそはという特別の感情が湧かないのはどうしてであろうか。ステーションプラザで、ひる、薬業界の新年会があって祝辞をのべ、宴会となったが、出ているごちそうは、見たくないもの、食欲をそそらないものである。それは日常的にあまりにも身近にあるものばかりだからである。「飽食時代」なのである。昔は、正月だから、正月を待って、口に入るものが、今は、日常的に、かつ過剰に口に入る。新年だからといって改まることはない。着るものも、また然り。逢う人だけが同じである。まあ、今年中に予見でき、起こりうる事柄について、評価したり感想をのべたりしあう意味で新年という言葉があてはまる。子供たち、若人たちにこうした感慨をきいてみたいものだ。正月に新鮮味を感じないほどにこちらが古びてしまったというのが真実だろう。

1月5日（火）

少し狂いはじめているのではないかとすら思う

啓二らが安部さん宅に行っていて、夜送り届けてくれ、拙宅で安部夫妻に新年のあいさつをした。家を新築したので、お祝いに壺を進呈した。話がフィンランド旅行になったり、この頃はやりのテレホンカードになったりした。又、知事公舎を一般の結婚式に開放したらどうかとの提案すら受けた。教育会館の跡地をNTTが買い取る話題が出たり、今流行の天神西通りは東京の地上げ屋があちこち買い占めて地価を吊上げているとの話も聞かされた。ともかくみんな金持ちだ。五〇〇円、千円のテレホンカードを単に買っておくだけで記念にストックする時代である。新聞にはNTTの五万円株が一二〇万円程度で売出され、一時は三二〇万円もしたが、今は二〇八万円にさがり「どうしてくれる」とNTTに文句の電話が殺到するとの記事が新聞に出たり、一方で満ち足り、他方で狂気じみたことが満足の中から相ついでいる。今年の途中、何か大事がありそうにも思える。

1月6日（水）

お寺まいり

新年のあいさつまわりをする中で、ゆとりができたので、光円寺に行った。円日氏にあうことができたが、葬儀がすんだばかりの取込中だったためだろう、本堂には上がらず、客間に通って仏壇におまいりしたに止めた。円日氏はお寺の月刊誌「むれ」を送って来てくれる。説教にも熟達したおちついた僧だ。大屋祐雪氏と同じく経済を卒業したという。年末に姫路に帰った時も刀出、本家、打越の三つの仏壇にお参りしたし、刀出の墓参りもした。福岡で、ということで気がかりであったのだが、今日それを果たしえた。できれば小郡にも行っておきたい。それから正月の三社参りというのも気になる。三社でなくて一社でも、今年はまだ参っていない。折を見つけてどこかにとび込んだらと思っている。随行の福原君が、以前横目で見っていた左翼の奥田とはイメージが違うという。唯物論者は寺や墓や神社は拒否すると思っていたというのだ。

1月7日（木）

県警との間の「雪どけ」というが

朝のうち、平和台で県警の新年視閲式があり、県庁行政棟前では分列行進に立ち合った。昨日は本部長が知事室にきて暴力団抑制の話をしていくし、十八日には署長会議に又顔を出すことになっている。知事と警察とが「雪どけ」してきたと新聞は書いている。前回知事選直後の「お布施」事件から一昨年近藤副知事辞任事件まで、福岡県警が奥田知事を意識的に向うにまわして立ちまわったことは紛れもない。酒井、木村の二人の本部長はとくにそうだった。中曽根内閣下、中央で後藤田が官房長官として腕をふるっていたことも事実で、今はこの二人も中央で動いていない。できれば足をすくってでも知事を追落とそ

うと努力したのだろうが、思いは遂げられなかったわけだ。「雪どけ」というけれど、こちらは、そういう策動は微塵もしてないのだから、どちらがとけてきたかは明かだろう。

1月8日(金)

中連の旗開きに思う

中立労連の旗びらきがあった。十一月二十日に連合が発足して、中央の中連は解散したが、地方では県評も中連も次の段階まで解散しないでいるわけだ。いずれ地方労戦の統一が課題となってくるだろうが、先ずはメーデーの統一など、共同行動がうまくいくかどうかが行先を見る一つの鍵となろう。労働四団体の間にさほど大きなへだたりはないだろうが、メンツや役員の処遇などの問題が残っているのであろう。右傾化の歯どめがほしいとの慎重論が共産党系の指導者をもつ組合にあるようだが、それは統一した中でも不可能ではないと思う。実際の闘争力、意識に歯止めがなくなっているのが現状で、運動のあり方形態を根本から建てなおす努力が再び必要となってきた。労働組合が自主的にそれを行うことができないなら、客観条件が変化して外から要請されるまで待つしかないかも知れない。ともかく今は大きな流れの中でベストを尽くすべきだろう。

1月9日(土)

人事管理における組合運動偏見

急に寒波が来た感じ。風強く小雨降る。今日は久しぶりに日程も少く、県職労の橋口委員長、城島書記長、社会党の竹村、小田、それに秘書室の杉山という顔ぶれで、特別会議室で中食をとりながら、組合側の思いを披露してもらう会となった。特別昇給制の導入について組合側が二の足をふんでいる理由の最大のは亀井時代に定着した組合罪悪感に基づく差別昇給が行われうるという点にあるようだ。こうした組合への偏見が役付への昇格についても未だ固定的にあらわれている。なかなか係長になれないとか、主査になるに際してさえ、組合運動をした者には十年というような経年の差のある例があるという。人事課の中にそうした偏見が定着しているし、ほとんどの役付職員が偏見をもって組合活動を見ている。これあるがゆえに特昇導入に際し勤務成績加味ということに賛成し難いのだと彼らは主張している。こうした実態をどうときほぐしていくか急務だろう。

1月10日(日)

鴻臚館遺構にわかに関心される

調査期間

(十二月二十五日
一月十日)

年末から年始にかけてにわかに関心するものが鴻臚館遺構発掘である。こ

こは福岡城、陸軍連隊、そして平和台球場がつづき、遺構は破壊されどうしであったが、今回、太鼓判つきでそれが鴻臚館跡であることがわかったようだ。今の球場の外野付近、約一〇〇メートル四角のあたりである。京と難波と筑紫の三カ所にあった大陸に向けた迎賓館開門たる鴻臚館は今では福岡のこれだけが確認しうるものだという。他の二つはあとかたを確かめようにもその術がないといわれる。それだけに、平和台のそれは国の立場からも古代史究明に貴重な価値ある遺跡と折紙がつけられるもの。今後、平和台球場の移転をはじめ、この遺跡発掘研究をどのように進めていくかが大きな課題となってきた。国立博物館誘致問題とからめ目をはなせない問題がでてきたわけである。

1月11日（月）

国際化問題がますます具体的に

水野会長、大内副会長の二人が代表して来室。福岡県の国際化に関する懇話会提言（報告）が知事に手渡された。国際情報文化センター及び会館の設立が提言の二つの柱である。県庁舎跡地に会館をとというのがねらいである。福岡市では交流協会ができていし、会館建設の構想もあるようなので、県は県としての役割を果たさねばなるまい。先日からの鴻臚館遺構の話といい、にわかには国際づいてきた新年明けである。国際県としての福岡の位置もようやく明白になってきたし、なすべきこともだんだん明らかになってきた。インターナショナルスクールについて、新年挨拶に行ったとき九電の幹部から発言があったが、この方面の問題にも、やがて取り組まねばならぬだろう。留学生が円高で生活に困っているということも焦眉の問題だと思うが、確たる処方箋がないので困る。東京では短期旅券でのアルバイトがふえているというし……

1月12日（火）

助信氏の開き直ったセリフ

十二時から母子寡婦連合の代表者と中食こんだん会に入る直前助信県議が知事に合わせよとのことで入室。十二月県議会のあとの私の記者会見の発言についての彼の憤りを吐露した。議会が期限内に終わったのは「問題が少なかった」と私がいったというので、彼は、給与振込問題での野党の反撥を自分があれほど心身を砕いて鎮めたことを知事は全く評価しないばかりか、あの発言では納められた野党の怒りにこたえたことにはならない、自分の努力が台なしになったので、社党を脱党するか、幹事長を辞める、といい放って出て行った。知事室に入るや否や、今日は知事とケンカしに来たというセリフであった。まあまあととめるスキもない。又彼は教育会館跡地をNTTに売ると知事がいったので、跡地委（議会特別委）での議論が困難になってしまった。その責任はどうしてくれるかともかみついてきた。新聞記事をそのまま信用してのことだが、知事が言った通り各紙は書いたはずと押ししてきた。

1月13日(水)

新たに、改めて論ずべき家族論

西日本新聞の朝刊に富安兆子さんが「私の家族論」をのせているのを拝見。私が考えていることと同じような論潮であったので興味をひいた。「同居必ずしも親孝行ではない、というのがこれからの親子関係でいえるのではないかと思いますよ」「私の理想としては年齢的にギリギリまで自立した生き方をすること。それは基本的には個を大事にすることです。そして最後は共同体に身をゆだねる。血のつながりなどなくてもそれこそがこれからの家族となるわけです」と結んでいる。共同体と向う三軒両隣からはじまって、部落、町、市町村、県と昇っていきだろ。われわれは「ふるさと」を去ってはいけなし、抹殺したり、捨てたりしてもいけない。昨年秋西南大の学長をしていた古賀先生夫妻が東京の息子さんの所に身を寄せるため離福されたが、隣や故郷を棄ててしまうことになるし、一種の牢獄に入るようになるように思えてならない。

1月14日(木)

職員用の図書室と会館があつてよい

県庁内に図書室があつた方がよいと思う。統計課には各種資料が揃えてあるようだが、それは課自体の業務用であつて、他の一般の利用が趣旨ではない。課長あたりの許可を受け、一時間でも二時間でも図書室で勉強できる状況があつてよいだろう。百科事典なども揃えると、各課においてないものを見ることができし、他の資料も各課ごとに重複しておく必要がなくなる。議会棟には図書室があるらしいが、これは議会用だろう。県立図書館も趣旨が違ふし、これは距離が遠すぎる。又、職員の福利施設としての職員会館が県庁近くにあつてしかるべきだ。仕事が終わったあとかなり思い思いのグループ活動や余暇利用が手短かにできることが好ましい。黒田荘はその代理をなしえない。遠いのが第一の理由。それに県庁自体の福利施設とはいいい難い機能上の問題がある。こうした方面に全く関心を寄せない従来の県行政の欠陥があるように思える。

1月15日(金)

依然話題になっている鴻臚館遺構

今日の勤サ協の集会でも社会党県議団の年賀会でも鴻臚館遺構が話題となった。長谷川県議はひる間の開かれた時間に平和台の遺構を見たとのこと。ずらり大行列ができて一時間は列の中で待たされたという。市民県民の間でも大変な話題になっているしるしである。出土品がどのように陳列してあるのだろうか。発掘跡はどうなっているのだろうか私も一目見たいという気持である。大泉五十との文字であらわされている「新」時代の古銭の謎を解明してくれる人が出ないものだろうか。これは紀元〇〇九年に当るというが、鴻臚館との時代の開きが大きすぎる。古銭が持ち込まれたというのが正しいのだろうか。つまり

実用中のものではなかったのだろうか。今日の勤サ協の私の講演の中でも、博物館を早く造るべきだということを強調しておいた。かね余りのこの時代にこそ、文化面での投資が望まれるのだ。

1月16日（土）

美馬君のような人もたまにいる

済生会の全国病院長会議が山ノ上ホテルで開かれたあとの祝宴に出席して挨拶したのだが、三〇余人のメンバーの中に香川県済正会病院長美馬恭一氏というのが私の席に来て、杯を交換。これが姫高文乙の同期であることがわかってびっくりさせられた。早速、カウンターまで行って山村謙一に連絡したし、その時電話が通じなかったので、帰宅後牧坂に電話したが、牧坂は、知っているが、よくは知らないとも言う（彼は一年留年になったので）、又美馬に、土井仙吉が近くにいるといったら、土井は知らないという。そういえば私も美馬という男が記憶に残ってないではないが、定かではない。美馬とはそういう人である。私は文乙の山村や牧坂が会いたいならと思って電話したのだが二人とも積極性はないし、美馬にもなかった。旧制高校なら誰しもスキンシップ豊かなはずなのに、人に知られず知ろうともしない人がいるものだ。同窓会を開いても出てこない人がかなりいる。どんな心境なのか知りたい。

1月17日（日）

国破山河在

国破れて山河あり（国破山河在）—杜甫—本来がどういう意味かは作者の気持は知らない。が昨日のJAL広報誌取材の時にもいったのだが、この山河は単に物象的な山河ではないのだ、というのが私の意見。山河はムラであり、地域であり、その地域に住む人達の慣習、連帯である。これが、今日にいう「自治」体の原型をなすものである。国がどうなろうと、国がどう指図しようと、ムラは人々がそこに生きていく必要から、人々によって自主的に決められ形成され運営されてきたものであり、国とは別のものである。国が破れようとそれは破ることはできない。国と県と市町村というように今は人為的なそれが人目につくような形で在るが、われわれは今あるそれを単に与えられたものとして不動の前提として受けとるだけでは本質をつかむことはできない。正に国破れて山河在りで、この在る山河は何かを改めて考えよう。

1月18日（月）

「郷に入ったら郷に従え」

今日の監督者研修では北田ベスト会長の講話があり、直前に知事室で面会した時、彼が私にきいたので、実感をおよそで言ったら直後の講演で彼はそれを披露してしまったらしい。

それは、忠実に県政を推進している者はどのくらいかとの問いに、職員の四割ほどであろう。あと四割はどちらでもいい中間者で、あと二割はむしろ問題があるといったのであった。私は今日の講話で「国破山河在」という点にもふれた。自治の心が大切だということであるが、それを心得ている者が四割もいるだろうか。与えられた仕事だからやっているに過ぎないというのが大部分だと思う。今日、安達氏が、何かの新聞に掲載するからとのこと一〇〇〇字の私名儀の原稿をもってきたが、そこでは自治の原型としてのムラの説明がなされていた。私は加筆して「郷に入っては郷に従え」という諺にいう「郷」でもあるとの挿入をしておいた。言い伝えられた真実はおそろしいものだとの実感をもって挿入したのである。

1月19日（火）

失業問題に、国とは別の意味で取り組む必要がある

不況の特定をうけた三市長が知事要請に来訪した。北九州末吉、大牟田塩塚、直方有馬の三人である。現実問題としては失業問題なのである。他に移転しなくて地元で生活できるようにとの願いである。市当局としては人口減になるような移住は好ましくない。ただこうした感傷を別とすれば移住して生活できるなら人口減はこぼむ必要はないだろう。しかし今はどこでも関東や関西に移ったらどうかということは、以前と違って禁句になっている。現に失業中といわなくても、学校を卒業して就職を求める者についても、郷土志向を否定するようなことを言うのは禁句である。Uターンという現象さえまれではない今日、東京や大阪は就職口はあっても住みにくくなっていることは確かだ。このようにして、失業して地元で滞留するケースがふえている。市長たちが失業問題を深刻に受けとめている理由もここにある。県としても市と協力しながら何か仕事が見つかるように、振興策に協力しなければならないと約束した次第なのである。国策とは別にである。

1月20日（水）

ふくおか女性フォーラム

ふくおか女性フォーラムが福銀ホールで開かれた。県民生活局では四ブロックを一巡する計画で、今年が福岡でトップ、五〇〇人ほど参加していただろうか。男も混えての会だが、「女性」という方が女が来やすいとあってももちろん女が多い。テーマは「福岡のイメージアップ」である。女の社会進出は近頃目ざましい。パート労働の分野での進出も大きい。労働条件はよくないらしい。その点、男子の失業と一般的低賃金への圧力となっていると思われる。又女性の社会進出はあっても、主要ポストはほぼ男で固められていることも事実。大学への就学もまだ、男女同等とはいえない。今日は、女の目で福岡のチャーミングポイントを見つけ出し、化粧化していくべく協力してほしい、それが福岡のイメージアップにつながるとあいさつしておいた。福岡県にはダークイメージが多いし、街並みもきれ

いとは思えない。こうした点に修正の努力がほしいのである。

1月21日（木）

モニターテレビの取付け

この正月に啓二が帰っているときに、留守番電話の話が出て、うちにもそれを取りつけようと思い、秘書室を通して工事人に連絡してもらっていたところ、今日その工事が行われた。モニターテレビも一しよに取付けられた。このテレビは玄関の魚眼と光線の都合上、逆光で昼間はよく映らないが、夜だと玄関灯との関係で、かなりよく作動することがわかった。留守番電話の方は他の機能とあわせ、かなりよく手引書を読まないで十分に使いこなせないで、これから勉強していかなければならない。いずれにせよ、近頃の機械の発達はわれわれ老いたる者の到底及び難いものである。考えるより慣れる以外にないことはよくわかるが、慣れるのもかんたんではない。こうしないと警備上危険があるのかということだが、そういうことはない。むしろ、会いたくない人、話したくない人を敬遠する手段という方が当たっていよう。うちの電話番号はすでに㊟になっている。

1月22日（金）

暖冬

明日は初雪になるとの天気予報。そんな感じがしないと皆んないう。一寸だけ降ったが寒くない。寒い時は寒くなければならず、暑い時は暑くあってほしいと誰しもいう。先日八幡製鉄の役員との話の中で、鉄も、この暖冬では景気に響くとのことであった。今日は商工業団地協議会の総会に出たが、やはりそんな話で、雪が降ってくればいいといっていた。灯油が消費の落込みで値崩れをおこしているらしい。冬物の衣類が売れないとのこと。洋服も年末よりも新年開けてからの方がずっと安値になっているという。あてこんだ需要が伸びないので、困る人も出ているようだ。麦の徒長も心配されている。スキー場で客がなくて大変という話も遠くからきこえてくる。しかし全般的に景気は昨年後半以来、回復しており、今年前半まではみんな楽観していいといわれている。消費は上昇傾向といわれる。

1月23日（土）

不眠の悩み

昨夜は常用の安定剤を飲むのを忘れたためだろう、眠れないまま時間が経っていて、途中から服用して、ようやく少々眠っただろうか。それに、この座敷の近辺か天井にどうも天井イタチか何かがいる物騒な音を立てる。何でもないと思えばそれまでなのに、やはり薄気味悪い。又気になる。今日は豊前に往復の車中の長かった旅なのに、往きは熊谷課長と一しよで、「農業に将来はあるか」など中心に話し合いながら費し、帰りは半分眠っていた

ようだ。なるべく車窓からは物を見まいと思う。刺戟が少しでも少い方がいいと思うからである。でもぐっすり眠ることがないのが残念でならない。夜、床の中で眠れないのは、考え事をするからではない。床に就くと無念無想に心懸ける。だのに眠ってないようだ。何故だろう。同様の月日が今日まで長く長くつづいている。でも、人間は疲れたら眠るに違いないと楽観してる。ただ今日の体調はいつもと違って特に悪かった。

1月24日(日)

社会主義協会と労働組合の昨今

午後になって、社会主義協会県支部と全通福岡地本旗びらきの集会があつて出席あいさつをしたのだが、近頃の状況からいってどうも集会の目的に沿った挨拶はしにくいので、乗り気薄の感はぬぐえなかった。社会主義協会の方は産業経済研究所の名義を使っているし、全通については、福郵労との関係もあるし、後者の「左肩上げ」には一寸閉口でもある。労働組合は一般に組織率が二七%余に落ちていることにもあらわれているように組織離れが進んでいて、その行動様式には一般的な批判が強まっている。春闘が間もなく始まるが、賃上げ要求は七%ほど、それに時間短縮が主テーマ。時間短縮はともかくとして、賃上げには要求貫徹の可能性が小さい。こういう時に、組合への挨拶はやりにくい。他方協会については、その指導力が問われており、その上に、指導者の間に、何かごたごたもめごとがあるようで甚だ頼りないものになっている。

1月25日(月)

交流

全日空ホテルで、初の異業種交流グループいくつかが集って研究会と懇親会が行われ、私は懇親会に出て挨拶をした。ここで私は「交流」について強調した。他県では異業種交流がすでに久しく前から盛んというのに、福岡県では聞かないと思っていたら、県下でも六年前からやっているグループがあることがここに来てわかった。交流によって、新しい発見がある。それは相手を知り己れを知ることになるし、相手と己れの間、さらには結合を知ることになる。技術革新や新分野開拓が分刻みのように展開されている今日である。交流がこれを促進する条件の一つであることはいうまでもない。それは単に産業界にとどまらない。行政にも学問にも美術にもスポーツにも、地域、年齢層、その他あらゆる分野についていえることである。「福岡県二十一世紀へのプラン」のサブタイトルにも交流の文字が入れられており、私の新年の幹部職員研修講話も交流を結びの言葉にしたのであった。今後、あちこちでこれを強調したい。

1月26日(火)

補助金行政その空しさ

武井園芸連会長をはじめ、農協諸団体の役員が打ちそろって「みかん危機」についての県の救済措置についての陳情をうけた。今日は又労働福祉協議会からの支援陳情もあった。先日は有明海海底沈下について漁連からの要請、そして私立学校協会などからの予算陳情も思い出される。どれも零細住民の窮状に関するものであるに違いないが、「補助金」行政というものの実態がこの範囲からだけでもよく見られる。それは体内化してしまつて次の応用なり転換ができないものが多い。一年度きりではなく、続いて毎年対応しないといけないものになる。最初は有難いと感謝されても、同じレベルでつづいていると、「増額」要求となり、それをしないと逆に批判反撥を買うことになる。行政というものはこんなものか、こんな宿命を帯びているものかと思うと一寸空しい感じがする。「みかん危機」というが、危機を自分で突破するのが当然といえないところに空しさがある。

1月27日（水）

共産党の要請のもつ二つの問題点

夕方リーセントホテルで共産党県委員会、県議団と知事との交歓会があった。諸要請が述べられたが、中でも部落解放運動と労働戦線統一問題では党側の要請は堅いものがあつてしっくりこなかった。共産党の背後に全解連と統一労組懇がある。否むしろこの両組織は共産党が作っているといつてよい組織である。社会党の場合はむしろ逆で、解同や総評の動きに社会党が従っているかのごとくである。あるいは解放同盟の流れから、及び総評の流れから、共産党が別組織を作ったかの形になっている。このあたりに政治問題がある。今日も共産党の側は同和行政において行政側は解同からの主体性を貫けといっている。特別に同和「基本法」はいらない。民主主義人権尊重の現行憲法があれば十分だから、県は解同と一しょになって基本法制定運動に力を借すなと要請している。又、政府の「指針」を批判した県の「見解」の撤回をもせまっている。労働戦線については昨秋発足の「連合」を右傾化として、その流れに棹さしている。

1月28日（木）

人事のこと

県政懇の人達で、夜、山ノ上ホテルの会合になった。外から見て奥田政権というのにあれこれ注文があるわけだ。とりわけ人事問題。それをもっと煮詰めると、知事に覇権意識が薄いということにかかわってくる不満の吐き出しである。話の中でも、これは民主主義と直接関係なく、権力の構造からくる基本的な問題だとの趣旨の主張が表面に出てきた。役人ども、幹部どもはそれがないから右顧左眄している。このような状況をなくするのが二期目の当面の課題だということだ。林副知事にも池田出納長にも、知事が相談するという形ではなく、下命するという形で臨まねばダメだ。でないといつまでも彼らは右顧左眄するだろうというのである。人事については権力集中を意識して決行し、人心をそれに靡か

せ、かつ沸かせることが肝要というのである。こんなことで、今晚は出席者わいわい語り合ったのであった。

1月29日(金)

解けぬ怒り

助信氏が依然幹事長辞任の意思が堅いようだから今日は夕方折尾まで私が行こうという予定を立てていたが、林県議が来室して、中止することになった。十二月議会が定時に終わったことについて、記者会見で私が「何もなかったからね」といったことが新聞に出て、それにひどく立腹したのだが、「わしは社会党を脱党してもいい。幹事長はやめる」というていた。意思是今もかわらぬというのだ。林副議長の話聞きくと、給与振込の際の組合費天引について野党内にある反対論を鎮めるため、接待費をかなり使っているらしい。社会党がひねり出したのだろうが、誰か個人の政治資金負担になっているかも知れない。それほど苦勞して期日どおりに十二月議会が終わったのにかわらず「何もなかったから」とは何か、けしからん発言だというのが怒る側の気持ちである。私からいわせると、そうした苦勞はすべて理解もし、一人一人言葉に出して謝意を述べた上で、記者への言葉だったのだ。

1月30日(土)

自然と人間

中食をキングでとっていたら嶋津氏が入って来たので一しよに食事をしたが外側は梅花が見えて、もうそこまで春がやってきている気配だ。一昨日もうちの裏の紅梅の小枝を切って部屋の中の一輪ざしにさした。「一枝春」という段階ではない。一輪一輪が全力を尽くして咲いている。何の意図もないかのようだ。一輪一輪もいいが、全体もいい。「野草幽花皆知己」「野草幽花各自否」というのを書にすることがあるが、そのような気持ちをもって私も筆をとっている。でも人間の社会は、どうもそうではない。今日も帰途車の中から見ていると、若い少年が歩きながらコーヒー缶を口にしつつ、呑み終わったらポイと歩道に捨てている。空缶をそうかんたんに捨てるから歩道は汚い。又くわえタバコをする人が歩行者の中にずいぶんと多い。これは必ずや吸い殻を道端にポイ捨てるに相違ない。そうまでしてすわないといけないのかしら。

1月31日(日)

ゼロ査定項目にも目を通す

日曜だからこそ、社会党県議らとの予算査定についての検討会、三時から山ノ上ホテルで、会議時間は八時まで五時間。今年の特徴は総務部段階で各部から来た諸要求のうち、ゼロ査定のものについては従来は日の目をみないままになっていたのを、リストにして査定資

料に加えてきたということである。ゼロ査定になっていたのには、計画未熟というのが理由であるものがかなり含まれており、未熟でも早急に計画化する努力をすればよいものがかなりあるわけで、財政課がこれを握りつぶすのはいけないとの理由から、出させる努力をして結実した。いいことだと思う。それに、政治的配慮からゼロというものはないわけではないが、これこそ目の見るようにし、判断は三役、知事にまかせなければいけないだろう。今日は社会党県議もそうした観点からアドバイスをする意味で、たんねんに全資料について目を通していったのである。

2月1日（月）

県下の労戦統一

夜、浄水茶寮で、永田、杉山同伴で、県評坂本議長、自治労岩田委員長と夕食懇談会をもった。労働運動の現状について、意見交換したのだが、前の岩崎事務局長体制にはかなり批判があるようだ。松田現事務局長にもまだ批判があるようだ。単純な表現だが、右に傾いたようだ。その代わり労戦の全的統一には積極的のようで、メーデーの統一については私からも力説しておいたが、この二人が今熱意をこめて努力しているところだという。メーデーが労働四団体一しょにやれるなら、いろんな面で県政もやりやすくなることは明かだ。共産党の統一労組懇はこうした傾向に力強い抵抗しているようだが、大衆から浮き上がらぬためには同調せざるをえないだろう。今、日教組大会があっているが、元気を取り戻すことは不可能のようだ。公務員の統一行動に対する処分のしこりを残しているのは全国で福岡県だけらしいが、早く復元するためにも、統一の方向で県全体が動く必要があろう。

2月2日（火）

高校の現場改善について

県評の大塚次長の申出で昨日連絡をとって、早速今日夕方、浄水茶寮に城野節子教育委員を呼んで、学校教育の現場改善問題について当方の意見をきいてもらうことになった。教委と両教組がツノつき合いをしていたのでは学校現場はよくなるから、高校の方からまず雪解けをはかろうと策しているということを知り、彼女に了解してもらうこと、又、昨年来新任の佐藤教委にも後日同様の話合いの場をもちたい旨提言しておいた。城野大塚間で二度握手をするほどに今日の話は有意義に終わった。地域で父母、生徒、校長、教師が心を合わせて努力することによって、地域がよみがえり、学校現場に活気とよろこびが出てくるということをお私の方から強調し、それは偏差値で輪切りにされて心理的差別をうけている実業高校の現場と地域の見直しからはじめるのが最も効果的との提案であった。小中学校は手はじめてなくてよいと指摘した。大塚氏はこの方向で今後動くだろう。

2月3日（水）

多忙からの脱出

ぐっと冷え込んで今冬最も寒い一日だった。予算要求の知事保留復活要求のヒヤリングが一日中つづいた。一寸した中食休憩中に南面の窓外を眺めた。日蓮さんのまわりで鳩の群がいつも見えるし、群の外にさらに少数の群が公園の樹々の間をとんでいる。どれも元気だ。そしてふと思った。あの中に老いたる鳩はいるのだろうか、痛める鳩はいるのだろうか、雌雄の違いはどうなっているのだろうか、……でも、そんなことはどうでもいいのであろう。夜テレビを見ていたら、働きすぎ社会から脱出すべく努力しているサラリーマンの話が放映されていた。私のこの頃の関心は家族の崩壊と高齢者という課題だが、このテレビではまだ若い夫婦の家庭にも、働きすぎで家族生活が崩壊することがテーマになっていた。奥さんとたまにコンサートに出かけるように努力しているサラリーマンが話題になっていた。会社人間が多すぎる今日注目を引く放送だった。先日、中沢貞治さんから来た手紙に返信を出したのだが、その中で私は、知事は多忙、しかし自分が大切と書いたのを思い出す。

2月4日（木）

幾歳月を心を入れかえてかこう

昨夜も十分に時間をとった積りなのに昨日につづき今日も大変にねむい。元気がなく体に張りが出ないでぐったりしている。尤も予算査定の会議の連続で椅子に掛けてばかりの時間がびっちり詰まり運動不足でもある。それにしても張りがなく眠いばかりだ。ところで昨日から「幾歳月」の原稿を書こうと思いはじめ、九大研究室に入った当時のことを書きはじめていたのだが、忘脚、忘却、とてつもなく忘れてしまっている。四〇年ほど前のことなのだ。一彦が生まれた頃である。これからは履歴書を見たりみゆきにききながら何か思い出を引き出しながらできるだけのことを綴ってみたい。思い出に出てくるものは何でも書いておこうと思う。六〇年のうち二〇余年は何とか書いて一六〇ページにはなったのだから、あと二〇〇ページほどの間にその後のことを書きたい。気力のある間に書いておかないと決してつづくものではないだろう。

2月5日（金）

改善された予算知事査定

来年度予算知事査定がやっと終わった。今年は財政課がゼロとしていたものを全部一応は知事までリストアップしてくるようにしたため、従来なら日の目をみない項目がいくらか浮上してきた。その代わり財政課は一寸迷惑がっていたようだ。でも原課から上って来たものを財政課が篩にかけてしまう悪弊が克服できた方がよい。しかし、財政課が知事保留したもののうち、金額を財政課があらかじめ査定しているケースがいくつか見つかかり、それ

が問題になった。この点も将来は訂正しなければならないだろう。このように、今回は従来よりはかなり改善された。その努力をした永田室長はあるいは嫌われ者になったかも知れない。知事室に政策担当者がいないために、永田の今回の出しゃばりが必要になったとも考えられる。どうするかが今後の課題だろう。

2月6日（土）

晴と褻

晴と褻^ケという短文をどこかで読んだのだが、その記憶はもうない。ふだんの生活を褻^ケといい、あらたまった特別の場をハレというのである。われわれの生活は褻^ケがあるからこそ晴、又は晴のための褻^ケであるともいえる。どちらもがあつて、生活に折目節目がつくといえる。季節的な又は冠婚葬祭的な晴の日を心を正して迎え、そして普段の生活にかえる。その中で晴の日のあることを心懸ける。知事の出番は晴の場が多い。だからいつも盛装をしていなければならないし、言うことも晴の場に合うように用意しなければならない。夕食など外が多いが、晴れの食事なのである。今日も日本舞踊の会、青年会議所の総会、それら会場、出席者の服装、祝辞などみんなハレ用であつた。だのに、衆院予算委員会では委員長の浜田コウイチ氏は共産党の宮本氏は殺人者だと堂々と発言し、ハレ舞台に全くそぐわぬ発言をなし、議場は大混乱。

2月7日（日）

地権・漁業権

東平尾公園に国体メイン会場造成工事の様様を見た。あのあたりまだ一帯が未開発の土地がずいぶんある。「あの土地遊んでいる」という人もいるが、開発の進むのを待っている地権者がいることを忘れてはならない。日本では用地買収が終れば公共工事は九〇%は進捗したも同様といわれる。又、公共事業費の半分は用地費だともいわれる。それだけ「不労所得」があつている訳だ。GNPが大きいといつてもそれが勘定に入っている、諸外国ではこの辺の事情はかなり違うようだ。大濠公園池の浄化も二～三年来の懸案だが工事すると博多湾漁民漁協が一寸待てという。漁業補償は関西新空港でも巨額らしい。白島石油備蓄基地もそうだったし、当面の新北九州空港も漁業補償をどう乗り越えるかが問題。権利というものが物に換算されて大きくなる。

2月8日（月）

みかん危機

豊作貧乏は戦前からの言葉であるが、今は「みかん」農家について専らの報道。機械貧乏は農家一般に何年も前からいわれていたが、みかん豊作貧乏がこれに加わつたのである。みかん価格が暴落し、ちぎり賃すら出ないといわれ、取って見えない所に運んで穴埋めし

ている写真が夕刊に出ている。外国からの果物輸入の圧力もあるようだ。若い者の嗜好も変わりつつあるだろう。どうしていいか誰も結論が出ない温州みかんについてであろうが、転作を考えるしかないのかも知れない。みかん農家の危機突破大会もあったが、結論はなく、緊急融資がまずは必要といわれている。しかし、基本的には、このままではみかん経営に農業が依存できないのであれば、別の途をとる以外にないことは確かだ。農村地域は外国から攻められないものを求めねばなるまい。私は都市との交流、三次産業の導入を目ざすべきと考えるがどうだろう。余暇利用などだ。

2月9日(火)

天孫降臨説に思う

東京会館で企業立地推進委員会があり、あとの夕食懇談会の時に、私の右隣にいた経団連の花村副会長がいったことが妙に耳に残っている話が福岡平和台球場で発見された鴻臚館遺構から展開したが、彼は、新羅にも天孫降臨と同じような神話がある。日本のもその模倣ではなかろうか。だが、この問題はこれ以上つかない方がいいと。「これ以上つかない方がいい」という考え方に彼の保守性がくっきりあらわれている。ある意味では面白いともいえる。私が平素感じているのは、政府文部省が、大和朝以前について探求したがるのは天孫降臨説をさわらない方がいいと思っているからではないか。ある日こつぜんと天皇と国家ができたということ以上に考えてはいけないと思っているのではないか。九州で国立博物館を建設し、古代史の研究にも資したいという動きは好ましくないと思っているのではないか。博物館誘致運動を進めていて私はそういう感を抱くのだが、花村発言が傍証しているようにも思える。

2月10日(水)

個室寝台車

名古屋から小倉まで、ブルートレインの寝台個室を利用したのははじめての経験だった。車内放送でやかましい鉄道ではあるが、夜はさすが放送もなくてよかった。が、六時には放送が始まり、寝台を順次片付けていくという。そんなことは放送しなくても、作業員が各車両ごとに挨拶しつつ仕事すればよいのではないだろうか。六時には強いて起こされてしまうことになるからである。それとも車内放送をすれば免責になるとでも思っているのだろうか。久しぶりの寝台車だが、前々から、前奏付きの起床放送は迷惑だと思っていたのである。これを今回又経験させられたわけだ。仕事する人が起きている人から順番にだまってやってもいいのにと思う。久しぶりの寝台経験だが、思ったように、近頃のわが身、若干ねぐるしかつた。振動にも弱いんだなと思った。福原氏が、個室寝台料金はホテル以上に高く一万四千元ですよといった。

2月11日（木）

中学校同窓の集り

ヤマトヤシキでの福岡県物産観光展激励のため姫路行きの日となった。随行の福原氏は姫路市長秘書に付いてもらって白鷺城を見学できてよかったという。夜は私が刀出に行くので、それに同行し、九一宅の二階に泊めてもらった。物産展では久留米がすりが売れているとのことであった。祭日のせいでもあろうが、人出は思いのほか多いと感じられた。京口駅近くの播龍という料亭で中学校の同窓生が十一人集ってくれた。広田児島が世話人になってくれたらしい。雨内、瀧元らは中学以来はじめての出会いである。松井が、中国を自転車旅行した話を出したのが印象的だった。関口は姫路工大の学長をしているという。広田は来年定年になる。みんなそうした年になって第二の人生に入りこんでいく。本條巍は昔のとおりひとがらがおだやかそうにみえた。私は色紙を書いてきていたので、順序不同で一枚ずつ記念にお渡ししておいた。

2月12日（金）

松井正年氏

昨日の播龍での中学同窓の集りで思ったのはみんな五〇年と少しもかわってないということだった。とくに松井正年は相かわらずだ。彼は級長の私が、叱られて罰をうけている彼をもらい受けに来てくれたのを感謝しているといったが、私にはその記憶がない。他人の記憶と自分の記憶が合致する場合と全く思出の不可能なことがある。又同じ件についての思い出もそれぞれに受けとり方が違うのである。同窓会というのはそういうことで、話に花が咲くのである。松井は自負心の高い男で、平凡者からみれば奇行すらしてかす。朝授業が始まる前に弁当を開いて食べていて先生から注意されたり、授業が入れかわり次の先生が来ているのにテキストを丸棒状に丸めてひとの頭を叩いてふざけていて注意をうけたりしたものだ。頭がよく、一度出会った英単語は忘れることがないと自慢していた。努力型というよりは秀才型の人だった。自負心が強すぎたともいえよう。

2月13日（土）

植木生産のこと

久留米の植木集荷所落成式に出席した。田主丸とともに大きな緑化センターがあり、植木農協が経営、植木の集散地となっている。高価なものもある。手がこんでいるのはそれだけ付加価値が高くなる。「根まわし」がいてねいにおこなわれているのが見える。きくところによると、根まわしは一年ぐらいかかり、上手にしないと木を枯らしてしまうこともあるとのこと。言葉だけは知っていて政治工作などの面でよく使うが、実際にやってみた経験があればなあと思った。近頃、植木市場は不況だという。住宅建設が進んでも、高層化に向う限り植木の需要に連がらないということであろう。マンションがいくら建っても植

木は不要であろう。その意味では大きな公共施設が進んだ方がよい。公園などは一番のお得意であろう。県では六五年国体の会場整備が今年は急ピッチで進むだろうから、景気の回復とともに植木市場はよくなるのではないかと思う。根気強く植木生産をしている人達には頭がさがる。

2月14日（日）

家屋の周辺

裏の紅梅はもう散りはじめ、西の紅梅は今が満開。裏の白梅は今が盛りのはずだが、ここ数年花の数がめっきり少い。どうしたのだろうか。マンションが建ってから日光がぐんと少いので、そのためかも知れない。甘夏柑が今年は少いと思っていたのに、枝に垂れている様子ではかなり多いように見える。庭に出て仕事をするのがなくなっているのも何もかも投げやりである。萬両の実が美しく重々しく下がっているので心豊かに感ずる。猫がいなくなってもう一年になろうか、何か足りないような気がする。西の松の木が枯死して二年になろう。裏にマンションができて影響はかなり出ていると見える。もう一つ登り口の方に出来つつあるが、車が多くなってこの方面でもせせこましくなる。地価はこの十五年間に二〇倍も上昇しているが有難くない方向へ動いている。上の畑の白梅は見事に満開である。

2月15日（月）

二月議会が抱える諸問題

農政連と県民クラブ別々に二月議会の議案とくに予算細目を説明する知事との懇談会を行った。六三年度当初予算を俎上とする二月県議会がいよいよ二十四日から開かれるので、今日から前哨戦気分にはいったわけだ。一兆三〇〇億円と、県としてははじめて一兆円の大台の乗る予算を上程するわけだ。石炭と鉄で支えられた福岡県は今や技術立県と国際化をかかげて前進をはかりつつ、石炭と鉄の後遺症とせまり来る高齢化問題に対応しなければならないが、国際化の中では農産物の自由化というトラブル下におかれた農政問題も小さからぬ荷物であるわけだ。又、来年は福岡市制一〇〇周年記念博覧会、再来年は二巡目の国体「とびうめ国体」にも万全を期さなくてはならない。且又当面の解決問題として課せられているものとしては県庁舎と教育会館の跡地の処理を措くわけにはいかない。

2月16日（火）

高校教科書にある大和政権の出現

三省堂「日本史」（稲垣泰彦ほか）の二四ページに大和政権の形成という項があって、次のように記している。三世紀の後半から四世紀のはじめころ、畿内瀬戸内の各地に古墳が出現し、それ以後急速に全国にひろがっていった……各地の古墳が前方後円墳という同じ形

式をとり、内部施設や副葬品の内容や形式に共通性をもっていること、なかでも大和を中心とする畿内に巨大なものが集中していること、鏡や碧玉製腕飾りなどの副葬品が、畿内の首長から各地の首長に配布されたと見られることなどは、古墳を営造した首長たちが畿内の政治勢力を盟主とする連合を形成していたことを推定させる。この政治勢力は大和を中心とする畿内の首長の連合体であったと考えられ、これを大和政権とよんでいる。大和政権の最高首長は当時^{おおきみ}大王と称していたらしい。古墳の分布は四世紀後半から五世紀にかけて急速にひろがり東は東→【2月17日に続く】

2月17日（水）

畿内優位？

【2月16日から続く】→北地方南部まで、西は九州四国の南端部をのぞく西日本全域におよんだ。このことは大和政権の勢力圏の拡大を反映している。大和政権は服属した地方首長に一定の貢納や軍役労役などを課したが、小国の王が保有していた支配権はそのまま認め、その領域内に直接支配をおよぼすにはいたらなかった。地方首長は畿内の首長と共通の古墳をつくることによって、相互の親密な関係を確認し合い、大和政権の力を後ろ盾にして民衆にたいする支配をいちだんと強めたのであろう。……五～六世紀の大和朝廷は大王家を中心とする畿内の大豪族の連合政権で各地の豪族を支配していた。その政治組織は氏を単位としてなりたっており、^{べのたみ}経済的には部民と^{みやげ}屯倉とを基礎としていた。「九州に大陸への門戸があったとはいえ、畿内が生産力の点で優位に立っていた」これが私の今の総括である。

2月18日（木）

武井善仁氏葬儀

県園芸連の武井善仁さんの葬儀が甘木文化会館で行われ、私は氏の叙位叙勲の伝達と弔辞読みの役で出席した。第二会場までしつらえてあって大葬式だった。武井氏は一月二十六日みかん危機突破の件で陳情団を引きつれ来県したのに、翌日心不全でなくなった。突然とはこのことである。本人や家族に悪いかも知れないが、こういう死に方につき賛成と思う私の心情である。入院して生命の末路も見えているのに、何日も何日も医師に万全をつくしてもらい、家族も看護に疲れてしまうような死に方はしたくないものだ。大正十年生れというから一年上である。車の中で、あんな死に方がいいなと思ったら、随行の福原君が、まだ死んでもらっては困るといっていたが、後進に道を譲るという言葉もあるし、次々に代わっているのが自然だと思う。無理にといわないが、少々長く生きたとて、どうといえる意義があるわけではない。ただ、あせり気味なのは、身辺整理で、残った人にわかりやすい情々にしたい。

2月19日（金）

選択肢は多いものではない

朝十時に自治省に持永官房長を訪ね、六月で三年になる大塚副知事の人事について考えてほしい旨要請した。誰しもだんだん年を重ねるにつれて何をするにせよ選択肢が限られてしまうものだ。大塚氏の身の振り方だけではない。たとえば私にしても自由時間があれば何をするか、在宅して何をするかとなると、子供や若人のようにはいかない。限られた行動選択肢がない。そういうことをふと考えたのである。平素から何につけ、選択肢を多くもっているように心懸けておくべきだとの感慨をもつ。知事をやめたら何でもできると思ったことが何度かあるが、ほんとうは案外することがないのではないかと思ったりする。県庁の職員も定年退職後何かしたいのだがと訴える人は少なくない。そのような訴えをしなくてもすむように平素から心得ておくべきだと時にひとにいうが、そうかんたんにはいきまい。持永さんは考えておこうとの返事だった。

2月20日（土）

びっくりするほど汚なかった名古屋郊外

なごやキャッスルホテルから空港まで朝の名古屋郊外をドライブしたが意外と環境全体が汚いと思った。高速道路工事が延々とつづいていてそれが原因ともいえよう。両側の道の脇はごたごたして泥がかわいた諸事物が延々、走る車も多いがろくに磨かれた車なくこれ又泥まみれのが多かった。空缶も散乱し、郊外にあり勝ちな産業廃棄物の小集積所があちこちに見える。食べ物屋がこれ又汚ない雰囲気のまま点在する。名古屋ってこんなに汚いのかなと我を疑ってみた。住民の心得も、自治体当局の態度も問題がありそうだ。飢えているはずはないのに、なぜなんだろう。「ウサギ小屋」とひやかされてもやむをえない光景がくりひろげられている。北、西欧諸国の人達に見られたら大名古屋が恥しい。開発途上という言葉がそのままあてはまるのだ。名古屋だけではないだろう。自己反省にもしたい。

2月21日（日）

直方での楽しい一日

大濠のマラソン大会、直方の河川敷での凧上げ大会の二つに参加するので寒かったら大変と、コート、懐爐を準備したのに、天気は快晴風もなく、全く春日和ポカポカの快い一日であった。直方では野下県議が連絡役をつとめてくれ、凧上げ会のあと凧匠の工芸作品といえる凧をいただいた。一度も行ったことのなかった多賀神社にも参詣できたが、ここでは宮司らが迎えてくれ、祈禱の儀式までしてくれ、茶も一服いただいた。思いがけぬ歓迎におそれ入った次第であった。このあと協会員たちを中心とする人達が十数で、新入の小料理店三毎^{みごと}で歓談の夕食会を開いてくれ、一時間半ほどすごした。話が知事選に及び、集

った人達がいかに選挙のことで血まなこに動きまわったかが思い浮かばせられた。九一がこの地域にもよく入っていたことが話題にもなった。全県でも筑豊が、筑豊の中でも直鞍地区が、多くの奥田票を集めたのだという自負があった。

2月22日（月）

「宝」といわれてみて思う

昨日の三毎での会食の時、活動家の誰かが、「奥田知事はわれわれの宝だ」といつてくれた事が今日もなお強く印象に残っている。彼等は選挙の時にわが事のように走りまわってくれた人ばかりだ。佐藤、野下、手嶋その他等々、今日からみれば当り前だが、九大当時学生運動をしていて私の教養部長にきびしく対抗した某君は昨日の凧上げ大会の実行委員長をした人だという。「宝」といわれて自分の客観的見直しが必要なような気がする。ほんとうに大事に思っている人がまだほかにたくさんいるに違いない。そんなら自分をもっと大切にしなければなるまい。とりわけ健康への配慮が足りなかったように思う。政治とは一面こういうものかなと思う。昨日のような同志で集って、食事をしながらいいたいことを言ってもらう機会を作ることも亦大事だということが判る。

2月23日（火）

緑化意識のおくれについて

造園業協会の役員たちと天神てら岡で夕食会をした。知事は話しやすい人だということがわかったらしく、先方から久留米の鳥越県議の仲介で近づこうとしたので今日の会合になったらしい。当方からは秘書室二人、建築都市部長水産林務部長が出席、鳥越氏も仲介者的に出席した。緑化や造園について、ヨーロッパ諸国とくらべ日本は意識がまだまだ低いということを私はあいさつの中でのべた。日本の街並みの汚なさを見ても、まだまだ日本人が訓練が足りないことは明らかである。緑化に要する経費を建築にまわさねばならぬし、道路建設にまわさねばならぬと思ひ込む程に精神的に貧困なのである。日本人にセンスがないというよりは文化的に、精神的に貧困であり低劣なのであって、今後だんだんよくなるだろうとは思ふ。街並みをみんなで美しくしようという運動が大衆的に起こる日が待遠しい。

2月24日（水）

議会への予算条例の提案理由説明演説

今日二月県議会本会議開会。六十三年度当初予算の提案理由説明の演説を行った。一時間近いもので、疲れを覚えた。予算や条例の中味をこまごま説明するのだから長くなる。独特の項目の名など舌をかみそうなのが少くないし、文意がよく理解できないほど前置きが長かったり、形容句のかかり方がよくわからないようになっている。だから余計に疲れる

のだ。聞いている方もほんとうらしくきこえ、わからぬ文脈になっただけでも、そうかなと思っただけではないだろうか。次からはもっと歯切れのよい文章に直した方がいいと思う。役人の、用意周到な、かつ無責任な、ひとりよがりの文章だと思うのである。ほんとうは一般の人がきいていてもよくわからないのではないだろうか。ともかく二回ぐらい前もって読み、句読点、息つきについて印をつけておいて、やっとなんか読んでいくことができるというしろものなのである。

2月25日(木)

病院について連想される負の社会的財産

済生会病院に人間ドック入り。一昨年帯状疱疹で一ヵ月入院していた時に見知りの看護婦さん達がいてなつかしい思いがした。ふと、今日の病院って何かいなと考えてみた。昔の陸軍病院のことも思い出した。人間が一万人もいれば病院の一つは必要な今日である。だが、市町村というような自治体がそうであるように、病院についても、一般にひとは、今日あるがままのものとして受け取って疑問に感じないだろう。しかし、ずっと以前なかった病院なるものがなぜに生まれたのか、それがなぜにふえているのか。県立黒木病院のような不採算病院はない方がいいのか、なくてもいいのか。無医地区はどうしているのか等々いろいろの疑問が湧いてくる。それと対照的に、家族機能の変化する歴史を考えてみたくなる。医学医術の発達も無視できない。職場は一つの原理で一定の年齢層の人を集めて成果をあげている。だったら病院もなくてはならない。「負の社会」的財産の共有を回想する。

2月26日(金)

年寄り世帯がふえていく

あちらにもこちらにも年寄りだけの世帯ができていく。急激にそれがふえる。みんなわれわれの仲間なのだ。子育てに熱中し、育った子は離れ離れに生活するようになる。二人の子がいずれも東京の大学に行くような家庭もあり、一人十五万円としても二人で三〇万円。親の給与収入が五〇万だったら半分以上仕送りせねばならぬ。そうして育った子が親から離れてしまう。親としてはつらい限りだろう。そういう自分もまたそうしてしまったのであって、事情は今に始まったものではない。今日こうした事態が急に進んでいるのである。「あととり」ということが、農家や商家や医師のような場合に深刻な問題になっているし、医師で全くあきらめている人も少ない。社会がどんどんかわっていく。なのに、考え方や対応がそれに伴わない。政治もそれについていってない。老いて、病気になって、さらに痴呆になってということになれば、年金など少々あってもさほど役に立たないことになる。行政課題だ。

2月27日（土）

共済農協の小中学生作文コンクールに思う

一時から第二三回共済農協の小中学生作文コンクール入賞者への表彰状授与式に出た。知事になって毎年この回には出席していると思う。（去年は選挙のためどうだったか？）今年には六五四校二二万人の子供が参加し、過去最高記録だそうだ。推薦点数二万三千余点。いつも思うことだが、このコンクールは大きな意義がある。親と子と先生の三者が作文という紐をたぐり合いながら相互に結びつく、対話がある。これが第一。第二は、子供がモノを見、考える習性を身につける。そしてそれを文字に表現する力を養う。第三は、子供のこうした活動を通して親も先生も子供と共に学ぶ。又気付いたことだが、入賞文集を手にしてみて、毎回内容がかわっている。それは社会とりわけ子供を包む社会環境が敏感に反映されているということだ。子供は社会の鏡といっても過言ではない。入賞者達はきっといい人になるだろう。

2月28日（日）

春の選抜野球大会出場校に期待する

KBCの催しで新装なった会館すみの広場で春の選抜野球大会に出場する柳川、福岡第一の両校選手の激例会が行われ私も祝辞をのべるために参加した。福岡勢はここしばらく甲子園で一回戦で敗退することが多い。九州勢も全体として弱くなったといわれている。この春の大会は九州から四校出場するがそのうち福岡県から二校であるから九州を代表する意味でぜひ勝ち進んでほしい。トーナメントだから一寸の隙を衝かれて負けるとあとがない。一発勝負だから全力を傾注するほかはない。野球は総合戦総力戦だからチーム全体に隙なくたたかうほかはない。陸上競技なら個人の成績も残りうるが野球はプラスとマイナスがどう組み合わせられるかわからない。福岡勢が近頃全くふるわないという観点から、今回の両チームへの期待が殊のほか大きくなる。どちらかが勝ち進んでほしい。

2月29日（月）

清山哲郎氏と長谷川裕一氏

過ぐる知事選を思い出す二人の知名士と別々に同席することとなった。一人は清山哲郎氏、もう一人は長谷川裕一氏。どちらも田中健蔵氏と近くしている人であるが、知事選も終わっている今日、いい意味であるが、私に一言申したいというタイプで同じ。清山氏は県の技術立県につき自分の意見を盛り込んでほしいという。今日はテクノフロンティアシンポジウムというのを県商工部技術振興課が開催、その三人の講師の一人として来庁し、若干の意見交換も行った。長谷川氏はCアンドC21というのをリードしている人で仏壇屋さん。これまで反奥田の旗を振って財界で活躍していたのだが、（田中陣営でも動いたようだ）、今となっては県をよくしたい一念は同じということで、一夕席を共にし、県政の揖取りの

参考になるならということで「てら岡」で夕食を共にしたのであった。福岡がアジアに開かれた西日本での中心、九州のリーダー県として今後どうするか、アジア研究に力を入れてみたらどうかと提言していた。両者の意見を率直にきこう。

3月4日（金）

岩崎隆次郎が去り、労働戦線統一の影もみえる

岩崎隆次郎氏が最後の放送に出るといので夕食をしながらきいた。私の関心のない音楽のことで、戦後の流れを追っての放送の解説をやっているみたいだった。NHK FM 放送で姿は見えないし、二度にわたって取りしきった知事選の雄を壊想する放送としてはいささか感傷的で淋しい思いだった。昨夜の湯口さんを送る会の席での雑談で中西氏が私に、三期目も出るかというので、私は問題があるネといったら彼も「そうなあ」といった。岩崎が居らんと社共がまとまらないし、まとまらないで勝てる保証はないというのが共通の思いであった。共産党の票数というよりは共産党が否定するなら選挙資金の大宗を担う県評が動けない。現に今、共産党の主導する統一労組懇が知事に会見を求めて来ているが県評主流は「会見してくれては困る」といって突っぱねを求めている。全国的労働戦線統一の問題の背景が投影しているわけだ。三期目などといってもその前提が何であるかわからないのが現状である。

3月5日（土）

恭則寿について

揮毫の中で扁額用に「恭則寿」というのがあった。出典解説には恭なればすなわち命ながしとあった。恭の意味であるが自然の理、社会の理、身体の理に忠実に従うということではないかと思う。われわれがこうした理をどの程度知っているのか、それが自分の周辺でどのように問題化しているのか、その状況を自覚的にうけとめているのかが問題なのである。又それを自覚していても対応する条件が整わぬ場合もある。貧乏ひまなしというように、キリキリ舞いさせられていると対応が困難であるが、逆に、自ら驕れる状態になり、怠慢に流れてしまうこともある。それに、恭でなくて、自然に面倒だということで理を軽んずることもある。いずれにせよ、ゆとりの時間と心が必要と思う。人生八十年という時代になって来たが長生きもいいが、ひとの厄介にならねばならぬ長生きもほどほどであった方がいいと思う。厄介にだけはなりたくない。

3月6日（日）

「共生の思想」

有名な建築設計家の黒川紀章の「共生の思想」を読みはじめた。これは先日上京の折、住友建設の斎藤武幸さん（東京福岡県人会々長）が私に托したもので、本人の私あて「恵存」

サインがしてある。東京ですごく大きなマンションをもち、その中に唯識庵という本物伝統の茶室を作り、新の中に伝統を共存させるというこったことをしており、東京湾を埋立てて東京改造の理想を実現すべく努力中との説明があった。今日は一〇〇ページまでは読めなかったが、一〇〇万人を住まわせた江戸は世界的に偉大な都市社会だとたたえている。利休が秀吉から切腹を命ぜられるけれども、あれは秀吉が茶を理解せぬ権力主義から出たもので、秀吉の愚劣といっている。彼のいう「共生」は共存でもなければ統一でもない。一見相反すようにみえるものが共に存在の意義を強め合う、世界はそうしたものの全体ではないか。真善美をそこに見出そうということのようだ。

3月7日（月）

親族近況

夜九時すぎ東京の子供たち三人に電話した。一月以来の電話改良でボタン一つでつながる。直美はスキーでの右スネの骨折が治癒せず悪化しているらしい。正当に医者にかからず無理をしたためだろう。啓二はいなくライヤが出た。サリをねかせていたという。この十七日で満二才になる。かなり片言をいえるようになったらしい。どンドン言葉を覚えるだろう。一彦は出ず美可が出た。一彦は新材料、新システムの勉強に多忙らしい。麗衣は小学卒業まぢか、久美は高校受験に向けてがんばっているという。墨絵のいい本があるから送ろうと美可はいう。そういえば墨絵の独習をしようと思って何年かたつのに、一向に手始めをしていないのに気付く。一彦のように新素材でもなければ新システムでもない「化石人間」といわれるようになっていたので、墨絵を手始めるのもいいかも知れない。ただ、独習ではいけないと思う。でも独習しかないのが今の立場である。藤江君が他所に転居することになったので、ゴミ出しの仕事をせねばならなくなったとみゆきがいう。止むなしということだろう。私がゴミ出しに手を貸すのも一寸具合が悪い。方途はないものか。

3月8日（火）

安定した状態になってほしい藤江康之君

藤江君の姿がうちから消えて何となく淋しくなり、彼の存在が改めて感じられる。何となくひょうひょうとしていてどことなく意地っ張りでかたくなに感ずることもあったが、全体としては前後五年間知事選がらみもあって、よく内面からわれわれ夫婦の私生活まで支援してくれた。今まで独身を貫いていたが、これから相手女性をつかむようだ。昨秋から前の借家に入っていたが、昨日あたりから荷物はそのままにしつつも宿所を別に求めたようだ。昨夏から職業訓練校に職を得で五年に余る無職状況からやっと正常に戻ったわけだ。どうも他の事務職は不向きといい、結局は教鞭をとる道を選んだわけ。平凡ながら安定した途だと思う。無理をしなければ生涯の職業となしうるだろう。短気を起こさねばと心配する。ともかくトータルには献身的によくやってくれた。家族をもって早く安定した生活

を築いてほしい。

3月9日(水)

今の健康

二年も前は県庁の階段を八階まで歩いて上った。若干は無理だと思いつつ、随行の佐々木氏も息を切らせながらついて来ていた。その後森山随行の時から医者からもいわれ無理するなということ、それをやめ、近頃になって運動量が足りないからせめて半分でもということ、福原氏が四階から八階まで、そして降りる時は忙がしくない時は歩いて八階から一階まで歩こうといい出した。四階だけでも結構息はずませ、最後は足の重さを感じるほどになっている。可成り衰えたのであろうか。議会のある日は午前午後二往復するから、かなりの歩数になる。万歩計をつけていないが凡そ不足かどうかの判断がつく。議会に二往復、そして階段を半分歩くなら、他を合計してようやく不足といわなくてもいいほどの運動量になろう。平常の日はこれよりはるかに少いから衰えが進むようだ。しかし総じていえば、特段の病気がないことが幸せというしかない。睡眠をとることだけが心得。

3月10日(木)

草月流の生花作業工程をみて

ニューオータニで草月展オープニングセレモニーがあって出席を乞われた。大丸で草月展が六〇年創流記念として開かれているとのこと。開会に先んじて家元勅使河原宏氏の演ずる生花の指導現場がスクリーンで大うつしに映写されたが、柿の実を一ぱいつけた柿の木、巖島神社での松、竹をあしらった場面といい雄壮というほかない情景であった。まさに床の間の生花ではなくて、外に出て、大きな空間、それも近代の建築世界の中でも我ゆかんというものであった。四季それぞれの自然を自分の心眼でとらえ、引きつけ、て創造してみせるといったものだ。作者の理想が、素材を通じて、その組み合わせにより、現実の形をとって再構築される。自然は、そのもつ色、形を人間によって一定の空間で美の極致はこうであるといった主体者のように生まれ変わってみせるのである。生けていく作業は建築のような仕事でありながら一面ドラマのようである。なまの自然の中でなら埋もれているかも知れぬ自然の美しさが草月生花の作業を通して自己を再びとりもどす。

3月11日(金)

教育会館跡地の処分について難癖

教育会館跡地処理について特別委にかけたが総務委はつんぼさじきにおかれたとか、周辺商店街からは意見を無視されたと怒っている。なぜきかないのかといったようなことで、総務委員会が執行部に巻きついてきている。NTTに売却しそこが再開発されて客を引くと他の商店街がすたれるのに、知事は思いやりがないことをするとの意見も出ているらしい。

ともかく巻きつきたいのだろう。中島、蔵内、松山あたりがくどい。とくに中島がくどい。旧スポーツセンター、教育会館あのあたりが、大牟田線の福岡駅移転などとのからみで、あのあたり天神一帯が数年後には見違えるようになる。私があと十年も生きていくかどうかと言った人がいたがそれはともかく、その頃には天神の人の流れも様が変わりすると思われる。NTTが教育会館跡地を再開発用地とすることに異議を唱えるのはおかしいので、さすが県議会総務委員会の誰もが異議は唱えないが、執行部に難くせをつけにかかっているのだ。

3月12日（土）

春が来たが

知事はついていると中食の時に福原君がいう。行橋の植樹祭も雨天でなくてよかったし、あと関門橋を渡って橋下のレストランで潮流をみながら春来たれりの快晴の中で食事ができ、すばらしいドライブになったからである。今朝は鶯の鳴くのをききながら食事をしたので気持がいいことが重なっている。この食堂では車で立寄るまいかと迷ったところボーイさんが呼び込んだのだし、一番せまい海峡部分で潮と船の往来、対岸の門司のたたずまいをながめることができた。又近くの席には北九州から来たという女性群と目が合って向うから「知事さん」といって近寄って来たので、持っていた関門橋刷り込みの名刺をみんなに配るとい一幕もあった。一面はこういう明るい日だった反面、凶事もあった。昨深夜、何者かが薬院の中国総領事館一階の窓に銃弾を打ち込むという暴行を演じ、八時半頃私は郭総領事を見舞うという事態になった。県のイメージダウンになること甚だしい。何にもならぬいやがらせをする。打撃感痛く身にしみた。

3月13日（日）

糞詰まりが解けた

昨日は一日中大便が出ずに苦しんだ。夜就寝前にセンナを煎じてコップ一ぱい飲んで今日はそのせいか通じて気分がよくなった。何とかかなと思った昨日一日がいけなかった。知事という仕事ではトイレにも随行者が待ち気であるので思うように用便できない。在庁時間で少しひまがありそうなきは何かできる。本来なら在宅中に済ませておくべきなのだが、出発が少しでも早い時は用を済ませぬ間の出発になるから困った事になってしまう。それに近頃はやっぱり睡眠が自然でない。早目に就寝することにしようと思う。朝床の中でぐずぐずするのが一番いいが、それができない身上であるからには早目に就寝するしかないだろう。今日は扁額用に「恭則寿」というのを書いた。三月五日の記事にもした言葉だが、自分の肉体が何を求めているのか、もっと客観的に考えうるようにならないといけないのであろう。

3月14日（月）

頼りない前途

昨夜は睡眠時間が十時間もあったので、調子がいいはずと思ったのに、ひとは顔色がよくないというし、自分でも頭のどこかが正常でないとの自覚があった。頭を振って一寸痛い時のようだがそうでもない。時々痛いかなと思う程度の妙な異常さである。何だか変だと思う。ということで一日が過ぎた。やはり衰えは確実のようだ。二月補正予算の早期議決を今日までにとっているのだが、土木委員会の審議のもたつきで、五時過ぎの本会議となった。それまで、読書ということで黒川紀章の「共生」論を読了し、二回目改めての通読に入った。こうした暇に杉山氏が来室しての話に、統一労組懇の扱いについて、県評との仲がうまくもてない云々、私は全解連と同じに扱うしかないだろうとっておいた。労戦の「全統統一」で共産党系すべてを切ってしまうという要請が出ているとのこと。奥田三期目をいう人がいるが、あと一、二年の間に支持母体がいかに動揺するか見当がつかないし、私の健康も前途不明とっておいた。

3月15日（火）

吉村元秀が組合のことではねる

吉村元秀が踊り高岡新がばんそうして予算委員会が七時間も時間の無駄をし、当方の行動も大きく狂わせられたのがこの一日だった。若いのも一因かも知れないが、根は自民党の労使関係についての無理解からきている。経営者の方がはるかに理解はよかろう。今日午後早く、地裁が十七年も前亀井初期の県職員スト処分について棄却の判決を出し、知事を被告とする原告の中に管理職になっている者がいるということはおかしいではないかというのが、彼等が追及しようとするポイントである。判事もこの時点でそういう判決を出すについては何か一物をもっていたのかも知れないが、吉村はそれを利用して知事攻撃をしてきたわけ。十数年前にスト処分をうけ無効の提訴をしている者が被告の知事と同じ立場に立つ管理職になるのはおかしいと思うのもいいが、それは公の場で何時間もかけてたたみかけてくるのはどうかと思う。昇任させるのも、提訴するのも自由では？

3月16日（水）

総領事館襲撃事件で大使館に参上

福岡の中国総領事館襲撃事件につき中国大使館に出向き陳謝するとともに、経過について概要報告した。企画の古賀次長も同席。章大使はわが方の陳弁行動について了としつつも、犯人捜査につき、このまま無為に終るとなると、両国の友好の将来に傷を残すことになる旨牽制の意を表明した。若干の思いの違いがあると思われたのは、県の側に捜査の責任があると思われているのではないかという点である。県警本部の方で、捜査に付もどかしくなるような発表しかしてないらしいし、それが、県を通じてでなく報道陣の方からしか情

報が流れてこないからであろう。警察の方で口を閉しているのが気に入らぬかのように私には受けとれた。むしろわれわれの方ももどかしい程にしか情報が入らないのである。この事件には右翼が、暴力団との関係で噛んでいるらしい。国際関係史上はじめて在外公館が凶器で襲撃されたという大きな衝動だからだ。

3月17日（木）

時間ばかり流れる

警察共済のサンヒルズホテルの落成式に出て帰宅でき、一時すぎからずっと自宅での時間が過ごせたのに、十二時にこれを書くまで何をしていたやら結局筆を持って時間を過ごしたにすぎない。色紙八枚と岩崎隆次郎、山口一弘の両氏に贈る壁掛（半裁半分）用の揮毫をしたのと、あとは書譜を何程か書いたにすぎなかった。時間の流れは早い。十時半頃教養部の福留氏からの電話で五月下旬の土曜日に「私の昭和史」みたいなことで講演をしてくれないかとの依頼があり、結構ですとはいったものの、実は大変な事を引き受けたもんだと思うようになった。単なる自分史ではなく、客観性をももたせねばならないが、かなり資料の準備も必要はずである。それを準備する時間のゆとりがあるだろうか、又どんな構成にしたらいいだろうか、あれこれ考えながら、構成から準備しなければいけないだろう。時間がどんどんすぎていくのに、これといえる納得も展望もなく流されている無力さを感じず。書譜が読めるかという、半分ほどしか読めない。解釈訳読できるように勉強すべきだろうか。

3月18日（金）

やはり調子がよくないようだ

夜久しぶりに体重を図ってみたら五四 kg あった。まずは変化なしといえる。それが、中山日出子氏が来宅しての話で、みゆきも四六 kg に減っているとの話でびっくりした。以前は五七 kg もあって私より多いと思っていたのに、一〇kg も減ったという。中山氏は少々太ったように思うのできいてみると四七 kg とのこと。私自身殆んど変わらぬか一寸はふえているくらいであるのに彼女は減っていて先日の簡易人間ドックの所見では五一 kg までふやすよう通知が来たという。他については全く異常なしなのに少々案じられる。私は糖尿と肝機能に呉々も用心というので、この頃は睡眠薬（安定剤）を加えて、注意怠りなく三種の薬を飲んでいる。食欲はあるが睡眠不足、歯は上の臼歯左右ともガタガタ、眼鏡があいにくいところ。みゆきは自分で言う「近頃何か意欲、気力がなくなった」と「どこか旅行したらと思う」と。旅行も一人ではつまらないし、連れ次第ではかえってよくないのではないかといっていた。昼間の独りがいけないのだ。

3月19日(土)

飯塚での菜の花摘み

午後のあき時間を利用して飯塚の河川敷を選んで菜の花摘みをした。十日ほど早ければもっといい花摘みになっただろうが、それでも結構摘んで来た。雨がつづいたせいもあり、少しまだぬかるんでいた。行く途中若杉山を利用してハングライダーをとばしている者が多かったこと、河川敷で中食をとっている折に、頭上でヒバリがすみきった声で啼いていたのが印象的であった。羽がふるえるように動いているのがよく見え、幼い頃に麦畑でうけた印象がよみがえって来た。舞い上って羽をあんなに動かしてさえずりつづけるのだが、何をしているのだろうかと思議に思う。飛ぶというのではない。恐らく地上の巣を五〇メートルほど上から見ているに過ぎないようにみえる。鳥にくわしい人にいつかきいてみたい。菜の花を摘みに来ている人も結構多いものだ。近い人はたびたびそれができるから楽しいだろうと思う。又、子供にとってはこの恵まれた自然は忘れえぬものになるだろう。

3月20日(日)

家屋のまわりの雑用が課題

今日明日は連休。公務の予定全くなし。入れないように努力してくれているからでもある。一日中小雨が降っていた。宿題の揮毫が何ぼかある。朝からそれにかかる。書譜の臨書もする。夕方まで筆墨のことに時間を費した。できれば家の外まわりの仕事をしたいとも思ったが、雨が降るし、ながめてみても一寸では仕事にならないものばかりである。誰か雇ってでもしてもらおうほかはない。平素やってないし、連休だからといって外仕事をする訳にはいかない身分である。外出のレクレーションという手があるが、この頃は一向にその気にもならない。誰か呼んで来て時間をつぶすのが一番近道である。ふつう女仕事といわれる事もだんだん億劫になってきたとみゆきはいう。これまで藤江君が手伝ってくれた買物、ゴミの日の持ち出しはしんどいという。私が手伝うわけにもいかぬ。窓にホコリも積る。連休でもそうした事が出来ない不自由さだ。

3月21日(月)

書譜臨書のこと

書譜を臨書しているが、使っている便箋一枚でシマッター、と思う箇所が二、三でてくる。そのままに書き進む。しかし、後髪ひかれる思いは何が書いてあるかわからないままに進んでいることだ。心のゆとりもできたので、手本のあと書きを再度読み、書道全集を引き出してみた。八巻の唐Ⅱというところに、何が書いてあるかの説明などを読むことができた。また、駒田信二「中国書人伝」というのを引っぱり出し、孫過庭についても読むことができた。ゆとりがあるからこそ今日できた点検作業である。漢の張芝(百英又は伯英)

魏の鍾繇（元常）、晋の王羲之（逸少）そしてその子の王献之（子敬）の四人を四賢といっており、張鍾の長所不足をミックスしたのが王羲之だというのが書譜のはじめの方に出てくる文脈の骨子である。手本は最善をつくしてあるがまだ欠点があるという。それも巻上だけしか現存しないといわれている。流れるような運筆だ。

3月22日（火）

八丁和生氏救急入院

八丁和生氏がクモ膜下出血で一丁目の広瀬病院に担ぎ込まれた。朝七時頃の衣笠氏からの電話でそれを知り、登庁途中見舞に行った。人工呼吸というのか酸素吸入というのか機械で管を通じて鼻と口につながれており意識不明。医師は九分どおり見込はないといっている。十九、二十の二日は東京に行っていたとか。超多忙の身のようにだった。帯状疱疹もあったとか、夕方は黄胆がでていたとか、無理が重なったことは否めない。どこか気丈なところが表に出ているのを感じることが多かったが、裏ではこれを支える肉体が続かなかったようだ。タバコ、酒はやらないし、通常人のやる遊びもしない。私が色紙によく書く寛楽、寛怒とは反対のことが多くみられた。かなり多くの敵を作ったが、それなりの力量で社会問題研究所を二十年以上もきりまわして来た人である。県評の岩崎とそりが合わなかったのが印象的である。ただ、こういう事に出くわすと人間のはかなさをつくづく感じさせられる。

3月23日（水）

「お布施事件」の初判決でる

十時に「お布施事件」の初判決があった。諸岡氏と那珂川町議山根氏の二人についてである。有罪。諸岡氏は懲役八ヶ月、山根氏は罰金十万円、どちらも四年間の公民権停止つきである。諸岡氏の懲役は四年間の執行猶予つきである。新聞はネタができ、ホイホイであれこれの記者会見を判決につづいて記載した（夕刊）。県議会もよろこんで知事緊急質問を予算特別委員会でとりあげた。タイムリーな判決だったわけ。被告側の弁護団は後日協議の上控訴する構えである。月末と五月に第二弾、第三弾の判決が出るので、それを待って一括やるのだろうか。「政治弾圧」だと批判してみても、そうしたものだともわかり切っているからどうしようもないが、それならそれとして、控訴で時間かせぎをさせてもらうというのが被告側の基本態度のようだ。検察・裁判と時の権力とどのような関係にあるかを知った上であろう。ともあれ、これらを承知の上でまずい事はせぬ方がいいに決っている。

3月24日（木）

都市高速道路公社の無責任さ

おかげで当初予算提案の「二月県議会」は最終段階まで来た。関係者みんなよく頑張った。

野党側もいろいろ文句はつけたものの協力的といってよかった。しかし、今会期で予想外なのが都市高速道路公社の赤字問題だった。十五年もの間、対応策の樹立に怠慢があった。官僚主義的無責任さが極度に達していたといえてよい。県からも応分の出資、赤字対策がつづけられているから県に責任なしとはいえないが、何のために理事会があるのだろう。私は答弁の中で「政治生命を賭けて」対処するというしか議会側を納得させる術がなかった。膨大な、末広りの赤字が北九州道路に見込まれ、制度的解決の途をさがすしかないのである。年間収入の2倍もの利子を払う形になっている採算性の悪さを放置していて、議会もまた見逃していたといえる。勿論議会より県に、県より理事会に何倍もの責任があるわけだが、こんどの議会ではこれには閉口させられた。

3月25日（金）

八丁氏の通夜

八丁和生氏が十一時四五分に死亡。於広瀬病院。脳血管障害との診断らしい。夜七時から野間の自宅で通夜、喪主は妻の雄子さん。娘さん二人はこれからが大学という時。明日四時から野間の飛鳥会館で密葬が行われ、四月六日に、大手門会館で「追悼の集い」が一時から行われるというスケジュールができています。気の強い男だった。それだけに敵も多かった。自分に対してもきびしく謹厳なのはよいが、仕事熱心の余り肉体に冷酷だったようだ。体の使いすぎで、近頃医師から入院をすすめられていたのに、振り切って仕事にはげんでいたようだ。ひとのことはそう言っても、自分をはたしてどうかとなると自問の余地が多分にありそうだ。彼、五十一歳、まさに人生の絶頂期である。私は学生部長を終え、イギリス留学のち教養部長の時だろう。しみじみ無常という言葉をかみしめた一日だった。「もう過去の人間よ」と来葬の知人に言って私は帰宅した。

3月26日（土）

問研の転機

四時から野間の飛鳥会館で八丁氏の葬儀、朝から弔辞を作るのに時間がかかったが、知事というよりは「恩師」ということで葬儀に臨んだが、一部の記者は私との関係に注目しており、インタビューさえ云々していたようだが、それはことわった。問研はどうなる、ということが私の関心でもあったが、東定君はつづけるというし、衣笠君も弔辞の中でつづけるから心配するなという意味のことを述べていた。疑念は晴れたが、では誰が揖を取るのかということが宿題となる。私にも意見はあるので、そのうちに開陳するチャンスはあると思う。八丁氏は理論に忠実であった。それだけに固かったし、他の理論との折れ合いがよくなかった。個性の強さは長所でもあるが、欠点にもなる。他との折れ合いが問研というような組織月報という雑誌には必要だったと思う。八丁氏はそのことがわかりながら、自分に勝てなかったのであろう。今後の問題はその点、転換が求められる。

3月27日（日）

久しぶりの庭仕事

すばらしい天気で気温もかなり高かった。市民会館及び須崎公園で展開された春闘共闘のフェスティバルという初の試みは、労働組合員家族たちを楽しませたようだ。二時頃帰宅し、私も久しぶりに裏庭に出て草抜き作業をした。いろいろ花も春らしく咲き雑草も元気よく立ちはじめていた。草は抜かねばならぬが、抜かれるために生えており、生えること自体がわれわれにとって幸せであると、草抜きをしながら考えてみた。甘夏柑が重々しくたくさんぶら下がっている。近いうちに取りろうと思う。立派なものだ。取られるために実っているのだ。万両の実が美しい。海棠も咲きはじめてし、ボケは立派に花を揃えている。久しく庭仕事をしないので、鉢類が用済みで無造作に積み重ねられているのを見ると何となく荒廃感を覚える。心が通わせてないことが反省される。週に一日は庭仕事をしたいものだ。色紙も書いた。

3月28日（月）

社会問題研究所の将来

ひるま、外まわりをしていてあき時間ができたので問研に立寄った。東定さん一人いた。八丁氏死去のあとで木下さんは休んでいた。きけば八丁氏は木下からも飽かれていたという。研究所内での経営視点の不足とワンマンぶりが目立ったようだ。昨日は県評の役員と話すチャンスがあったが、坂本、松田のトップ及び自治労の岩田などは問研の将来については何とかしないとイケないといっており、八丁氏がいなくなればかえってやり易くなるとの意見にきこえた。私は東定に、月報をつづけないのであれば問研は解散した方がいい、つづけるのであれば「主義を売るのはなく情報を売れ」とよくよく言っておいた。問研は社会問題について一定の主義を月報に展開するのではなく、問題を分析し、大事な情報を流すこと、斯界のリーダーのいい分をのせることによってこそ読者をふやしうるのでということをよくよく言っておいた。問研の将来はそうなるかどうか。

3月29日（火）

八丁氏の退職金などどうなるか（超零細企業だから）

八丁氏の年金や退職金について東定さんに電話してみたら、年金は掛けてあるが、年数二〇年をこし、多くはないだろうが、奥さんに渡ることになるだろうとのこと。退職金は月給に勤務年数を掛けた額は準備しないとイケないのではないかという線が常識的なところと思うとの返事。三〇万円として二五年で七五〇万円である。その額を問研が積んでいるのかどうか聞かなかったが、彼女の口ぶりからすると、今の勤務者が一度に全部やめるのではないが、積立金として八丁氏がやめる分ぐらいいは今でもあるというふうに受け取れた。ぎりぎりの経理状況のようだから七五〇万円も出して底をはたいてしまうのかも知れない。

ともかく、周囲からそうした問題についてあれこれ心配する声が出つつあるようだ。衣笠氏から部内の統一した意見をまとめた上で、心ある人達に集ってもらって今後どうするかを四月六日の「偲ぶ会」以降に外部に相談をもちかけうるように準備したらいいのではないかと、私の方から伝えてみた次第である。

3月30日(水)

又も入院

数人の方から顔色がよくないといわれた最近だったが、今日は職員研修所の落成式のあと済生会病院にとび込んで診察してもらったが、小川院長も、昨日のテレビで見た時の顔色は悪かったといわれた。自覚という程のことはないが、やっぱり近頃どことなく覇気がないことは自分でもわかっていた。今朝は起床時にふとんの上でよろけ、足のもつれをその後自覚し、落成式後の祝賀会の時も飲食の欲が湧かなかった。随行の福原氏が病院行きをすすめ、永田室長が駆けつけてきて、今週末までの入院を勧めた。五時には報道陣に発表され、宅には何人かが早速状況問い合わせの電話を入れてきた。疲労で風邪気味というのが入院の理由。便秘はなくなったが、足どりも重く気分ももう一つさわやかでないのが近況ではあったが、今日のように足がふらついたのは新徴候といえる。入院の勧めもあり年度のかわり目の多忙さを思うと気になるが、仕方がない。

3月31日(木)

血糖と肝への対応

病名

椎骨動脈循環不全

入院には直接の原因はなかったと思う。敢えていえば疲労かも知れない。その疲労はやはり総じて衰えだろうと思う。小川院長は昨日のような脳障害(足のもつれ)は今後ともおこる可能性があるから要注意という。具体的には糖尿と肝機能の低下から誘発されているようである。二十日ほど前からの便秘の傾向も肝にはよくないからつとめて早めに対応するようにとのことである。下剤を使っておろすことに躊躇しないこと、といわれている。両脚にあかい斑点のできもの風のもので出て、もう二週間になろう。いやその傾向はずっと前からあって一年も二年もになる。近頃少し目立っている。これは明日皮膚科医にみてもらうことになった。ともかくもあれやこれや問題が出てくる。生活のリズムと老衰に基本問題があると思う。有難いことに食欲は衰えず、何でも食べておいしい。食べすぎないようにコントロールするのがつらいほどだ。

4月1日(金)

書譜の書き下しをしてみた

入院中の一寸した時間を利用して孫過庭の「書譜」の書き下し文の最後の方を書いて仕上げたが、誤りもあるだろうし、第一意味がほとんどわからない箇所だらけだった。半ペラの原稿用紙三六枚になったが、思えば垂拱三年紀元六八七年という唐時代のこんな難解なものを今なぜ書きくだしに直してみなくてはならないか、自分のしていることに納得がいかないのだが、考えてみると、これも一つの意地でしかないようにも思える。しかし、病床にあるからこそ、この無駄を敢てする気にもなるのだろう。無駄骨折りも甚だしい。しかし、所によっては理解もできるので、又の機会に、臨書でもする時にわかって臨書できる部分が少しでも多ければそれだけ自己満足になる。それだけのこと。よくも書論なるものをこれだけ綿々とやったものだと感心する。日本に文字なく、漢字なるものが輸入される頃とみていい「書譜」だ。古今和歌集などその書法を学んでいると思われる箇所があることに気付く。

4月2日（土）

「生と死の教育」

小川院長が「生と死の教育」というのを読んでみたらと借してくれ入院の三日間に一五〇ページ（2/3）ほど読んだ。死の教育は生の教育であり、その逆も成り立つ。又教育というのを体験におきかえてみると、昆虫でもペットでもその死を体験した子としない子は人生に関する考え方も違うらしい。この頃は以前の家族関係、家族機能が崩壊して、子供が祖父、祖母の死に当面するケースが極端に少なく、病院が死の体験を隔離してしまう役割を果たすとは誠に遺憾というようなことも書いてあった。われわれにとっても否定はできない。子や孫は遠くにいて死に気付かないだろうし、佐方の母についてみゆきに、たまには行ってたずねてやったらと持ちかけてもさほど関心を示さない。有田の中西家の話もあるが、相続の関心だけが親子の心の糸になってしまっている場合もある。死と生、縁と生活、日常と異常について、もっと人間らしさを回復するようにならなくてはいけないのではないか。

4月3日（日）

春日の縁側

起床して天気がいいので西の縁側のカーテンを開けようとした時、蘭の鉢にひっかかって、又、倒れかかり、カーテンにぶらさがったため、カーテンレールを片方もぎとってしまう形となり、これを復元するのにビスまわしを使い梯にのぼるやら一時間ほど時間をかけてしまった。やっぱり弱っているのかも知れないという不安が一瞬横切った。夜、安部スミ子さんから見舞の電話があり、その中で、八丁君の死で精神的ショックを受けているのではないかという。そうかもネと答えておいた。入院中永田室長が同じことをいったと小川院長が私に話してくれたが、そのように考える人がいるものかと感じ入った次第である。

小川院長には何回か覇気がなくなったとは告げたのだが、それほどに、何だか元気がないのに加え一寸足許がふらつく感じが加わっている。気のせいだろうか。外は全く春そのもので雪柳やボケが咲き、縁側がねていて暖い。できるだけ横になったらいいと小川先生はいわれるが、そういう習慣がないので横になるのもしばらくしかもたない。

4月4日(月)

花輪、盛花、花壇、花の春に葬儀でも花一ぱい

花一ぱい。ほんとうにどこにも花。それに近々のうちに葬式の花も一ぱいみせられた。八丁和生氏、大神健太郎氏、高田光雄氏、花輪などぎっしり。私の入院にも見舞の花がおく所ないほどに持ち込まれた。さながら極楽もこうだろうと想像する。今日は大神氏の本葬だが、中洲の大地主ということ、井上吉左衛門、井上雅美両氏のうしろ立てだということをはじめ知った次第。夕方は高田光雄氏の通夜、これ又解放同盟堅粕地区の大物現役市議員で近くの解放会館は葬儀に使われて花一ぱい。一ぱいの人ばかりであった。世も贅沢になったと思う。花でうずまってあの世に送られるのだ。大神さんの葬儀会場の祭壇も花一ぱいだが、供養の花輪が誰かわからぬほどに立ててある。一〇〇〇といわぬらしい。一々見ておれぬし見てもおぼえられない。でも出さないといけないと思う人が一ぱい競合しているわけだ。大変な時代になった。ひっそりと家族と友人だけで静かに送ってもいいのではないだろうか。

4月5日(火)

軍隊の時の毛布

どこだったかの某運送会社から私のネーム入りの軍隊当時の古毛布が一枚県庁に届けられ、秘書室に届けられていたが、今日毎日新聞社がこれについて取材するという。毛布をかかえて写真をとり事情をきかれたが、たぶん鯖江時代のだろうとっておいた。製造は広島陸軍被服廠のものである。四〇年以上も前のものである。昭和十六年製とある。大阪中部軍司令部、久留米砲兵隊、宮崎守備隊など転々としたが毛布はそれらのうちどれと断定できない。ネームの筆跡は間違いなく自分のものだ。満州時代もあるがそれは考えられないし、消去法でいくと鯖江ということになる。私が今知事だから福岡県内の運送屋さんが使っていた業務用品につき「知事の名が書いてある」として届けてくれたのだろう。知事とわからなければ消耗され捨てられる宿命。奇しき縁というしかない

4月6日(水)

又体調が崩れた

昨夜は七通もの見舞礼状を書いておそくなったこともあり、又体調が崩れ、ねむれなかった。幸い午前中休みだったので朝食後に寝直した次第だ。生活全体を見直してバランスを

とり直すべきだろう。中でも就寝がおそくならないようにすべきだろう。小川先生の意見では糖尿問題が多方面に影響をあらわすから、無視しないようにとのことである。肝臓と伴い厄介なものを背負い込んでいるわけだ。運動不足による体調バランスの崩れもあると思う。ジョギングだの散歩ができない、ゴルフもできないとなると、面白味はないが室内体操しかない。少しずつ心懸けてみよう。途中眠りから覚めるのはトイレに行きたくなるからであるが、夜間は水をのまぬようにしたらとの意見があるが、他方水分をとって新陳代謝を促すのはよいことだとの意見もある。更に、肝臓にはアルコールが悪いとのこと。好きな方ではないので、一切とらないこともできるので、更に更に減量しようと思う。

4月7日（木）

記者団との花見会

夜西公園の鶴来見亭で記者クラブとの花見会があった。早いのは四～五分咲き。あいにくの雨だが、やはり花見はいい。雨の風情も格別だ。夜の闇と電光、雨、花の対照が何ともいえない。昼間なら昼間でいい風情を感じるのであろうが、われわれは昼間のそれを望むわけにはいかない。記者クラブ、広報室秘書室の合体だから人数が多すぎてそれが難点。三〇人といわぬ会衆だったろう。一〇人以下でしんみり語り合いながらの会の方がもっといいだろう。記者たちは裸の知事に接したいというし、私も記者のもつ率直な意見をききたいが、人数が多すぎてしんみりした話が交わせないのが残念である。花見というような形ではなく中食会にカレーライスを食べながら話し合うとかの工夫があってもいい。報道に直接利用するというのではなくて、どちらもが、相手のありのままの姿を知り理解し合っておくことが、相互に仕事上無形の役に立つはずである。県議会についても、与野党の動きについても知りたい情報を彼等も持っている。

4月8日（金）

都留大治郎の死

夕方福岡斎場での都留大治郎の通夜に出る。九経調が事務的に世話していたようだ。68歳というから私より一年先輩。どこでおぼえたのか、よく酒をのんでいた。一説によるとアルコール中毒でカバンの中にはウイスキー瓶をしのばせていたという。森耕二郎、正田誠一の二先輩のマネをしたのではないかとさえいたい。この二人も早死にした。好きなことをして死ぬなら、ここまで生きてきてもう不足はないかも知れぬ。この前の福岡市長選に際し、引退する進藤市長から推されて候補になる道はかなりなところまで進みながら、自民党の一部から文句いわれたのか、桑原候補が決するまで、「政治入院」させられたのが都留氏であった。保守地盤でかなり名声をあげていたのに、一面革新的なところもあったので、それを不満とする者が待ったをかけたのであろう。奔弄され、気の毒だったが、西日本新聞がその後も大事に遇していたので、生き甲斐はあったらと思う。酒による事

故死とは残念だった。

4月9日（土）

老人対策

日赤今津病院に老年病センターが出来、病院自体前面新装改築が成って今日落成式祝賀会が行われた。県、福岡市周辺市町村財界なども資金の応援をした。山本日赤社長も参列した。二年足らずで二期の分工方式で、昭和四年以来の木造老朽の建物が立派に近代化された。老年病センターは全国的にも珍しいといわれる。一八〇床で収容は三年を限度としてローテーションさせることを考えているようだ。逆にいえば、いつまでも入院されるようでは困るのであるから、特養など老人ホームその他の中間施設について考えていかないといけないことになる。それは県、市町村の行政責任でもある。その意味でこれからその面について行政施策をフォローしていく必要が生じたわけである。今後の重要課題といえる。県内でもあちこち実験は行われているようであるから先行事例について早急に研究してみたいと思っている。

4月10日（日）

春にそむくことしげし

高田光雄氏の合同告別式。会場の堅粕会館は氏が骨折って建設したものといわれている。この付近一帯の部落の住宅改良に功労があった。市議ポストは長男が後継したいといっている。34年から連続八期市議をつとめ、実力者である。先日は都留大治郎、その前は八丁和生とこのところ葬式がつづいて無常の感一入である。高田、八丁の二人は同じような脳障害で長わずらいなく逝った。去られた側にとっては訃報は我が耳を疑うというほどの早さであるが、逝く者にとっては苦痛の時間が短くてよかろうと思う。同じ死ぬなら苦痛の時間を短くしてほしいものだ。近頃の記事には病気のことや葬式のことを何回となく書かれた。それだけ身近に凶事が多いわけだ。春らんまん万物萌えるというのに、生命を感じるより死を感じるのに時にさからっているわけだ。福原氏が昨日（異動のため）、私の健康チェック資料をまとめてくれた。

4月11日（月）

人事異動

一般職員の人事異動が今日発令になった。人事は半分が喜び半分がうらむという。光と蔭とも表現しうるだろう。先日から内示があって、職員組合から早速苦情が出た。尤もな側面もあるかと思うが手直しをしていると、総崩れのおそれがあるともいわれる。しかし、人事は知事の最重要課題と指摘する人がある。その通りと思う。だから出る苦情が重大な苦情かどうかである。人事を扱う幹部に重要人物をおいておく必要がある。二重又は間接

コントロールが必要ということだろう。多面、多くの幹部が納得しなければならない。むずかしい問題というしかない。今日の職組交渉でも組合側から出たように、「亀井時代の悪しき慣行」というのがある。権力主義、抑圧主義でルールが敷かれその手直しがなかなかすんなりいかない。信をおくことによるのではなく抑えることによって権威を守ろうとするやり方である。組合を処分権発動で抑えに徹するのである。今なおこれが尾をひいている。

4月12日（火）

社会問題研究所の今後について衣笠氏の意見をきく

連絡によって衣笠氏が来庁し、杉山、安達の二人をまじえ、今後の社会問題研究所のあり方について基本的な考え方をきいてみた。岩崎隆次郎氏は使えるのかどうかということが私の念頭に一寸あったが、衣笠氏の意見をきくのが先決ということだったのであるが衣笠氏は否定的だった。岩崎のように現役引退者では、意見が通らないし、混乱のもとになるというのが理由。なるほどそういうものと再考させられた。岡山から河野正輝氏が九大に転職してきたので、彼の力も借りたいので、私からよろしくと衣笠氏は言った。福留は勿論、徳本や石川らが手伝ってくれそうだし、やはり学者の力を借りるのが先決と衣笠氏はいっていた。私は自治労や教組、全通など、いろんな組合の力も借りたらと意見を出しておいた。衣笠氏は「連合」の地方版で今の県評がどう転びはじめるかを見てからでないと、組合工作はしにくいとの意見である。だったらこの秋をこさないと思当がつきかねるわけだ。

4月13日（水）

又健康のこと

ゆうべはよく眠ったはずなのに、体調が万全ではない。まだ眠いし、どうも頭の調子が正常でないように思える。左の方がふらつく。少し前から左に耳鳴りを感じることがあった。基本的に過労、睡眠不足の解消に取り組まないといけないのではないのか。便秘と思ったが、今日はほぼ通じた。注意しないと便秘になる。今と思った時に便所に行けない身なので、辛抱するからいけないのではないだろうか。前々から小川先生には睡眠がよくとれなくてひる間は眠いし、頭が霞んだ感じだといっていたのだが、近頃は耳鳴りが加わったように、頭が割れ目をもっているとも思える。先日入院時に、両足（下脚）の皮膚に斑点の赤みが出来て入浴の時など痒みを強く感ずると訴えたが、私が内蔵の問題だろうと思うと言ったので、小川先生は皮膚科医を呼ぶのは次のチャンスにしようということであった。この点も気になる。もう一年もこの状況がつづいているので、これ又心配の種。

4月14日(木)

神奈川県婦人総合センター

一時すぎ車で一彦宅に着いたが、美可がドライブしようといひ出して湘南に出た。足を伸ばして江ノ島までという事になり、県立婦人総合センターに出くわし、そこに飛び込んで見学するというハプニングになった。創立五周年というこのセンター、女性館長金森さんに案内され館内を一巡した。福岡県でもこれを作ろうということになっていて春日原の米軍跡地の払下げにラチがあかないで、もう四、五年になるのだが、今年中に払下げに目途をつける約束を議会にしているといういきさつだが、私にはこの施設のイメージが具体的に湧かなかった。今日の見学で、まずは一例としてイメージが出来たことは大きな収穫であった。設計はコンペで採用したといわれたが、なかなかいいなと思った。図書室を見せてもらったが、七万冊の蔵書とか、福岡では女子大に資料を集めているのが現状だが、とてもここには及ぶまい。カケ出しというところだ。

4月15日(金)

目黒の英彦寮

横須賀から東京事務所への帰途、ひる少し前、目黒の英彦寮に立ち寄った。昨日の婦人総合センターの場合同様予告なしの訪問だったので、寮管理人は驚いたようだ。この男子学生寮が時に話題になり、まだ一回も見たことがなかったので、今回はいいチャンスだった。新学年のはじまりというのに、九割も詰まっていなかった。一学期が過ぎる頃には多くの退寮者が出ると予測されている。月一万二千円の寮費というから、今時安いと思う。が、二人部屋ということと、浴場その他、今時の若い者には向かないのだそうだ。高校時代に一人部屋に馴れ、テレビや電話などの電機器具も使い放題だったのに、それができない。又上級生との間の階層差にも反撥があるともがあるともいわれる。浴場も個室シャワーがいいというだろう。ともかく共同風呂、二人部屋、というのでは、今の若者の生活感覚に合わないので、秋になると空室がふえる。建て替えた方がいいだろうに、まだ建替えの年限に達していないという。困ったものだ。

4月16日(土)

土井たか子委員長を迎えて

社会党の土井たか子委員長を迎えて「21世紀をわたしたち女の手で」というシンポジウムを超党派で開き、夕方、ガーデンパレスでレセプションとなり、私も出席スピーチさせられた。福岡の著名女性が二五〇人ほど来ていたろう。シンポジウムは、土井氏もパネラーの一人として参加。これには二〇〇〇人は参加していたという。土井人気も大したものである。私は一年余り前、知事選の時、宣伝カーのうしろのステップに彼女と一しょに立ってマイクをもち福岡市の街頭を叫んでまわった記憶がまだ鮮明にある。あの時も街角から、

露地裏から市民がぞくぞく土井氏を一目見ようとして路傍に出て来たものだ。それにあの時は売上税反対がよく浸透したので、実に気持ちよかった。今回は男女平等、社会参加を更に一步進めようとの呼びかけであった。国連婦人の十年も終わったが、その趣旨が、今急速に実現に向いつつある。女性の力もずい分強くなったとの実感が湧くこの頃だ。あと一步、二歩で更に見ちがえるような社会になるであろう。この勢いで二一世紀を迎えたい。

4月17日（日）

四月中旬の花 ソロプチミストに期待する

田川から帰り、久しぶりに八木山峠越えをした。飯塚側にも篠栗側にも桜公園があって今が満開を一寸すぎた頃。美事なものだったが見物客は意外と少なかった。舞鶴公園も近頃は西公園をしのぐ立派な桜の名所になっていて、今日も美しかった。隣の後藤さん宅の桜も夜は電気をつけていて美しく映えている。夕方から小雨が降り出したので桜もこれで終りだろうか。藤の房がだんだん大きくなって来たし、カイドウも美しい。これからはツツジと藤だろう。今日は田川のソロプチミストの認証式だったが、奉仕の心を強調する婦人集団。私は近頃の飽腹の時代がローマすら亡びる時があるように日本もいつまで経済大国がつづくだろうかということを中心に、家族の崩壊についてあいさつで言及した。夫婦の間、親子の間、そして隣人との間が極めて危険な状況にある。これは飽腹の時代の反映だが、これが社会的衰退の原因になると思うので、ソロプチミストの皆さんはここに目をやって「奉仕」の精神を生かしてほしいのだ。

4月18日（月）

硬球を唇に当てて歯を痛めた

天気はよい。藤の花房も二〇センチぐらいに伸びて来た。完璧な春なのだ。代休で一日在宅。秘書室からの電話で、留守を預っている高原氏に、明日に備えてキャッチボールの練習でもするよう命じたらしい。彼の要請で外に出た。あまり人目につくのもよくないので、うちの玄関を背に私が球を受ける形でボールをやりとりした。私の不馴れはひどいもので、受けるのに悉く失敗した。そのうちに、彼の投げたのが、私のミットをはじいて口に中った。血がポツと出た。大変な失策である。唇が歯で切れただけではなく、歯が大そう痛むようになった。上、右の中央の歯である。殆んど完全な歯のない当今、この歯まだ上等な方なのに、早速練習をやめて唇に打身の膏薬を貼った。一時間もして血は止まったが、歯の痛みは残ってしまった。春のこのよき日に、とんだ失敗をしたものだ。健康状態の悪化に新しい段階が来たように思われてならない。

4月19日（火）

プロ野球の始球式に神経もすりへる

昨日の硬球による唇のケガで今日の庁議は痛み旁々かっこうが悪かった。記者会見もだが質問がこれに関して出なかったので助かった。早速病院へということで中食前に治療してもらったが、平安先生が深切にしてくれた。三時頃東公園でもう一度投球練習したが、相かわらず、球がどこに行くかわからぬ状況。三〇分ほどで練習を切り上げ平和台球場本年初のプロ野球試合(西武・ロッテ)の始球式は緊張そのものであったが、いざやってみると、ワンバウンドでまずまずの出来で笑いものにならずに済んでよかった。ここ数日このことに多くの神経をとられて来たことを思うと、少年時代にこの種球戯をしてなかったことの因果を痛切に感じさせられた。捕球投球いずれもダメで単に老化が問題なのではない。子供の時にやっていたら身体で覚えるはずなのだ。上手下手は別である。やっておれば昨日の怪我もないし、数日間の心配も無用なはずである。教養部長の時、知事になってから二度、計三度の始球式となった。

4月20日(水)

韓国との関係

四月下旬から五月上旬にかけて日韓交流の諸行事が、北九州市、県の関与でたくさん組み込んであることを改めて認識させられた。昨日あたりからすでに展開されていて、今日は第六回交流ゲートボール大会が三萩野の競技場で行われ、松柏園で夜歓迎レセプションが行われた。私は日韓親善交流フェスティバル実行委員会々長という立場で、このゲートボール大会協賛の趣旨でレセプションに出席した。すでに六回目のゲートボール試合を重ねているとは以外だった。韓国については、昔から、そして今は南北分断ということで、それなりの偏見が一般に多いことは事実だが、いつまでもこの状態で経過することは許されない。今年ソウルオリンピックがあり、南北の確執、大韓航空機事件など特異な事件を背負いながらも親善には積極的に対応しなければならない年である。五月下旬には私もソウルに行く予定になっている。曲折はあろうが乗り切っていかなければならない。その意味で今後の十日間が大切。

4月21日(木)

春らんまんの日のゆとり

藤花がかなり伸びてきた。モクレンも薄紫の花を一せいに開き、コデマリも競うように咲きはじめた。桜は落ちたあとも、赤みがかったガクをつけていて新緑の中で美しさを保っている。県庁に入る道の両脇のは久留米つつじであろうか満開。ヨドガワつつじもこれからと蕾をふくらませている。知事室に矢部村から運んできてくれたシャクナゲは室にとって大柄だが今正に満開である。すべてが梅、桃、桜につづいた春の妍である。四月末近くにはうちで藤見をしようということになるが、この頃は北九州市での日韓交流フェスティバル行事で多忙のようだ。近頃は習字のような詰めた時間の使い方をやめて、できるだ

けのんびり時間を費すのが必要と思っている。今日も夕方深堀、和田の両夫人が来宅したので、「上れ」といって、一時間余も雑談した。高齢化問題を私の方から持ち出したのだが、誰しも考えることは同じだなと思った。

4月22日（金）

岩崎隆次郎氏に額を贈る

たくさんの用事がいくらでもあるものだ。今日も午後六時前に帰宅してゆっくりできるかと思ったが、手紙ハガキ四通書き、色紙のたのまれものを書いて夜の十二時になってしまった。軸物などとても書くゆとりがなくて残してしまった。こうして時間が消えていくことに一日の意義があると思えば諦めがつく。中食は庁内で岩崎隆次郎氏と共にした。昨年県評事務局長を引き、元の職場NHKに仮に戻ってしばらくしてそこも定年でやめ、今は閑職にある。選挙の時は、二度も勝たせてもらった総指揮者だっただけに恩義を感じる。「寛而栗」と書いた額を贈ったのだが、岩崎氏の人格をあらわしているなら幸いと思って書いたのである。彼にとっては現在のような春ではなく、秋といった方がいいかも知れない。現役の人は冷いと彼は言った。いみじくも表現したと思った。去る者は追われるといてもよい。今春なのに秋を感ずる彼の一日がぎっしり詰って多忙であることを祈る。

4月23日（土）

星野の観桜会

八女茶サミット、星野の観桜会、黒木の大藤見、萬歳屋での夕食はグリーンピヤ八女に泊りに行った。矢部川、黒木の峡谷、いつみても大きな自然で、春、とくに満喫できた。大藤は今日観藤の儀があって酒を藤の根に注いだという。まだ二〇センチほどしか房が伸びてないが、長いのは一・五メートルにもなるという。樹齢六〇〇年ともいわれる。五月の連休時には観籐に絶好の状況になり、観光客で賑わうだろう。一寸早目だった。星野の山桜は遠景を見る会になっていて、近よって観賞できないのが残念だが、遠景もすばらしい。あと二～三日で満開だろうと聞く。それにしても標高九〇〇メートルというあたりで最も高い山の三分の一ほどが山桜で一面覆われている。見る方も小さい山頂、それは六〇〇メートルほどの所とか。若者たちが太鼓を叩き、婦人達が山菜、竹で作った食器で酒食をもてなしてくれた。福岡県の景観百選に値するのではないか。山の名は？

4月24日（日）

グリーンピヤ八女

グリーンピヤ八女の遊具施設などのオープニング式に参加したのだが、鶯やホホジロが啼いて申分ない環境。二千人の客はくるといわれている。十分に営業としては成績をあげることができているようだ。池の向うにあるニワトリ小屋も撤去の話が進んでいるとかで、

さらに環境はよくなる。回轉遊覧車を設置する話が進められているようで、日帰り客ながら結構楽しんで帰ってもらっているようだ。私は三木と指宿に行ったことがあるが、双方とも八女よりも格段と施設が大きく立派である。大きすぎ立派すぎはしないかと思う。採算上問題があるようだ。その点八女は大きくないから、小刻みに、ニーズに応じて拡大していけばいいという点、かえって取柄といえるだろう。年金事業団お抱えの前二者と異り、八女は第三セクター方式で県や地元も経営責任をもつようになっている株式会社方式のようだ。余暇時代に向けて将来性が期待され、楽しみがもてる。

4月25日（月）

雑草に思う

四月二十五日といえば子供の頃から天神さんと筍が思い出される。昨日八女からたくさん筍をもらって来て近所の人達におすそ分けするがまだ余りができるほど。タケノコメシ、煮付、すいもの、旬のものだから何に作ってもうまい。休務日なので、裏に出て雑草取りをする。「雑草のごとく」という言葉とおりにあるが、それでよいのではないか。いくらでも生えてくるし、伸びる。それでも抜かねばならぬ。それでも生えてくれる。それでよい。一本一本かわいいのに、抜き取る。揮毫に野草幽花各自春とあるが、それを思う。人間が勝手に雑草ときめてかかっているだけだ。西側にはスマレがたくさん生えている。それをなぜか雑草とせずに抜かない。名も知らぬ草で小さな美しい花をつけている草があるがそれは植えたのでないという点ではスマレと同じだのに抜き取ってしまう。若い時から花の名をおぼえておくとスマレのように抜かないのかも知れない。

4月26日（火）

立派な東公園

毎日のように転勤あいさつ状が来る。うち岡大から九大に移転して来た河野正輝氏のがある。彼は宮崎が故郷だから近くなった訳だ。ヨドガワが咲き出したので、東公園も亀山像付近はだんだん花開き美しさを日ごとに増している。八階から眺める美しさは平地で見るよりはるかに美しいと思う。サンヒルズに行くのに歩いて東公園を横切ってみたが、一段と美しい公園になっていることに気がついたし、吉塚駅周辺も見ちがえるようになっている。これで吉塚駅を改装して立派にすれば光ってくるだろうと思った。活気もある。昨年からは新たに衣替えした国鉄、今のJR九州も新車輦を入れてスマートさを増している。東公園^{ママ}市民がもっと利用してくれてもいいのにと思う。今日東ドイツ文化省副大臣が来訪して来たが、県庁を評して宮殿のようだし室からの福岡市も大変立派と賞めてくれた。実際福岡市はだんだん実力を備えて来たと思うのである

4月27日（水）

九州新幹線鹿児島ルート早期着工のための大会

一時から市民会館で九州新幹線鹿児島ルート早期着工実現のための総決起大会が行われた。鹿児島、熊本、福岡の三県はもちろんだが九州全県にわたる出席者、合計で三〇〇〇人。会場はあふれていた。政、官、財その他各界の要人が主体であった。宮崎と大分のほかは全知事が出席。国会議員、県会議員らが顔を揃えた。東北、北陸、九州の三線（長崎、北海道ルートははずされている）の着工順序を八月を目途に決めるというのが政府の方針で、三線のうち一番にならなければならないというのが、今回大会のねらいである。財源問題をどうするかの問題がネックのようだが、「政治」が優先するとの声と熱気に包まれたのが今大会の特長。政府に決議文をつきつける。明日は上京して大会を再びもってそれを行う予定。地方負担一〇%といわれ、その負担反対、土地取上げ反対という声の一部にあるし、採算を危ぶむ声もある。もっと優先すべきプロジェクトがあるとの声もある。予断を許さないわけである。

4月28日（木）

自然と平和

◎弘法は筆を選ばず

◎弘法も筆を選ぶ

SGIの池田大作会長が今年東南アジアの香港、タイ、マレーシア、シンガポールの四ヶ国をまわった時の写真展が東区の池田会館で十一時からオープンした。日本の富士、東京、福岡の写真も加えられていた。撮影歴十七年というが、一流の技術水準との折紙つきで、何冊か写真集も出版してある。今回の展示は全国でも初めてのものといわれている。カメラアングルとシャッターチャンスがポイントだろうが、どれもうまくいっているのが展示されている。車の中、飛行中にもシャッターを切る人だとのことであった。心技一体といえよう。テーマが「自然と平和の対話」というのであるが、彼の宗教論の中に、宇宙と人間の心の一体、共生観があって、それがSGI平和運動の基礎になっている。今回の写真展もそういう気持で受けとめてよいのではないかと思ひ、オープニングセレモニーでの私の挨拶の中では心技一体、写真から撮影者の心を汲み取ることが必要ではあるまいかと訴えたのであった。

4月29日（金）

日韓親善交流フェスティバルの諸行事一覧

日韓親善交流フェスティバル行事

↑ 四月 十日（日）「私が選んだ韓国商品」展示企画ツアー（～十二日）

十九日（火）バレーボール大会（市立総合体育館）

- 協賛事業
- 二十日(水) ゲートボール大会、同レセプション 三萩野、松柏園
 - 二十一日(木) //
 - 二十八日(木) 日韓経済セミナー(年金会館)
家庭婦人バレーボール選手知事表敬市長表敬
コンサート(趙容弼)(南こうせつ)北九州総合体育館
 - 二十九日(金) 家庭婦人バレーボール大会(北九大体育館)同歓迎パーティ(松柏園)
 - 三十日(土) 文化講演会(小倉市民会館)レセプション
 - 五月一日(日) 大韓民国総合展～五日まで(西日本総合展示場)
韓国青年会議所海外地区会員大会(思永中学)
同記念パーティ(小倉城広場)
 - 五月一日～二日 韓国芸能の夕べ

4月30日(土)

知事の態度に対する北九での若干の評価

夜松柏園ホテルでの日韓交流フェスティバルの席上、名は定かでないが盛んに言い寄ってくる人がいた。「あと十年もすると北九州の人口は九五万人になる。それは北九に地上げ屋がないことでもわかる。ところで、福岡市の地上げ問題で知事のとった態度は立派だった。亀井ならできなかつたし、桑原もやらなかつた。知事は県民党の立場を鮮明にし、それを忠実に守っているからよろしい。行政に強引さがないので評判がいい。物足らなさを感ずる人もなくはないが、それくらいの方がかえっていいのではないか。ケシキばらなくても、今は県民がテレビでよく見ていて正しく判断してくれる。心配ない」といった調子である。又、こんな人がいた「今晚の席に社共は出席しなかつた。仕方がないかも知れないが残念なことだ」私はいった「仕方がないだろうが、あと十年もすれば事態が変わり、平和と友好がもっと広がるだろうから、社共もかわってくるだろう」と。公党レベルの問題、政治レベルの問題をこえて今回の催しがあっているということがわかってもらえればいいと思う。

5月1日(日)

メーデー

全国的には東京ほかいくつかの県で「連合」新時代の統一メーデーが実現したが、福岡では統一を目ざしながらも実現には至らなかつた。福岡地区労内での話合いが進まなかつたのが原因ではあるが、いわば時間が足りなかつたし、障害が大きかつた。共産党系の統一労組懇は現状を肯定し、民労協との統一行動は希望しないのである。であれば、時間があっても来年にはということにはならない。共産党系だけは別にということができるかという、そこまで踏み込むには無理があるようだ。又公務員系の組合は「連合」が民間系だ

けであるため、連合入りには距離がある。メーデーだけでも統一ができれば、県の労働行政にもやり易い面がでてくるのだが、まだ曲折がつづくだろう。次の知事選にも影響があるという意見が出ている。今年の春闘は昨年より一%余上積みがあったが未解決も小企業で半分あるといわれつつ、明るいメーデーだった。

5月2日（月）

博多どんたく前夜祭に思う

例年のように、今日は福岡市民の祭り博多どんたく港まつりの前夜祭。スポーツセンターがなくなったので今年は国際センターが会場である。少しは広すぎるかと思ったが、結構一ぱいになっていた。にぎやかに、派出になっていくので、広さも必要になってきたようだ。市民の祭りとして位置づけられてから今年が二十七回目という。博多のまつり、商人のまつりという性格から市民のまつりにまで昇華したところによさがあるし、この祭りには踊り、さわぎ、洒落、はあるが、神社や神様がいないところに特徴がある。あらんかぎりの催しだが、中心街二十八箇所できりひろげられる。花自動車が電車なきあとこれに代わる。今日の前夜祭にいて感じたことだが、女のパワー、若者の活力である。それを年寄りがうまく指導しているのである。祭りが市民のものになっている。主催、福岡市民の祭り振興会となっており、協賛企業は一四〇ほどであるが、かなりな資金が動き街は華やき、客が寄り、沸き、活性化される。今年は来年のアジア博前座の思いが強い。

5月3日（火）

「書譜」について話を一寸

福岡書道会から案内状をいただいて、午後二時からの国際ホールでの記念会に出席した。岸本雷峰先生らが幹部だが、私にとってははじめてのこと。三五周年という。いわゆる芸術書というよりは文字を正しく書こうという書道教師の集まりのようだ。高校の先生が会員としては主体のようだ。尚文堂が事務局を担当してある。その意味では私に性も合う。五分余り祝辞をのべただろうか。行くまでは全く知らない団体であったので、何をいおうかと思って「書譜」を準備し、カバンの中に解説本など三冊しのばせていた。五分ほどのあいさつの中でもそれにふれた。書譜の中味の理解は並大抵ではない。今の中国人ですら使わない字がやたらと出てくるし、文法上の組立ても難解。文字がわかっても意味が通じない。四割も理解できるだろうか。そういう事をのべた。一万人の人達に教えている人が会員として来ているというので、少しは気持ちを理解してもらえたと思う。

5月4日（水）

ファントム機墜落時代を考えてみる

どんたくは雨がつきもものというが、昨日今日雷さえ伴う大雨だった。博多っ子にとって

は残念この上もなかったろう。われわれも、休務だからおしのびでどこかに行こうかと思ってもこれではどうにもならない。原稿や色紙など、家にいてすることはいくらでもあるので、ひまを見て横になったり、新聞の切り抜きを整理してファントム事件という二〇年前のことを記憶によみがえらせたりした。参与だったあの時の事を二〇周年記念行事の記事にするから原稿をとの要望だが、一寸手数のかかる仕事ではある。引きうけて新聞コピーを手に入れたものの、当時の日記には一寸ずつしか書いてない。エンブラ事件から日記をたどってみるが、いざ原稿になると手が進まない。大変なものを引きうけたものだ。当時とくらべると平和なものだ。学生運動や基地反対を思う気持はいいとしても大学当局としてはまさに進退谷まりだった。

5月5日(木)

個人主義の高まりを思う

子どものことが新聞報道に出ている。十五歳以下の子どもの割合は一九・九%で昨年より七二万人減だそう。個人主義が高まったためか、晩婚、未婚の女性がふえ、出生率も二〇年前は二・六五であったのが、一〇年前は二・一九、昨年は二・一七と減っている。戦前は四・二七で、五人子の家庭がざらにあった。子どもより車、職、収入、という指向が強まっている。独身を貫く女性の数がふえているようだ。子二人を希望する夫婦が主流で六〇%、三人希望が三〇%でその半分。「理想は三人だが経済的理由などで二人」というのが大半のようだ。こうした傾向はそう長くつづかないのではないかと考えられる。もう少しおし戻すことになるのではないかと考えられる。つまり、この数年が減少傾向の底になるとの見透しもある。「親が子を見ない、子が親を見ない」傾向はそれでも止みそうにない。個人主義が高齢化社会の問題をどう処理していくのか、それも心配である。

5月6日(金)

福岡県勢の将来を考える

若葉がどんどん青葉になっていく。藤花も見ることがなくなりましたので手入れの必要を感じず。いろいろ小鳥が囀っているのに名を知らぬのが残念。万物一せいに活発に動いている。今年全国的に強気の景気で始まったが、下期に疲れを見せるとの観測もある。東北地方がいいとは前からきいていたが、今日の安川電機研究所長の話でも、東北大学の活況があわせて話題にのぼった。福岡の場合、石炭と鉄の後遺症が今底をついているので、九州大学もその影響で活動が鈍く、県を筆頭に九州全体にまだ早春の動きでしかない。願わくば間もなく五月の動きに達してほしい。その可能性はあるはずと私は言い切っているのだが言い過ぎだろうか。東北は東京一極集中のめぐみを受けており、更地でもある。関西、中京は織物工業の伝統がある。長野はカメラ、時計の伝統があるのに、福岡は石炭と鉄が死んであと芽が出はじめた段階だろう。数年待ちたい。

5月7日（土）

歯痛で不愉快な一日だった

秘書室の配慮でこの頃は休務日をよくとってくれている。一般が週五日制とか、公務員が四週六休制に入っているから。休務日がふえることは、一般の傾向に合致したものといえる。今日は、明日の出動が一寸あることと、土曜だから休務であるが、それほど異例な休みとはいえない。それでも休務は何と有難いことか。以間為樂の四字を色紙に書くことが多いが、まさにその通り。しかし今日は久しぶりに歯痛で不愉快な一日であった。上右の臼歯だのに、アゴまで痛みを感じず。あいにく、土曜。そして明日は日曜だから治療に駆け込むわけにもいけまい。仕方なく苦痛に堪えて一日を送った。そして早目に、九時前に就床したのである。スカーッとしたい日が欲しい。ぐじぐじ毎日どことなく通常でないこの頃である。誰しもそうかも知れぬが、自分の将来の予測がつかない。大変消極的だがそんな気さえする。依然として睡眠が問題で、こういうことでどうなるかと思う。

5月8日（日）

「第九」を歌う会（ふくおか八〇〇〇人の「第九」コンサート 88）

昨年につづき、今年も「第九」を歌う会のコンサート 88 が国際センターで行われた。八〇〇〇人の歌う会だから大集合だ。メロデーの有名な部分は何回もきいているが、ドイツ語でとなるとさっぱりダメだ。やってみようとしたこともないからである。An die Freude（歓喜に寄せて）の有名な部分とドイツ語、日本語をもらったが練習にもついていけない。Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium, Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum! [歓喜よ、美しき神の閃光よ、樂園からの娘よ、われらは情熱に満ち天国に、汝の聖殿に踏み入ろう！] 国際センターに八〇〇〇人うち五〇〇〇人分は一般席、三〇〇〇人分が今日を期して「第九」をドイツ語でものにしてきた人達。それは服装も女は白、男は黒のユニフォームで統一されている。それは人間が作った神聖さであって、いかにも尊いし、力がこもっている。魔力さえ感ずるのである。

5月9日（月）

歯科の平安先生のこと

昨日今日歯の痛みは止まっているが、二時から平安先生にみてもらって、次の木曜に抜歯ときました。秘書室と連絡して私の外国旅行との日程を合わせるのに、苦勞していただいた。旅行中に問題がおこらないようにすることへの配慮をしていただいたわけ。あと二本抜歯を要するのだがそれはあとまわしということになった。他方義歯も製作中とのこと。この前すでに型をとってもらったのがその工作進行というのである。いずれ到着せねばならないことだが、何分情けないことだ。平安先生も今年限りという意識があつて名残り惜しそうだ。大阪の人だが、こちらに来て二〇余年福岡に残れるなら残りたいとの希望ももらさ

れた。関西人で私もふくめて福岡は住みやすいと思う人は少ないようだ。何か仕事が見つかればいいのと思う。私のこの二〇年来この先生に歯のお世話になって来たので情はうつる。学園紛争を結び目として知り合った仲である。関西弁が特徴の人だ

5月10日(火)

韓国への買物のこと

近くて遠い国韓国がずっと近くになって来た。今晚は浄水茶屋で韓国総領事館の幹部と夕食懇談したが、先方からは四人、当方からは六人出席した。五月一日前後に北九州市で開催された日韓親善交流フェスティバルは一〇万人動員予定が十八万になった事で成功といえ、この下旬に県青年の船が訪韓するがこれで三度目だろうか、今回は私も団長として参加するので、相手方の要人あれこれと会見することになるが、その連絡などってもらっている。そうした近づきを今日確かめ合うことになった。先日安川電機の前波研究所長と対談したが私の方からニックスの追上げに話題をかえた時、技術の面からもこわいのは韓国だとの答だった。今日の話では同じ品物でも日本と比べ向うは四分の一か三分の一で買えるという話である。賃金の安さ、それに流通段階でのマージンの少なさがそうさせるらしい。逆に日本は異状だといわれている。韓国への買物客が日本から多く、この連休でも福岡総領事館での旅券へのビザは何千枚か、急増したということである。円高、ドル保有が異状ともいわれている。

5月11日(水)

福岡総合展の準備に入る

今年予算では「大ふくおか展」を東京で、という事業がつけられた。二月の下旬を目標に、西武池袋デパートを借りることを中心にこの構想で、今日いくつかの課から補佐級の者一四人を選んで、プロジェクトチームを作るよう発令した。もちろん商工部だけでは不十分だから他部からも選出した。以前なら福岡県は石炭、鉄で売り出したが、今はそうはいかなくなった。逆に暗いイメージすら与えている。しかし、何か特徴を出さねばならぬし、出せるはずだから、それを何とかしてみようではないかというのがこの事業の目的である。単なる物産観光展をするのではない。今日選抜された人達が、フクオカアイデンティティを作りあげてくれることを期待している。技術立県と国際化がそのテコになることはいままでもない。東を向いた福岡でなく西を向いた福岡と常に言っているのだが、売り込みは東を向くしかないのである。過去の栄光は今はないが、これからの栄光を早く見つけようではないかというのである。アジア博、とびうめ国体の宣伝も兼ねるのだ。

5月12日(木)

耳目と腹心

部長次長級の研修会があって、夕食会に私の出席要請があり何か一寸話してくれとのことだったので、揮毫の中で題材として出てくる句「集羣議為耳目任老臣為腹心」の十二文字をコピーに焼いてそれを話した。私もそう思うが、部次長も同じ気持でやってくれと十分足らず話したことだった。耳目と腹心の二つを並べてみるこの意味がよくわかるだろう。人の上に立つ者の哲学ともいえるだろう。ただなかなか実行はむつかしい。そればかりか、実行したつもりでも間違いを犯すことしばしばというのが歴史の教えるところだろう。四月から秘書室にスタッフを三人増員したが、そのことに反撥する者が多かった。私は「耳目」「手足」たるべくその点での私の足りない所を補うのだと説明したが、ある人はそれは無用といい、他の人はそれを「腹心」と取り違えて反対した。昔から兵を動かすのに、トップと幕僚、現場の隊長との間にごたごたがあったらうし、大変だったと想像する。今も尚むつかしい問題だ。

5月13日（金）

補助金行政の形骸化一よほど考えてみなくては……

昨日は青少年育成県民会議、今日はソロプチミスト大会と出席して、考えさせられることがあった。儀式、形式が厳正に行われることは必要だしいいことである。が、それが儀式化、形式化してしまっても気づかれぬままに過ぎていくと困ったことになる。農協のすることにしても、交通事故をなくする県民運動にしても、赤い羽根運動にしても、内容がぼけていくことは避けられないようだ。商工会、商工会議所、医師会などにも多分にその傾向がありはしないか。イエスマンばかりが集う。おそろしい形骸化のスキマが見える。県の補助金行政のどれをとってみてもそれがいえる。私立学校の運営などもそうだろう。サンセット方式が叫ばれるが、あとにひけなくなってしまいつつある。失業対策、生活保護にもそれがいえる。青少年育成運動も形骸化の一例とみてよい。民主主義が生きてなくてはならない——どうするかだ。

5月14日（土）

趣味、教養を追う女性

玄羊会書展があつて今日は講評とそのあとの懇親会。今回は昨年より出品点数はふえたものの、最盛期に比べるとやはり落ちているという。書の愛好者も最近は減少傾向のようだ。それでも、同好会の中で女性の数は男性をかなり上廻っている。こうしたレジャー利用分野では茶や華はもちろん、旅行その他多くの面で女性の人口が多いときく。男は家計を支えるというよりは「出世」を望み、がむしゃらに働き、酒を飲み、という時間に多くを取られているからだろうか。女は子育てを終った主婦、男に拘束されない有業婦人など、自由に我が身を処する傾向が強いためではないだろうか。「出世」はそれほど強く執着しない。それに、近頃は晩婚女性がふえている。玄羊会の中にも目につく。未婚を貫くと

いう人も少くない。戦前は子の数が一組の夫婦で平均四・二七人(昭15)、今はそれが二・一七人である。男女平等志向がこういう形で進んでいるのが現実で、この傾向は更に進むに違いない。

5月15日(日)

ひるまのぼんやり頭で何とかやっている。不健康といえば不健康だ

ホッペばれがなかなかひかないせいもあって、近頃は何かにつけ積極性が足りない。気持ちに張りが、気力がない。何回も書いているように、睡眠不足に最大の原因があるように思える。時間は十分に取ってあるのに十分に眠れないのである。必要があれば眠るだろうと思っただけはいるが、どうやら必要があるのに眠らないようにみえる。ひるま、ねむく、ぼんやりした頭、スッキリしない頭で通す。それで時にうつらうつらする。つまり頭が冴えないのである。やはり病的というべきであろう。年のせいばかりとはいえない。ひとにこのことをいうと、周辺からいつも見られており、そのことが、知らず知らずのうちに緊張感と呼び、それが睡眠不足に通ずるのではないかという。一種の過労だろうというのである。しかし自分ではそんなに緊張してばかりしているとは感じないのである。ところでこの日記毎日、衝動的にペンを取ってページを埋めようとして書いているのだが、何を書いているやら文脈がよいかどうか全くの自信はない。意地で書いている。

5月16日(月)

四〇年前の家計簿をみての感慨

昭和二十一年からの家計簿の読みかえしを行ったが、いろいろの事が回顧されるのにびっくりした。かなりいい加減な家計簿だが、物価上昇インフレの様がよくわかる。理髪料金などもぐんぐん上昇している。それから佐方に帰省したり、引越しをしたり、その他旅行の行動もかなり詳細にとらえうる。驚くことに、今日の人は知らないだろうと思われる物品名が出てくる。ガラ、十能、枕蚊帳、ひのし、蠅入らず、青砥、靴鋏、かまどの輪、六一〇ハップ、テラポール錠、ライター石などなど、あげればきりがなし。物が現われ、誰もが親しむのも一時的で、時代の流れによって淘汰され、わからなくなって消える。人間の生活は物的にも社会的にもどんどんかわっていくわけだ。当たり前といえばそれまでだが、四〇年前に生活をたたかっていた人間にとっては、これほど当り前のことに感慨がこもるのである。全く不完全な家計簿ではあるが、記録というものが、人のいかんによって、これほど重要な意味をもつものであるとは改めて感じさせられたところである。

5月17日(火)

県青年の船に追付くために福岡空港を立つ

福岡から北京に直行便があるのに、日程の都合で、それが利用できない。はじめ秘書室の

計画の中には昨日から成田に行き、そこから北京への案もあったが、私が拒否して、中
を取り、大阪経由ということになった。「無駄」と私はいったのだ。でも、福岡—大阪—上
海—北京のコースになり、朝九時半に家を出て、向うのホテルに着いたら十一時になった。
大阪で三時間余、上海で一時間、北京で荷物受け取りに一時間余を費したのである。五時
間ほどアキ時間を必要としたのである。大阪では浅沼組の江崎さんと会い、時間をつぶし
た。江崎氏は参議の遠藤氏の気持を私に伝えたいと空港まで迎えに出てくれたのであった。
北京ではなぜか荷物の受領に時間がかかった。のろのろ作業のせいだろうと思う。決して
「のんびり」という類のものではない。大阪からは旅行社 JTB（日本旅行社）の小倉女史
が同乗し中国を離れるまで、私に添乗員として通訳を兼ねて世話してくれることになった。
ホッペタのハレがようやく平常にもどった感じだが旅行中はつねに大量の菓をのまねばならぬ。
北京は三八度むし暑い。

5月18日（水）

仲麻呂の話（701～770）

安部仲麻呂は唐の玄宗帝に寵用され何度か日本へ帰るチャンスを得つつも遂に長安にとど
まらざるをえなかったという。船が流されて戻って来たこともあり、死んだと思われた事
もあったという。唐の名を朝衡といい、李白と親交したと伝えられる。李白は仲麻呂の死
をいたみ次の詩を残しているという。

今日朝衡辞帝都

征帆一片繞蓬壺——仲麻呂の唐名

明月不歸沈碧海

白雲愁色滿蒼梧——死んだ場所と考えられた

中日友好協会できいた話である。くわしく後日しらべてみたいと思う。正確を期さねばな
らぬだろう。すっかり中国人になりきったのだった。鑑真和上は失明しながらも、不撓の
志で日本にやって来た訳だ。そう思うと、もう一二〇〇年以上の昔の事ながら、両国交流
の意地のようなものが感じられる。

【欄外記入】

同時入唐者

（吉備真備

玄昉

あまのはらふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

（於帰路途次の蘇州船出の港）

ハノイにも行く、任地

5月19日（木）

天津の活況につき思いめぐらす

天津は単なる北京への入口の町かと思った事もあったが、巨大な独自の生命を有する都市で、今は建設の槌音高く活気に満ちている。水晶宮の自室から朝窓の外を見ると七時すぎにはだんだん自転車の数がふえて左右に動いていく。その密度は次第に高まる。何の音もきこえない。黙々と表現しうるとは思わないが、こちらからはそう見える。太陽は東の空すでにかなり高く昇っているのに、輝くというよりは赤く昇っている。自転車の群が、何だか幼い時に見た蟻の行列のようにすらみえる。午前中ゆっくりした日程の中で例により絨毯工場に行ったが、手工労働にかわりはない。コンピューターの時代に、そうした先端技術の導入はないのかときいてみたが、否定的な返事。絨毯は芸術作品みたいである。随行の家永氏が、一枚大きなのを買っていたが、先年私が買った時より、円高のせいか、四割ほど安くなっていると思われた。これで生活ができるのかなと首をかしげたくなる。一日で十センチ程度しか織り進まないというのに、八畳敷きで十五万円程度の価格だったと思う。

5月20日（金）

中国の腐ったりんご

天津で買物をした古文化街、北京のルリチャンのようなところといえようか。筆と紙を買った。筆も小筆、これは消耗が早いので、中国では安かろうと思ったのと、紙は一度、中国のを試用してみたかった。墨については今ストックがたくさんあるし、中国の墨は質がよくないと思うのである。あまり考えたくない話だが、中国の製品は概して質が悪く、他国との関係で信用上損をしているのではないかと思う。知識は乏しいながらそう思う。「ガタが来る」という言葉があてはまるようだ。大学時代中国研究会で旅行し、上海で経験したと同じく、ここ古文化街でもリンゴの腐ったのにでくわした。少々の腐り方ではなく、ひどいのが店頭に並べてあった。随行の家永君に合図して、これだから中国には問題があると思うんだ、と私はいっておいた。上海では籠に一ぱい詰った貨物としてのリンゴだった。流通、サービスという過程に対し、それなりの価値を認めないからではないかと私は推測するのだが、どうだろう。社会主義体制の考え方の問題のようだ。

5月21日（土）

青年の船の船内

県青年の船「新さくら丸」（一万六千トン）に昨夜乗りこんでこれから二泊して韓国仁川港に上陸することになる。船中の旅に入った。船中では団員は研修と交流、娯楽のスケジュールを消化していく。団員は知事が行動を共にするのを待ちかまえているフシがある。今年も旅行中に誕生日を迎える人と、班長とに、私の署名した色紙を贈った。感激する者が

多い。船内ではチャンスさえあれば、一しょに写真を、とって私にポーズを求めるグループ、個人が何ケースかあった。それに今日は日程の中に九時から一時間知事講話というのがあった。私は今の青年たちが飽食時代に生きていることへの自覚反省を促す気持で話した。私の幼少時代弁当もなく学校で昼休み時間を過ごした思い出をまじえたのだが、一瞬きいて涙したという青年もいた。二十一世紀を担う諸君は、日本の没落期を体験しないとはいえないといったくだりには反撥を覚えた団員もいたようだ。日に日にこうして団員は研鑽を重ねていく。

5月22日（日）

デラックスにも程があるホテル

今日はソウル新羅ホテル泊。船中の特別室といい、天津水晶宮ホテルといい、北京の友誼賓館南配楼といい、特別待遇の部屋を与えてくれるのはいいが、育ちのせいもあってか、すべて勿体ないという感じである。デラックス極上である。ひとりで静かに寝られるなら、それでいいのと思う。だけど、世はすべて極上指向であり、中国でも次々と質の高いホテルができていく。福岡でも思ったことだが、少し古くなると新しいのに取って代われ、客が来なくなる。指向は客が決めているともいえる。ホテルでも、共済組合の施設でもそうである。このように動く客の好みには、ある限界以上には不健全なものがあるのではないかと思えてならない。水晶宮や新羅ホテルに至ってはピカピカで、鏡の中に入れられたようになってるので、何とかしてくれないかといいたくなるほどである。われわれのような古い人間にとっては、アットホームでないから落付かなく、特別の容器に閉じこめられたようにさえ感じて休息感が生じない。

5月23日（月）

民族村と水原城

ソウル郊外の民族村と水原城に行った。民族村の印象は、一つは日本の昔とほとんどかわらない田園生活の再現ということ、第二は、福岡県でもこの種のを今のうちに作っておいた方がいいなということであった。「村」の経営は民間でやっているという。明治村（愛知）がそうだろう。明治村の発想もいいが、民族村も一味あっていい。西区に観峰さんがかかわっている「歴史の町」があるが、あれを今一まわり大きくしてみたい。今の若い者が昔を、田園生活を偲ぶ材料を残すことに意義があろう。水原城は城壁の見事さに感歎した。あまり熱を入れなかったのが、紀元何年頃のものか知らないままだが、火器時代のものであろう。天守閣がないのが日本との違い。山城といった感じ。大野城とも違う。ずっと後世であろう。日本の城が朝鮮からの受け売りであるとの想像もつく。今日は快晴にめぐまれ、すばらしい散歩ができたわけだ。緑がきわ立って美しい。アカシアの花が一带を白っぽく彩っている。

5月24日(火)

青年の船事業に参加して

県青年の船事業に八日間の付き合いだった。やっと終り実はホッとした。青年たちの若さはうらやましい。まさにこれからの人だ。我身にもそのような時代があったとつくづくと感じる。団員の中には二〇歳そこそこな者、三十半ばの者さまざまで、この事業で受けた精神的影響もかなりまちまちだったと思う。それでも、若さは一様だ。中国の社会主義、韓国のニックス性、又は新興資本主義については底知れぬ理解の困難さがあつたに違いない。それどころか、円高に象徴される日本、飽食時代の日本の中で育つたそのからだで中国と韓国にポンと接触したとすればどんな感じをもつただろうかと案じられる。だが共通して、世界は一つ、若者は一つという感じを持ったことだけは確かだ。つまり同じく感動し、何の垣根もないことを知ったはずである。この事業で、地域の活動家になる事への期待はあるが、それは未知数の効果であろう。むしろ、国境をこえた感動の共通性、平和への説明し難い確信が種蒔かれれば十分だと私は思う。

5月25日(水)

県議会議長選挙

六月定例県議会前に臨時会をして議長選挙をするという。毎年議長をかえるのは福岡ぐらいのものという。今日はその日。十一時に始まらず、四時半になってしまった。議長は自民のたらいまわしで中村忠和氏から高山へ、副議長は他会派だが社会党の林から農政連の安枝守太氏へ。本会議は五時半から六時半までだったが、堂々めぐりの投票、開票は形式だけだが時間がかかった。何ともいいようのない形式主義ではある。この形式を踏むに至るまでに時間がかかるのである。行政側の職員も多数残業を強いられる。誰に罪があるともいえないが、もっと議員たちの自覚がほしいものだ。林副議長はこんどは跡地対策特別委員になるとのこと。跡地は今年の大課題であるだけに彼は満をじしているようだった。それにしても一年で交代せねばならぬとは百鬼夜行というか、何とも醜態というしかない。今日の臨時会では監査委二人も選出したが、これも利害の交錯地。委員になると旅費や手当や車がつくので、寄ってたかって取り合いになり、ケンカにならぬよう一定の配分ルールはあるらしいが、淡白になれぬものか。

5月26日(木)

日の丸・君が代、デモ・ストについての私の発言に反撥あり

共産党の五人の県議が打揃って知事室に来て、たまっているうつぶんをぶちまけて行った。近々又会うことにした。まずは三池炭鉱の七三〇人の人員整理をやめさせるよう知事は動いてほしいという。次は先日筑豊ハイツで「労働組合に期待する」私の講話の中で、日の丸・君が代問題は主戦場でない云々、デモ・ストの効果疑問云々の私の発言が新聞にのり、

それを見て一般から「与党の共産党は何しているか」と突上げられており、私の発言の真意を知りたいと議員たちはいていた。三池炭鉱の問題にしても、ストで片付くならやったらどうかという論法になるのだが、それはそれとして、新聞記事を見て、知事は日の丸君が代賛成で、デモ・スト否定なのだから、憤りを覚えるし、選挙に応援した甲斐がなかった、裏切られたとの共産党系一般の反応には県議達も説得に困っているのが事実のようだ。共産党系といわず、福教組の中にもそういう反応がかなりあるらしい。もう少し事を柔軟に考えてほしい。

5月27日（金）

意見の「違い」に抗議するとはいただけない

日の丸・君が代、デモ・ストについての私の筑豊ハイツでの発言が新聞記事になり、とくに共産党系の県民から反撥が出ており秘書室に知事あての抗議文が何通か来ているらしい。選挙の時に熱心に動いたのに裏切られた、右傾化も甚だしい等々あれこれ抗議の内容が盛り込まれている。私は、選挙の支援者一人一人に違った意見、立場を取ることがあっても仕方がないと思っている。むしろ当たり前、ありうることだと思っている。一々抗議されてたまるかとさえいいたい。妻や友人とだって意見の違いはある。まして、知事と支持者の間に違いはあるのが当然だろう。奥野発言奥田発言それを並べて批判している文章もわが家に舞い込んだ。「違う」というならわかるが、抗議となるとおだやかに受取るわけにはいかない。「違う」ことはあると認めてかかるのがまともではないだろうか。知事選挙など一致を求めどちらかが近いかを選んで、投票するだけなのだ。

5月28日（土）

新北九州空港建設の運動軌道にのる

苅田沖合に現に進行しつつある港湾浚渫土砂捨場に新北九州空港を建設する運動が始って十年以上が経過したが、今日、国会議員による現地視察と建設促進期成会総会（於北九市役所）が行われた。期成会は私が会長で副会長は北九市長と苅田町長。何回も国に陳情活動はやっていたが、実現に至らず経過してきたが、この四月からは期成会の事務局も県に移し、県には対策室が置かれることになった。昨年暮からは国会議員団も超党派で取組む体制を作ったし、県議会、市議会、町議会も同じく議員連盟を組織し、いわば今日はどうした揃い踏みの初顔合わせのようになった。これまで足なみが揃わなかったのか今なぜこうも足なみが揃ったのかよく理由がつかめない。波れというものは恐ろしい。国会レベルの議員会長は麻生太郎、県議会レベルの会長は早麻清蔵。どちらもこれまではこの方向で動くどころか、新北空港には頭をかしげる立派の人だった。福岡空港や宗像沖に新空港をとの立場があったからだ。新北もこれで始動したことになる。

5月29日(日)

埼玉知事選の応援に来てみて

はじめてのケースだが、午後、埼玉県知事選(六月十二日投票)の応援に駆けつけた。大宮、浦和、川口の三カ所で駅前街宣でのスピーチ。各五分間ほどの行動。福岡県が五百万に満たぬのに対し、埼玉は六一〇万人口という。この三市どれも四〇万人規模、東京から道々切れ目なしの住宅商店が並んでいて甚だしく都市化した埼玉。市の数が県下四〇いくつがあるという。今回の知事選は大型間接税の行方を占うもので、国政レベルの代理選、新税導入の成否を決する前哨戦だともいわれているので、この点につき、昨年の福岡県知事選を例にひきながら、埼玉県民に畑和知事の五選をぜひと訴えた。六月十二日投票だから本格選挙運動に入って三分の一の日程は過ぎている今日なのに、駅前の人達、街行く人達は驚くほどクールである。税制改革につき政府・自民党の腹の中が未だ不透明といえる状況にあるとはいえ、三市をまわってみて、東京への通勤者九〇万人といわれる都市化埼玉の選挙の困難さを痛感した次第である。

5月30日(月)

三池炭鉱の命脈

三井が三池で昨年五四〇、今回七三〇の人員削減をやるというので、大牟田の県議など六県議、企画部長などともども、今朝から三井鉱山、労働省、通産省に善処方陳情してまわった。三池には二六〇万トンの貯炭があり、外炭輸入がふえ、撤退しかの無いというのが鉱山及び通産側の態度である。わが国の石炭需要は年一億トンというのに、国内炭は一千万トンすら引取り手なく苦慮しているのが当事者側である。三池は年四五〇万トンから三五〇万トンに減炭するという。トン二万何がしかの国内炭に対し、外炭は三分の一ほどの価格だという。地元の大牟田での火力発電にすら三池炭を使わず輸入炭を使うのが得だとのこと。「六〇年安保」の頃の「三池」争儀は一二〇〇人の指名解雇である大騒動であった。それが今はそれ以上の人員整理なのに、騒ぎにならない。三〇年の歴史の重みを感じず。帰福途次、機中でかばんの中にしのばせていた「黒い羽根それははばたきうるか」(中央公論三四年十一月号)を読み返し、感慨新たなるものがあつた。

5月31日(火)

焦燥感

二十四日に県青年の船の旅から帰福したが、そのあとまたたく間に一週間、きりきり舞い。その間にダラダラ議会で二回何とも知れぬ時間を費して空しい感じもした。明日から六月。八日にはブラジル行きというが、これ又ぎっちり詰まったスケジュール。詰めれば詰ったで又空しい感じである。機械のように動いて主体性のない日がつづく。充実感がない。「世のためひとのため」というが、「わがため」が裏に全くないようでは、空虚な言葉というし

かない。六月四日に学生会館（教養部）で「私の昭和史」と題して講話することになっているが、その構想のマトメが全くできないままどんどん日が経ってしまうから焦燥感が裏にあることも事実である。一時間余の講話ぐらいふつうならなんでもないので、今回は妙に重い。構想がまとまらないのだ。ぶつかるしかないと思うが、それではいけないと反面で思う。だから余計に焦燥感に駆られるのであろう。それに、よく睡れるならいいだろうに、それがないから。

6月1日（水）

福岡大空襲のことをふりかえってみる

裏辻さんらが執念でもって綴った「火の雨が降った」（一昨年六月刊、葦書房）（福岡空襲を記録する会）のアニメ化が進んでいる。この本をいただいて改めてパラパラめくってみた。六月十九日は毎年やってくるが、だんだん風化していく。でも何としてでも風化をくいとめなければならない。焼夷弾の雨が六〇機の B29 によって主として博多部上空にばらまかれ、一万三千戸が焼かれ、二千人をこえる負傷者が出た阿鼻叫喚の二～三時間のことがくわしく記録してある。福岡大空襲に関するこの種の本は他にもあるが、この本が一番くわしいのではないだろうか。その頃私は宮崎県の川南村で沿岸防備の迫撃隊の主計の任についていた。福岡のことは知らない。宮崎においてもグラマン機の機銃掃射をうけた。この本のような記録を、そしてできたら実感を後々まで伝えていかねばならぬと思う。十五銀行の惨事、奈良屋校区、冷泉公園の遺体収容所、那珂川にとび込む避難の話など惨事の例はつきない。こんな実情をよくかみしめることが平和の起点だろう。

6月2日（木）

交通網の整備だけで九州はよくなるか

朝から大分ゆき。国鉄（JR）を利用し、「にちりん」で約三時間。九州知事サミットが午後一時からあった。佐賀、長崎あたりは四時間五時間かかったとっている。サミットでは交通網の整備が昨年同様一番にとりあげられたが、みんな東京より時間距離の長いことをなげく。同時に、東北との比較で、九州が取り残されていることを歎き、その原因の最大なるものが交通手段の整備の後れにあるとっている。先だって青年の船で中国韓国に行った時、私は先方の人にも、九州は東を向くのではなく西を向いて行動せよとっているといってよろこんでもらった。サミットでもこのことを指摘しておいた。東京一極集中への批判が強まり、「九州府」を主張する知事がいたりして自主権と財源の移譲を唱える声が高いが、九州を活性化させるには、目を西に転ずる事も必要だと思うのである。国が東京集中のメリットを知っているのに、九州に財源をとってみてもなかなかそうはならない今日なのだ。

6月3日（金）

九州知事会の国への要望

九州知事会議（大分西鉄グランドホテル）では例により財政問題がまっさきに取上げられた。交付税、税制改革、国庫補助率削減の復元など。その次は農産物の貿易自由化阻止、農業振興の問題である。いずれにしても名案があるとは思えない。この会は国への要望が主題だから、次は高速交通網の整備が出てくる。今日新幹線三線の新建設につき、中央で、財源負担割合を国六、民活三、地方団体一との試案が発表され、報道陣が早速意見を求めてきた。民間が三の財源を出すかどうか私には疑問がある。自治体の一の負担も小さくはない。これから論議が高まろう。航空運賃の通交税、国際割高、貨物運賃の路線別差別制などが問題として提起された。九州各県は高い通交税を払っているし、それが他目的に使われているとか。航空貨物運賃は福岡からよりも、大分、宮崎からのほうが東京に高い運賃を払わせられているのが実際らしい。空の時代だから、古い制度は早く是正すべきであろう。

6月4日（土）

教養部での学館文化講演

九大学生会館で年二回行われている文化講演に先約していて、それがいよいよ今日二時半から。準備していた内容は半分も話せなかったのに、七〇分の予定をオーバーしてしまった。「私の昭和史」が演題なのだが、なかなか限られた時間内におさめるのは困難だった。「私の」の部分をもっと話すべきだったとあとで反省した。中島敏子さんら教官も含めた知人が多く顔を見せていたので、一寸おもはゆい感じもした。昭和史は戦前と戦後に大別するとしても、戦後の変化が又急なので、その辺のことを強調していると、どうも自分のことにふれる時間が足りなかった、敗戦からたち直って経済一流国になるまでの大きな変化は何としても説明の中に入れなければならない。私は女子が強くなった事を選挙権や国際婦人年のみならず、スポーツの面で、マラソンの記録を引合いに出しながら強調した。又、二十一世紀の日本が、今のままでは「個の突出」が強すぎて心配だという点にもふれておいた。短時間では難かしい話だった。

6月5日（日）

大塚副知事の進退について

大塚副知事が持永官房長（自治省）から呼ばれて、福岡から帰っても退官しかないといわれ、近頃頭に来ているようだということで、林県議が心配し、今日は正午すぎ椎田町での環境美化行動を終って帰福して後「かわさき」で中食しなから、林副知事を交え三人で大塚氏の件を話合ってみた。五月三十日に自治省に行った時、私は持永官房長から大塚氏についてきかれたが、「よろしくお願いします」というに止めていたが、持永氏はこの二日に大

塚氏を呼びよせて自治省にはもう席はないと申渡したらしい。大塚氏の進退については、県の部長クラスの中で、頭ごなしに叱られることが多いということで評判がよくないとの風聞はあったし、任期も余すところ一年だからそろそろ考えておいた方がいいということだったので、この春には自治省で、あとのことを考えてくれと私は申出した記憶はある。自治省はあとの面倒は見れないから退官しかないといったらしい。このままにしておくで大塚氏はやる気を失うだろうから心配である。

6月6日（月）

大塚氏の進退の話は当面は凍結に

自治省官房長に電話して大塚氏の進退については、当面は現状変更を考えないということで一段落した。大塚氏は一方では自分の進退は自分で決めるといい、私に対しては知事が権限をもっているのだから知事にまかせるしかないという。持永官房長がこの二日に彼を東京に呼んで、外郭団体のポストなら用意してもいいが、自治省内ではポストがないので退官になると申渡したようだから大塚氏はショックを受けたようだ。平易にあって、自治省内での昇進の途はもうないと宣言されたのだから、彼はそれを深刻に受けとめたのであろう。私が彼を追出そうとしたかのようにはじめは受けとめたときくが、そうではなく、私は機を逸して彼の転進に影響するようではいけないと慮って自治省に考えておいてくれと言ったという事実は、林県議から大塚氏にとくと伝わったようだ。大塚氏は私が追出しにかかっていると受けとめていたようだ。こうした思い違いは当然にありうることではある。

6月7日（火）

「高齢化社会を考える」

八月に県民大学があり、いつも知事がそのうち一齣を受けもつのだが、今年のテーマをどうするかにつき広報室から相談がもちかけられた。私は躊躇なく「高齢化社会を考える」と提案した。ふりかえてみると同様なテーマでもう三回ほど高齢化に触れた講話があっている。しかし私には私なりの視点があり、言いたいことがある。広報室も賛同してくれた。六月四日の九大学生会館文化講演でもふれたのだが、この物余り時代を反映してか、われわれ周辺では個の突出が目立っている。親子の間でも、子は親と同じ食卓で同じものを食べない例が多いという。住、食その他の点についても、家族の仲さえ切れ切れになっている。都市では隣同志は切られている。そうした条件における高齢化である。生き甲斐のための就職、社会参加、健康、ボランティア、治療どころの話ではない。老人病どころではない。人間がバラバラになって、昔の家族や地域の果してきた役割をだれがどうして受け持つのかというのが私の今の意識だ。

6月8日(水)

ロスアンゼルス

ハワイは行ったがアメリカ大陸はアラスカを除いてはじめての経験であった。といってもロスアンゼルスを一寸だけ見たにすぎない。ブラジルに行く途中休養を兼ねて一泊しようということだった。でも雄大という一語につきるようになった。フィッシュマンズ ヴィレッジのヨットハーバーはアメリカの豊かさを感じさせた。三時にロス市長ブラッドレーを訪問したが市議ギルバート・リンゼイ氏が仲介してくれたものだ。リンゼイ氏は夜のニューオータニ（ホテル）での南加福岡県人会にも顔を出してくれたが、日本在留者に強い支持者をもっている人だ。市長がわれわれに会ってくれたのも、在カリフォルニアの日本人の実力を知ってのことらしい。西側の中心は今や完全にロスアンゼルスに移っているとのこと。残念ながらその辺のことを十分に勉強していないので正確でないかも知れないが、重工業からシリコンへの転化に成功し、カリフォルニア州だけでも世界第七位の経済実力を備えているという。

6月9日（木）

新しい世界のリーダー、ロス

晴れわたるサンタモニカの浜に立つ。

こんな匂がふと浮んで来た。ロス、アメリカ西海岸、新しい世界の活動代表がここに見られる。もはや世界はヨーロッパでは代表されないのではないかという感じだ。太平洋をはさんで日本、さらにそれがアジア大陸へと向いそうな息吹きを感じず。ただ、まだまだ文化が感じられない。若々しいだけのようだ。こうした雰囲気は馴れられぬ自分がおそろしいようにも思う。又取り残されそうにも思う。すこぶる重厚、大味、活力、ロスに一日滞在してそう感じた。馴れられないが、私に欠けているものを示してくれたようにも思うので、これからは少しでもロスのものに接してみる必要があるだろう。馴れる必要があるだろう。サンタモニカの浜に立って世界を見渡してみる必要があるだろう。あまりにも小さくこせこせしている私。それだけにこだわらないようにしなければならないが、これは教訓としておこう。

6月10日（金）

文明と源流と

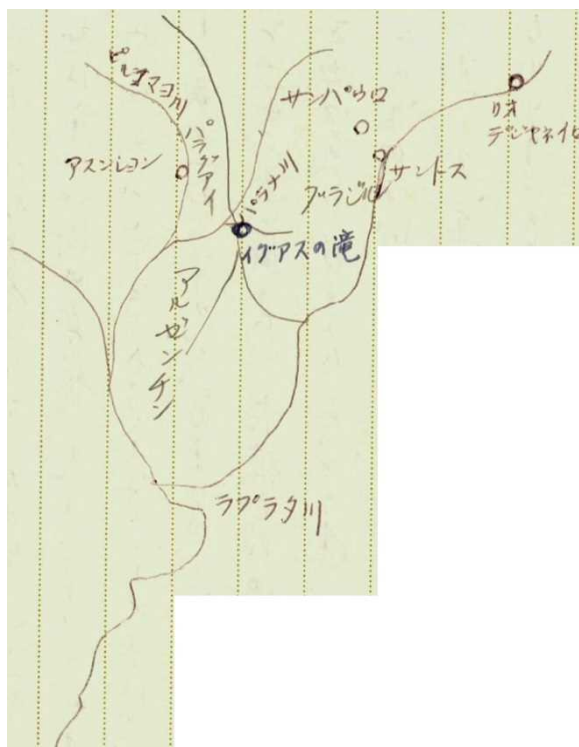
機中二泊、ロス、サンパウロで二泊ということになるが、何と騒々しいことか。音から逃れたいとつくづく感じ、やはりわが家が一番いいことを確信した。音は文明といわんばかりだ。ホテルも車と冷房の音でやかましい。機内もやはり十分眠れない。こうした事とは逆に、ロスで起きた事だが、日本人は移住した時から思考停止するとの現象がある。混住の都市にはチャイナタウンや日本人街はつきもので「ふるさと」が再現される。これは長

崎のオランダ屋敷でもそうだっただろうから不思議ではないが、三ッ子の魂百までといわれるようにいつまでも古いものにあこがれ固執するわけだ。昔の小学校の唱歌は忘れ難くなつかしいし、ここに来て水汲みの苦勞は話せばわかってもらえる。二世三世となるとそれが薄れていく。今の子は水は水道の栓をひねれば出るものと思込み不思議でない。それが前提なのである。井戸掘りの苦勞なくては水の有難さはわからないといわれるが、そうした源流への反省はやはり必要だろう。

6月11日（土）

無限の未知 イグアスの滝をみて

イグアスの滝見物の一日だった。ナイアガラの滝よりはるかに大きい世界一の滝。日本で那智、華厳といっても何百分の一にしか当たらない巨大なもの。どうしてあの水量が、あの地形がと不思議で、解くことはできない。それに、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの国境といわれても頭に、目に、明らかに入ってこない。パスポートに印されてアルゼンチン側に入った。ブラジルとは一味ちがう国境の町プエルトイグアス町はやはり観光の町といえよう。滝が流れてパラナ川になり、それが下ってラプラタ川になる。ほんとうに未知の世界の無限さに驚くばかりである。無限の未知、当たり前といえれば当たり前なのだ。



6月12日（日）

誰か故郷を思わざる

ひる間は佐賀県人会館で「知事歓迎」の福岡県人集会有り夜は市中心街の高層ビル「イタリアノ」で知事県議の招宴があった。ここで宴会に入ってしばらくして当地の司会者が私に名ざして歌を一曲というので、苦手ながら即席でやったのが「誰か故郷を思わざる」であった。「花摘む野辺に日は落ちて、みんなで肩を組みながら歌をうたった帰り途、幼なじみのあの友この友、ああ誰か故郷を思わざる」というやつだった。二番は歌詞が出てこないで一番だけにした。こうした席では今はやりのカラオケ風なものよりは昔を思い出すのがよいだろうと思っても見た。あとできいたら知事の歌は大変よかったという。移民一世の人達は「思考停止」によって、このような歌に打たれるのである。「知事さんを

見るだけでもいい」というほどの人達なんだから、感動するのも無理はない。私も今のカラオケブームの下では「思考停止」しているのだから丁度よかった。

【欄外記入】

日系移民 サンパウロを中心に80万人

1908年 781人が到着

6月13日(月)

みやげ物買い

「買い物」といえば宝石店にきまっているかのように、午前中は東洋人街の明石屋に行った。指輪など女性向きの品に目を向ける人が少ないが、これは数多く揃えるには向かないので、私には興味が乗らなかった。ブラジルには魚の化石や火山の時に出来たであろう水晶など結晶石の原石が多い。私はむしろこの方に目をやってみようか予定した人へのみやげ品をそこで買い揃えた。原石を輪切りにしたのやら灰皿にしたのが丁度いいと思った。が、荷物としては重いものになった。皮細工や蝶の羽根を細工したものもブラジル特有ではあるが、あまり感心できない。外国旅行には餞別、餞別にはみやげがつきものであって、わずらわしいものの一つである。多くの人がこれを苦にしている。荷物が一ぱいになる。重くなる。なのに、何とか消化しなければならないからだ。今回は明石屋で大よそ買ったと考える。トータルとしてみれば、ガラクタかも知れないが。

【欄外記入】

リベルダーデ地区

東洋人街(ガルボン・フェノ街) 鳥井大阪橋あり

その西側が Av.da Liberdade (リベルダーデ大通り)

6月14日(火)

アマゾン河口で思う

ベレンでの一日。魚市場で人間ほどの大きさの川の魚切身から始って今日は熱帯アマゾン河口を十分に味わうことができた。河口には九州ほどの大きさの島があるという。船二隻でアルプラスという三井アルミ系工場に見学に行ったが、川の中の島を縫って船は走る。兩岸には土着の民家が転々。ハワイのカウアイ島を思い出す。常夏の国、ゆたかな自然の中で人間がのんびり暮らしている。文明などおせっかいだといわんばかり。アルミ工場などむしろ異質物といえよう。工場から港まで帰る時すごいスクールに見舞われた。われわれの乗る高速艇が土着民の住む岸边に大きな波をうちつけていく。干満の差は二メートルもあろう潮か水か海か河口か区別がつかない。自然はそれなりに豊かで人はそれにさからわない。さからわない自然はやさしいし、さからう自然はおそろしいのであろう。土着民はそれを十分知っているようだ。

6月15日(水)

ブラジルでの日本人意識が今後どう変わるか

ベレンからリオへの旅の一日。途中首都ブラジリアに降りたが街には出なかった。リオのホテルは同じく八〇年祭に参加する人だろうか日本人でゴッタ返していた。どこもかも日本人には事欠かぬこの頃だが、リオではとくにその感があった。昨日ジャイカの上園氏の話が思い出される。八〇年祭といっても一世にとってであって、これが最後の式典になるかも知れぬ。二世三世では日本人意識は違ってきている。十年後に九〇年祭ができるかどうか分からない。急速に意識はかわりつつある。しかも日本人だけがそういう意識をもちつづけたのだが、日本人といっても例外ではないだろう。二世、三世となるとその意識が稀薄になり、「九〇年祭」の意味がどう変化しているかわからないというのだ。だがこれとは逆に、今、日本の国力、日本人に対する信頼は上昇気流にのっている。現地ブラジルで日本人の株が上っているわけだ。この相対向する空気が今後どういう空気を作っていくだろうか。

【欄外記入】

ブラジル総人口 1億 3850万人

ブラジリア	118万人
サンパウロ	1010万人
リオデジャネイロ	562万人
ベレン	110万人

6月16日(木)

リオでも貧富の差が強調される

リオを見物し、サンパウロまで急いで帰り、総領事主催の慶祝団一行の招宴に出る。福田元首相が慶祝団会長として元気なあいさつを行った。立食のパーティで、何というほどのことはなかった。福岡県の尾形代議士、三原代議士も顔をみせていた。リオの美しい景観が印象深い。「一月の川」という名のついたリオだが、一五〇〇年頃に発見された時は、この湾が河口と錯覚されたとのこと。リオの海岸は美しいし、沿岸ビル群は見事なものだ。しかし、山々の中腹、北の方には低所得者がひしめき合って住んでいるとのこと。何でも豊富にある広大な国なのに、貧富の差がひどく治安もよくないときく。ありすぎるからとの発想さえ出てくる。そしてすごいインフレである。インフレは貧しい者をますます貧しくするのであろう。日本からの移民の中にも貧乏している人が見えないけれどたくさんいるに違いない。要は政治が悪いのであろう。ベレンで日本の総領事は、「民主主義以前ですよ」といったことが又思い出される。

【欄外記入】

サルネイ大統領 (ネベス氏当選就任前日死去 1985年4月21日)

86年2月デノミ

1 クルザード=1000 クルゼイロ

6月17日(金)

福博日語学校(スザノ市)

サンパウロから東へ40キロほど行くとスザノ市になる。スザノ県人会支部がある。福博日語学校で二〇人ばかりの子供たちが迎えてくれた。先生は某氏で夫妻という。ブラジルは半日授業で、二部制、ときに三部制もあるという。迎えてくれたのは低学年だが午後には高学年が来るらしい。高学年の子供たちは午前中ブラジルの学校に行っているようだった。小学校の普及が四割ほどだというから、今時、文盲六割もが、どうして見逃がされているのか理由がわからない。GNP 世界九位という国なのに。日本移民は多く成功しているが、教育水準が高かったからということができるかも知れない。このスザノ市では日本人系の勢力が大きいようだが、行徳八郎氏のセラミック工場がある。二千人ほど雇用しているらしい。タイル製造工場だが全ブラジルの一四%のシェアを占めているとか。行徳氏の孫の直美さんが現に九州大学歯学部で大学院コースにいるともきく。日系人の教育にける熱意はすさまじいものがある。県費留学について強い要望があがっている。

【欄外記入】

混住国民	白系	55%
	混血	38%
	黒人	6%
	アジア系	1%

先住民 19万人

6月18日(土)

寒い八〇周年記念式

今日はいよいよ移民八〇年記念式。パカエンブー競技場は満席。ここ数日冷え込んで夜も毛布の追加が必要。この競技場も日照のある所はいいが、日影の所は寒かった。和服の日本婦人がトラック一周の形で民謡おどりなどしたのだが、このアトラクションが始まるまで二時間近くも立ったまま待たされて寒かったろうし、疲れたろう。ブラジルでは飛行場でも時間の遅れを知らせないし、ここでも今日は十七分開会が遅れたというのに知らされもせず、夜の統領宴席も一時間半も待たされたが何の予告もないといった有様。誰も何もいわないらしいのである。日本から礼宮の臨席があるという事をつけ加えても、少しは引きしまってほしい状況だ。というか、それならそれで、当方も考えがあって、相応の弛緩緊張の対応をしてもよかったと思う。八〇年祭というには一寸難があった。日本でなら責任問題になろう。逆に日本では時刻が守られすぎるのかも知れない。ブラジルは大陸で鷹

揚な国民性があるのかも知れない。

【欄外記入】

サルネイ大統領

義務教育 7～14歳

ブラジルの踊り サンバ

6月19日（日）

県人会の人々に感謝

ブラジル最後の日、鹿毛アデアールさんが、私の車の助手席に乗ってずっとついてくれたので大変助かった。占用の黒塗り車は市議野田マリオ氏の努力で市長車、運転手、先導車、警備をつけてくれ、渋滞道路もスムーズに飛ばして時間を節約することができた。スピードは一三〇キロ、時には一五〇キロも出してわれわれが冷々させられた。今日は山口青年の案内で地下鉄その他通常では見れないサンパウロを見ることができた。同じことが中村勲会長宅で荷物造りをして後、大学街見学の時にも小高い丘の上から全市を眺望する形で体験することができた。中村会長は自宅をわれわれの帰りの荷物まとめの作業に使わせて下さった。ヒモやガムテープを使ってそれぞれに荷物がまとまった。会長宅には県人会役員も来てくれ、お別れの中食会をした。ほんとうに楽しく便利な不足ない旅行をすることができた。二年後に県人会六〇年記念式をするから、その時も来てくれといっている。実現するかどうかは別として受ける側は大変なことだろう。

【欄外記入】

地下鉄駅 リベルダーデ

セー広場（地下鉄セー）

セー寺院

6月20日（月）

ニューヨーク

朝早くニューヨークに着いた。旅行社の世話だろう、日本人ガイドが付いてバスツアー様式で一日ニューヨーク見物をした。初経験でもあり、ニューヨークの巨大さにただびっくりするばかりであった。摩天楼の立ち並びは正に世界一だろう。一つ一つのビルの高いこと、ひろいこと、大変なものだ。シカゴもそうだろう。エンパイアーステートビルは三八一メートルの高さ一九三一年に建設されたという。八六 F の展望部分に昇ってみた。なぜこんなに巨大なものを並べなければいけないのか理解に苦しむが、たしかに美事なものだ。だが限界に来ているのではないだろうか。もっとゆとりがほしいし、こんなところに押し寄せるのを止めるようにできないのだろうか。ウォール街は大変なところかと思ったらそれほどでもなかった。平凡。国連本部が見られてよかったが、時間的に中を見学できな

ったし、加盟国の旗が出ているのを見れなかったのが残念だった。ひととおり見ることができたら満足して他を見たい。

【エンパイア・ステートビル展望台入場券の半券貼付】

6月21日(火)

ニューヨークの福祉や教育を知りたい

ニューヨークでは買物は一切しなかった。但し空港の免税店ではオールドパーを三本買った。一本二千円もしないので、みやげの数の中に入れるには便利である。宝石店を見てもそうだが、ブラジルより質がすぐれているように見えた。需要側の目が高いのであろう。街を歩いて緑の少いこと。歩道が汚いのが印象的だった。市当局が清掃に努力する必要がある。ふと教育はどうしていると疑問がわいた。ビルの群は商工業、取引には最適かも知れぬ。情報も至便。でも家族はどうなっているのだろうか。福祉や教育はニーズをどう受け止めているのであろうか。それなりに施設があるはずだから勉強してみないといけない。車がなかったら暮せないとガイドさんが言っていたが、福祉や教育は車のない人と関係があるのではないだろうか。ニューヨークという市街地の合理性の極致をみるにつけ、生活のゆとりについて考えてみたくなった。いつも乍らわが日本が一番よいとの結論になる。

6月22日(水)

面倒な通関

短い一日だった。JALがニューヨークケネディ空港をたったのが午後一時。成田に着いたのが午後四時。その間に日付変更線を西へこえたので、アメリカの二十一日が暮れたと思ったら、又日本の一日が暮れそうになっている。眠らないといけないと思い機内では眠ることに意を注ぎ、どこを飛んでいるのか全く注意しなかった。太平洋の北の方を飛んだのだと思う。成田に着くと重い荷物を見はりながらの通関手続き、これがうんざりだ。私はふえた一箱の段ボール荷物をチェックされ、これは何かといわれ、向うの県費研修生グループから貰ったものだが、私自身何か知らず、民芸品でしょうと答えたら、さげてみて比較的軽かったせいか、不審な顔をしつつ、では、と通してくれた。帰宅して中を開けてみたら金属ボールと受皿であった。関税の係員もめんどろな事をせねばならぬものだ。日本の国境はアメリカ同様に面倒なんだそうだ。旅行社、航空会社が世話していても面倒なんだから……

6月23日(木)

ブラジル日系人の背後にあって、その信用を確実なものにしているのは何か

昨夜はおそくねたのに今朝は早く起きてしまった。時差ボケではなく、何となくだ。性かな。それでだろうか夜は早目にねむくなった。これが時差ボケだろうか。登庁したら、

みんなお疲れさまとってくれた。「知事だけが元気のようにだが」とひやかされもした。別段元気ではないが、そう見えるのだろうか。記者への帰国あいさつの時間が設けられていたので、十分ほどブラジルゆき印象記なるポイントを話した。一つは大変歓迎してくれたこと。「知事」が来るのを待ちに待っていたといえる状況だったこと。二つめは、ブラジルの発展に日本移民の活躍が大きく貢献し、そのブラジル日系人の背後に今は日本の経済力があるということが感じられたということである。日系人は本来信用が厚かったが、日本の経済力が今それに輪をかけているということだ。但し、日系人、福岡県人といった境界線が今後だんだんはっきりしなくなっていくだろうこともたしかであるという点も指摘しておいた。

6月24日（金）

最近の健康

長期旅行による疲労と時差ボケが心配されたが、両方ともそれほどでもないようだ。中食抜きだったせいか、夕方の健康診断では血圧が高目に出たのに反し、糖の方はむしろ低目で尿糖はむしろマイナスに出た。一寸不思議なほどである。一時的なものであろうとは思ふ。老人性関節炎はどうかと聞かれたので、両手とくに右手の小指など三本が常に意識に上るとっておいた。それに昨夜の如きは三回もトイレに起きねばならなかった。一寸異状と思うと訴えた。寝ている時の発汗が少いのかも知れないとのこと。前立腺肥大はいうまでもない。一般に体力の衰えを感じずが故障らしいことを意識するまでに至っていない。「元気ですね」とひとがいうので、「イヤ、やっここで精一ぱい努力しているだけ」と答えるようにしている。何でもおいしく食べられるので、それだけでも有難いと思うしかない。

6月25日（土）

記録と記憶

日記を書いている理由に、記憶力が衰えたので記録しておくのだということを他人に説明してきたものだ。それで旅する時でもできるだけ日記を携えていてその日のことはその日のうちになるべく書いておくよう努める。ところが、今回のように、ブラジルへの長途の旅の場合荷物が嵩ばり、日記帳をもたず、その代わり、他のものになるべくメモして残し、あとでメモに従って記録していこうとする事もある。ところが、今回はメモの記録を見ても、すでにそのメモが何だったか記憶に全くのぼってこない場合がある。それほど記憶は悪く忘失してシーンが蘇ってこない場合が少くない。メモが役立たないのだ。これは日記を読み返してみる場合も同じで、単なるメモ程度の記録になっていることが少くない。ないよりマシである事は確かだが日記の内容がシーンとして思い浮かばないと全く情なくなってしまう。何のために書いているんだ、と我を叱りたくなるのだ。

6月26日(日)

草の根レベルの運動を

昨日は朝のうち、自然と足が外に出て裏庭を掃除することになった。久しぶりのことだが、動いて動いて汗をかき、中食前にシャワを浴びる始末。休務だったので、思い切って自由に時間を使うことができる。ぐったり疲れたが、このような日がちょいちょいあればどんなにいいだろう。裏庭の雑草を大体きれいにするのができて気分が一新した。知事をやめたいなとふと考えた。いやいやみんなの期待を裏切らぬようにと思うとそうはいかないのがよくわかる。自由人への魅力がちらりと念頭に浮んだに過ぎぬ。今は知事の立場にかえて社会党自治体議員団総会に出てあいさつしたのだが、さきの筑豊フォーラムの時と同じように、草の根保守主義と草の根民主主義の同根であることをよく認識した上で、日常的な問題をとらえて、草の根レベルで運動してくれるよう説得したのであった。

6月27日(月)

今の右翼の動き

日教組大会については例により右翼の妨害が問題になっている。今年は七月十八日から大手門会館で開く予定ということで、知事との関係も加わって今年は特に大きな妨害波が予想され、警察が四〇〇〇人対策に動員されるとかの話が流れている。動員費もかなり予算追加せねばならぬということらしい。大会を開かせるな、奥田に挨拶させるなで彼等は全力をつくすだろうから、当方はこれにどう対応するか今から心配している。現時点では右翼は亦、朝鮮墓参団の日本への帰国を許すなということ騒いでおり、帰国港を下関とすることについて下関側が騒ぎにまきこまれたくないということからこれを拒否し、今北九州に変更し、北九州も拒否の姿勢をとって問題化している。この問題がどう決着するかが、日教組大会にもからんでくるだろう。強引な行動をするものだなとあきれざるばかりである。

6月28日(火)

不調

昨夜もねつかれず、不調な体で登庁。寒気さえもよほし、夕方、済生会病院に急患として出頭した。二四日に定期検診を受けたばかりだったが、その時の肝機能の数値が大変悪いということであった。疲れだろうという。今日のは風邪と診断。今日明日休みが必要ということになった。注射や点滴の間に一ねむりした。熱は七度八分で寒く感ずるはず。夕食後もすぐに寝た。何もする気力はなかった。ブラジル旅行の疲れが出たのだろうといわれるが、あれからだいぶんたっているのにも思う。自覚的には不眠である。その理由は自分でもわからない。ぐっすりねて、すかっとなれることを期待するのだが、その反対である。何も思いわずらうことはないし、不眠の理由がわからない。運動不足だからだろ

うか。一昨年の帯状疱疹も丁度この頃だった。いやな予感がする。

6月29日（水）

戦争資料の蒐集

ねていて考えた。暑中見舞いはどうすればいいだろうか。ああでもない、こうでもない。戦争資料は何を今もっているだろうか。戦争資料というべきものはたしてあるだろうか。戦後何回も「ヤウツリ」しているし、生活がかわってしまったので、あったものでも捨てている。あるのは写真帳に残っているものぐらいだ。平和事業をとということで、県では戦時中のものを蒐集することになったが、今年の戦争体験風化の中で、若い者は戦争資料など見向きもしないので、辛うじて保存してきた人はその執念のいかんにかかわらず、若い者が、それを捨ててしまう。古い者はせめて県が蒐集保存してくれないかという。そうすることで戦争資料の蒐集をすることになった。一ヵ月ほど呼びかけたので若干は集まっているので、明日庁内地下の蒐集室へ行ってみる予定になっているが、今日の朝刊にはその概要が出ている。ほんの僅かではある。がしないよりはましというところだろう。

6月30日（木）

朦朧の一日

未だ経験したことのないようなモウロウたる一日だった。どうにかなってしまってもおかしくないほど頭が回転せぬ一日だった。議会棟を往復せねばならぬのに、階段でぶっ倒れてもおかしくない、提案理由説明の読みまちがいで失敗してもおかしくないほど、ボケてしまった一日だった。なぜこうなったのか理由がわからない。ブラジルボケが今頃でてきたのではないかという人がいる。それにしても時間が経ちすぎている。一昨日のような熱はない。ふるえもない。しかし睡眠が不正常であった事は否めない。昨夜は午前二時すぎからほとんどねていない。ねむれなかったのだ。今日は議会があるので休むわけにはいかないので、とにかく出勤して形だけはととのえたが、正確な対応をしたかどうか自信はない。提案理由説明と二つの陳情にどう答えたかわからない。死を考えたほどだった。死とはこのままいつてしまうことだろうと…

7月1日（金）

余の時間は休む

梅雨はまだ晴れぬ。山笠の季節になった。不眠症のため体調はよくない。末期的な感じすらするが、まさかと思うので、余の時間は何もせずにこらえて体調の回復を待つしかないのではないかと思っている。今日は昨日より幾分ましと思う。斎藤氏が小川院長から随行秘書は何しているんだと叱られたという。随行秘書の責任とは思わぬが、はたからみると、そういいたいくなるのも無理からぬところだろう。つまり秘書の注意が足らぬから過労に追

いやっていると見るのである。ひるまのむべき薬を忘れて外出することがあるが、その視点からはうちまで取りに使いをやるということになる。そんなにしなくても私は思うのだが、そこまで配慮しないと又叱られるという。私の方がおおまんなのかも知れない。心配かけぬように心懸けたい。昨日、今日、余った時間をぼんやり過ごした。こせこせ使うのが性分なのだが、当面はのんびりやってみよう。

【「甘木市の岩下さん 喜怒哀楽つづり 50年 日記に人生を克明に」（『西日本新聞』1988年9月17日）の切り抜き込み】

7月2日（土）

宣伝不足の中小企業、業界も県行政も

福岡市庁舎落成式に出席したあと、筑後川温泉へ旅館の女将たちとの対話に出かけた。対話事業は今年度これが始めてだという。テンポが少し遅いといえる。女将たちとの対話など珍しい試みでどうなることかと思っていたが結構話題はあるものだ。鎌水町長も参加していて、筑後川温泉の活性化が浮羽町の活性化につながることは女将たちも町長も同じ認識に立っていて、県の商工部もそこをポイントに対話を組んだようだ。総じていえることは宣伝への熱意不足である。それは福岡県の中小企業のどの分野にも同じくいえる。過去一〇〇年石炭と鉄を中心とした大企業の活動の傘下で中小企業も宣伝努力せずにすんできたその惰性が未だ残っているためであろう。県では今このことを意識して商工業に対応する行政姿勢に改変しつつあるが、県行政も同じ惰性の中におぼれていたのである。福岡に温泉があるのかというほどの認識が県外はもちろん県内にもあるくらいなのである。

7月3日（日）

雑草抜き

いつ降るかと思われるような天気。大変蒸し暑い。休みで一日草抜きにあてたが、途中外出があったので二度下着をかえてシャワーを浴びた。ビッシヨリ汗にまみれた。午後は顔から汗が落ちた。久しぶりに汗をかく動きをしたということにもなる。夏は雑草ときまつた事で、「無限」という言葉があてはまるとつくづく感じた。雑草にも生える権利ありといえるのである。次から次へと生えてくる。湧くように、草の生命が地表にあらわれる。われわれはこれに挑戦するだけである。草の根、実が無限に用意されているのだ。これが生命の不思議さというのかも知れない。先日ブラジルに行く途次ロスとニューヨークに寄ったが、アメリカ中部は大旱魃ときく。地球のどこかに大雨を降らせているのだろうか。めぐりめぐって、サハラ砂漠、アラビアの砂漠にも雨が降らぬ状況がかなり長期に固定したのである。のんびり雑草抜きをする日があってよかった。

7月4日（月）

肝臓の調子がよくないということで、休むように医師から強く要請されている。つまり激務を避けるようにということである。ブラジル旅行後やはりよくないとのことで、今日も又点滴をうけた。気持がよくて眠りをさそう。できるだけ回数多く点滴をといわれている。GOT、GPTが100をはるかに越えているのだそうだ。慢性肝炎と診断されている。性が悪い。肝細胞のこわされたものがどっと多く血液の中に出るので血液検査で、いつもその数値の高いことが指摘されている。糖尿疾患に加えて肝疾患が体調を悪くしている原因のようだ。肝の場合自覚症状がないという。糖尿もそのようだ。従って自分ではただ「元気がない」「晴々しない」という程度の表現しかできない。元気潑漑、気分爽快の逆である。何となくけだるく眠いともいえる。食欲はあるので、一人前のつき合いは出来る。医師から監視され、周囲の人達もしっかり意見されているので、近頃の私は衆人環視の中で日々送っているようなものだ。

【欄外記入】

肝臓病

	GOT	GPT	
55年7月	21	20	(還暦)
62年4月	87	106	(2回目選挙)
63年3月	77	103	
63年7月	52	80	
	⑦⑩	①③④	ブラジルから帰った後6月29日

六月三〇日の記事

7月5日（火）

技術研修生事業について思う

九月中旬に、ロスアンゼルス日本人移民県人会の八十年とか八十五年とかがあつて三役の出席が要請されているとかの話。誰が行くことになるのか。ところで、ブラジルで感じたことだが、県人会とは何かということが年を加えるたびに問題化していくということ。二世、三世になるにつれて県人会意識が風化することは避けられない。日本人どうしが結婚するとは限らないし、ましてや同県人どうしが結婚するとは限らない。そして又、就く職業が農業から次々に他に、サービス業から次々に他に移っていくであろうから、移民、県人会の意識が世代を重ねるにつれて風化していく。そのことを考えると、県費留学生の現制度、そして今日の議会で自民党横田氏が質問にのぼせた技術研修生事業など、一寸考え直してみたい。「移民子弟を対象に」とはいうが、その対象がぼやけてくるようにも思われる。ジャイカの事業もこうした観点からだんだん考え直すことになるのではないだろうか。もっと広い視野、区別のない視野が必要のように思う。

7月6日(水)

歌の本

近頃の若い人達が好んで口にする歌、カラオケのアイドル曲、そんなのについて行くのはとてもかなわないが、せめてこれまで知っている歌を正確に思いおこせるようにするのも価値あることだと思い、近頃秘書室の人に頼んで文庫本のような形の歌集を求めたら三冊仕入れてきてくれた。中に軍歌集が一冊あった。一番近より易いものと思ってこれを開いて時に口ずさんでみることにしている。すらすら覚えられるのは数少く、歌詞を忘れたり、前後ごっちゃになっているのが少くない。いずれにせよわが生涯の精神界の中で歌の占める分野は大きいと思う。今の歌やカラオケに追従する必要は、もうないと思う。せめて過ぎし日に口ずさむことができた歌を、今も同じく口ずさむことができればと思う。そのためには歌詞が出てこないと問題にならない。その意味でこの三冊は意味があった。探してみたら我が家に、すでに二冊別のものがあった。計五冊である。

7月7日(木)

ブラジルにおける日本語の運命

ブラジルの日本移民の世界では日本の資料が貴重らしい。モジの鶴我という人からヤシの木で作った箸のみやげが届いたので、香春の弟さん宅に電話してみたら奥さんが電話口に出てそのことにふれていた。学校の教科書の古いのでも、マンガでも送ってあげたらよろこばれるとのこと。移民の間での望郷心の中に、日本語がだんだん亡びていくのを淋しく思うという意見をのべた文章に出くわしたのが思い出される。「ブラジルにおける日本語」なるテーマが念頭に浮かんでくる。果たしてどうなるのか。二世、三世が使わなくなるだろうから亡びていくといえる。他面、言葉は生き物だし勢いである。最近世界的に日本語熱があがっているようだ。経済大国日本の反映であろう。それなら、ブラジルでも日本語は重宝がられる。日本語を理解することが武器になる。そうなると二世、三世にかかわらず日本語への関心が高まる。そのへんでブラジルで日本語が亡びるか否かをもう一度考えてみたらどうだろうか。

7月8日(金)

県議会一段落

この一週間毎日八時出発の県議会対応の緊張の連続であった。今日で小休となる。代表質問、一般質問は思いのほか順調に経過した。県勢沈滞で知事非難を強く叫ぶ質問も何人かあったが、それはむしろ注目されないものであったし、緊張を呼ぶほどのものでもなかった。大上段にふりかざした批判はあまり受けないと見るべきであろう。それと、社共陣営にある非核宣言や政治倫理条例の制定をせまる発言も、もう一つ光らないといえる。君が代、日の丸論議もその部類であるといえよう。まじめ一徹やカッチンカッチンの挑戦もの

は当面の情勢には合わないということだ。その種の論議は議会の裏で、水面下でそれこそパチパチ火花を散らして行ない、議場ではむしろお笑いのようなことで経過するのがよいという雰囲気になっている。今日も蔵内氏が、知事も東京で県産品宣伝の役を買って市場に出てみないかといった発言など、マスコミも面白く書いてくれる話題であった。

7月9日（土）

北九州の活性化について話し合う

小倉の法華クラブで「北九州の活性化」をテーマに「知事と語る会」が開かれ、議会のあいまを縫ったこの行事に参加した。秘書室から家永、橋本の二人が付いてくれ、橋本は資料の準備もしてくれた。私に二〇分ほど基本的視点について話すよう要請された。大企業一小企業、親会社一下請の硬直した関係で北九経済が成り立っていた時代とは違った発想をする必要性を中心に意見を開陳した。アモーフラス（無定形）論を展開し、活性化とは「出直し」であるとすら強調した。列席していた多賀谷衆院副議長は「いかに売るか」の発想転換の必要性を最後の締めあいさつで強調していた。五〇人ほどの出席者だったが、みんなうなずいてくれた。社会党市議、県議の骨折りで行なわれたこの会であるが、一寸雰囲気のかわった行事であった。質問者の中に、堀川が腐く汚れているので何とかしてほしいという珍しい発言もあり、私は必ず対応を検討すると約束した。対応の仕方に泥くさい政治的対立のあることもわかった。

7月10日（日）

記念切手を改めて見なおす

休務で日教組委員長らが、大手門会館で十七日以降大会をもつことをめぐり、警備などで迷惑をかける旨あいさつに来訪、十二時頃から一時すぎまで対応した以外は、自由な一日であった。手伝いに来てくれた秘書室の藤本女史に切手のストックを披露したついでに、ストックブックなど改めて見直し、平素つつこんだままになっていた記念切手を適当に挿し入れることで余暇をすごした。夜九時までかかったが、まだまだ十分に整理できなかつた。以前は中島敏子さんが買い運んで来てくれていたし、自分でも気がつき次第買っていたのに、知事になって以降はプツリそうした縁がなくなってしまったので、シリーズもののほかどんどん発行される記念切手のどれが買いそこねているのか全くわからない状態になっている。その代わりドツとふえたのが、お年玉切手シートである。年賀状のあたり籤なのである。まだもっと整理に要する時間がほしい。何時までつづくかわからないのに……

7月11日（月）

PTA への一瞥

六月議会は順調に一般質問も今日で終わった。点滴を終えて早目に帰宅することができ夜は依頼原稿を書いた。一三〇〇字ほどのものだが福岡市PTA四〇年史(誌)に寄せたものである。書棚に熊本県の向山小学校PTA母親学級が共同執筆で昭和二十七年に出した本があるのを見つけた。原稿は半ばこの本にかかわる内容となった。「母親教室」という本で、母親たちの三年の研鑽のあとがよくしるされている。でも今は非行、いじめ、塾通い、虚弱児など子供の問題はPTA発足当時より重大化しているのではないだろうか。先日は東京目黒で、中学校二年の子が両親と祖母を殺した事件がおこり一せいに世間の注目を集めた。異常な親子関係に誰もが気付いていないようだった。特例といえばそれまでだが、誰もがこうした異常に気を配らなければいけない。PTAはそのような問題のブレーキ役を果たしてほしいのだが、大抵は眠っているのではないだろうか。

7月12日(火)

子供があとに続くとな否との差

議会のはざままで今日は休務。揮毫も仕事のうちと思って、たのまれたのを一々点検しながらなし終えた。みゆきの外出中にセールスマンに対応した。家屋の外壁張りかえの勧誘である。何とはなしに頭をかすめたこと、それは「自分はいつまで生きるのだろうか」であった。この家屋も二〇年になる。外壁は人工材でかなり古びている。セールスマンはそれに目をつけたのであろう。が、当方も自分の「余り」をふと考えざるをえなかった。子供が住む訳でなし、誰かに売却して価値あるものでもないと思うと、自分の今の瞬間が一番貴重なものと思えるようになってきた。一昨日も記念切手のストックブックを眺めながら、自分はなぜこんなことに時間をかけるのだろうかと考えたものだ。子供があとに続くことを考えてみて価値あるものと、それが考えられないなら価値のないものと、大きく違って来そうである。少しばかりの蔵書ではあるが、似た感慨が横切る。

7月13日(水)

県民の会は動かないでいる

県民の会の幹部達と中食懇談した。事務局をにぎっていた山口氏は引退し、今は山川氏に代わっている。内田茂雄さん、内田一郎さんらが学者代表、それに社共の代表が加わる。今は事務所を大学通りの県庁近くに移している。ただ、カネもないせいか運動目標も明らかでないせいか、動きはほとんどないようだ。春だったと思うが、姫路に行ったとき、「年賀状が来なかった」といわれた。山川氏は「カネがないので年賀状は減らした」といっていた。何枚印刷したのか知らないが、少しはアルバイトに宛名書きをしてもらって、大部分は各労働組合に下請けさせてしまうようだ。もちろん名簿は独自のもの整理しているわけではなく、組合は組合の名簿で宛名を書いている模様である。だから姫路の人達に年賀状はいかないのである。私も一枚も書けなかったので、今もって暑中見舞などどうしよ

うと思案している。県民の会が出さないのなら、欠礼になっても仕方がないなとも思っている。

7月14日（木）

消費税のこと

前の知事選の時に全国を沸かした売上税、それが当面は消費税ということで、七月十九日召集予定の国会の焦点として浮上してきた。六月十二日投票の埼玉知事選では畑知事が消費税反対を訴えて大勝した。しかし、自民党は、多数をたのんで押してくるようだ。消費税は以前の売上税が5%だったのに対し、こんどは3%、前回とくらべて除外例を少なくしている。しかし、弱者（低所得者、高齢者、病人、障害者、失業者など）に逆進的な不公平さを押しつける点はかわらない。それに、業者に事務上の煩雑さをおしつけることも問題だろう。一物二価ということにもなる。3%上乘せできる業者は切上げ価格とするだろうから3%以上になる。逆に上乘せできない弱い立場の業者は3%もとれないで自分で負担することになるだろう。私も、自治体財政の受ける影響をふくめ、もっとくわしく消費税の勉強をしなければならないと思っている。野党側が今後どう動くかである。

7月15日（金）

博多祇園追山笠をみて

追山笠で櫛田神社のサジキに招待され出席した。四〇年以上も福岡にいて追山を神社で見るのは初経験だ。約三千人の観衆が境内を埋め同じくらいの舁き手が詰めかけ、一番から七番までの山笠が秒を競うのである。関係者は徹夜同然で関与する。沿道には出店が軒をつらねてこれまた徹夜状態。三〇秒から四〇秒代で境内一周で勇壯の絵巻きを見ることができた。ただ、博多の旧市部の人達だから活気の裏に老化を感じた。福岡市部は商業も活気があるが博多部は欠けるものがあることは否めない。それを反映して舁き手に老化がみえるのではないだろうか。もうかなり以前から田舎では伝統の興かつぎ後継者が少くなり、祭りのミコシを中止したところが全国にいくらかあった話をきいていたのが思い出される。博多山笠には中止ということがありえないことではあるが、福岡部にも「流れ」を広めるなどの手段もありうるのではないだろうか。人々が燃え、ほほえみ、よろこぶ行事は何とか伝統的に継続したいものだ。

7月16日（土）

神社のこと

小郡での下水道開通式に出席した帰途、明願寺に寄った。一期目の選挙の時お布施事件がおこり、兄がしばらくお世話になった寺である。お別れの時にパンフを頂いた。住職は平和・靖国の問題に敏感であり、古墳、環境の問題にも関心強く造詣が深い。天神の円光寺

の円日住職も靖国問題に熱心で、この程送られてきた寺の月刊誌「むれ」に靖国問題を書いていた。国の関与が憲法違反であり、裁判所が「信教の自由は犯してない」との判決を下した「靖国訴訟」(自衛隊員合祀問題)について批判する論旨が展開されていた。改めて寺からの見方を教えられたような気がする。神社の立場からも国の関与をことわる方が得策なのにも書いてあった。神道というのは妙に私も思う。教典に類するものがない。私は神社におまいりし、礼拝するが何を対象にするかの自覚をもった事がない。神社によって祭ってある「神」はそれぞれ異なる。村の鎮守といっても、何が祭ってあるか知らないケースが多すぎる。宮地嶽神社が交通の神様と今の人はいうが、なぜなのかわからない。太宰府天満宮は道真公で学問の神様とは後世の人がつけ加えた解釈だろう。

7月17日(日)

一人当たり老人医療費の多さ

日経新聞に老人医療費の地域差のことがかいてあった。六十一年度について総医療費一七兆七〇〇億円、うち七〇歳以上の者に要する医療費は四兆五千億円で約三七%、人口比は七・一%だから、当然のこととはいえ、医療費は老人に多くかかる。一人当たり老人医療費の一番高いのは北海道北檜山町の一〇九万円、一番少いのは岐阜県徳山村の九万八千円。一〇倍以上の開きがある。医者が多いと患者も多い傾向があるといわれるが、この新聞ではベッド数が多い地域には老人医療費が高いといえるかもしれないと指摘してある。福岡県は一万人の老人につき、ベッド数は全国三位で医療費は四位と書いてある。福岡県はガン死亡率も全国一といわれて久しい。医師の比率が高いから患者発見が多く、不名誉なことではないと医師会の人は曾つていつていた。一人当たり老人医療費はガン死の問題とは同じではないが、ワーストの側にかたよった位置にあることは、いずれにせよ自慢にはならないはずである。いずれにせよ、いい数値になるよう努力すべきだ。

7月18日(月)

教育日本といえるけれど

東京事務所に来て東京新聞を見ていたら、日本の教育について二つのことが書いてあるのが目をひいた。一つは日本の教育水準の高いのにくらべ、アメリカは低く、米国の将来は衰退の方向だという。先月ブラジルに行った時も日本移民の教育水準が活動の基本になっているとの説明をうけ、これと通ずる印象をもった。(この裏で、今、受験地獄そして日教組大会があっている)まさに教育日本がこのハイテク時代に光る理由がわかる。この教育の光の部分に対し、陰の部分があって、十日前に目黒で起った中学二年の子が祖母、母、父を殺した事件につき、「社説」と「発言」欄でこのことが大きく取りあげられている。「わかもの声」が六件ほど、この家族殺害についてのせてあるのである。殺害少年は、「計画的」にやったと自白しているようだが、行為の計画はあっても、人生の計画は全く滅裂し

ているので無計画というしかない。受験地獄と「家族」の正常な姿の崩壊が深層部に流れていることを見落すわけにはいかない。中学二年の年頃、セックス問題もからめて、大変な節目であることを改めて知らされた。

7月19日（火）

アメリカは衰退するか

朝日新聞に「アメリカは衰退するか」の連載（15）が今日で「をわり」になっており、日米比較の数字があがっていて興味をひいた。民間産業設備投資のGNP比の日米の違いは日本一七%、アメリカ一〇・二%、工業設備の建設後平均経過年数は同じく一〇年と一七年、年平均一人労働時間は二、一五二時間と一、八九八時間、工作機械の発注から納入までの平均時間は一〜二ヵ月と五〜六ヵ月、週に五時間以上平均家庭で勉強する子供の割合六五%と二四%、工場での実働ロボット数四万と一万、中小学校の平均年教育日数二四〇日と一八〇日、家族の貯蓄率GNP比一五・七%と五・二%等々があげてあった。日本の活力が改めて指摘されている。電子工業の製品欠陥率〇・五〜一%と八〜一〇%にもあらわれている。「働き虫」の中傷もあるが、「衰退するか」との問題提起に対してはこれら数字はかなり有力な証言といえそうだ。逆に日本人は忙しすぎると自己批判してもいいのではないだろうか。

7月20日（水）

昔は下から上へ収奪、今は上から下への陳情

先日、直木賞をうけた白石一郎氏の「海狼伝」を手に入れたので、読みはじめた。数ヵ月前に受賞との関係でその梗概（本人作）ものを文春？で読んで面白いなと思って読む気になったこの本である。以前講義の中で海軍は海賊の変形と説いた経験があるし、豊前の村上水軍についてきいたこともあって興味はつづいている。はじめのほうに、対馬の海賊がでてくる。朝鮮王に臣従するところで、対馬は米麦の類が十分に生産できないとあるのでびっくりした。海の幸はたっぷりあるだろうに……今日は来年度政府予算案について各省まわりをしたが、カネをくれということばかり。その中で、ふと、妙だと思ったのが海賊の話との連がり。昔は中央又は支配者が力づくで取りあげる一方であったはず。今は中央にカネをくれとか道路をつけてくれとか中央から地方におろせという陳情で、省庁の階段がすり切れるほど地方の者が走りまわる。今は力なしで予め取り上げられ過ぎているのだろうか。地方は昔のように困窮しているのでもないが……

7月21日（木）

博物館を考える

東京に何回となく往復しながら東京事務所との間を行き来するだけなので、今回は思い直

して鉄道博物館と通信博物館を見学することになった。名は交通博物館、通信総合博物館となっていた。東京ならではの事後感想がまず第一。それに、まだまだ徹しきれてない不十分さがあるのではないかとも思った。それに通信の方は、下の方が今の電信、コンピューター化の展示場化して博物館というには、ちと、NTTのPR室化しているのかの感があった。建物の坪数をもっと広くないといけないだろう。子供が大勢来ていたが、大人ももっと来なければいけないのではないか。福岡県も何か博物館を自力で作りたい。提案できるところまで、もっと勉強してみたい。外国にあるような武器博物館も国でつくる必要があろう。それ以外にも、民族、民俗、民具、^(不明)□具等々考えていけば限りなく空想はひろがる。教科書博物館も考えてみたい。

7月22日(金)

糖尿値の異状小康

今日も済生会病院で検診と点滴をうけた。今日は血糖値一五九で昨日の三三三と様が変わり、尿糖も4からプラマイゼロになっていて昨年とプラ四よりぐっとよくなっていた。なぜにこんなに違うのか。自覚できない。食べ物や睡眠や多忙さの違いとも思えない。小川先生は糖尿についての注意書きのコピーを届けて下さった。生活全体について一そうこまかい配慮が必要であるようだ。前から足のあちこちにできている赤い傷(斑点)も糖尿と関係があるのではないかと思える。足の下方部分を常に清潔に保っておく必要があるという。今日は小川先生との間で、十七、八年前、イギリスに行く時、既に糖尿病の心配があったことなど話しておいた。問題は、知事になって以後それが重症化したこと。更に慢性肝炎が加わっているという点である。今のところ運動不足を補う妙案がない。家にルームランナーなどおいて利用する方法もないわけではないが、こうした途には興味がつづかなかくて……

7月23日(土)

軸物の箱書き

休務だったので、揮毫に時間をあてた。高県議の紹介で書いた藤井天道氏の「自然風月情無盡」というのが掛軸として立派に表装され、先日来庁され箱書きをというので、今日はその宿題も果たした。うっかりして箱表を前後逆に書いてしまった。盍合わせが既にきまっていたのだから、それを点検してから書くべきであった。中に前後を決めたしるしがついていることに気づかなかったのである。藤井さんがこの軸を床にかけているのを見て、自分にもとって芳賀という人が同じく軸物を依頼してきた。断わることのない私はそれもOKして今日書いた。極高明而道中庸という七文字で、数年前に長崎の孔子廟に出品したのと同じ内容のものである。あと十枚ほど色紙の依頼があったので、それも消化した。誰かが最近、あちこちに書いてありますねとひやかし半分に行った。でも頼まれれば断わ

らない性分だし、レジャーの一つとして楽しい事だから世の批判にまかせよう。

7月24日（日）

元九大学生課長小林靖之氏来宅

中食スシを食べながら来訪した小林靖之氏と二時間ほど歓談した。彼は今東大の学生部長で、私の学生部長時代は彼が九大の学生課長であった。当時学生部にいて今は厚生課長の堀氏が同道してきた。私が学生部参与、学生部長時代に大学紛争をめぐって苦労辛酸を共にしてきた男である。ファントム F15 が建設中の大型電算機センターに墜落してから今年は二十年目にあたり、ベトナム反戦、安保反対を外的条件として学生運動は昂揚していた。行政の筋とこれら問題に対する基本姿勢は当然にくい違った。その後一年余りすぎて学生の大学封鎖解除、電算センター再建、学園平常化を達成するまでにいつくせぬ苦難が必要だった。今日は、私の日記を種に当時を想起しつつ大いに歓談した。現に、さきの筑豊フォーラムで私の「日の丸君が代発言」がいろんな草の根団体から反撃されたことも併せて想起された。

7月25日（月）

高齢化の問題

七月がどんどん経過していく。今年は梅雨明けといわれたあとに、今日も、雨が降って、ダムは満水放流ときく。干天つづきよりましかなと思うが、照るべきは照った方がいいのだろう。蝉が二～三日前からしぐれのように音を立てはじめた。この土曜日に県民大学で高齢化問題を考えると題して私がトップバッターを演ずるので、高山女史が作ってくれた資料を土台に、関係職員が集って議論したが、「対策」となると、首をかしげ頭を抱えなくなる。結論は「楽しい長寿」のために、地域社会、コミュニティの復興ということになるが、具体的な確信のもてる案の準備はないといえそうだ。自助、互助、公助というスローガンはどうやって作るか実現するか、今県下で立派なサンプルがあればどんどん出してみてほしいというのが当方から投げかける課題である。この部門分野を県政の最重要課題と考えていると私は敢えていおうと思うのである。緒方氏が「元気で死ぬ」といった。そのことをどう実現するかだ。

7月26日（火）

ホドリ君宣伝隊の来庁

ソウルオリンピックの宣伝隊が日本全国をまわっていて、今日午後県庁に来た。一階ロビーは管財課が使わせぬというので亀山上皇像前を利用して、表敬を受けた。金権萬総領事も来て私も挨拶に立った。ホドリ（虎）がマスコットで、ホドリ君たち一隊と最に踊ることになった。オリンピック会場の砂をパックにした贈り物が届けられたほか、県庁には一

メートル大のマスコット（ぬいぐるみ）が贈呈され、これは当分知事室に飾ることにした。こんどのソウルオリンピックは一六〇ヶ国の参加で、競技参加選手の数も、あわせて史上最多のものになるとみられ、韓国の国威昂揚に大きく寄与しているようだ。ソウルはますます近代化、大都市化すること確実である。県では今年のそれに加え来年の福岡市制一〇〇周年記念アジア太平洋博、再来年の六五回国民体育大会を、連続三大イベントとして対応している。

7月27日（水）

東京奥田後援会の懇親会

奥田知事東京後援会というのは総評会館に事務局をもち私の二期目出馬の時に発足した。二期目に入った直後の昨年七月に反省の意味をこめて会合を持ったが、やはり今回と同じく総評大会を機に開かれ、県議会との関係もあって私は出席できなかった。今回今日それを果たし得た。三五人の福岡県出身の労組幹部を中心とした会合に終わったが、一人一人のあいさつをきいていて、在京の人達は壁が厚いのだなと感じた。今後ともこのことは配慮に値すると思った。高橋正雄先生も出席してくれ挨拶の中で、今八十八歳だとのことであった。元気そのものだが、やはり足腰は衰弱とみえた。この種の会では皆から推挙される立場にある人である。後援会にごむさたしているが縁は大事にしなければいけないことを知らされた。東京事務所長の床嶋氏も同席、杉山氏の随行という形をとってまずはよかったと思う。総評がセンター化したあとは未知数だ。

7月28日（木）

松田留吉県評事務局長の要請

羽田から福岡まで、県評の松田氏と一しょだった。機内での話に、知事の「声かけ」が各分野で待たれているとのことであった。それで早速着いてから林県議（社党県議団長）事務所に訪ねた。警察の日教組大会警備予算要求に関する件と、九月上旬に予定されているハワイ及びロスアンゼルスゆきの件につき意見をまとめておいてくれるよう要請した。前者は残業賃をもう少し奮発した方がいいかも知れぬということ、後者は知事の海外出張についてとかく波紋が大きいということを配慮しての判断を求めたものである。又夜には福留氏に電話した。八丁君亡きあと県評サイドから学文サイドにブレーンの役割を期待する向きがあるのに応える受け皿がないが、どう対応するのがよいか考えてみてくれと語りかけたのである。福留氏はよくわかると答え、社問研に八丁に代わる若い学者を置けるならベストだがと彼はいていた。私は当面はブレーン集団を組織できれば専属者はそのうちに・・・と試みてみた。

7月29日（金）

零細商家婦人のなやみ

午後、庁議室で、県商工会連合の婦人部役員と「知事と語る集い」を開いた。零細商業の婦人といえば、農家婦人以上にきびしい日常生活を送らねばならぬ立場なのである。農業なら農閑期もあり夜もあるが零細商業ではそうした特定の時間帯はない。客が来なくても店を開けて番をしていなくてはいけない立場もある。教養やレジャーもままならない。今日の話の中には、大型店や生協に圧迫されて業績があがらぬ事も訴えられた。閉店の余儀なきに至るものも少なくないとのこと。後継者難も当然にある。私の方からは街づくり、店の環境づくりや、営業品目を客の好みに合わせて変える勇断も必要と提案してみた。零細商業の悩みは尽きない。とくに筑豊などでは生活保護を受けてのんびりやっている者がうらやましいとの声も出るらしい。婦人ならばこそ、担い手としての悩みがたくさん聞かされた。新しい世界をかいま見た思いがする。

7月30日（土）

今の子供は水汲みを知らない

東公園の市体育館で中学校体協四〇年記念総合体育大会の開会式があった。選手たちはのびのびとたくましく大きい。ベストを尽くして力と技を競う、それが再来年の福岡国体の種まきにも通ずるだろう。体力づくりと強調されるのは至極尤もである。が五〇年前のわれわれの頃がふと思い出される。スポーツはもちろん当時も奨励されてはいたが、今ほどではない。中学校で運動部にはいり、練習で帰宅がおそくなると、農事手伝いの必要、部活動はやめて早く帰ってタンボ行き手伝ってほしいといわれたものだ。小学校の時代でも役に立つものは猫の手でもということ、農事家事の手伝いは当たり前だった。小学校の三年にもなると水汲みを義務とされた。ツルベで井戸水を風呂や台所用に汲んでおくのである。今の子は蛇口をひねれば水が出るのが当たり前だが、われわれの子供の頃は労力によって水を手に入れたのである。今の社会が五〇年後にどうなっているだろうとフト考えた。

7月31日（日）

「老後」のこと

五月末に県民の会レベルで岩元和秋氏の送別会を行ったが、二日ほど前に、いよいよ鹿児島に帰るので、との電話があった。向うで長く暮していたので、かえって地縁血縁は向うの方が濃いからいいかも知れない。六本松に近代的なマンションを得て住んでいた、そうした後処理にも時間がかかったろう。夫婦二人で・マンションといっても移動は大変だろう。ひと知れぬ努力がいる。財政学の専門家で自治労がよく接触していた。ひるがえって、自分のことを思うと、身辺机辺の整理はととてもとても動けるような状況にはないことというまでもない。今後何年の寿命なのかかわからないが、それこそ動くわけにはいかない。

根を張ったようだ。そうなる、やはりいわゆる「老後」というか、誰かの介護を必要とするようになった時のことを思わざるをえない。誰か考えて呉れ、名案はないか、カネはないか、安定した誰もがよしという制度はないか。こんなことを考える自分である。

8月1日(月)

ダウンタウン・ヒーローズを見て

山村氏の招待で山田洋次監督(早坂暁作)の松竹映画ダウンタウンヒーローズの試写会に行くことができた。話は戦後、六・三・三制への移行直前の旧制、松山高校の寮が舞台である。戦後の自由と飢えの面で私の体験とはやや違うが、他は違わない。二時間あくことなく見とれて過ぎた。早坂暁が旧制松山高時代をふりかえって書きおろした自伝的小説を同時代山口高の一年修了の山田洋次が脚色ドラマ化したという。戦後しかも一年間という旧制の寮生活にしては、ちと馴れすぎ、旧制すぎるくらいがあり、誇張もあるが、すっかり私を堪能させてくれ、言うことなしの満足作といえる。今の若者が見たらどう思うだろうか、それが気になる。旧制のあのバンカラの背後にはやはりエリート意識があった。今の若者にはそれはないだろう。主演の薬師丸ひろ子、中村橋之助はあのバンカラの中に一寸とけそこなった現代っ子である。でも不足ではない。現代っ子の若者に大いに見てほしい。山村氏は、松竹はこれに賭けているのだという。

8月2日(火)

家族内の過疎化

午後市民会館で作文教育研究大会が開かれているのに出席挨拶した。全国から六〇〇人ほど来ていた。私は原稿なしで県農協連の作文コンクールの事業にふれて感想を話した。それは先生と子供と親の三者が交流し合う意義を私なりに強調した七月十一日のこの日記のPTA記事とも関連している。さらに七月三十一日の朝日新聞のケア日誌(コラム)「家族と一緒にでも孤独」にも言及しての挨拶となった。核家族の子供教育に与えるマイナス影響については多くの人が言及するが、この記事は四代同居の家族の例をひきながら、ヒマゴにも相手にされない老婆の立場について書いている。「誰も私のいうことなんかきいてくれない」と彼女はこぼす。食事の時間、内容も別なら居間も別。この家にはテレビが四台ある。みんなが勝手放題に自己を享楽して時間をすごしているらしい。「家族内の過疎化が急ピッチで進んでいる」とのべてある。核家族でなくても、人間が誰しも家庭内で核化していくようだ。わが事のようにも思いながら、私の演壇での挨拶だった。

8月3日(水)

抜歯して思う

左上の小白歯をとうとう抜いた。がたがたに動いていたそれである。一つおいて奥に並ぶ

二本の臼歯については、かなり動いているが、一考を要すると医師の甲斐さんという。つづけて抜歯していくのも問題だろうが寿命が来ていることは確かだ。歯の悪いことについて、どこまで責任がもてるのか知らないが、歯を大切にしていなかったのも事実で後悔している。面倒という気持ちが先立ったことは確かだ。どれもこれも手入れしたことになり、総入れ歯とはいわないが、全滅に近いわけだ。今の子供は歯の手入れはよくするが、やわらかものばかり食っているから、アゴが発達せず、歯並びが悪く矯正せねばならぬケースが多いとき。歯科医師会の人がいうように、人間の寿命は延びているが歯の寿命がのびないので、そこを延ばしていくよう努力しているとのこと。他の動物は歯は心配ないのではないか。そうだとすれば、歯は人間が自然にそむかないようにすればそれなりに長い寿命を保つのではないだろうか。歯の手入れはそこに原則があるように思える。

8月4日(木)

平和月間

八月は平和月間。タイムリーに高木二郎氏が「昭和萬葉集」（前書集）を送って来たのでこの数日、車の中でペラペラめくり読んでいる。こんどは句をよんだ場所別にしてあるので、広範囲な「終戦」「敗戦」の様相がにじみ出て、あれこれ考えさせられるものとなっている。夕方、お盆参りの意をこめて光円寺に行った。予め連絡してあったので、円日住職ご夫妻が待っていてくれて歓談しばしであったが、寺の入口に「反戦反核」の行事を示す看板が掲げられていて改めて円日氏の平素の主張を思い出した次第である。自衛隊員の奥さんの靖国合祀違憲裁判についての彼の文を読んだことがある。創価学会の池田名誉会長も強靱な平和主義者である。「昭和萬葉集」をみても、どの地点にあっても平和が歓迎されたことがうかがわれる。にもかかわらず、あの馬鹿げた無辺広大な戦線に国民を動員する大戦が行われ、原爆が広島、長崎に落ちてはじめて戦闘ヤメになった。草の根保守主義と草の根民主主義の合体のさまを改めて考えさせられるのである。

8月5日（金）

竹トンボ作りをみる

どうなることかと案ぜられる今の若い者。緑の少年団キャンプ場（背振）で竹トンボ作りをしている小学五、六年生の子供たち、切出しナイフ、錐、鋸などの使い方がなっていない。傍にいる先生達も指導力がない。科学技術が発達した今日、使い方など不用といえばその限りではあるが、いかなる機械も道具を不用としないように、いかなる道具も基本になる手技を不用とはしないはずである。小刀を使わせない今の家庭、学校に基本の問題があると思う。手を切ったら大変という考えが下敷にあるようだ。誤って手を切ることがあってもそれを避けるのではなく、克服するように訓練しなければならないのではなからうか。今の裁判所の前では誤って子供が手を切ると、親が先生を訴え、勝利するようになっている。

先生もこれでは敢えて危きに近よらないのである。竹トンボを作る子供の右手、左手、ナイフ、竹それぞれが遊離していて一体になっていない。五体全てがナイフを通じ竹に没入するのでなければならないのに。

8月6日(土)

原爆、八月十五日を語り伝えたい人のために

広島原爆忌。二、三日「昭和萬葉集」をあちこち読んでいるが広島と長崎の部分は胸につきささる。私もこの「万葉集」のような本を福岡県について、まねて、作ってみたいと思った。語り部の運動もあるが、どうなっているのやら。新聞は毎年この月になると多くの原爆関係記事をのせる。あちこちで運動、集会が行われていることも報じられ、体験談ものっている。同じことを二度しなくてもいいが「万葉集」という形で、広く一般に募集すると、新聞記事にならなかった人達も希望して応募するに違いない。隠れた記録の掘りおこしにも意味があるに違いない。そういう事業ができないものか……この数日こんなことを考えつづけている。自分の記憶、念想を残したいという人が多いに違いない。六〇歳をすぎたら、そう思うが聞いてくれる人がない。そのような人のために、書いて残す方法はないものか。

8月7日(日)

非核、反核

広島、長崎の原爆体験は風化させてはならない。今は水爆というのかどうか定かには知らない。又広島・長崎の何千倍の威力なのかも知らない。が一発で世界、地球が終りになりそうなのが何万個とかあるという。核保有国、米、ソをはじめ、英、仏、中の実験はもとより引き金を預っている人達の正気を顧わずにはいられない。ビキニの水爆実験がいかに非人道的に敢行されたか、ひるまのテレビでやっていた。島民(マーシャル群島の一島)が生きた実験台にされているのだ。国防とか何とか立派な言葉は使われるが、生体実験を、その名のもとに平気でやる核保有国の指導者の気持がわからない。そういう指導者を選んでいる国民も反省していいのではないか。とって米軍の方針をうのみにしているわが国も無罪なのではない。平素から非核、反核の運動をやっている人達に頭のさがる思いがする。辛抱強く運動をつづけて下さることを切に期待する。

8月8日(月)

「負」もまた常識の中に入れるべき

中央陳情を終えて帰福中、機内も一しょだった企画の中村健部長が、「総立ち」について私に話しかけてきたので、城の石垣や将棋の駒の例を出したり、源流としての三池労組の「五人組」、それから三隅氏との対話の中で集団力学上もそれがいえるということなど延々と説

明した。そして「総役立ち」でもあると付け加えておいた。又機内の話は進んで西欧、北欧などで使われるハンディキャプトの適訳が日本語にはないということにも及んだ。昨年秋北欧に行った時、強い印象として総括的にいえる言葉として「負の共有」ということが土産として私はもち帰ったのだが、「総立ち」の中には高齢者、心身障害者、子供も組み入れられるということ、その中に特にハンディキャプトの人たちも算入し、負もまた忘れてはならないことを部長に話したのであった。「負の社会有」という意味を昨年私がい出したことを彼は知っていた。正のことばかり考えるクセをやめて負もまた当然ということをもっともっと常識化しなければならないと思う。

8月9日（火）

健康に尚不安

長崎原爆忌。運動体の「協」と「禁」は割れたまま集会をやっている。くわしくは知りたくもなく、空しい感じだ。今日も点滴、検診。血、尿ともに値は低かった。空腹のせいかも知れない。正午にサンドウィッチ少し食べ、他はとらぬまま五時半の糖検査である。血糖一〇三、尿糖マイナス、看護婦さんが低血糖の心配すらあるという。何だかわからないが、睡眠不足もあり、頭の中が晴々しくない。言動には狂いはないと思うが、階段の上下の足の運びなど、夢遊病者はこんなのではないかとすら感ずる。点滴をすすめられる関係か、医師の見るところ、どこか決定的な問題があるのに、私には周囲がかくしているのではないかとすら疑いたくなるこの頃である。大丈夫かなと我を疑ってみたりする。小川先生は夕食後のてっとしてという指示もされるが、とてとてもそんな呑気な日程ではない。機内はのんびりと思うが昨日と明日は東京日帰りの旅であるし、夜は八時すぎでないと自由になれない。そのあと私的な時間がどうしても二時間以上は必要。総じて空しい。

8月10日（水）

黒川紀章氏の面会要請について

東京の県人会会長齋藤武幸氏（住友建設会長）の強い要請により、上京の仕事が終って後、東京事務所で、林県議が会うという形で、私も同席して齋藤氏の話しをきくことになった。建築家の黒川紀章氏が県庁舎跡地に作る施設について自分が設計素案を作成したいとの意思をもっているので、仲立ちして、その話を知事に伝えたいというのである。黒川氏から知事に会いたいとの要請は数ヵ月前から受けてはいたが、（間接的に）、辞退しているという背景がある。しかし跡地利用については、先月に予測していたNHKが進出をあきらめたということがわかって、それ以来、方策が模索、動揺の状況にあるし、県議会側も強い関心をもって見ているという状況であるため、黒川氏や齋藤氏と私が会うことは、目立ってはならないし、何もいえない白紙の状態では会う意味がないという判断から、私が動かないとの立場を堅持しているわけである。今日も齋藤・林会談という形にした。施設の内容

はもちろん第三セクター方式、信託方式など、まだ選択肢をこえてはいないのである。

【「奥田知事も思いつづる 終戦の「俳句前書集」』（『フクニチ』1988年8月10日）のコピー挟み込み】

8月11日（木）

昭和万葉前書集の一部を引用する

「二十年八月十五日を詠う昭和万葉前書集」は、北からやっと東京のところまで読み進んだ。二、三引用してみよう。

・・・今若者の街原宿も、空襲の毎日。明治神宮、海軍館と標的は思うまま。空襲の夜は竹下通りは火炎が宙を走り、無残な死骸の山。嬰を胸にくくり、老父母を抱え逃げ迷い、再度罹災、ついに防空壕生活。・・・また他の一人・・・戦災で家を失い、終戦当日は世田谷の深沢に住み海軍療品廠に就職する。軍関係だけに敗戦の情報は一日前に流れ、一部の男性が暴動を起こす騒ぎもあった。当日は青酸カリを支給され、全員トラックに乗り、宮城へ行く（女性である）・・・三月十日東京大空襲、死体の整理に行き深川扇町小学校庭プールの中に折り重なって^{ママ}百人の死体、この世の生地獄であった。戦後家なく食なく衣なく、毎日東京の人は夢遊病者のように食を求めて歩き回った・・・

8月12日（金）

岩田自治労県本委員長から問題提起があった

午後のひととき自治労の委員長岩田順介氏が折入ったので要談をということで来室した。労働戦線統一にからんでの連合＝地方センター、県評の将来、地公労の動きについて今後の対応は一致した。三井三池の若年者人員整理については、今後できるだけ早期に私が大牟田市に行って三井側、市長に会うなら、中央で本社、国会議員なりに会って少しでも有効な対策をとるよう遊休地利用をふくめて対応がとれるよう県も協力しようと申込む必要があるというので、この意見については事務的につめを急がねばならない。第三は亀井時代の職員処分について、県職・教組の対応は同じではないということ。来春までに一人特別扱いをせねば気の毒という人があるので大塚副知事に動いてもらうよう働きかけるという話。これは県議団の動きとも関連してあれこれ関係が多いようだが、動き出す必要があることは確かだろう。以上、三点について岩田氏の申入れは了としつつ早速にも動かねばならぬ課題である。

8月13日（土）

敗戦の混乱は知恵の一つであろうか

今日もまた「昭和万葉俳句前書集」をよむ。終戦のドサクサというか、何がどうなったのやらわからなくなってしまう。過去がすべてといえるほど清算されてしまう。施設も役所

も家も家財道具も焼かれてしまう。残った記録と焼き捨てられてしまった記録の差、比較がどうして可能であろうか。焼き出されて、身寄りを頼って地方に脱出するもの、身寄りのない者まで抱えこんで同居する者、食うに食なく、同胞離散してしまう。郵便局や銀行が金銭帳簿を整理するシーンも詠まれているが、それが何の力になろうか。生きた人間には過去を身にもっているが、あとすべてはないし、あっても混沌・戦後のインフレは今でも忘れられないが、インフレが残された過去、灰になった過去をすべて清算し、ゼロにするのに一番適切な方便であったことが今になって理解できる。貯金も国債も権利も、すべてゼロにして、ゼロから再出発することになった事が理解できる。

8月14日(日)

「昭和万葉俳句」を読めば読むほど感慨がわく

昭和二十年のこの頃は、B29の爆撃、原爆で、日本の全国これという市はほとんど焼きつくされ、こわされ、死屍ルイルイで、生き残った者はどんどん僻地に居を求めて四散し、戦闘の体力ある者は空なる米軍上陸を想定して体当たりの工夫をこらしていた。戦車が来たら、米艦が入港したら、米兵が近づいたらとの想定で、爆雷をかかえて「特攻」突撃するのであるが、そんな想定は的中せず、米軍はとことんまで空襲し、艦載機で掃射し、体当たりの対象は最後までつかまらなかった。戦力は無限にゼロに近づいた。疎開仕事、傷病者の手当、死者の仕末、米軍行動に関する情報伝達（通信）、避難訓令発信、伝達等々、全く戦いになってなかったのが二十年のこの頃である。一億玉砕とか、絶対不敗という過剰意識が、ここまで無駄な消耗につき進んでいったのである。せめて一日早く、一週間でも、十日でも、早くポツダム宣言受諾といっておれば少しでも消耗せずにすんだのに。

8月15日(月)

四三年目、戦争やむ

例年どおり、全国的に今日四三年目の敗戦記念日戦没者追悼式が行われた。正午を期しての黙禱、恒例の武道館での県主催追悼式は、少ない感じがした。「風化」が進んでいるのかなとふと思った。ある代議士の電文の中に「英霊」という言葉がでてきたが、国内の爆撃、機銃掃射などで犠牲になった国民一般、子供、婦人、老人、工場労働従事者、漁業操業者、旅行者、医療従事者、執務者その他等々、こんなのを「英霊」の中にも含めるわけにはいけないので、「英霊」は何としても適切ではない。戦闘行為だけに限られるような言葉はいけないし、追悼式は戦争の直接犠牲者を全部ふくめているはずである。遺族会は兵員の遺族が構成員であろうから、これもこの行事の主催者ではない。夕方、県少年の船の帰港式があって、あいさつに行ったが、八百人余の団員少年は沖縄南部戦跡の見学をし、戦争と平和を考えさせられたというが、「風化」が進む今日、貴重な体験ができたと思う。「語り部」たろうとしても「聞き手」がいないのが残念といえる現況である。

8月16日(火)

靖国を権力がうしろだてするのは不当

昨日は全国慰霊式に天皇が那須からヘリコプターで参加、靖国神社へは十一人の閣僚が参拝した。竹下総理は参拝せず。西本願寺の門徒代表とかいわれていた人だ。慰霊式はいいが靖国となると「英霊」へのあいさつに限定されてくる。先だって最高裁で自衛官の靖国合祀に反対する家族の訴えが敗れたのも記憶に新しい。最高裁判事も十一閣僚も、靖国と武力行使者とを直に結びつけ、その論理を国家権力でバックアップしようとしている。八月十五日を思いおこし、広島、長崎の原爆、ビキニ、スリーマイルズ、チェルノヴィリをよく考えれば靖国を合理化して再び戦争肯定には世論はなかなか結びつかないだろうが、危険な傾向であることは確かだ。今日の西日本新聞には、満州事変の時日本軍が捕虜を虐殺するシーンの写真一四〇枚を保管していた糸島郡の人の提供したものが掲載されているが、私も、七二兄から後手に縛られた捕虜が今にも斬首される直前の写真を刀出で見せてもらったのを思い出す。靖国はこうした非人道にも通じているのだ。

8月17日(水)

山あいのセカンドハウス

合所ダムの上流、細流^{せせらぎ}というところにヤマメ料理を食べに行った。帰りには名は忘れたが藁葺きの珍しい民屋三棟式の見学した。国指定の重文という。こういう環境で、今後の農山村のあり方にふと考えが及んだ。参加した鑑水町長に、町の経営で簡易セカンドハウスを造成して売ったらどうだろうと提案してみた。都会は営業就労するところであっても暮らすところではない。マンション生活には自然がない。「細流」に私はこれで三度目のようだ。知事になる直前に書いた「一波萬波」の色紙額もある。ここは空気がうまい。うまいと感ずるようなところに週のうち一日、二日はおってみたいものだ。簡易セカンドハウスで建^たの二〇坪、畑の三〇坪ほどのものでよい。一千万円もあればできるだろう。車のことを考えて道路をつけることができるとよい。老いた健康人が、畑作に精を出すのもいい。そのような空想をめぐらしてみた。日本中いたるところにこうした適地はあろう。

8月18日(木)

特養ホームをみる

午前中、永田室長の運転で、家永、斎藤の四人で田主丸町石垣の特養老人ホームひじり園に行った。平均年齢七九歳で八〇人。その職員三七人とか。介護を要する人ばかりの入所である。近頃シルバーホームヘルパー制度が問題になっているのだが、元気な高齢者をこういう施設に働いてもらう方法はないものだろうか。働くというほどのものではなくても「介護を要しない」高齢者も入所してもらって、それなりの役割を果たしてもらえないだろうか。昨日までひとの世話をしていた人が今日から人の厄介になるというこ

とになってもいいと思う。県下の老人福祉施設は定員は足りているようだが、足りていても中味運用は工夫してみる余地があるだろう。入所者すべてが要介護で、他の人は全部事務や介護をする人という構造は将来に向け検討する必要があるだろう。老人ホームに行くたびに、私は鬱々たるものを感じずるのだが、飼育場みたいではなく、生活の場という側面が前面に出るといいと思うのである。

8月19日（金）

漁業とレジャーの共存の道

県下三海区ごとの海区漁業調整委員会が今日から新発足した。漁業者間のトラブルはもちろん対象だが、近頃は游漁者との間のトラブルも注目をひくようになっている。私は漁業者の方から積極的に游漁者との共存をはかるよう行動をおこすべきだとの意見をもっている。レジャー時代になったのであり、貝掘り、魚釣り、海水浴、ヨット、ウインドサーフィンなど、海をレジャーに利用したい傾向は強まる一方である。しかし、こうして海に出てくる人達はマナーがよくないことが多い。海浜がビニール、空缶、餌などで汚染され、迷惑千万な光景を呈する。まき餌が専業漁師に迷惑をかけることもある。しかし漁業者はレジャー行動を邪魔物扱いするのではなく、地元者として、これら来客に、サービス、監視の役務を提供し、それを収入源とするように、姿勢をかえ、体制整備をはかるべきであろう。漁業者も高齢化するだろうが、高齢者に適した仕事はレジャーとの共存の中から新たに見つかると思う。

8月20日（土）

非明析、非爽快の度の進行

夕方時間のゆとりがあって大濠公園池の浄化工事現場を視察した。ヘドロ固化作業がはじまっている。六十年目の工事での種工事としては全国珍しいといわれる。来年春の福岡博開会までに仕上げねばならない。中の島を歩いて広いのに改めて驚いた。そして汗ばんだ。ところでここでわかった体力の衰えに何とはなしに末期的なものを感じざるをえなかった。それは表現の仕様のない疲れである。頭の明析さはほとんどないし、歩の運びもわれながら全くたどたどしい。記録しておかねばと思ったものの、どう書いていいか表現のすべがない。ともかく全面的な衰えである。いつか前に、明析、爽快の反対と表現したことがあると思うが、その方向の進行である。今後どういうスピードで、どう進むのかわからないが、進むことは確かなようだ。眠れない、眠れないの連続である。公用がおそくまでであるのも健康障害の一要因と思うが、それ以外に何かあるのだろうか。

8月21日（日）

甲子園へ、舞台裏

福岡第一高校が夏の甲子園野球に勝ち進み、今日は沖縄水産との準決勝。朝から応援にかけた。五万何千人という観衆を呑んだにしては、以前の記憶からして今日はやや小さくみえたがなぜだろう。以前はなかったかも知れないが、応援席には女子高生がいるからこそ高校野球らしいサマになるのだと思った。彼女たちはテレビに映ってもサマになる。叫んでも涙ぐんでもサマになる。でも考えてみると、旅費その他の経費はどうなっているのだろうか。元締にあたる人は大変だろう。小道具も揃えねばならない。人文字も、よく工夫されているし、訓練されている。一定のスケールなしにはこれもサマにならない。応援団何百人の一斉の叫びも、訓練されているからこそである。第一回戦までに訓練が終っているわけだ。われわれにはこれらの舞台裏が見えない。この見えない部分の人達については選手団とは別の意味で敬意を表わさなければならない。毎年出場するなら別だが、一年きりのにわか仕込みをせねばならないのだから大変だったろう。

【第70回全国高等学校野球選手権記念大会の入場券貼付】

8月22日(月)

暑中見舞状への対応はしないで気にはなる

今年は年賀状にも暑中見舞状にも対応しなかった。中には不平を言う人もいる。家族内では能力と気力に不足している。私は多忙すぎる。対応するにはひどすぎる。もったのんびりしたいくらいである。県民の会はほんの少し機械的にしているらしい。つまり、印刷したハガキを組織に分けるだけのよう。秘書室もやっているが、これは行政の範囲内である。私がかかっているアドレス帳は誰もしてくれないのが実情。何回か渡すのだが、県民の会は自分で表書きをしないから、私のアドレスのコピーは眠ったまま。それにコピーも、誰の所有かわからん住所名列になっているのなら、なきに等しいだろう。誰もふり向かないからだ。こうして私に近い人ほど賀状や暑中見舞状では無視された形になっているように思える。県民の会の山川氏にきいてみると、印刷が少なかったからだろうなんて全く理由にならぬ釈明はする。事実県民の会は開店休業に等しいOBのたまり場にすぎないようだ。「革新」のこの頃の姿である。

8月23日(火)

福岡第一高校の戦勝パレード

福岡第一高校が帰福して市内は歓迎祝福の気にあふれた。天神あたりも沸いただろうが高宮の学校周辺も沸いていた。朝日新聞のマークの旗のれんが沿道に飾られ、選手団はくぐり抜けるようにして母校に到着した。六時半だった。若者たちがキャッキョウ声をあげてよろこんだ。これだけのブームを呼んだのだから優勝だったら、この何倍もの沸きになっていたにちがいない。準優勝でも何ら劣るところのない決勝戦だったと思う。これだけ沸かしたことが何よりもその功労の程を証明している。学校にとっても、市、県にとっても

大きな功労があったといえるだろう。人々が沸くだけで事は十分だといえる。よくやった、ごくろうさん、ありがとうの連発である。校長、理事長その他学校関係者のよろこびは大変なものだ。一躍有名校になったのだから。歓迎の生徒たちを見ていると、若い若い。無邪気そのものに見えた。キャッチャー土屋君がギブスをはめて列にいた。痛々しい。このケガがなかったら、優勝していたに違いないと思うと残念でならない。

8月24日（水）

終戦、敗戦という言葉の響きと違う終焉

夜おそく帰って縁側の戸を開け、横臥すると、もう秋の虫の音が盛んにきこえてきた。暑い暑いといっているうちに、もうそんなになっている。網戸から涼気すら入ってくる。そういえば、この数日、クーラーなしに、窓も締めて寝ても別に寝苦しいというほどではなくなっている。人の世常ならず、虫の音の頃かわらずということだろう。ここ一週間ほど車の中で、「墨場必携」を一とおり目を通し、よさそうなのに印をつけた。その間「昭和万葉集前書集」を放っておいたのだが、宮崎川南の川越さんからひょっこり手紙が来て、又今日からこの「前書集」を車の中で読む動機となった。北からずーとさがって今日は広島県に来た。やはり原爆関連の記事が多く、むごかったことが想起される。「終戦」という言葉は余りにも不適切で、惨敗の終焉というしかない八月十五日である。「敗戦」という冷やかな表現でも不適切である。手も足も出ない終焉なのである。

8月25日（木）

全く無駄な意地っぱり

二十年三月の東京大空襲で事実戦争は終っていたと思う。あれから五ヵ月単に大消耗がつづいた。賢明な指導者ならドイツより先に降伏したであろう。だのにあとは盲目的な抵抗を叫びつづけた。木製飛行機を作ってみたり、上陸を予期しての戦車への爆弾をかかえた突撃を訓練したり、松根油を掘りまわったり、横穴を掘って奇襲を考えたり、ありえない想定ばかりに骨折っていた。米軍は次から次への都市工場、交通網（機関）の爆撃と機銃掃射を拡大していった。国民は学校を工場・病院に改造して最後の抵抗と被害犠牲者処理に奔走した。肉身さがし、屍体処理、負傷者介護だけを考えても想像を絶する労役であり、とても抗戦の段ではない。食物もほとんど枯渇していた。もう一ヵ月降伏が早かったら、二ヵ月早かったらと誰しも考える。五ヵ月以上無駄骨を折っていたのは明かだ。

8月26日（金）

疲労蓄積とみる

頭の中に霞がかかったような毎日である。それが今日は少しまじらうかと思ってみる。睡眠が思うようにとれないためとは思いますが、今日は羽田から帰りの機内で思わず少し眠っ

たようだ。近頃多忙すぎるので生活の不満も続いている。帰ってから夜の十時からでも「ひながな」の毛筆練習をやろうとした何ヵ月か前の気力がうそのように思える。昨日は点滴のついでに検診で、リウマチに関する数値が正常者の十倍も高いと検出され、小川院長がどうかないかと問診。その事なら、何年も前から両手の何本かの指の関節を横からおさえると痛いと感じる指が何本かあること、又右上膊に若干筋肉痛があると答えたが、それだけでどうとは判断されぬ模様だった。マッサージがいいといわれたが、それができるほどゆとりのある身上ではない。ハリ、キューはときいてみたが、快い返答は出なかった。いずれにせよ、横になって、両手、両足をぐっと伸ばしてくつろぐことで回復をはかるのが最善とのこと。

8月27日（土）

東京都人会青年部との対話

東京福岡県人会青年部を相手に「知事との対話」事業がふくおか会館で行われ、私が最初二〇分ほど基調の話をしたのだが、若い人達だけに大いに福岡のことに注目の姿勢をもっていることを表明してくれた。私は技術立県と国際化でもって全国八～九位の県勢を維持していきたいということを強調し、東京と福岡の情報発信及び受信の立場の違いを十分知った上で今後は福岡からの発信機能を高めたいと付言した。こうした基調は参加者に強い感銘を与えたようだ。又、知事が福岡を売り込みに東京に来て若者と心おきなく話合ってくれたとよろこんでくれた。来年の春には西武デパートで「大ふくおか展」を予定しているが、この青年部の人達も一役買ってくれそうだという。東京にいて、郷土ふくおかの名があがることは大変うれしいとの気持を率直にあらわしていた。感銘深い行事だったとのこと。

8月28日（日）

埼玉大宮のソニックシティをみる

夜六時から福岡で上杉昌也氏らのチャリティゴルフ前夜祭に出席しなければならないので、朝から福岡へ帰っても中途半端だからというので、埼玉県の大宮駅前にあるソニックシティを見学する日程を入れた。三二階のメインビルをはさんでピアノ型のシティホール、パレスホテルの三点セットになっている。県、日本生命が主体になっている。福岡県庁跡地の開発の参考にとの趣旨での見学だったが、福岡の場合はビルの高さ制限で、そして利用敷地面積でも、埼玉の半分しか可能性がない。同じものを作ったとしたら四分の一になってしまうのではないかと思った。ソニックシティはそれほど大きい。イベント広場もある。参考にはなるがとても真似はできそうにない。埼玉のシンボルとしてこの四月にオープンしたとのことだが、福岡のもシンボルになるようなものと私がいいつづけたことに、冷汗が出る思いだった。ただ、この施設がこの規模で採算にのるには、大宮の位置上の魅

力がよほど宣伝されねばならないだろうと思う。利用者は予想外に多いとはいう。

8月29日（月）

南海ホークスの誘致について

昨日の各紙（スポーツ紙含めて）福岡に今の南海ホークスを誘致する話が大きく報道され、明日の定例記者会見をにらんで、広報室あたりが問題視していた。ダイエーが南海を買収する話があり、明年からの実現に動いているという。一説に一〇〇億円ともいう。売る側、買う側双方とも、これを否定する発言をしている記事の内容である。「誘致市民会議」が既に地下鉄の壁などにその記事の基になるようなポスターをでかでか貼った事も確かだ。東京に行っていて留守中の事だが、桑原市長は関知しないと発言しているらしい。私はそれほど冷淡に発言したくない。多方面にわたる合意、中でも諸条件の詰めが何もできてないのに、運動の方向を掴んだだけの記事だから、当の南海の選手の言い分のように、感じが悪いと思う人すらあるだろう。南海について、そうした噂が出るほどの事実が潜行していた事はいなめない。

8月30日（火）

プロ野球団誘致の意味

定例記者会見ではプロ野球の誘致についてコメントが求められ、「歓迎」「積極的協力」との態度を明白に表明したが、加えて、十年余前にライオンズが西武に引きとられる時に行政が冷淡だった点にふれ、今日は「意味が違う」と前置して、プロ野球は一種の企業誘致のつもりで対応していくと説明した。余暇、レジャーを対象とした三次産業が叫ばれるようになった。「働き蜂」の異名をうけている日本の円高、これに対応するためにも労働時間の短縮は表面、日本の対外の看板になっている。それに対して余暇レジャー施設が貧弱である。オーケストラが外国から来るとき、絵画展が巡回するとき、プロ大相撲、等々、福岡は全国でも一〇指に入る土地柄なのに、プロ野球が一球団ぐらいあってもいいし、行政の県民市民の余暇対策としてはこれの誘致に取り組む任務が当然に生じてくる。今日の記者会見はこのことを強調した。

8月31日（水）

啓二一家のこと

沙理が昨日フィンランドから帰国したが、日本語を忘れてしまっていると啓二がいつているようだ。すぐおぼえるし、又フィンランド語もすぐ忘れるだろう。柔軟そのものに違いない。この夏は、ライヤのフィンランドゆきも現地で北九州市長の旅行に通訳の役をはたしえたので、ついでながらよかったと思う。東京の地価、家賃の高騰する中でやっているのだが、定収入のない位置にあって生活も容易でないと思うが、自分で工夫をこらしなが

ら彼等なりによくやっている。もちろん、前から私がいっているように、親子関係というものは、人間も動物とかわりなくなってきたり、一人前になるとそれぞれ別々になってしまう。ある意味ではそう心に留めなくては行けないだろう。今日和歌山の亡兄の一七回忌法事へのみゆきの出席の返事をしたが、彼女はついでに佐方に寄って母を見てこようといっている。

【「9月の予定」欄への記載】

毎日が県の仕事のルーティンワークめいていて、これといって書くことないとき、私の精神栄養補給は、近頃、嘗つての戦友高木二郎氏が送ってくれた「昭和万葉俳句前書集」が主たるものといってよい状況である。九月はじめ、やっと福岡県のところまで読み来った。

(九月二十三日)

天皇の容態が十九日夜から悪くなり、二十日には上京、見舞記帳をした。前からよくないことが一般的に知られており、丁度一年前に開腹手術がなされたのだが、そのあとだけに重態であること明かである。ソウルオリンピック最中だが、報道陣は大忙しで、むしろ天皇の容態の方に神経をとぎすましている。二十二日に又上京したが東京といわず、一般にお祭りの騒ぎになる行事は中止され、霞が関界隈は静まりかえっている。自民党、政府筋は足止めになった要人が多い。県内で見舞記帳を始めた所も多くなった。

二十八日の早朝かなりひどい左腹の痛みで呻吟した。次の日診断に行ったが、とくに対応はしなくて、小康をえている。体調不安なこの頃である。-

9月1日(木)

玉砕、体当たりという戦術(昭和万葉俳句前書集をよみつつ思ったこと)
戦争の終り頃の絶望的状况の中で継戦思想が根強く、無謀な抗戦を指導していた中で、体当たり特攻というのがあった。肉弾三勇士というのは、まだ勝っていた頃のことだから別として、それに似た戦術が終り頃に、大まじめに訓練の中に取り入れられていたのである。上陸して来る敵の戦車に爆弾を抱えて突込むとか、人間魚雷とか、類似の舟艇の建造訓練、飛行機による体当たりとかがそれである。戦車の魚雷のことなどほとんどないことだし、飛行機も敵機に近づくまでに撃墜されてしまうばかりであった。すべてまともな頭で考えうることはないのに、その頃の人ほとんどが信じきっていたのだから不思議である。負けが明らかになってくればくるほどその途をつき進んだ。狂信というか、狂走というか、それが日本人の心のどこかにある。今でもあるかも知れないと思うと恐ろしくなる。一時のことであったといえることを願うのである。

9月2日（金）

ダイエーに名を成さしめてはならないとの福博業界

プロ野球誘致の問題については、知事はこれ以上深入りした発言は控えてほしいと秘書室永田室長がいう。桑原市長のわざとノーコメントでつっぱねている。末吉北九市長は歓迎とっている。問題の中心にあるダイエーは考えてないといい。当の南海球団関係者はシーズン中なのに不愉快な話という。表も裏もあつてのことではあるが、福博財界にドロドロした確執が見えかくれする。岩田屋、玉屋の筋から桑原市長に、押すなら次の選挙に反対するといわれたとか。市は百道の埋立地博覧会跡地を球場建設地に早く売りたい立場にあるともいわれる。ダイエーは西武と流通界で福岡周辺を含め激戦を展開しており、西武はダイエーが球団を持ってPRを有利にすることを嫌っており、岩田屋、玉屋と共同戦線にあるといわれている。今日の三光園での報道責任者との懇談会では、シーズン中にこんな話が大きく報道されるようでは、潰されることになろうとの観測がもたらされていた。

9月3日（土）

子供のための余暇を論ずべきだ

国立夜須高原少年自然の家の開所式に行った。中島文部大臣ほか社会教育局長も来所したし、三原・瀬戸山元文相も来所した。そのほかOBとしては高石次官も来た。六月に辞任して次期衆院選に向け郷里の三橋で運動に取り組んでいるのが高石氏である。衆院の山崎、太田、参院の遠藤、渡辺の顔も見えた。県では十年來の願望がかなえられたわけで、国立の少年自然の家は十一箇所目という。佐賀、熊本、大分の各県もこれがカバーするらしい。子供達から自然が日増しに遠ざかっていく昨今であるから、この「家」の発足の意義は大きい。それだけに、もっともっと多く建設が進められることと、こうした施設を利用する子供がぐっとふえることが望ましい。そのためにも子供にチャンスを与える社会状況が期待される。レジャーは大人のために論じられるが、子供のためにも論じられなくてはならないのではないか。

9月4日（日）

何が自然かをよく考えて「自然の家」を使う必要がある

子供の頃は山猿にも似て、山川草木鳥虫何でも日常の環境であった。それを思うと今の子には全くそれがない。昨日瀬戸山元文相は「自然の家」の開所式のときの祝辞の中で、こうした自然が子供時代に欠けてはならないと強調していたが、平凡なことのようで肝要なことだと思った（瀬戸山氏は八十八歳だといっていた）よくも悪くも自然を体験することである。今の子は部活動や旅行などわれわれが狭い範囲でしか体験しなかった自然を大きな洗練された形で体験している。それでいいかどうかだ。スキー、スケート、球技などのスポーツをはじめ、多方面にわたる旅行による見聞はわれわれの子供の時の比ではない。

しかし、ナマの自然があまりにも少い。昨日は「自然の家」にいう「自然」とは何かいなと考えてみて一寸わからなくなった。ハエ、ノミ、蚊、ヘビ、トカゲ、ネズミ、川魚、海のサカナあれこれ、台風、洪水、水族館に行くとかたくさん見られる、望遠鏡で天体を見る……何が自然か。

9月5日(月)

夏草茂る

夕方、大塚福知事らハワイ・ロス訪問団見送りに行つての途中感じたのだが、空港周辺の道路敷など夏草が伸び放題に伸び、所によっては低い植込みを全部隠してしまっている所が目立つので、管理責任者が何とか雑草除去をすべきだということである。ハードとソフトに分けると後者に当るが、これに予算を使わないのが今の日本の通弊となっている。福岡市、福岡県、感覚の欠如が不思議でならない。ボランティアとか高齢者雇用の途はあるはずである。方面をかえて、昨日の大牟田ゆきの縦貫道筑後方面での悲しい情景、それは両脇の雑草に枯死剤をふりかけ、草刈り代わりとしていることだ。五〇センチ、一メートルの高さに茂った雑草が延々と枯死して褐色が部分的に細い帯状をなしている。これなら何もしないで「夏草茂る」にまかせた方が余程情緒があるといいたい。これ又感覚の欠如といわずして何であろうか。カネ余り時代というのに。

9月6日(火)

放射能測定をできるようにしたい

記者会見で私が放射能検定器を県としても検討したい旨、記者の質問に答えたら、早速夕刊でそれが記事になった。この夏玄海原発で冷却水漏れのことがあり、反原発グループから県への要請もあり、県議会の質問にも取りあげられ、この程改めて市民グループ(含大町たき子氏)から、その後、国や九電との交渉はどうなっているのか善処してほしいとの要望があり、それにこたえて、国、九電には引きつづき知事から要望するが、放射能の独自検出も試みたいと発言したのをとらえて、今日の記者質問となったのである。九電は中央の原子力安全委員会の指導の線で、佐賀県及び玄海をふくむ八〜一〇キロメートルの圏内とは通報をふくむ協定を結んでいるが、福岡県の自治体にはその必要はないし、安全は確言できるとして、県からの善処要望には冷やかにしか対応していないのが現状。したがって県は二丈町など一八キロメートルはなれていても西風の場合、安全とはいきれないから、離れ具合の見直しを含め、住民の立場を尊重するよう主張している。九電の腰は重い。が測定器をもつことは県として自由だとの立場をいったのである。

9月7日(水)

皇室のものは誰のものだろうか

ニューオータニでの午餐会、これは三笠宮、通称ヒゲの殿下寛仁親王を迎えての毎日新聞事業部、岩田屋中牟田会長、社長の皆さんの同席で、私は日赤福岡支部長という立場。「皇室の国際親善特別展」が毎日側の主催で岩田屋八階での開会式があつてのことである。入場料など益金はチャリティで日赤支部に寄贈という趣旨である。陳列されたのは明治以来のもので、外国からの勲章その他の贈り物であつた。あとで思ったのだが、……誰が、どこから贈られたのかは別として、この種のもの結局は博物館にいくしかなく、誰が誰に譲渡するとか売買できるようなものではないということだ。筋は全く違うが、たとえばわが家のものでも、子等に譲れるかといえは否であろう。受け取るまい。つまらんものでもそうだのに、「皇室の……」となると尚更だろうと思う。立派なものであればあるだけ、それは国のものであり、国民の宝というべきものであろう。天皇の身の廻り品など、どういうことになっていて、将来どうなるのであろうか。

9月8日（木）

朝鮮に対する日本の支配の崩壊の時の模様

昭和萬葉俳句前書集を尺取虫のように読みつづけていえるが、今日は南鮮から北鮮の部分に入った。終戦近くなると日本軍が「本土決戦」の名のもとに大陸から国内へ急速に戦線を縮小してくる様子が読み取れるのと、敗戦の情報は朝鮮人の方が早くつかみ行動にあらわす。日本人は天皇の言葉をきいてもなお信じないでいるのと対照的。それどころか、朝鮮人は直ちに万歳を叫び、在鮮の日鮮両民族の立場が逆転する。彼らは旗をかくして持っていたのではないかと思われる程、すばやく自分らの旗をかかげて騒然となり、日本の秩序はたちどころに崩壊する。ただし、朝鮮人は日本人に対してかなり寛大ですらあつた。又日本人は取返して支配を維持しようと努力しなかつた。いずれもよかったと思うし、「植民地的支配」の崩壊をよく理解していたともいえる。こうした「万葉集」あればこそその模様が記録に止め他に知らせるのであることを改めて思うのである。

9月9日（金）

また、睡眠不足を思う

夕方県民の会の要請で機関紙グリーン 21C 用写真撮影に応じていたら、カメラマンが、元気がないので、よりほがらかな顔をポーズしてほしいという。一寸反撥を感じたが、注文する方が当たり前なのかも知れない。依然として眠れないし、近頃咳が一寸でて異様を感じさえする咽喉である。何回も同じようなことを書くのだが、眠れないのが不思議でならない。いら立ちも心配事もないし、睡眠のための時間が足りないのでもない。考えごとがあつてのことでもない。気付いてよなかに起き上がって、眠ってないことを知る。時間をいくらでも無駄づかいしている。ひるまはぼんやりし、ひとの話をきく位置にあると居眠りすらする。いいようも他にあるかも知れないが、いわば終末感すら覚える。何とか頭をす

つきりさせたい。それには眠るしかない。だのによく眠れない。運動不足といえはいえるが、解決方法にはわかにはない。ゆたっと、ぼんやりとの時間がとれたらと思うが貧乏症なのか、何かをすることになる。

9月10日(土)

親と子の関係の変化

ブラジル日本移民八〇年祭に出席した県職の若いお父さんが子供に、お土産は何がいいかと問うと、その子は「日本円」がいいといったという。多分中学校ぐらいの子だろうと思うが日本円という言葉を知っていたのが第一の驚きであるが、日本の現状をいいえて妙な表現であることが第二の驚きである。子供の発想がブラジルに届かないこともあるだろうが、まずさしあたっては物は何も欲しくない(物余り現象)という心情があるだろう。では、カネはというと、カネ余り現象とはいえ、子供達には自分に自由になるカネはいくらでも欲しいのである。しかし物ならば、何年にブラジルから買って来てくれたという親子の物的愛情の証が残るであろうが、カネならそれという形には残り難い。子供は今、親の愛情をそうした形で求めているようである。そらおそろしいような感じがしてならない。扶養関係や相続関係、物を介した親子関係が今急速にかわりつつある。

9月11日(日)

草取りしながら思う

裏庭や玄関進入通路の草抜きをした。夏になって二度目である。雑草は無限といえるほど、次々に出てくる。抜いていて次の雑草がつづいていることがよくわかる。それには手が及ばない。何日か後にまた生い茂るであろうと思いつつ、できるだけ小さなものまで抜きとる。執念のようなものを自覚しつつそれをする。そして雑草が次々に生えてくるのは自然の理であることを自分にいい聞かせるように黙ってかみしめ乍ら抜く。この作業、しかし、ただけの甲斐あってかえりみれば気持よくなっている。放置しておいてもそう変わらないだろうに、草抜きするのは自己満足である。芝生、コケ以外は雑草とみて抜き取る。自分勝手にそう決めている。義務感があってしているのではない。書いたり読んだりの余り時間にそうする。蚊がすぐとんで来て足や顔に止まる。追い払う。たたかれても潰されても次々に攻めてくる。雑草と同じである。

9月12日(月)

平和の有難さ

第18富士山丸の紅粉、栗浦の二人が北鮮に捕えられてから四年十ヵ月になるが、このほど社会党山口書記長が向うに行って、この問題につき折衝、政府もソウルオリンピック直前の十六日にも北鮮に対する制裁措置を解除し、二人の問題につき交渉に応じていいとの見

解を示したので、栗浦さんの奥さんについていろいろ配慮した県としてどう思うか、という事で特別の記者会見になった。私は今「八月十五日」を詠う句集前書集を読んでいるが、国内篇を終り国外篇のうち中部満州の部まで読み進んでいるので思うのだが、この二人の船員の人權と家族への配慮、記者の関心の程を考えあわせると、人を虫けらのように「国のため」に犠牲にしてきたあの戦争当時とくらべ、今日は何と平和であり、民主主義が高まったことかと驚くのである。戦争の非人道性とくらべ、二人の船員にこれほど行政も世論も動かされる平和の浸透の有難さは考えてみて不思議。

9月13日（火）

竹井、井手で仕組んだ奥田攻撃

さてどれほどの効果か。一寸もいい感じのしない井手。びっくりするほど妙な井手。これを選出する小郡の人は偉い？

共産党の高県議が県政懇のあとで、寄って来て、カッとなるなという。国博誘致の県議会特別委で九州全域の国会議員（自民党）の招集をかけた時、私が行ってなかったのも、福岡の知事がなぜ来ぬかという人があったようで、そのモトを確かめたら竹井教育長が奥田は呼ぶまいという線で計画した会だったそうで、小郡の井手宗夫がそれをつつこうとしたら元凶が竹井だったので、そのお鉢を「新幹線の順位決定にも奥田は出て来なかった。そういう事で国博誘致に他県の協力はえられない。何と心得ているか」との質問に井手はスリ替え、特別委に知事出てこいという事となり、出席すると、井手の質問は私をこきおろす事に焦点をあて、他県の自民議員が新幹線の時に出てこないくせに国博誘致に協力せよとは何事かといったという論法で私を責め立てた、委員長は太宰府の吉塚、竹井は九州の国会議員を集めることを知事部局に秘していたのである。しかけスモウだ。

9月14日（水）

南海買収問題と福博財界

ダイエーも南海も株価急上昇といわれる。買収は真か否かというよりは株がリードか同時反応か、というか株の反応はうわさどころか、きわめて敏感である。南海株がどうして上がるかといえば、赤字の球団を手放したというよりは、難波球場跡の開発利益に買手の目が注がれたためようだ。他方ダイエーは西武を流通業界で一步抜いたということで好感をもたれたようである。皆さとい、驚くほどである。福岡の業界はこれを冷い目で見て思うように思う。ダイエーの名が上がると、自分のところがさびれるのではないかと、思うらしい。岩田屋、大丸、玉屋など大手小売業は桑原市長にダイエーの南海買収劇に反撥の意向を伝えたという。桑原も票にかかわるとあれば躊躇する。そんな雰囲気は市内をサッと流れたのは事実。共存共栄という考えで臨んだ方がいいのではないかと、ダイエーでなくとも財界が一步出てくれればよかったのに。

9月15日（木）

敬老の日

福岡市ばかりではいけないと私がいったので、今日は福岡市と久留米市の二人の一〇〇歳のうちにお祝いに行った。早良区の下司さん安武の大久保さん、そして久留米では午後市民会館で敬老大会が開かれたのでこれにも参加し表彰状渡しもした。高齢化は進んでいく。男七五、女八一という。百歳以上の人もどんどんふえていく。高齢者が長生きしてよかったと思うようにするのが敬老というのであるが、家族や地域でその試みがあればこれ行なわれている。その例が新聞にあれば報道される近頃である。だが、実際は「よかった」と思ってもらうには距離があるようだ。報道されている限りはよいのだが、どこでも、誰にとってもそうだとはいえない。私は「薄い」との感想である。こうした事例が幾重にも上塗りされるようにならないといけないだろう。どこでも誰でもにならないだろう。行政への反応がまだまだ弱いからそう思うのである。高齢者問題はこれからといえるだろう。

9月16日（金）

まだ元気なうちに死ねるならいいが

敬老の日は、それで万事結構だと思う。が新聞の社説ではこういう日の感動を年中持続すべきだとか、一年中敬老の日とせよとか書いてある。これまたそれ自体結構な主張であろうと思う。しかし、自分自身どうかとなると一寸考えさせられる。敬老の対象は六十五歳以上でなく、一般には七十五歳以上となっている。矍鑠たる人は少ないであろうが、多くの人は老衰していく。介護を要する人、介護なしには食も便通も、立つこともできない人はほんとうに多い。養老院に時に行くが、見るも気の毒な人が少ないことがわかる。「寝たきり老人」というのは欧米では見られず、何らかの用具が工夫されて横にならずに生活を保つように皆んなでしてやるようになっているから、日本の対応のおくれを表現するのだそうだ。それにしても、自分自身、もしそうなったらと考えると、今はゾーッとする。元気なうちに死を迎えることの幸せという事を考えてもいいのではないか。

9月17日（土）

儀式好きの日本人

儀式・パーティの好きな日本人ということがいえるのではないだろうか。それもとくに政治的な側面をもつ場合に、今の私の立場からそういえる。今日は福岡市議の高松光俊氏の市議七期二五年表彰の祝賀パーティがグランドホテルで正午から開かれた。市からも農林大臣からも受賞したとのこと。別に高松氏がどうのこうのというのではない。一般にそういうことが多いということである。それも、祝辞をのべ、本人の謝辞があり、かれこれ一時間は儀式にかかり、鏡割りの儀、祝宴となるが、同じ舞台はこんどは出し物、博多にち

なんだ舞踊が行われる。国会議員や県会議員、市会議員の顔も多く見られ、弁舌もきかれるが、祝宴が始まるころにはほとんど姿を消してしまう。帰りには紙袋入りの手土産が渡され、受付者も忙しそう。あそこでもここでも、この種儀式が多い。ホテルなどこれで益金がふえるという。欧米流に簡素化はできると思うのだが。

9月18日（日）

上岡亀弘氏宅に立寄る

鞍手での六ヶ岳を考える会との「対話のつどい」からの帰り、篠栗の上岡さんの家に寄り、若杉山麓に作っている研修所に案内され、一家と語りつつごちそうになり、ススキを切ってもらって書齋に生けた。実に秋らしい空気になった。中秋の名月にはあと一週間はあまる。弘二君に「昇龍」と書いた扁額を贈ったのだが（条幅用の揮毫のみ）、よろこんでくれた。二歳ほどの子ができてはしゃいでいた。実によく訓練された弘二君だと思ったのは、几帳面に暑中見舞を夫婦子の写真入りで送ってくれたし、今日も刺身テーブルをかこんでいる時私の横にいて、ティッシュペーパーを、私が使った度ごとに、じっと見ていて、サッと新しいのを取り代えるという気のきかせようである。上岡氏は「一〇人の子を育てる親を見つけるのはかんたんだが、親を面倒見る子を見つけるのは難しい」という言葉がある」といったが（誰の言葉だろう）、弘二君はそれだと思われた。

9月19日（月）

虫の音涼し

食後はできるだけ横になるよう医師からすすめられているので、休みの今日は実行した。ねむられないのは相かわらず。反面、いろいろな音がきこえる。悪いのから並べよう。チリ紙交換、下のマンションの出入り車の音、上の道で車のふかす音、車のクラクション、うちのテレビ、それに対し、自然のものはいい。雨の音、山鳩、コオロギ、鈴虫、どれもいいが鈴虫は涼しい感じだしかわいい。今年のかえしそこねて家で飼ってないが、家の周辺でいくらかでも鳴いている。ところで、虫の命はどうして短いのだろうか。春にかえって冬になる前に死んでしまう。どこにそうなる仕組みがあるのだろうか。虫の音をきいていると、人間のいのちがそれに集約されているようにも思える。命の長短といっても大きな自然からみれば大同小異であろう。虫と人間だけでなく、人間のあいだでもそうではないだろうか。まだ読みつづけている「昭和万葉俳句集」ではあるが、四十三年前に戦争で殺された人の事を思う。

9月20日（火）

天皇見舞記帳

午後は東京への往復。トンボ返りのあわただしさであった。天皇陛下の容態が大変悪いと

いうので、見舞に行くことになった。午後になって、知事本人なら OK という制限解除が宮内庁から出たから急遽いくことになった次第。二時半に出発して九時帰宅という動き。東京はいつもより車の渋滞がひどかった。東京事務所前にも報道の車がずらりと並んでいた。乾門から入り北車寄せで見舞記帳するというだけのことである。もし容態悪化なら宿泊もありうるということであったが「小康」というので帰福した。左翼というか、そのあたりから「何故行くのか」「戦犯じゃないか」の声もあるが、そこは耳をふさいでいるしかないと思った。ほとんどの人が初経験だから、上から下へというか、誰も彼もどう対応してよいか迷っている。これなら、とすることをするしかない。政府も国会もとまどっているらしい。天皇は吐血がひどく一〇〇〇C.C.の輸血という。臍臓あたりの、去年のガン手術の後遺症が悪化したようだ。

9月21日(水)

依然調子が悪い

九月議会開会で提案理由説明のとき何箇所か読みまちがった。気付いて言い直したところ以外にもあったようだ。どうかしていると自分でも思うし、民生部長が疲れているのではないかという。相かわらず眠れない。又右肩の筋肉痛がつづいていて感じが悪い。読み違いも、さもありなんといえるコンディションである。今日も一日中キリキリ舞いの日程の詰まりよう。少し間引いてほしい。帰途済生会病院で検診と点滴を受けたが、血糖二五二、尿糖プラス三、血糖はこの空腹状態であるのに、異常に高いという診断である。中食が過度という訳でもないし、間食や砂糖を使ったコーヒー、ジュースの類を摂取したわけでもないのにこれである。夜、中西忍君からの電話で、次期知事選に出るなどの彼の忠告、尤もなことである。次々と用件が転り込んできて避けられない状態がつづいている。曲乗りのようなことすらしなければならない。十二時間労働なんてざらにある。それに休務といっても自分で仕事を作ってしまう気性がよくないと思う。

9月22日(木)

味わった孤独のよさ

ふくおか会館で夕食、チェックインして入浴。シャワーばかりつづいたので入浴は久しぶり。ベッドの上に二〇分、裸体のまま横になり目をつむった。テレビも見まい。電話もかけまい。誰も訪ねてこないことを望み、ひたすら孤独のよさを味わう。ひとりぼっち。誰とも語りたくない。触れたくもない。何だか人権の原点を考えなおしているような気がした。誰もが私のことを考えてないだろうから、これこそが自由である。平素こういう時間がもっとほしい。他とのかかわりは自から求めて、他の方が快く応じてくれる限りにおいて OK である。又その逆もである。そういう状況にありたいなと思う。午後八時ほんの二〇分余ではあったが、ベッドの上でほんとうの自分を再発見したような気がした。こんな

にいい気持になったことはない。外の音も聞えない。温度も秋分の日を迎えて最適。テレビなんか聞きたくない。静かな孤独な時間が過ぎてゆく。何時間かこのような状態で経過したい。

9月23日（金）

大ふくおか展は可能か

西武池袋デパート山崎社長を訪問し、来春に予定している「大ふくおか展」への協力に謝意を表明し、店内主要部分を案内してもらった。予想していたよりはるかに広大だし、客もぎっしり押すな押すなで驚いた。さすが東京で構造も品物もドギモ抜かれるような感じで、果たして「大ふくおか・・・」という「大」が通用するかどうか、「大」といえるものになしうるか否かが心配になってきた。七Fか八Fで北海道物産展が行われていたが、十何回目とか、押すな押すなの賑わいである。私は北海道に匹敵するのはやはり九州で、福岡ではないといったのだが、北海道にはそれだけの特徴あるイメージ作りが可能であるが、「福岡」でそれが可能かどうか。だからといって「九州」は一つにはなれないのが残念である。「九州展」ができるなら上々だが、熊本や大分は「われこそは」と主張するだろう。「九州は一つ」というが「九州は一つ一つ」と皮肉る人がいるくらいである。「大ふくおか展」の実行に責任をもつ大石課長も同行していたので、西武を出るとき「おい、大丈夫か」と肩を叩いた程である。いろいろあらん限り工夫して実行に移してほしい。

9月24日（土）

自分の力で地域づくりをしようという人たちのあつまり

雨の中、吉井と大牟田に行った。前者は農業、後者は石炭ということで住民がたち上がるうとしている。米作は減反と米価引下げ、米の輸入自由化圧力、それに耳納山麓土地改良事業の負担増という何重もの問題がふりかかっている。農業者達は米に代えて緑化木の苗作りに挑戦しているし、食糧の自給力向上に努力している。公共事業に関連した灌木類の苗作りは将来に向けても望みはもてるし、若者達もはりきっている。食糧の自給率向上をねらう農産物加工については流通段階に一工夫も二工夫も加えないとうまくいかないのではないか。米の輸入自由化については今の政府がどこまで頑張ってくれるかに大きな関所がある。アメリカの押しの強さに負けたら大変なことになる。大牟田市職労のマチづくり集会は、石炭の将来がいぜん暗いだけに、難関突破にはまだあと何年かの試練をこえなければならぬはずだ。市職労が先頭に立ってくれることはよいことだ。自治研の形で取り組んでいる。

9月25日（日）

異様な日曜日

雨の日曜まるまる休んだが、休まったとは思えなかった。何となく調子がよくない。休日とあって県庁には早くから多くの人が天皇見舞記帳につめかけ、一万人をこえるだろうといわれた。それだけに、秘書室は大そう忙しかつたらしい。私も自宅待機の気持での在宅だったが、天皇陛下の容体は昨日より好転で、一応安心しての待機ではあった。コウ・テンリム氏が夕方雨の中を来訪してきたが、彼も県庁に記帳に行ったとのことだった。彼がどんな気持かよくわからないが、平凡に理解していいだろうと思う。天皇の侍医団は昨日から下血防止に全力をつくしているとのことである。体温三六・九、脈拍八一、血圧一五四～八〇、呼吸二一、今日だけで四〇〇CCの輸血という容体発表で、これらの数値は昨日より良い方向で、動きも安定である。皇室筋、政府筋の動きもあわたたしさが静まっている。テレビなど報道陣がこの関係でずい分時間とエネルギーをさいていて、オリンピック以上といえよう。秘書室の職員が動員されたように、国民の気持も大きく傾いていた。

9月26日(月)

前知事亀井光氏を偲ぶ会(三回忌)について

前知事亀井光氏を偲ぶ会が二時からスター・レーンで開かれた。永倉三郎氏が実行委員長として表面に出たが、他はうしろにひかえた形になった。県庁OBの間では、この会を次期知事候補かつき出しの盛りあがりの契機としようとの動きもあったようだが、これも押えられたらしい。二〇〇〇人も人が集ったので、これを機にこの動きが出てくるのかも知れない。それはそれとして、まずは率直に三回忌として受けとっておいていいだろう。報道陣が私に集中して、感想を求めてきたが、平凡に答えておいた。左からの不当呼ばわりも、次期ねらいの策謀もそれなりにありうることとして受け止めておけばよい。県や市町村が行政の立場で、公的役割りをもって関与するのは不当だから「ひげ」と共産党から注文をうけたので、なるべく、ひいた形でこの会がもたれたといってもよい。ただ、こうした「偲ぶ会」をすることによって、私の亀井氏への、又亀井氏側から私への「怨念」のようなものが多少なりとも、これを機に払拭されるならいいことだと思うのである。

9月27日(火)

教育会館跡地処分について

教育会館跡地をいつ、どこに、単価いくらで売り、代金は何に使うつもりかと代表質問の自民吉村元秀氏がきいてきた。まだきめてはいないし、話があれこれ取沙汰されている時に公の場でいえるものではないのに、金額まできいてきた。もう半年といわぬ以前に、社会助信や農政関の両氏が処分先とみなされるNTTには絶対反対の声をあげていたのが思い出されるが、この線でいこうという議員とそれに反撥(政治的意味で)する議員が対抗している点につき、今日西鉄労組大会に出席のため同道した林県議からかなり裏話としての詳細をきくことができた。利害には群がる議員族である。だから正面から質問されても答

えられないし、質問する議員は利害の中に立ち入ることができてない人のようだし、利害のある人に相手にもされてない人、耳打ちもされてない人のようでもある。いすれにしろ、私は、かなり傍観者的に推移を見守っておこう。

9月28日（水）

Xデーなるものが既に始まっている

もう一年といわぬ前からマスコミの一部にも X デーということがささやかれていた。天皇の病状悪化が大きく取り上げられてから十日目になる。その間、皇室、宮内庁、政府、議会その他いろんな動きがあった。私自身、そして県の議会も県庁も様々な関連する動きを演じた。報道の変化、社会的一般の行事中止等の動き、県民国民市民一人一人の動きには記帳や祈願やいろいろあった。外国人にも、その論評にもいろいろ反映された。私に宛てて抗議する団体もあった。しかし、私は、Xデーが単数でしかつかめてなかった。ところが実際は複数ですでに始まっている。それに今日はじめて気付いた。抗議の中には県庁玄関での記帳をやめよとの声もあった。二日目の代表質問の中で、各党の反応も代表的にあらわれた。最後の代表質問者共産党の高議員の登壇に至って爆発的な、質問封じになるような、議会の続行ができなくなる流会という事態が起ってしまったのだ。これが X デー（複数）の一齣であることに今日はじめて気がついた。

9月29日（木）

四点も五点も欠陥のある体調

今朝は腹痛はなかったが、前日のこともあり、病院に寄ってみてもらった。左腹の痛かったところは帯状疱疹と関係ないが、正常ではないとのこと。腸が騒々しく動いているようだ。糖、肝、それにこの腹痛、さらに自覚としては右うしろ首あたりが疱疹の時のような痛痒がありそうだ。右肩後の筋肉痛とともに、なんとも意気あがらぬ最近である。議会空転の間に一時間ほど横になったが、一寸眠ったみたい。こういう時間がとれるならいい。逆に、それほど弱体化しているともいえる。主観的に気力はそんなに衰えてないのだが、あちこち欠点をいわれると、そうかなということになる。食欲は十分にある。医師は中食をしなくてもいいということだが、それでは仕事がつづきそうにない。摂取量が過剰にならないようにといわれるので、それには気をくばっているつもりでいるが、取りすぎているのかも知れない。左右の母指と中指の爪が一寸形状がおかしいが、これは問題らしい。肩右後筋についても、リウマチ性と関係があるという。このように指摘箇所が多い。困ったものだ。

9月30日（金）

果物の魅力

あつという間に九月が過ぎた感じ。あちこちから果物をいただく。梨、ブドウ、それにイチジクも珍しい。どれも好きだし、どうみてもおいしい。正に味覚の秋。リンゴ、さらには柿が出てくる。果物を食べるのは何よりも楽しい。果糖は糖尿によくないと医師からいわれるのが悲しいが誘惑に負けそうだ。ハワイ、ブラジル、中国あたりも果物はよく賞味させてくれたし、近頃の身边には外国産の果物がバナナをトップにたくさんある。しかし、私は日本の秋の果物が一番おいしいと思う。イチゴ、スイカ、モモもいい。キウイフルーツも近頃は味に馴れたせいかわかるといえるようになってきた。しかし、平凡ながらブドウ、梨、リンゴがいい。柿もだ。食事の代用にしてもかまわない。幼い頃から山猿のように、これら果物に馴れて生活してきたせいだろうか。毎年渋柿の皮をむいての干柿づくりが又楽しい。去年は鎌水浮羽町長が、特別立派な渋柿を送ってきてくれ、楽しみを与えてくれたのに感謝している。何ともいえぬ干柿の味といえる。

【「10月の予定」欄への記載】

30日 天皇の容態少々悪いといわれる

10月1日(土)

松の実会に出席して思ったこと

夕方国際ホールで開かれている松の実会に出席した。九大女子学生のOBの会である。戦後間もない頃はチラホラしかいなかった女子学生も年をかさねるにつれてふえつづけ、法学部でも今は二四〇人の定員のうち女子が六〇人とか八〇人とかである。文学部はもっと多いし薬学部は男子がかげにかくれてしかみえない程であろう。昭和四〇年代に入った頃、女子学生亡国論が出現したのを思い出す。役に立たない女が国立大学の定員を犯しつづけるのは国費無駄づかいという意味である。その後も女子の比率は高まりつづけているのが実状である。亡国論はその後かげをひそめたが、平等論がそれを压したのと、女子が各方面に進出して活動している事実などによると思われる。今日、ますます女子のかげが大きくなっている。心配なのは家族の機能の変質と高齢化社会の進行である。一方では女子の家庭での役割が変化し、他方では新しい役割負担が求められつつあるということだ。行政の出番が求められる。

10月2日(日)

思い残すことが少くないこの頃

平かな、草書体など習字を重ねること、それと前から少しずつ書いている思い出の記録を少々面倒な紆回をしてでも書き次いでいくこと、その二つが近頃全くできないでいる。体調がよくないのが第一の原因だが、何の拍子かこの夏以来戦争の記録を読むのに時間を割いている。昭和萬葉句前書集は九〇〇ページあって、これに時間がかかり、一〇〇ページ

足らずがまだ残っている。これがすんだら他にもたくさんある戦争記録はできるだけ読みたいと思う。これが近頃の心境である。考えてみると、大学生だったら、学徒動員、幹部候補生だったり、戦争の体験に乏しい身だったことをひしひしと感じているからであろう。つまり、苛烈なあの戦争で、むしろ他の人よりも苦勞の少ない場に居つづけたことが近頃わかって来たのである。習字をしたり、思い出の記録を綴ったりすると、他の人達がなめた戦争体験を理解すると、どちらが大切なんだろうか。

10月3日（月）

月下美人を賞でる

今夜一せいに、うちの月下美人が咲くだろうというので、一日で終わった一般質問のあと足輕るに帰宅し、秘書室の者中心に鑑賞に来る人達を待った。高原氏の采配でモツ料理二鍋分が準備され、十数人が駆けつけ、前の家二室を使つての宴会となった。十輪ほどが咲いた。昨日の三輪、残つた一輪であったが、夜の八時頃から開花はじめ十一時頃には満開になった。近所の奥さん達も予約があつたらと九時頃に五人ばかり来訪され、一しよに、わいわいいながらの鑑賞会となった。金木犀も咲いていて、涼しさも程々に、ほんとうにくつろいだ一夜となった。みんな花の美しさに見とれ、自然の不思議な仕組みに感じ入っている様子だった。オシベ、メシベ、花びら、その包み、ねっこの根とのつながり。サボテンの一種というのだが、自然の不思議さが説明なしに秘められ、花が何となく揺れていて、分ごとに動くようだった。一夜しか開かないところに更にこの花の神秘性があるし、見る人誰をも魅了する力を秘めている。花が喜んでくれた。

10月4日（火）

大陸博物館構想

十月一日シティホテルで開かれた公明党のシンポジウムで私は大陸博物館なるものをはじめて口外に出した。恐らく誰も気付かなかつたらう。パネラーの一人として五分間しゃべる中で一口ふれただけなのだから。かねてから考えている大陸博物館は、福岡に国立博物館を誘致する以外に、もう一つ県の目玉になるような別の博物館を作る構想である。これは、福岡の大陸とのつながりの歴史的地理的な位置を利用して、中国や朝鮮の博物館的資料を、常設的に、テーマごとに、披露していこうというものである。中国には無尽蔵といえる資料があるのだから、これを借りて来て、テーマを選んで展示し、日本人に見てもらおうというものである。そのためには、資料発掘や研究や国際的交渉取引など無限の活動努力を要するし、相手国のためにもわれわれ自身のためにもなる。何時しかそれを県の手でできないものかどうか、問題提起してみたいと思っている。九大の研究資料館のことも思い出されるが、国がこの方面にもっと財力を注いでほしいものだ。

10月5日（水）

戦争最後の段階における南洋諸島の日本人

昭和万葉俳句前書集を誓って読了しようと思っていたが、今夕九〇〇ページの終りまで至り、志を貫くことができた。読み進むうちに、外地とくに南方諸島に至っては、戦争というよりは生きるための動物というに等しい日本軍人がえがき出されているのを改めて教えられた。イモ、タロイモ、現地自活という言葉は私も当時軍隊の中できかされたのを思い出す。軍票は紙屑同然と化し、給与はもちろん、兵器生活生存用器具資財など補給はなくてももちろん情報通信もなくなり、闇を利用してのみ行動し、ジャングルか洞窟にひそむなどして米軍の攻撃を避ける苦心ばかりという。これではもはや戦争ではない。当時の日本人の一般的な知識と、戦争意識をもった人間日本人がジャングルの中に閉じこめられて苦闘しているにすぎない。何万人だろうか、三分の二は戦死、病死、飢死という形でほおむられていく。無政府状態でもある。一年以上もこういう状態で放置されていた訳だ。

10月6日（木）

戦争記録の一例

どうも戦記ものに目が延び、今日は五年前に出版され贈呈をうけていた医師魚住孝義先生の「大陸殿兵団」を読みはじめた。八一五部隊（新京経理学校）の同窓誌「白雲悠々」をちらちらみて、筆者たちの記憶のよさにびっくりしたのだが、魚住さんのこの本は、さらに輪をかけた驚きである。軍の行動、組織、月日、氏名が、人数が端数にいたるまで、大陸の地名、部落名、時刻に至るまで、こまかく記述されている。これはおそらく丹念な記録とその保存、類まれな記憶力によってはじめて原稿に至らしめたものというしかない。今日は少し読み進め、六〇ページほど読んだにすぎないが、感嘆するばかりである。そのはじめの方に（二〇一二ページ）に歩兵一人の完全軍装の時の持ち物の一つ一つについてその名称も、古い言葉で書いてある。総重量約六〇キログラムと。こうした戦記ものは、二度とありえないものだけに、貴重なものといえる。今の自衛隊の普通科でもアメリカ化している上に、さらに近代化していて、持ち物すら全く違うといえるだろう。ともあれ、あの戦争は一回限りのものだったのである。

10月7日（金）

多すぎる身の雑物

何十年も生活していると、身のまわりの物が蓄積されて、どんどん過剰になる。捨てる気がしないので、紙屑であろう物まで貯えてしまうのでなおさらである。本、筆記具、用紙類、それに着る物、身の雑具、茶碗、皿などに至るまでである。本はどうすればよいか、資料類はどうなるか。誰も関心と呼んでくれないとすれば、貯えても無駄になるだろう。でもその中に、後に残って何かの意味のあるものもないとはいえない。一途に思い込んで、

あるいは自然にたまったものなので、今はそのことを考えるところに年の宿命のようなものを感じず。昔なら、子供が親の物をとということで、保存の役を担ってくれる部分もあった。又、形見とってほんの一部の物でもひとに分けてよろこんでもらうこともあったのだが、今は、よろこぶ程度も極小になっているに違いない。たくさんにとはいえないが、身辺にある物が、乱雑に放置されすぎている。

10月8日（土）

県庁跡地暫定利用はじまる

旧県庁舎跡地北側を囲っていた塀が、長い間通行人に不快な感じを与えていた。それが跡地整理の事業が進むにつれ徐々に取り除かれ、今日初の暫定利用一号として、県交通安全フェア（第五回）の開会式にまでこぎつけた。公園広場のように立派にでき上がり、旧電車通りは金木犀も満開で気持ちよい広場として市民の目の前にあらわれたわけだ。今年中に本格的な施設建設素案ができるので着工まで一年あまりしかないはずだが、何千万円かの経費をつぎ込んだの用地整備であった。水はけが悪いのでという理由もあるようだが、短期間利用にしては経費をかけすぎると思う。それにしても今日は碧空、空はどこまでも晴れ渡って適当に風もあり、いくなしの天気恵まれた。三連休利用で客が多ければいいが、この交通安全フェアはイベント内容が少々堅すぎる。

10月9日（日）

壊わして造る

まさに秋たけなわ。夏草の生い茂ったのを刈り取っている風景がみられたが、昨日私はそれをした。いくらでも生えて来る。無限に、予備がしてある。でもそれは今年この辺でストップ願うという気持ちで刈り取る。下の鴨井さんがいなくなって二、三年になろうか、しばらくして家屋は取り崩された。藤棚もあったが、今でも放置されていて誰も手入れしていない。夏草が至るところに生え荒れてしまっている。近々誰かが家屋を新築するに違いない。陸軍墓地（谷公園）の前の道から上の方だけでも五件、六件と新築工事が進んでいる。取壊し工事がうちの上の道の上方にあるらしく連日破碎機のうなる音がうるさい。こわしては建て、こわしては建てる。もとあった材木や瓦など再利用するのはもう昔の話。つぶして廃材として捨ててしまう。その捨て場（廃棄物処理場）が現時点で全県的に、とくに福岡近辺で問題になっている。壊わして造ることによってGNPはふえる。再考の余地はないか。

10月10日（月）

敗北を見すえる目

魚住孝義さんの「大陸殿兵団」はまだ読み終らない。いうまでもなく敗走の記録である。

転進とか反転とかの言葉が使われているが、これは当時の用語で、犠牲を最小限にする努力をしながらどう敗走するかである。敗走しながら中国現地の住民たちに大きな犠牲を強い、中国兵もかなり損傷をうけていることがわかる。日本側は兵員にして三分の一は敗死を遂げていく。兵器は損耗され補給されず、兵の糧秣、被服はもちろんである。本土の米軍による爆撃や機銃掃射と同じく、二十年の六月、七月、八月の頃には損害は加速度的に拡大していく。投降を知らないが故であり、敗戦降伏を躊躇したが故の損害の拡大である。皇国史観、不敗という偏見がしみとおっていたからに他ならない。これはおそろしいことだ。これがおそろしいことなのだ。こんなおそろしいことは嘗ってなかったし、今後はないだろう。天皇の病気のことで、左翼各派が昔の天皇制の復活を問題にしているが、観念的回顧的な主張にとどまらず、右のような点を注目してほしい。

10月11日(火)

七褒めて三叱る

夕方になってから西日本文化協会依頼の「師について」の原稿を書きはじめた。学校の先生について書くことになるので、小中高大の四段階にわたって大まかに書いてみた。学校の先生に限らないというので、子供の時に絶対的な役割を果たしてくれた七二兄のことにふれてみた。仔犬のようにジャレ合って育った兄は、スタート点での重要な役割を果たしてくれた。又一人立ち直前九大の研究室時代に向坂教授から受けた恩義も一つの終点としてはかり知れない影響を受けたのは間違いない。この二つの始点と終点で私は一人立ちにまで育ったように思う。私は前にもひとにいったことだが、対人的には七褒めて三叱れとって間違いなしと、褒めてくれた先生は印象深いし励みになるが叱られた先生、とくに単に叱られた先生にはうらみだけが残っている。人を叱らないためにはかなりの諦観がいるだろうが、敢えて叱るのは三にとどめてくれるよう一般論としてお願いしたい。いろいろ先生が走馬灯のように脳裏を走る。

10月12日(水)

叙位叙勲というけれど

「大東亜戦は終末の段階に入っていた。軍部ではそれが未だたけなわであると揚言し、戦はこれからだという子供だましのゼスチュアがくり返されていたが現実を直視するものにとっては、それが偽瞞であることが明らかであった。沖縄が失陥していた噴飯に価する竹槍戦法が喧伝されて内地ではその訓練さえ行われているという驚くべき情勢が伝えられていた。……その頃の日本は政府といわず民間といわず末梢的になり果て、常軌を逸した事実が至るところに充満していた。軍部の方針は偽瞞と弾圧に終始し、それに対応して国民は限りない個人主義のあえぎを続けていた」(深瀬信千代著「オロチョンの挽歌、昭和五〇年刊、P11~12) いいえている。私はこんなにうまく表現できない。軍隊の中に功績調書作

りの者がいたが、調子のよい時は戦死者はすべて金鵄勲章をもらったのだが、この戦争ではどんなに力戦しても、のたれ死んでも、全部雲霞のごとく消え去らねばならなくなった。今日県庁で死亡者叙勲伝達式があったが、このことを考えながら伝達の台で私は言動し、妙な気持になるのを禁じえなかった。

10月13日（木）

日本人の国際性の低さが禍を呼ぶ

昨日からの本は一七〇ページの本で、今日読んでしまった。「戦時中に私は日本人の異民族政策について考えたことがあった。国策としては立派なことを言う。八紘一宇であり五族協和であった。しかしその先駆として大陸に渡った一人一人の日本人の現地人に対する態度には矢張り侮蔑があった。それがほんとうの信頼を失った大きな原因であった。それに比べると国策としては搾取を敢てしながら、個人的には異民族を友人のように扱い、肩を叩いて愛嬌をふりまいていた英国の方が数等上だった（一三八ページ）。深頼氏の指摘には一面うなづける。というか、日本人は戦後今日に至るもなお個人としては一般論として島国的であり、他国民への対応を知らなすぎる。洗練されてないといってよい。ただ、日本人はいつまでもそうだと私は考えない。今後洗練されていけば、右にのべられたような英国人の面をもつ人の率は上昇するはずである。敗戦の時も、朝鮮、中国、ソ連の人達から立派に国際人として扱われた人もいたはずなのだ。

10月14日（金）

京都に来てみて

東京一極集中ということが盛んに指摘されるこの頃である。その通りと思う。変災がひとたび起ったら大混乱するに違いない。大阪に来てそう思う。でもまだまし。京都に来たらホッとす。街が徐々にかわっていくが猛スピードとは感じられない。古いよき伝統や遺跡がちゃんとあって、何となくゆとりを覚える。あくせくしているようには思えない。これでやっていけるのだろうかと思うほどゆったりしている。人々は京都のもつ古いものに接するためにやってくる。新しいものを求めてなら来ない。適度ということばがあちこちにあてはまるのが京都ではなかろうか。しかしふと考えてみると、大阪はさすが、瀬戸内海の奥まった所、淀川という大河にはぐくまれた豊かな所といえるが、なぜに京がみやこになったのだろうか、との疑問がわく。盆地で、寒暖の差も大阪よりひどいだろうに。もしかすると、大阪があるので、一步引いて京を設定したのかも知れない。大阪の存在が前提ではなかろうか。今日の古さのいいのも、大阪があるからかも知れない。

10月15日（土）

国体開会式をみて思う

京都国体（第四三回、二巡めの初回）の開会式に出席した。招待席ではあるが、さらいねんには福岡県が四五回を受持つので、その下見という意味もある。昨日の京都駅もそうだが、秋季大会主会場の西京極総合運動公園を中心に京都市内は花一ぱいというか、国体関係のポスター、チラシ、等々うまく歓待の雰囲気づくりが進められているのを感じ、福岡の場合、こんなにできるだろうかとの心配すら感ずる程であった。京都の場合、天皇の病気のことで、準備もまぎわになってあれこれ「虚飾」への迷いがあったようだ。迷いで府当局も困っただろうと思う。国体開会式をみるのは初めてだが、各県選手団の入場行進に一時間以上かかって、これはどうかと思った。開会式のメイン行事だといえばそうなのだが、私には大げさにみえた。県ごと三〇〇～五〇〇の選手が行進する。それに合わせて吹奏する方も、視閲する方も、見物する方も、疲れてしまうのである。形式主義に陥らないようにしたらいいのではないか。人数制限をするのもよいと思う。

10月16日（日）

車内騒音

新幹線で急ぎ帰福した。京都博多なら退屈せずに旅行できる。しかし車中はうるさい。車内放送はききたくないのに長々と案内をくりかえす。英語でも放送する。又読みものをしていてトンネルが多く、車内灯は読むのに暗すぎる。ほんとうは眠るに限るのである。いつも同じ放送だから、座席やデッキに書いておいたらどうだろう。着時刻が何時何分かはみんな自分の関係のは心得で乗っているはずだから不要。連絡の在来線やその発車時刻も関係者は知って乗っているのではないだろうか。余分のオシャベリをしているし、やかましいだけである。みんなすなおに聞き流しているのが不思議である。案内がなく事故やミスにつながってはとの逃げの態度とうけとれる。日本の裁判所は訴えられたら列車当局が悪いという判決を下しそうだ。「列車とホームの間があいていることがありますので足許に注意」という放送は責任のがれ、裁判所のがれの騒音である。

10月17日（月）

衰弱を感ずる

また健康上のことで書こう。京都二泊の旅行なのに、睡眠のための安定剤を用意していたのにカバンの中へ入れ忘れシマッタと思ったが、幸い胸ポケットに予備的に入っていて難なきをえた。昨夜は在宅なのに、十分ねむれなかった。便所に二度もおきる有様。ここ一週間余り前右大腿内筋肉がひりひり痛い。その十日ほど前には左の同所が痛んだ。どちらも大事には至らなかったが、どうも気になる。右肩うしろの筋肉の鈍痛は調子の悪く感ずる日はとくに気になる。左右中指や右手小指の関節も相かわらず痛い。日常の用には差支えはない。運動不足は決定的であるのに、自分で室内運動によって補おう気にもならないのはどうしたことだろう。三期目の知事選にという人は少くないが、自信は全くない。

激務であることは確か。身の自由には程遠い用務のひどさである。が、止むなく動いているからこそ辛うじての健康度を保っているのかも知れない。歩もたどたどしい。

10月18日（火）

玉砕・自決を読んで思う

上原司さんの「シベリアの雲流るるままに」につづいて、吉野孝公さんの「騰越玉砕記」を読んだ。十年も前に出された本を今読んだということである。どちらも小さい本だが、心がしみ込んでいる。玉砕とか自決という途をえらんで何千何万という人が死んで行った。捕虜になることが恥とされ、無駄徒労犠牲をくりかえした愚がひしひしと反省させられる。必勝の信念が一方に、死すとも虜囚の恥をうけないとの精神がたたきこまれていたことが他方にある。女は青酸カリを、戦地の男は手榴弾を、自決用に配布された例が無数にある。それでも、中国大陸には何十万人という捕虜が残って戦後送還されている。二つの本を読んで相手の出方の違いが浮きぼりにされる。ソ連はかなりひどく収奪し強制労働ノルマの押しつけをしたようだ。蒋介石は捕虜を寛大にとの趣旨をできるだけ徹底させようとしている。戦況の差にもよるだろうが、ソ連の型にはまったような社会主義指導が気になる。

10月19日（水）

地方労働戦線も大きく動きをかえはじめた

戦後史の中で重要な役割をはたしてきた総評が終ろうとしている。昨年十一月に連合ができ、今年の十二月に県評に代わる地方連合が生まれる。福岡地区労など地方地方の小単位の組織がどうなるのかまだきいていない。心配になるのはこれら地区労がメーデーを律してきただけに、気がかりというよりは、具体的な結末をえないと、年度スケジュールが大きく変わってしまうだろう。私は今年のメーデーが連合の線で統一されるのかと思っていたら、地区労レベルで、そうはいかんということになって「間に合わなかった」そうである。メーデーがどうなるかは前の年のうちに見とおしがつかないといけならしい。連合路線のメーデーがどういうものになるのか、興味のある問題だし、それによって労働運動の流れもおさまるところに落付いていく。その意味で福岡地区労がこの年末までにどういう態度を打ち出すかが注目される。また、地方選挙の様相も今後かわってくる。候補者もどこから、どの線で引き出すかも大問題になるであろう。

【欄外記入】

プロ野球ニュース

阪急ブレーブスオリエンタリスに買収され、近鉄バッファローズの優勝ならず最小差で西武がパリーグ優勝ときまった

10月20日(木)

三県サミットをリードした雰囲気

三県サミットは二回目、佐賀県ホストで今回は唐津市シーサイドホテルで。ここは昨年植樹祭の際天皇が泊まれた所。唐津湾に遊ぶヨット群が殊に目をひいたし、虹の松原は雄大でおちついてみえた。嬉野でやるようなことをきいたので、又あんな所でね、といった私の声が届いたせいか、唐津になったので、いい所を選んでくれたと思う。浮ぶ目の前の高島。はるか向うに糸島とくに可也山がかすんでみえる。今日の話の中に余暇時代リゾート作りに行政として力を入れようということに時間が費されたのも、この湾内ヨット風景にひかれたかと思う。米の輸入自由化や牛肉オレンジ、税制改革に伴う石炭勘定の削減などにはこれに強く反対してだけでなく、産業構造の変転する時代の流れとして積極的に受けとめて対応していこうという意気ごみを伴わねばならぬという姿勢と連動しての話題でもあったのである。来春雪まつりの折札幌で三県合同物産展を行うがこれも一工夫して成功させようと申し合わせた。

10月21日(金)

北九地評の大会に行ってみて

北九地評大会(二七回)に列席した。いま日本の労働組合の組織率二七%台、労働運動に動き乏しく冷えこんでいる。戦後三九%にまで高まったことのある組織率である。若い新人がそっぽむいているのである。連合がスタートして一年、これからどうなるのか案じられる。何をしたいのかわからないのが実態ではないだろうか。地評の幹部の話では、総評系と同盟系は今話を通ずるが民労協とどうも話がつながらないとのこと。メーデーもそのため統一が見透せないでいるらしい。福岡からみてこれは意外だった。福岡地区メーデーの方が困難性が高いのではないかと思ったのに、北九も容易でないとのこと。来年春にひかえている市議会議員選挙もからんでのむずかしさなのかも知れないし、役員ポスト争い思惑もあるであろう。いずれにせよ、沈滞の労働運動のなか、なすべき課題も取り組み姿勢もネガティブな状況なのに、統一がむずかしいとは理解しかねるのだが。

10月22日(土)

母親大会に、黒い羽根のことを伝える

母親大会に出席し挨拶した。大手門会館大ホールに一ぱいだった。教師が主たる出席者なのかも知れない。二時からということで遅れる人も多かったが、予想外に多かった。大町さんが実行委員長。私は大会の基調にある平和・男女平等、反核その他のことは知りつつも、“黒い羽根、運動が、提起された三十四年の大会にふれた挨拶をした。高齢化問題でも、自助とか在宅福祉には反撥をもっているし、男女平等にしてもきびしく見ているのがこの集団である。もう少し柔軟に考えないかなと思うが、そうはいかないらしい。“黒い

羽根、は政府の離職者対策に火をつける役割を果たしたので、母親大会も点火役的なことをしてくれることを望むといったのである。鶴崎さんが知事になってすぐあと、私らが筑豊に入って失業者家族の生活実態を調査し、報告書を県に出し、さて対策は、というので、浦川県議の思いつきで「黒い羽根」をとということになったのであった。全国をゆるがしたものだ。

10月23日（日）

魚住さんの文化小ホールに行く

魚住孝義氏の誘いで「中国帰国者をはげますチャリティショー」に行き帰りは浄水通りに出て食堂レストランで一休みし、徒歩で動物園をまわって帰宅した。久しぶりの運動になった。多くの人に行き違いになるが、顔が知れているので、エシヤクする人が少ない。解放された行動で、ちょっぴり疲れ、快い秋の一日であった。魚住さんは以前から地域懇などで知り合った医師だが、先日その著「大陸殿兵団」を読んで、著書贈呈の御礼の気持で手紙を出していたら返信の中にこのチャリティショーの案内状も入っていたので、行くことになった。今吉まさえさんも昨日大手門で打合せていたとおりに来ていた。魚住さんは医院の隣に御所谷文化小ホールを作っているのだが、今吉さんにいわせると好きでやっているとのこと。放射線科でもうかりもせんのにともいう。それでも小ホールを作るとは篤志に驚かされる。場所がよかったら放射線科でももっともうかるだろうにと思う。

10月24日（月）

戦記ものについて

戦記ものを読みつづけているのだが、今日は「ああ滇緬公路」をよみはじめた。これは五〇〇ページをこす大きなもので、ひまひまによんでいると、いつ終るか分からない一つのジャングルである。少し前秘書室にたのんで県立図書館に同種のものでどれほどあるか調べてみてくれないかと頼んでいたら今日一覧表でカードコピーを作ってくれた。昭和二十二年頃からこの種の出版があっていた。ざっと数えたら三〇〇冊ほどの在庫であることがわかった。近頃は同期生の会誌の類が出ている。かれこれ年寄りになって、同期生が懐しく回顧録を作ろうとの話からであろう。京都の安田利政氏がその印刷原稿のコピーを今日送って来たが、海軍時代の思い出であり、日本海軍の末路にふれるところがある。どれもほぼ同じことを書いているようだが、できるだけ多く読みたいなあと思う。実行できないかも知れないが、懐旧の感傷なのかも知れない。「無駄」「残酷」と反省しながらも尚軍隊なるものが絶えない人間世界の業を思う。

10月25日（火）

慰霊巡拜（第八年目？）

マレー・シンガポールへの慰霊巡拜団が池田出納長を団長に総勢五十一人出発した。表向き、平和友好訪問団というが、日本人墓地を歴訪する。私は池田団長に、先方住民の感情を害さないようにと耳打ちしておいた。「わかっています」とはいうものの、先方の墓地がある場合はそれに鄭重な礼拝をすることが望ましい。「英霊」一七〇〇何がしというような表現をする向きもあるが、その気持だけでは相手の気分を損ねるのではないかと思う。靖国神社に祀るという気持もよくないと思う。戦争犠牲者は双方に、無数にあるのだし、当面こちらは加害者だということであたらなければならぬだろう。「散華」という言葉も亦無配慮に用いられてはならない。出向いていく県会議員を含め、英霊、散華という表現で出向く人が多いと思う。慰霊ということで、肉親が彼の地に眠る軍人に久々に会いに行くときと軽く思ってはならない。私は今日の団結式の挨拶文の中に「戦没者〇〇〇〇人」と書いてあった原稿の部分を言わなかった。

10月26日（水）

県民の会との抗議中食会

県民の会の申出で庁議室に中食がセットしてあった。社共は小田、野見山、労働組合は大塚、学者側は内田（一郎）、もう一人共産党から、そして秘書室の家永が列席した。中味は天皇の病気につき、対応が革新知事らしからぬという責めであった。とくに共産党の野見山がかなりまくし立てた。私は弁解もせず聞いていた。間がもてない感じだったし、これまで以上に今後も問題がおこるだろうという点に言及した。みんなの話題がそちらに移った。共産党の言い分では、天皇の戦争責任を問うこと、「元首」扱いや平癒祈願、自粛への批判について共産党支持がふえているとのことである。どんどん電話がかかってくるという。Xデーの時に黙禱や弔旗、半旗、早帰り服喪など反対しなければ革新とはいえないという。私は自治省の指示はどうか知らぬが、文部省－教育庁－公立学校というラインでは問題が起ろうなとっておいた。

10月27日（木）

二つの手紙

秘書室から二通の手紙をあずかっているとて、渡された。一つは、第十八富士山丸事件の栗浦さん夫人多美子さんから、先日東京で宇野外相に私が釈放への努力を要請したことへの礼状である。もう四年にもなろうか。釈放の目途がつかないが、ソウルオリンピックも終って、南北の間が冷却をゆるめてきたので希望なきにしもあらずだが、もとに戻っただけで展望は依然ない。基本のところできいちがいがあるのでどうにもならない。もう一通は立花町職員の田中稔氏、歩け歩け運動をしているのだが、本人は足の障害者。新聞によると地球を半周する程歩いたという。今日、本庁講堂で納税表彰式をしたが、その時、受賞者代表として来庁していた。賞状を渡すとき、それを意識して、目と目で挨拶した。昨

日、共産党の抗議の中に、「知事は草の根保守主義」云々というが、天皇制復活に反対する共産党に声援する者の声をきけと主張したのを思い出して対照してみた。

10月28日（金）

特大のカニ葉サボテンの返礼に色紙の額を

先だってももちパレスに行った時、近くのレストランで中食し、その下の花屋さんに陳列してある花をながめていたら、出る時、立派なカニ葉サボテンの花鉢を店主がプレゼントしてくれた。あまり立派な鉢だったので驚嘆して思わず声が出たのを捉えられたといってもよい。一万円をはるかに超える価格だったし、買うつもりもなかった。辞退したが、ともかく持って帰れというので、有難く頂いた。林正雄といい、参議の渡辺四郎氏と近い親戚だとのこと。それで、「和気致祥」と書いた色紙に額をかけ、今日済生会病院で点滴を受けている時間を利用して随行の斉藤氏にその額を返礼の意味で持っていってもらった。大変喜んでいただいたとのこと。額に入れると色紙も一寸した使いものになるものだ。このような、書くことによって返礼できるなら、まずはいいとしなければならない。花枝ぶりよくその径は五〇センチもあろうと思う。高さは根もとから三〇センチ、大きなカニ葉サボテン、紅。

10月29日（土）

天皇輸血の問題

天皇の病気さわぎが過剰だとの声が高まっている。報道、行事自粛とりやめなどをはじめ、先日共産党ら、県民の会から出した問題意識と連動するものが少ない。たしかに、・・・しかし、それを問題にする側の反応の仕方も過剰といえないだろうか。私の場合中庸だ。天皇の戦争責任を改めて問い直そうとする向きもあるが、それならもっと早目にすべきだ。私は、数日前に済生会の小川院長にもいったのだが、（今日も六〇〇CCの輸血があったとか）、既に一万CCをこえる輸血が行われ、警視庁職員かどこかの若者の新しい血で、黄胆のことも報道されなくなったし、——天皇を実験台として新しく血液学がもちあがるのではないか——ということだ。問題になって一ヵ月以上、四〇日、今後どれほど延命が可能なのか。血を作る医術が発達して医術というよりは人工的に延命をはかる方法が開発されたら世の中は一体どうなるだろうか。各方面に問題が拡散する。この種輸血は天皇に限られるだろうか。

10月30日（日）

自然との葛藤

前の家の裏庭に出てしばし雑草と勝負した。名は知らぬ根深き雑草である。裏庭一面に、そして植木鉢の隅に深々と強く強く根をはびこらせている。三週も前だったか、地表の草

の姿は取り除いたのだが、まだ一面根をはびこらせ生きている。移植ゴテを使えばいいのに、ついでのような出でたちで素手で挑戦し、手を痛めてしまった。固い固い深い深い。だからこそ、無限の生命力を持つ雑草なのであろう。この冬はこのまま終るとしながらも、来年は今年のように放置しないぞと心に誓う。たわけのような誓いである。雑草が何だというのか。心に笑ってもみる。そういう平和の一日、陽あたりがこいしくて外に出たくなる一時の心とからだのたわむれの一齣であった。西の石垣ブロックに這いあがる蔦も何年放置されていただろう。これとも攔闘するように挑んだ。指より太い蔓が延々と伸び、小枝をしっかりと張っている。わが心に合致しないので切り取るのもあって、それも確たる理由はない。

10月31日(月)

宮崎日南海岸リゾートとしての魅力

宮崎に飛んだ。何年ぶりかおぼえてないが、以前はプロペラだったろう。今回ジェットになって初めてである。三〇分ほどで着いてしまう。当たり前だがやはり驚きである。宮崎は空港、アクセス道路、会議場にあてられたサンホテルフェニックスいずれも秋晴れのすがすがしさを加えて立派なもので、三県知事会議で感じた唐津よりはるかに規模が大きく魅力に富んでいる。ホテルから海岸にかけて拵がった松原はどんなに長いだろうか。ホテルも近年みた事もない立派さでゆったりこの上もない。国際会議場といわれている。ゴルフ場が松原の中にあるし、動物園も近いらしい。空港、都心をへて佐土原(宮崎・高鍋の中間点)に近いところである。一帯が宮崎日南海岸リゾート地域として早々と国指定をうけたところである。新婚旅行は必ずといえるほどのこの地域が、ハワイ、グアム、オーストラリアへと順次時代と共に客を奪われていたのだが、この分だともう一度栄光の座をとりかえずのではないかと思われる。秋晴れで今は更によしである。

【「11月の予定」欄への記載】

6日 天皇は吐血下血でかなり大量の輸血(夕方)

8日 天皇血圧大きく低下

13日 天皇病状、低め安定 よくないらしい

14日 // 血圧一三〇～五〇 午前八時半、三木武夫死去

29日 天皇病氣、低め安定ここ一週間以上眠りがつづいているらしい

30日 天皇体温三八・七度

11月1日(火)

カルチャー程度差

宮崎の一ツ葉海岸から福岡に帰って来て、何と汚い、ごみごみしていることかとショック

だった。いつも思っているように、まずは広告や看板が多すぎる。道路を狭いのに利用しすぎる。空港前の広告塔の林立さえ、感じがよくない。エコノミックすぎる。おおらかさがほしい。他人ばかり批判するのではないが、もう少し公益、景観の観点があっているのではないかと思う。直美に電話したら印度に行ってきた、ひどいカルチャーショックを受けたとっていた。町が汚いというか、人々がのんびりしているというか、都市の道に牛がうろついているといった風景に接したらしい。東南アジアも日本に似て、こせこせしているように想像しているのだが、もう一つ文化度に距離があるようだ。宮崎の一葉地域などは一流と自慢できようが、日本も全体がゆったりとした情景になってほしいものだ。ヨーロッパ先進諸国はかなり先を歩んでいるように思えるのだがどうなんだろう。

11月2日（水）

石特会計の石炭勘定財源の危機をめぐって

原重油関税を消費税と併課することに、石油族が強く反対し、石炭族はその存置を強く求めている、後者の立場に立てば、現行制度に執着することになる。産炭地をかかえている地域は、その財源で就労事業や鉱害復旧やボタ山防災事業をやっている、まだ残事業もかなり残っているので現在の消費税導入で石炭族のいう方向で併課をやめることになると財源の保証がなくなることを危惧している。今日はそのことで労働省や通産省、自民党県選出国會議員に陳情してまわった。議員の中でも山崎拓は石油族でこのことで一番大きな影響をうける福岡県のことと考えてくれないのだと誰もがいつている。リクルートコスモス株をめぐり疑惑で国会は動きがとれなくなっていて、今年中に、来年度予算政府案はできないのではないかとされている今、消費税の行方もほんとうに霧の中といえそうだ。

11月3日（木）

休みの一日にあれこれ考える

休務だからのんびり在宅し、照ったり曇ったりの一日だったが、よく外まわりの仕事をした。ツツジの刈り揃えで大はさみをもって動いていたら揮毫に差支えるほど腕がふるえるので、そんなに重いものだったのかと改めて知った次第である。色紙と扁額を若干書いてのんびりできた。県庁の職員と接していて誤字を書くことがかなりあるので、いつか職員向け広報紙に誤りやすい字について私の原稿を出してみようと思っている。今日少し分類してみた。「展」とか「今だに」とか「心よく」とかがそうした例にあたる。「掘」と「堀」の間違いはかなり多い。近頃はワープロに馴れているので、誤った字を書いてもキーをたたけば正しく出てくるので、無関心な人が多くなっている。県庁職員は正しく字を書けという原稿を近いうちにまとめてみようと思ひ準備をはじめた。

【欄外記入】

私もどこかに毯の字を書いたが、実は毳の誤り

11月4日(金)

頭のいい人が多い

またまた新しく、太田毅「生還者たちのビルマ」を読むことになった。滇緬公路を読みさしで従軍看護婦に移り、今日又これである。しかし移り気のためでなく、新たに入手したので一寸みただけで、この三冊はもう一度もとにかえって、きちんと読んでいこうと思っている。公用のひまを見ての読書だからなかなか進まない。短気をおこしてはならない。元来私の読書進度は他の半分以下だと自認している。にも不拘、決して精読ではないのだ。頭の回転が鈍いことは確かである。高校時代からひとが読むのが早いので羨ましかったのを覚えている。そして又、内容がよく頭に残っていないのも残念ながら事実。忘れが早いのである。これ又頭の問題だろう。もう一つ頭の問題といえば、これら戦記ものを書いている人の記憶力の強いのに感心させられる。私ならとても書けない。著者はいろいろ資料をたよっているらしいが、高い記憶力なしにはやはり書けない。

11月5日(土)

姫高会一高齢化問題

長野さん七〇歳

五時から大名町のくいだおれで、姫高会があった。その前に九州寮歌祭が予定されていて五高が当番校だったが取消になったのだが姫高会だけはやろうということになった。熊本から長野薫恕先輩が出席していて、久しぶりの出会いだった。東京では児嶋正博氏と時に合うということ。天草先生は耳が遠くなり最近の穹窿会には欠席されたというような話題を交わしたが、印象に残ったのは、彼が今は引退して何もなすべき事がなくて淋しがっている状況に関してであった。庭いじりとか、句会に出るとか、二三の例をあげて暇つぶしの方法を提起してみたが、どれも向かないという。結局は何か遊ぶことはないかと待ちうけているみたいである。収入が欲しい訳ではないが、五万円でも十万円でも、仕甲斐を感じることはないだろうかと言はいう。詰まるところ、健康と生き甲斐である。高齢化社会の目標はすでに抽象論としてはきまっているが、具体案が個人的にも社会的にも行政側にも決め手を見出せないのが現状である。

11月6日(日)

マンモス東京

啓二の家に行った。広く、新々施設のマンションで、借景の緑にも恵まれて抜群にいいマンションだが、家賃が三〇万円もするという。驚きのみ。どうやって稼ぎ支払っているのか知らないが、いつまで続くかなと本人の弁。いたってのん気な話である。福岡で考えられない、二倍はするだろう東京の住居費。他の一般生活用品、食料費もびっくりする程高価だということが改めて知らされた。何故、どうしてこんな所に住むのだろうと、つくづ

く考えさせられた。他方この辺には都心にも劣らぬ高層建築や商店街の賑わいにも事欠かない所がある。よくも又人が吸収されてひしめいているなという感じ。東京、首都圏というのは底知れぬ経済力、人をひきつける文化力をもっている。もちろん、いざという時の安全性には欠けるに違いない。縄渡りというか高い危険性をおかしてのマンモスの力だとは思ふ。人々はみんなすましているし、享樂しているように見える。だが人間の深さに欠けるところがあるのではないか。

11月7日（月）

青果物を勉強

六時四〇分から神田青果市場のセリ現場の視察。何百万人か知らぬが、その胃の腑に関する青果物のセリ現場。ここからいくつかの仲買人の手を経るのだろう。小売店頭に見られる、福岡県の柿やイチゴ、葱、ナス等が共販連を通してこの市場に運び込まれる。消費者の食卓にのぼるまでの手順、流通路、価格の流れなどくわしく知る由もないが、人間の肉体の営みが何万年の間にかわって来たのと同じように、青果物の流通秩序ができ上っているわけだ。首都圏の住民の栄養となり、活動源となって流れ流れて一部が又福岡にも還流するのである。巨峰は浮羽のは、長野や山梨のに比べ、やや落ちるが、柿は岐阜を抜いたとのこと。イチゴはこの時期全国を圧しているという。巨峰が劣るのは気候のせいといわれる。他の産物にもそれがあるが、他面冷蔵施設や生産者組織の信用保持努力など、人為的な汗の結晶に寄与されるどころ少しとせずという。今日は青果物勉強の日。

11月8日（火）

あわただしすぎる

あわただし精神刺激の一日だった。とくに夜福岡空港に着いたとたん、出迎えの JAL 職員が、六時半の発表で天皇の容態がかなり急に悪化しているとのこと。血圧が上六〇代、下四〇以下。これは大変危険な状況である。「若し…」となると私自身の行動に大変圧力がかかってくる。この刺激は大きい。睡眠が妨げられないとは限らないのである。グランドホテルまで帰って来て林県議に会ったら、戸部田巧氏が膵臓ガンで亡くなったという。彼は昨年の知事選に際し、売上税反対で、福岡の流通業会を率いて私に肩入れしてくれた人だ。福岡卸センター理事長市繊維卸協会々長である。対応をせまられる。それに明日のスケジュールはといえば、庁議、記者会見その他ぎっしり詰っていて、打越の前田肇氏の来訪もある。おまけに済生会病院での点滴、夜は北九州での会議、それに小倉泊という。なぜにこんなにあわただしのだろうか。どうにでもなれといたいくらいである。日程を詰めて詰めて詰めこんでいる。これでは人間的再生産はできない。長持ちしないだろう。

11月9日（水）

ねるのに苦勞する大きなハンディ

明日伝統工芸品月間国民会議全国大会がオープンする北九州。その前夜歓迎夕食会を北九州市と県の共催で八幡の料亭千草でおこなった。七時から十時までの長時間の宴会になった。通産政務次官倉田参議ら十二人ほどのメンバー。次回開催地の大阪府からも二人、通産省、福岡通産局、市長、市商工会議所、県商工部長などであった。話題の中で感じたのだが、みんな朝に強いということだ。五時半とか六時に起きて何かするという人がかなりあった。東京などで通勤に一時間以上かかる所に住んでいる人は朝の早いのに慣れてしまっているらしい。血圧の加減もあろうかと思うが、私の場合、七時に起きるのでは早すぎる。もっとねてないと、その日の調子が悪い。今日のように庁議の日は八時二〇分わが家発なので、七時半前に起きねばならぬが、それが辛い、たいていの人は就床するとすぐ就眠になるが、私の場合一時間もそれ以上も就眠できない。トシのせいもある。大きなハンディだ。

11月10日（木）

伝統的工芸品産業の今後を祈る

伝統工芸品として指定された県産品は博多人形、久留米緋、上野焼、小石原焼、博多織、八女福島仏壇の六つがある。全国で一三三品、九州では一三品目といわれる。今日通産省の支援のもと北九州小倉の西日本総合展示場で開かれた第五回目の大会に出てみて、大変興味深いものがあった。全国の名産がみられ、作業実演にも接しえたからである。鎌倉彫り、九谷焼、波佐見焼、出雲そろばん、広島の手どれも立ちどまりたい実演が展開されていた。オープニングの時から待っていた小学生たちが興味深かげにみているのに接し、いいことだと思った。博多織、大島紬、友禅染など、私も見あきない思いだったが、時間が足りなかった。そろばんの将来が案じられるように、他の伝統工芸品どれをとっても、今の若い者の二十一世紀の生活感覚にどうマッチするのか、不安でならない。今回が五回目だから、この大会が始まったのは昭和五十九年、私が名詞の裏に六点の絵を刷り込んだのもその年だったのかと思い出している。伝統工芸品産業界の今後の発展を祈念して止まない。古い考えかな。来年は大阪府でやる。

11月11日（金）

もっとゆとりが欲しい

今週はぎっしりの日程というが、今日がその絶頂。朝八時から夜は十時までの拘束であり、帰宅後はそれなりに未解決で急ぐのが二件あった。こんなに忙しいと頭に来てしまうし、健康にもよくない。東京から帰りの機内は気流の関係でかなり揺れた。それなりに又疲れもあり、帰庁後の十二月補正総務部長査定の説明の時などぐったり疲れてきく気にもなら

なかった。機内は目をつむって過ごした。うつらうつらで時間のたつことが多い。自覚的にはさまでないが、客観的にはかなり衰えているのではないだろうか。陳情の時など階段を踏む時は一步一步たしかめることにしている。躓いて転んだりすると笑いものだろう。そうせねばと思うだけでもマシとみずから慰めている。戦記ものを読んでいて戦死の描写がでてきて、死ぬのは嫌だなと思うことしばしばだが、弾丸炸裂貫通などでサッと死ぬのも悪くはないなと思ってみたりである。ともあれ、今日はぐったり、ゆとり時間が欲しい。思うことをする時間、勝手な時間がもっと欲しい。

11月12日（土）

松友会に出席して

九大教養部のOB会（松友会）が午後、福大セミナーハウスで行われた。これは私の部長時代の創設だったことを誰かが指摘してくれた。物故者の紹介があった。鹿田茂、一井妙七、田中元弥それによく思い出せないが、一昨年度の死亡者追加ということで事務系の弥永久子さんの四人である。前の三人は今にも話しかけて来そうな感じである。この四月に言語文化部ができ、講義室もふえて教養部はだんだん複雑、狭隘になり、新しくキャンパスを見つけないとどうにもならないように感じられつつも、誰も新しいキャンパスを見つけての移転は口にできないでいるとのこと。粕屋演習林へ九大がまるごと移転する案もありうるが、工学部や法文経系の学部は移りたがらないらしい。九大全体が行きづまりの状況にある今日、誰か強力な指導力を発揮することが待たれているらしい。私の今の見地からは古い殻にこもってしまっているように思われてならない。二十一世紀を展望した大きな視野で対処できないものかといってみたい。

11月13日（日）

心のレフレッシュ

さわやかに晴れた日がつづいている。山の紅葉もすぎた感じ。晩秋といたらいいのだろう。思えば知らぬ間に月日が経っている。一日在宅して自在の時間を使うことができた。週に一日は是非こういう日が欲しい。書きたい手紙を書くことができた。かなりたまっていたからスツとした。天気がよいつい裏庭に出て動きまわりたくなる。夏のあいだ伸び放題になっていた木の枝を次々に鋸やはさみを使って「散髪」した。これまたスツとした。ひとにたのんでやってもらえばいいとは思う。危険も伴いかねない年ではある。しかし、自分でやるからこそ満足がえられる。以前に夏の雑草を刈ったが今日は伸び枝だった。室内の雑用も片付いたので、心身ともに秋空のようにすっきりした。ただ全くものは考えようなのであって何をしようと自己満足にすぎない。心が休まるならそれでよしとしたい。心のレフレッシュを果たした一日だといえる。

11月14日（月）

過保護農業

今日は一日、十二月補正予算案の知事査定に時間を費した。いわゆる復活要求の説明をうけたあと、査定の申し渡しである。原案が未成熟なものは、一見よさそうでもおことわりすることになる。とくに気になるのは農政部要求である。過保護といわれ補助金漬けといわれるものがずらり並んでいる。そして事こまかい。牛だ、豚だという製品ごとの要求に特色がある。工業にそんなのはきいた事がない。利子補給も二・五％負担とか三％負担で、一般利子率との差は行政負担をしてくれという。商工業にはその種の例は少ない。農協はカネが余っていて、農家に貸さないで他に貸す。農家に貸す分には利子補給をとという。甘えに甘えて今日に至っているように思える。それが当たり前で、反論する者は不見識、無知とさえいわれる。県の役人もそういう感覚になっている。農業は大事だということと補助金漬けというのとは違うと思うのだが。もっとばっしりした方策を樹てられないものか。土地問題が土台にあるようにも思える。

11月15日（火）

戦争遂行をめぐる無謀と誠意

職員図書室から借り出していた「一億人の昭和史」③太平洋戦争（毎日新聞刊）をペラペラみた。写真が多いので、戦争末期の玉砕死闘が余計あわれに思える。東條英機論なる文も読んだ。特攻隊の散華についても読んだ。無謀に包まれた誠意と悲惨は何ともいえない。戦記ものを読んでいる目からすると、さらに重ねて写真や短文で事の「あほらしさ」を知ると、もういやといたくなる。防衛庁には正式な戦史があるようだし、市井に公刊されている私的公刊物はおびただしい冊数にのぼるが読んでいくときりがないようだから、そろそろこの種のものを読むのは終わりにせねばならないだろうが、無謀に対する責任（これは天皇の戦争責任にも関連する）と誠意と悲惨に対する慰安とをどう分けて考えるかはかなりむずかしい。両方から責められて無情、無常を痛感させられる。いかなる時代も人間は同様の問題に当面したろうと思う。性こりもなくまだ準備している。

11月16日（水）

心の絆を大切に

物余り時代、心不足の時代である。今どき、筆記具は各自何本もっているだろうか。シャツ、靴下、靴、などなど、住宅水準も上っただろう。一人一部屋を願った時代はもうすぎた。昔は一室に何人もザコネ（雑魚寝）するのは稀ではなかった。今、紙はどんどん使われる。われわれ戦争をくぐり抜けてきた人間は裏紙を使わないで捨てる気にならないが、今のワープロ時代、コピー時代、どんどん使って捨てられる。食物も同じである。米粒など気にしない。レセプションは何百万円、何千万円と使われるが、半分も食べないで捨て

られることが多かろう。家庭においてもこの傾向はある。これに比べ、人の心の絆は薄く弱くなっていく。家庭内の夫婦や親子は縁が切れやすい。障害者や老人は面倒がられる。長わづらいも、わが幼児も、働くために托児、保育にまかせるのが当然になっている。この二つの傾向の進行は何としてもくいとめたい。高齢化社会について、体系的な対応を早くもちたいと思う。

11月17日（木）

忘れっぽいこと甚だしい

物忘れがひどい。今日朝から何をしたかな、夜になってふりかえるのだが、手帳か日程表をみないと正確に出てこない。どうにもならぬほどスッポリ忘れてることが多い。これは今時はじめたことではないが、近頃とくにひどいのではなかろうか。若干違う面であるが、ひとの名前は右から左へ耳を通り抜けて忘れてしまう。耳だけでなく目もそうである。直方市民会館での県職労大会の時壇上で花束をくれた女性、壇を降りて十分もたたぬ中に廊下で会って、もう忘れていた。忘れていたというよりは、よく見てないようだ。ひとに握手はする。目を見なさいよと注意されるのに、やっぱり見てないのか、顔すら見てないようだ。癖かなと思う。不注意なのかも思う。もう一つ別の面、それは字を忘れる。書こうと思っても出てこないで辞書をひく。人の名前だけでなく事柄の名称もすぐ出てこない。昨日キャプテンシステムというのが出てこなくて「あれ、その、あの…」とどぎまぎしたのだった。

11月18日（金）

日中平和友好条約締結十周年記念パーティに思う

冬がかけあしでやって来るようだ。庁内ばかりで感じなかったのに、夕方外に出るとわかる。県など実行委員会を作って全県レベルでの日中平和友好条約締結十周年記念パーティが東急ホテルで開かれた。両国の交流が地方レベルでもっと進めばいいのだが、具体性が乏しいし、進展の度も鈍いように思える。今ももち埋立地に中国総領事館が建設されつつあるが、この円高（一ドル一二二円）では大変だろう。日本の円高が交流を阻害している一つの要因に違いない。が他面、向うの国の体制が問題だし、技術水準も問題のようだ。日本にあるような産業連関も向うにはなく、機械の故障一つ起っても容易に復元できないともいわれる。だから長い目でみないといけないし、事こまかく配慮しなければならないようだ。中国側の期待どうりにいかないし、日本側の思い付き通りには事は運ばないようだ。遅々としてではあるが、更に十年二十年かけて着実に、「平和・友好」の関係をつないでいく必要があるようだ。

11月19日（土）

柳川地区県民の会

大川、柳川地区の県民の会の人達が、顔を見たいとの趣旨で夕方大川文化センターで知事を囲む集いをもった。労金柳川支店開設のため私が挨拶に大川に行った折を利用してのことである。待鳥、平山両夫妻や柳川盲学校の人達の顔がみえた。みんな知事選挙のときは熱心に動いたばかりで、陳情めいたことは言わないとの約束で集ったという。笑いの中で予定の一時間はすぐ過ぎてしまった。一しょに写真にうつりたいとの希望も多く、何回もポーズをとった。盲学校の方は、高等部が廃止統合された問題と、鍼・灸のほかにも就業の希望をどう叶えてやるかが問題と訴えていた。こまかいところまで手が届く県政でなければならぬのであろうが、合理性や採算性が行政の中まで強く浸透してくる今日、こうした福祉分野はあれこれ厳しくなってくる。正直なところ、こうして面と向って訴えられると、返答に困るといわざるをえない。

11月20日（日）

高齢者に生き甲斐を

今吉まさえさんの喜寿祝賀会が今日開かれるという。中山日出子さんが私の祝賀色紙を受け取りに立寄って来た。仕事は何かないかいなど今吉さんは先日会ったとき私にいった。喜寿でもまだピンピンして仕事してほしいといっている。昨日大川で待鳥、平山両夫妻に会ったが、この方はもっと若いのに尚更仕事が欲しいだろう。元氣であれば、仕事を持つことが「生き甲斐」であり、その趣旨で仕事を見つける、見つかるような工夫をすることが今日高齢化社会に対応するのに一番重要なことである。昨日の話の中では、誰しもわが家の前の道路だけでも、更に公同の場の清掃を年に何回か決めてやろうといっているということであった。高齢者が積極的にそうした動く問題提起をしてくれることは大変望ましいことだが、この頃は地域もこわれていて、高齢者は孤独の中で生き苦しんでいる場合が少なくない。解決を要する。

11月21日（月）

リクルート問題と高石氏

リクルート・コスモス事件がおきてかなりの日がたつ。今日は衆院リクルート特別委で前社長江副、前文部次官高石邦男、前労働次官加藤孝の三人が証人喚問をうけた。追及の仕方が下手なのか、逃げが上手なのか、これだけ政界、与党をまきこんだ疑獄でありながら、なかなかしっぽがつかみにくいようだ。貧乏人は少しの収入のためにもあくせく働くが、お偉さんは全く資金も労力も使わないで地位だけ利用して濡れ手に粟のようにカネが手に入るんだから……と世論は怒りをクールに表現している、高石氏は九大第三分校の第一回生。リクルートも文部省をフルに利用したし、高石氏も利用させたいらしい。県の現教育長

も突然に降って湧いたように現われ、反奥田の言辞を弄してきたが、これも高石の流れを汲むらしい。この竹井が国立博物館誘致に関し、就任直後ずいぶん無知冷淡ぶりを私に示したのだが、高石の命をうけていたように思えてならない。福教組、高教組の役員たちは高石にいじめられたらしく、衆院選には反高石のために三区にかけつけるといっていた。

【「日本は再び国家主義に逆戻りの危険 西独紙が天皇制で特集」（『西日本新聞』1989年11月21日）の切り抜き貼付】

11月22日（火）

前ハワイ州知事有吉氏の来福

前ハワイ州知事の有吉さんが、前上院議員の別府さん、ホノルル商工会議所副会頭の上田さん二人を伴って来庁。移民一〇〇年記念にホノルルに日本文化センターを建設するので、資金面で援助してほしいと来日し、都知事（知事会長）ほか九県知事その他市や商工団体をまわっているという。今の世代は先代移住者の苦勞を知らないし、自分のルーツについても無関心になってしまっているの、それに関する自覚を促すのがセンターの目的であるという。現知事ワイヘイ氏も賛同してくれていて、土地、設計もできているという。アメリカ式なのか、金額は希望したものをいわないが、県としても五〇〇万円ほどはせねばならぬのかなということだ。一九八一年亀井知事時代に姉妹関係を結んで以来の交流の仲でもある。有吉氏は本職の法律事務所を開いているが、仕事の中味はときいたら、コンサルティングといっていた。アメリカではそうした種類の用務が日常化している。われわれの想像の外にある。

11月23日（水）

衆心、衆口、衆怒

キジバトの声がかすかに聞こえるだけで、何も音しない朝、しとしとと小雨が降って、久しぶりにのんびり、何をしようかと思う休日であった。夕方は社会主義協会系の活動家六人が奥田県政の当面する主要課題を確認し合おうということやって来て、前の部屋で飲みながら語りつづけたが、これまた静かな中でのわいわいの歓談になった。他の時間、何をしようかと思案したほどである。目の前に中国古典名言事典があるので、改めてこれを見なおしていたら時間が経過した。古詩源の項に、衆心は城を成し、衆口は金を鑠かすというのがでてきた。唐以前のことだが、制度上の民主主義はないが、大衆が政治を動かすことは認められていたのはレキとして事実だということがわかる。左伝の項にも衆怒難犯、専欲難成というのが出ている。民主々義というのはこうした衆心、衆口、衆怒をどういうルートで政治の場にすいあげるのかの一つの形式だということであろう。

11月24日（木）

原田種夫氏の米寿の祝賀会

今日もまた多忙で暮れた。昨夜から風が強く、ガラス戸や木の枝が動かされる。落葉が街路の側溝にふきだめられ、道行く人は肩をすぼめている。がなかなか用意もよく、かなり厚着をしていて大丈夫なようだ。寒ければ寒いなりに順当だと思われるし、よいことだ。子供の頃北風吹く中を向い風でぶるぶるふるえながら帰宅したことが思い出される。ところで今日は財界九州社の主催で、文人原田種夫さんの米寿祝賀会が四時半からニューオータニで開かれた。「九州文学」が惜しくも廃刊になったのが昭和五十八年十二月といわれる。原田さんの努力にもかかわらず伝統の文学誌が遂に消えたわけである。財界の応援があったのだろうが、もっと続けられるように応援できなかったのだろうか。九州の財界に、この種の文化的産物を保存する力と熱意があってもいいのと思う。プロ野球ライオンズを手放したのも、同じく財界の、一端の責なしとしない。この事は木枯らし以上に寒い。

11月25日（金）

筑豊おこしゼミナールに出席して

筑豊むらづくり、地域おこしゼミナールが近大九州工学部で行われ、講演一時間たのまれて任を果たした。近大工の先生、当局が地域にとけ込んで各界各層の地域おこしを考えるグループと行動を共にしているのをじかに見て一つの驚きを感じた。知らないことだった。それに、筑豊では多くの人々が自らにたのんで立ち上がろうとしている姿に接して、今日は疲れた一日だったが、収穫も多かった。石炭後遺症に歎くばかりではなく、新しくソフト面でも何かをつかもうという意気込みがこれら人々からひしひしと感じられたのは、これ又驚きでもあった。石炭ばなれしていこうと真剣に努力しているのである。田川から来た人は、田川福祉短大を四年制にして高齢化社会に対応する新しい分野を切りひらく大学にしてほしいといい、シルバー産業も亦新しい分野となるように行政の努力を願うといった。立派な意見と思う。全県を見渡してみても、さすが石炭後遺症を抱えた筑豊だけあって、地域おこしにはすぐれた見解が続出した。

11月26日（土）

お布施事件で那波公明氏が議員を退く

那波公明氏が議員生活34年を閉じ、途を譲るといので讃える会が門司倶楽部で行われた。五年前のお布施事件が引退のひきがねになっているようだ。まだ、一期二期は期待できただろうが、公判をつづけていくのに費用もかかって大変だろう。気の毒といえば気の毒。男らしい人で、正しく剛く生きてきたし、ひとに微笑とユーモアを忘れない人だ。お布施事件などで何日収監されたか知らないが、短くはない。それでも全く心理的な動揺はなかったという。検察や判事が政治的配慮で動いていることがわかっているからであろう。検

察や判事が政治家のあやつり人形みたいに動いてさぞはずかしかりとうすら思っている。私の選挙に関係があるわけだから、私も気がひけること確かである。壇上のご夫妻には額に入れた色紙（以閑為楽）を贈っておいた。いずれにせよお布施事件はいやなことになったものだ。五〇〇〇円でなく、五〇、〇〇〇円なら事件にならなかったといわれる。

11月27日（日）

資本論研究会に来た人達集まる

大相撲の千秋楽、知事賞を渡す役割を演じたあと、箱崎のあと山でスキヤキパーティに集った。社会党県議団事務局長の嶋津と九大法学部の河野の二人が世話役の労をとり、「奥田資本論研究会同窓会」なるものを招集したのである。二十五年から三〇年も前の頃の、話題に花が咲いた。まだまだ貧しかったし、研究会も千代町の拙宅ですることが少なかった。年末にスキヤキ会をしたことが大きな話題を呼んだし、私が現職知事だということも集まる契機になっただろう。誰しも多少は私の「薫陶」の端々がどこことなく身につけると語っていた。理くつばかりでなく、事務能力も必要ということを強調してくれたともいっていた。今日集った十三人の中では年上の大山、嶋津の二人は九大卒でなく、かわり種は医学部を出た大島、いつ卒業したのかわからぬ岩永、それから行方がさっぱりつかめなかった安達の三人である。それぞれに大成して四〇歳代中ばをすぎ躍動中の人が多い。

11月28日（月）

資本論研究会の終りの頃をさぐりたい。

昨日の資本論研究会同窓会はどのへんの人が一番若いのか気になったが、浅野君だという。福大で法学教授をしている。資本論研究会というよりは三池二〇年史を書く時の調査を集計するのに、根気強く手伝ってくれた浅野君を印象深くおぼえている。もう社会主義協会は分裂していて昭和の四二年頃だったろう、二二年前、私が四六歳ということになる。その翌年六月に分裂が決定的となり、私は輝国に転居、学生部参与、ファントム事件、学生部長というのは四三年である。昨日はどこで研究会は途絶えたのかはっきりいえる人はなかったが、「先生も多忙になって続かなくなった」と誰かがいった。又、後輩や他の縁故を引きつれて研究会に出るとい人もなくなって……とも誰かがいった。東定宣昌君は自分に責任があるようにも思うといっていた。二十五年前には研究会の終期になっていたのであらう。でもみんな顔を見れば懐しく思い出せる者ばかりであった。

11月29日（火）

大牟田再生への途を探りたい

大牟田再生の途はないだろうか。今日はふとそういうことを考えた。炭鉱を母体として発展してきたこの町。知る限りでの最盛期は人口二十二万人。それが今日十六万人を切って

いる。三井関連企業がどんどんふくれてできたこの町が、それら三井系の衰退、撤退とともに、さびれていった。宇部とは違うのではないか。筑豊でも、三井、三菱、古河、住友、貝島その他等々、大企業が石炭で栄えたが、麻生を除きみな撤退して鉱害と失業者意外何も残さず消えていった。八〇万人が五〇万人以下にさびれた。大牟田は久留米と位置、ウエイトが逆転した。文化都市久留米に対し大牟田は火が消えたよう。石炭も「八次策」のもとで急速に大牟田のぬくもりを奪い去っている。今日は県下中小企業団体と知事と語る会がセンターザであり、済生会表彰式に塩塚大牟田市長とセントラルホテルで会う機会があった。この二つの会のインパクトで私は、ヨーロッパ先進国の産炭地を見学すれば大牟田の再生の途は別途発見できるのではないかとふと思った。三井のアジアランド構想と矛盾しないで……

11月30日（水）

北の丸公園散歩

三時には各省予定の陳情が終ったので、床嶋所長の案内で北の丸公園を散歩した。二度目であるが、中に入ってしまうと、東京の雑沓を忘れてしまうすがすがしさである。以前から東京のすばらしさに感嘆したのだが、やっぱり皇居をはじめ、その他の公園の雄大さには日本中どこもかなうところはあるまい。遷都論も思い付きのように主張する人もあるが、東京が首都であることはむしろ誇りとすべきと思う。園内の手入れもそれなりによくできている。今は落葉がすごく多いが、それなりに風情を強めている。カエデの紅葉は二週間ほどピークを過ぎているようだが、それでも美しい。武道館がいいところに建設されている。木の名、鳥の名知っていたらよさも又格別であろうが、人生これまで修養が足りなかったことを恥ずるのみだ。帰途ふくおか会館前の千鳥が淵公園も散歩してみる。天皇病気につき報道陣が長期寝ずの陣を張っているのがむしろ異様。江戸城の大きさに改めて感嘆。

【「12月の予定」欄への記載】

1日 天皇病状熱少々さがる

5日 未明天皇多量出血、千CC以上、最悪、血圧40以下

15日 天皇、ここ数日意識がない模様

12月1日（木）

柿の実

寒々とした坂道を背に陽をうけて帰宅した。四時半、東京で思わぬ時間あきとなったので、こうして早く帰宅できた。浮羽筑後川温泉の佐藤さん（新泉荘）から立派な富有柿を送り届けてくれている。佐方からも柿、米など心温る荷物が届いている。昨年もそうしたが、あちこちから果物をたくさんいただくので、東京の子供たちにお裾分けということで、

啓二と直美に一梱ずつ発送した。先日できあがった干柿も添えてである。心のおくりものであればそれで十分だろう。今の子はその辺の柿の木になっている柿の実など見向きもしない。田園のあれこれのたたずまい、畦、溝、小流、畝、冬草、あれこれの農具など全く知らない。それでいいのかな、と時に思うことがある。篩い分けるという言葉は使うかも知れないが、篩がどういうものなのか知らないだろう。そういう言葉もなくなって死語になるのであろうか。柿はせいぜい十二月。あとは冷蔵して、うまくいったら三月一ぱい、近頃は商店に残るようになっている。

12月2日（金）

九月議会の尻拭い

十二月議会は今日が知事提案理由説明ですべり出すのだが、前々からなかなか調整がとれないときいていた通り、定刻になっても動き出せなかった。九月議会で共産党の高議員の代表質問が冒頭から自民の吉村の不規則騒音で中断になって、論議らしいもの何一つないまま期日内に打上げてしまったいきさつから、今回は予め話合いにより正常化した形にしたいということで、今日までに「正常化」形式を追求しようだが、各党間で思惑が違い、時間切れで知事提案理由説明に流れ込んでいった。対立は自民と共産にあるようだ。自民からは共産に、もうあんな失礼なことは発言しないと約束して欲しいと注文するし、共産からは、言論の府で他党発言妨害などしないと約束せよと主張する。本来、共産党の言い分に筋がある問題だが、多数をたのむ自民、本来言論の自由など体質的に合わない自民には、共産党に屈するわけにはいかないとのプライドがある。今日はまともならぬまま、次の代表質問の日まで先送り。

12月3日（土）

漁協青壮年との対話

西の浦の漁村センターでの対話のつどい、山北県議も同行。広報課と漁政課が伴行。筑前海区の各漁協の青壮年部の代表十数人が対象で、西の浦漁協のイリコ加工場の現場視察が追加されていた。片ロイワシの荷揚げ現場にも折よくめぐり合えた。すべてが機械化された漁村といえる。先方は県や国の補助のおかげと深謝してもらって、当方かえって恐縮。対話の中では漁礁、掃海、密漁、遊漁者のモラル、後継者問題等々いろんな問題が話題とされたが、和気あいあいの中での対話であった。魚価の低迷、消費者ニーズの変化（米食習慣の減退）など漁業の将来への心配もある。がこれらすべては過渡的な諸現象とみて、将来は悲観的ではないと思うと私は説いておいた。米と魚が日本文化の根底にあるということが、いずれは再認識されるに違いないということ、又漁業者の方でも、水産物の二次、三次加工に意を注ぐべきではないかということ強調しておいた。遊漁者との協同、共生関係のことも。

12月4日(日)

五十余年の身近品の発見

刃物とぎの中に、中学生時代の解剖鉋があった。五十余年私と共にあるものだ。ピンセット、それから随分いつも使っているものに金槌がある。ノミ、ノコギリは使わないし使えないだろうが、作業時間用にもっていたものだ。カンナもある。それから最近見つけたものに、中学二、三、四年一表になった通信簿がある。五〇年の歳月、他にそんなのは気づかないが逆にいえばなぜ私の身近にあるのか、偶然というしかない。佐方から宮崎へ、雑餉隈、春日、箱崎、千代町そして最後がこの輝国。何とはなしに持ちまわったのだろう。手工の小細工が好きだということかも知れない。そういえば、中学三年の時、授業中に作製した机上用の本立ては今も私のテーブルの上にある。実用に供している訳だ。普通の人なら捨ててしまうだろう。こんなところに執念みたいなものがあるのかも知れない。この六十余年は激動の昭和史だった。生活内容が物的面ですっかり変っている。でも不可分物があった。

12月5日(月)

茂登山畜産団地

午後大牟田の茂登山肉牛飼育開拓団地の視察に時間をあてた。何年も前から知事視察を要望しつづけ、やっと実現したとのこと。昭和二七年からの入植という。素牛の大部分は北海道から買い、生後二〇ヵ月ほどで成牛として売り出される。飼料は輸入もの。約七〇〇頭を生産するという。機械化された協同施設、ニワトリも八万羽かしら飼っており、両方の糞尿で堆肥の生産にも乗り出し、茂登グリーンの名で出荷している。その肥料を利用したのミカン園も数十ヘクタールに及び、この団地の主要生産物となっている。以前は単なる荒野だったのに、そして入植当時は畑作をはじめたにすぎなかったのに…今年商どれくらいの出荷額かときいたら笑って答がなかったが、全く活気のある団地であることは間違いない。県や国から補助してもらって…と感謝されたが、やる気があつてのことである。「人間がおれば食っていけない事はない…」の私見が見実践化されている。筑豊の鉱害復旧と全く違う。

【欄外記入】

山内小学校校長室で大牟田再活性化について要談した

十一月二九日の日記

12月6日(火)

衰弱を覚える

今日の検診では血糖が二八〇をこえ、肝臓の数値もまた高かった。糖尿の専門医、それに皮膚科、整形外科の先生も問診に来てくれた。食飼養生をもっと徹底するようにとの注意

があった。皮膚の痒みは一応薬を処方してみようとのこと。両手の第一関節（各指）についてはリウマチではなく老人性の変形とのこと。あまり要領をえない診断だったがまずは健康に更に注意すべきであることだけは確かだ。依然睡眠が十分とれないのが大きな悩みである。二種の安定剤を併用し、就眠はまずまずだが、早目にトイレに起きてしまう。これまで一度だったのが、今は二度になってきている。ひとは私の顔色をみて「疲れている」「やせたらう」という。老衰に向っていることは外見的にもたしかかなようだ。今日も一日キリキリ舞いで夜のパーティにまでつき合わされる。この夜の時間が私にとり主観的に一番つらいことなのだ。

12月7日（水）

地域懇の再生はむつかしい

昨夜は、地域懇系の木梨、森、権藤の三人が、飲んだ勢いで、八時頃に来訪した。権藤は久しぶりのことである。木梨弁護士も久しく会ってなかった。権藤は六〇歳になったという「耳順」の年ですねということになった。忘年会だったんですかということ、いや久方ぶりに駄弁ってみたくなくて集っただけですよという。そしてやっぱり地域懇みたいな集まりがほしい、こいしいという。その心境で、ついでに知事宅に行って一寸話してみたいということになったのだとのことであった。権藤氏はこの夏だったか四五日間の中国西域の旅をしたことを改めてのべた。私のように行政的事務的に旅行するのではなくて、学术交流だから有益な旅だったと思う。うらやましいことだ。それにしても、地域懇というのが、県のような地方自治に太くつながる興味をもつものであるとの私の思いは、この三人にはなかなか通じないようだ。だから地域懇は私が知事になって、先ぼそりに消えてしまったのであった。

12月8日（木）

吉永允俊という人間像

代表質問の二日目、公明党の吉永允俊、これは以前から頭にくるようなことをペラペラ大きな顔をしてまくし立てる男と思っていたが、今日は、従来に輪をかけて、いやらしい印象を私に残した。再質問に立って、知事に注文するといって、根掘り葉掘りで答弁のアラセせりをする。寸しの瑕でも取り上げていく。相手より自分が偉いんだといわんばかり。たかが県議、そして代表質問。そんながまだ他にもなくはない。自己顕示欲が先走って、謙虚さが微塵もない。八時半から答弁検討をしたが、彼の部分は提起問題がほかの人の三倍もある。早口で矢継早に質問をたたみかける。予告質問の中から二つ三つ間引いた形になる。答弁を追っかけているうちに、質問になかった部分に気づかず、答弁したのが一件あった。「問いもせんのに答えるなんて・・・」となじる。「知事は質問をきいているんですか」「知事は事実を知らんのではないですか」「現在形での答弁ですが、これは過去形でないと

いけませんよ知事」といった具合である。ほじくるのが人生といった男の見本。

12月9日(金)

相手をやっつけるだけが能ではない

議会・議員というものはこういうものだとわかりつつも、やっぱり昨日の吉永の発言には腹立たしさを覚え、さらに進んであわれささえ感じてくる。あんな発言をして、知事をやっつけたと思っているのであろうが、自己顕示欲の出しそこねというべきではないだろうか。あれだけたくさん、ぶあつい質問文を早口に読み上げての質問だったので、答える方も応接にいとまなく、事務方も、予算をつける約束となるような答弁が用意できず「検討します」の連発となる答弁を用意する。どんないい提案でも、十分意思疎通ができてなく、執行部をやっつけ、びっくりさせてやろうとの姿勢の質問だから、まともに答弁できない。「思いつき」の投げかけでしかない。朝刊をみても追及はしたものの成果があったようには報道されない。政治家としてもっと揉まれる必要があるだろう。相手に腹を立てさせて議場のような一方的な所で、我勝てりと自讃しても人物が小さくみえるだけでしかない。

12月10日(土)

高齢化問題(一)

北九の厚生年金会館で障害者の日(昨日から一週間)「広がる希望のつどい」(作文表彰と発表、南こうせつ氏コンサート)に出席した。帰り原田民生部次長が車中同席したので、福祉行政についての話題でもちきった。昨日は議会空転の時間を利用して彼が、高齢化問題一般論を、私が出した宿題だというので、朝日新聞の「高齢化社会を考える」という本のまとめをして私に報告したといういきさつもある。問題点はたくさん出されているが、厚みがまだ施策として足りない感じが私の平素からの印象である。県では老人福祉課というのがあるが、これは老人施設の取締りに忙殺されていて体系的に高齢化対策を考える課になっていないらしい。又この問題は各部にもまたがった問題でもある。新年の知事講話あたりで、私の方から少し積極的に取り組むよう提案したいとも思っている。北欧諸国の印象が年頭にある。(つづく)

12月11日(日)

高齢化問題(二)

昨年夏北欧を一寸旅行して印象に残ったのは「負の社会有」ということであった。昨日の厚生年金会館での作文の中でも苦悩がよくあらわれていた。今の日本では誠に「個」がプラスに突出している。受験競争やマネーゲームがそれを象徴している。それが空缶放置、広告の氾濫、などとなってあらわれ、障害者や高齢者に対する無関心ともなってあらわれ

ているのである。このようなマイナス現象に対し、「社会的責任」であるとの基本的な考え方がスタートにおかれなくてはならない。個の責任というよりは、それを前提としつつも、なお問題となる場合は社会的に解決していこうという風潮が必要である。国連には二極あって、平和を軍備で維持しようとの努力（米、ソ、日その他）と「負の社会有」（社会的責任）こそが平和の原点であるとの努力（北欧諸国）とである。殺し合いでなくて、生命を大切にすることによって平和を、と殺し合っても平和を、と生命を大切にすることによって平和を、との二極だ。

12月12日（月）

熱意があってもできない正義がある

昨年同様、県民の会から、来年度に向けての知事要請のため代表の来訪があった。社共代表はなく、県評の大塚、会の方から山川、学文の内田、代表の内田（一郎）らであった。いろいろ私の方からも話したが、要望の中でできまわりのべられている中で、非核宣言と政治倫理条例についての感想をとくに伝えておいた。この二つは知事にやる気がないと批判もきかれるから、彼等代表に事情説明をしておいた方がいいと思ったからである。二つとも知事がしようと思ったからとてできる問題ではない。むしろ議会状況、更には与党の情勢も必ずしも前向きではないということだ。とくに政治倫理条例については知事だけでなく県議も対象とすることになるだろうから、乗り気になれないという人もいるのだと説明しておいた。側からみると二つとも知事の熱意不足とみえるだろうが、こうした情勢を内から見ると、思ったようにはいかないのだとの解説である。県民の会の代表の人達も、そうだろうなと感じたと思う。

12月13日（火）

臨江垂釣を思う

目加田さん編の「漢詩日曆」（今年の一月初一日刊）を時に読むのだが、解説をみてはじめて意義が解せる。力の到らぬのはもちろんだが、努力もその積み上げがない。日に一つぐらいは軽いと思ってとりかかるが、やがて放置してしまっただけでなじまない自分。だがどことなく又ひかれてページを繰る。十二月九日のがややわかり易い

千山鳥飛絶 萬徑人蹤滅

孤舟蓑笠翁 獨釣寒江雪 （柳宗元）

九世紀の唐詩人、流されての生活の中での作らしい。山にとぶ鳥なく徑に人影ないが、雪の川面には蓑笠をつけたひとりの翁が無心に釣糸を垂れている。千山、萬徑に鳥と人のないことをいわずもとは思うが、これを先にのべることにより釣りをする翁の姿がぽつんと更に引きたてられている。今の拙宅の座敷の掛軸は「臨江垂釣図」と題したものだが、そのものずばりだなと思った。極地をのべたような気がする。

12月14日(水)

一期一会

何とはなしに片手にした松原泰道著「一期一会」(文庫版新書版)やっぱり一度は目を通した本であった。でも新鮮さを感じるのは気分が違うからであろうか。一期一会は井伊直弼の「茶湯一会集」の中に出てくる言葉と書いてある。人生のすべてを「今」と考えるこの表現のすばらしさを改めて教えられる。とっさに小学校唱歌

秋の夕日に 照る山紅葉 濃いも薄いも
かざある中に 松をいろどる かえでやつたは
山のふもとの 裾模様 谷の流れに……

というのを頭に浮かべた。これだけではなくいろんな唱歌、それに絵画のあれこれ、一期一会という見方をもっとみると面白い。先日ヘリコプターで玄海の海岸沿いに東北にとび、北九州市を異なる角度から見、山々のまだ残している紅葉に、無情感を覚えたが、これも一期一会でひらめきかえった。何だか残り火を大切にしている自分を別に見たようにも思うのである。

12月15日(木)

鉦害復旧工事にいちやもんがついている

一般質問予定者から四人におりてもらって昨日今日七人ずつで十二月議会は今日一応ヤマをこえた。まだ波の立つ種がないとはいえないようだ。何かないかとおつねにさがしている者があるからだ。なければ幸いというしかない。言論の府といってもそこにも寄生する者がいる。一般質問がすんでやれやれと思っていたら、すぐ三役会という。何だろうかと行ってみると、方城の鉦害復旧事業につき、鉦害はなかったのにとこの訴訟が知事相手におこされているというのが議題。復旧すべきでないのを工事したのは国費の無駄づかいということらしい。何で今それが・・・と思うのであるが、「波」といってつかみ出している人がある。十年も前の話が、今もち上がっている。元にかえせというのか、弁済せよというのか知らないが、鉦害復旧事業をめぐる地元が二派に分立し、その片方に某県議が立ち、何かをねらっているらしい。カネになるということなのだろうか。筑豊にはこの種のものがたえない。だから筑豊というのだろうか。

12月16日(金)

小倉百人一首和漢朗詠集を開き見る

三春去盡夏将来 三春去り尽くして夏将来らんとす
裊裊薰風感慨回 裊々たる薰風感慨回る
香久山邊誰耐見 香久山の辺り誰か見るに耐えんや
白衣点点正愉哉 白衣点々正に愉しき哉

春過ぎて夏きにけらし白妙の
ころもほすてふ天のかぐ山（持統天皇）

有明之月感懐催 有明の月感懐催す
耐見暁天残影回 見るに耐えたり暁天影を残して回るを
風趣何宜芳野里 風趣何ぞ宜しき芳野の里
剛斯推雪白皚皚 剛に斯れ推雪白皚々 [推は堆か]
朝ぼらけ有明の月と見るまでに
吉野の里にふれる白雪（坂上是則）
太田虹松作 城戸築山筆の小倉百人一首和漢朗詠集より

12月17日（土）

軍歌に思う

軍歌をときに口ずさむ。年のせいだろう。「ここはお国を・・・」「とどろく砲音・・・」「煙も見えず・・・」みんな子供の時に身についたもので自分が軍隊に行った頃のもの何だったか、流行の程はよく知らないし、すぐ念頭に浮かばない。それにこの秋までかなり読んだ戦記ものの読後感は悲愴の二字につきるが、ひょっと思い当ることは、この戦いにはどんな武勲があっても感傷が残ってても、何百万、何千万の人の体験であっても、メロディとなつては残っていない。詩句には多く残されてはいるだろう。が、多くの人が口ずさむという事にはなっていないと思う。勝ったのと負けたのとの違いだろう。高木二郎氏の昭和萬葉集は知っている。が口ずさむことはないものだ。いわゆる軍歌は勝利の側のものであることがわかる。「さらばラバウルよ・・・」も未だ敗北を知らぬメロディではないだろうか。敗走と内地無差別爆撃は絵にも歌にもならぬ地獄そのものだったといえよう。

12月18日（日）

連合福岡の発足

連合福岡の結成大会があった。昨日の大阪に次いで全国県レベルで二番目という。昨年十一月中央で連合ができ、今年二月から十ヵ月の準備期間をへて今日の結成である。統一労組懇系統はこれをボイコットしているし、官公系が入ってなく民間だけである。数からいえば、県評と同じ程の一五万人である。来年は公務員系が入会するかどうか樂觀は許さぬものの努力はするとの声が強い。今日の結成大会では幹部の者が来年はメーデーを一しよにしようと言っていた。邪魔が入ったり、混乱したりも予想されなくはない。西鉄の池松、九電の鷺頭がトップ揖取りである。シンは反共である。県評の坂本、松田がこのあとどういう仕事をするようになるのか知らない。夜の記念パーティの時坂本が私に知事あいさつは熱いラブコールでしたわといった。坂本、松田も反共のサイドだから新しい役割に就く

のだろう。共産党、統一労働組、県民の会が今後私に対してどう対応してくかが問題である。

12月19日（月）

言葉狩り進む

少し以前言葉狩りといわれていたことが、今はかなり厳しくなった気がする。昨日だったか、新年用テレビ取材のとき、プロ野球について「気狂いのように勝敗を見守った」と私がいったとかで「あの部分は消去するように」と広報から放送側に申し込んでいた。今日は夕方のテレビで田中角栄氏の秘書早坂氏が「バカチョンでも・・・」の言葉を対話中にはいたので、放映の終りの時にアナウンサーが、それを指摘して視聴者にことわるよう早坂氏をうながしていた。「メクラ判」というのがいけないのだから、メクラ蛇におじずという諺はなくなるわけだ。ツンボサジキというのも消される。「片手落ち」「片腹痛い」も該当する。カタワというのはもちろんである。しばらく言葉狩りはつづくだろう。言葉なんだから当分は不自由さがあるかも知れないから、時間がたつにつれて不自由さはなくなるだろう。身辺にとっさに指摘されそうな言葉がまだまだあるだろう。要注意である。

12月20日（火）

日本製品の品質のよさを思う

中国や韓国との交流がさかんになって来て、物の流れも、多くなる。でも、日本の商品とくらべ、こうした国からの土産品の精巧さはやはり劣るといふ印象は蔽い難い。私は書道具につき、中国のもの例えば墨はヒビ割れがひどく筆は穂先と柄のくっつけ方が粗雑であり、硯石と硯箱の、とくに硯箱の机上での安定性（ガタガタゆらぐ）を前から感じていたし、紙の質もよくない。今日は、韓国仁川からの来客からいただいた螺鈿ものの立派な箱では、その金具がデリカシーを欠くのでせっかくのねうちが割をくうとの印象を受けたのであった。台湾では・・・とひとにきくと、似たりよったりだという。韓国車ポニーは評判がいいときくが、エンジンは日本製という。日本産業は品質管理がやかましいといわれるが、ニーズ諸国ではその点未だ一ということなんだろうか。逆に、総じて日本の品物が立派なのに驚くのである。

12月21日（水）

「一期一会」で思う

一期一会は井伊直弼（一八六〇年没）の著書「茶湯一会集」にはじめて見る熟語である。この書は彼が石州流茶人としての茶の湯に対する造詣の深さをよく物語っている。〔松原泰道著、一期一会、禅のところに学ぶ〕P.16 今日県議会が「空転」して待機させられている間に読み進めたのがこの本である。心とか業とか縁とか見方により様々に考えうるもの

だと感心させられる。一二四ページに「すべて仏法を守る天の神々」とのくだりが出てきて、仏と神とが並んでいるのも異様に思えるが、すなおに解してよしとせねばならぬのかも知れない。「叱るころ」のくだりを読んで、私の好きな「恭則寿」を思いおこした。「長生きしたかったら、なんでも物を大切にすることサ！」P.183 というのである。私のケチくさい根性が肯定的に述べてあるので意を強くした。水の一滴も、紙の一枚も、飯の一粒も、もったいないと思うのが今の私の生活信条なのである。

12月22日（木）

十二月議会終了 後直ちに 上京して思う。

天時人事日相催 冬至陽生春又来

（七六六年 杜甫の詩の一節）この詩のように、今日は冬至で一点の雲もなくもうそこまで春が来ているのではないかと思わせるような天気であるが、誰も彼も忙しすぎると思うほどあわただしい年の瀬せまる一日であった。なぜこうもせわらしい動きをせねばならないのか得心がない。流されるままになっている自分がかわいそうだとさえ思う。それでいて、その流れから逃避できないし、逃避したらいいとの判断もできないでいる。東京に来る機中で機内放映を何とはなく見ていると、雪に包まれた自然の中の海、流水、魚、鳥、小動物が活動的に美しく私に訴えているではないか。私の手には一冊の本があり、弥生時代に米を作りはじめ支配階級ができたであろう頃の北部九州のことが書いてある部分に目が動いている。あれとこれと自分と、なぜに、と考えさせられる一時であった。

12月23日（金）

寒山寺

前記漢詩日暦の十月二十六日のところに有名な次の詩がある。

楓橋夜泊 張継 唐、生卒年不詳（七五〇代の人）

（月落鳥啼霜滿天 江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

楓橋は蘇州郊外の橋、姑蘇は蘇州の古名

愁眠は旅の憂さに眠れぬ状態。それは考え多く又考えもせぬ心境ではなかろうか。江楓は岸辺の楓の木々を動かす風。張継という人は地方の役人らしい。一〇〇〇年以上前のことながら、今あってもおかしくはない。こういう心境になってみたいものだ。夜半船の中で宴席をもち、ほろ酔いで眠りこけそうだ。考えるとなく考えもせず、酔っぱらって半ば意識をなくすならいいが、老いふけて意識もうろうとなつてこうなることもあるかも知れない。それなら早目に逝った方がいい。役所の階段を踏みながら数えて足をたしかめるこの頃の私。

12月24日（土）

社会党陣中見舞は代理で

昨日は秘書室長が上京してきて、消費税ごり押しの国会運営（参議院）での牛歩抵抗に対し、知事が直接激励にいはどうかと提案してきた。この日は中食会などで自民党に来年度予算で陳情したばかりなのに、社会党に陣中見舞に行ったりするとバレるだろうし、それでは事面倒になってくること必定である。そういう意味で、東京事務所長に意を伝えるようにしてもらった。所長は細谷代議士のうちまで行って私の意を十分に伝えてくれた。昨日の中食会についていえば、いつものように、尾形代議士は、こちらの陳情に対して、いつも向うから当方にああせよ、こうせよと注文してくるクセをもっているということだ。遠藤政夫も似たクセをもっているが、選挙が近まったせいかな今回はそれがなかった。民社の北橋はていねいな印象を与える男だ。太田もていねいだが、山崎はツンとしている。自見はまじめな印象を与える。福田幸弘氏は出席予定だったのに急死の報だった。

12月25日（日）

家庭内離婚

今年の四月号から『社会主義』が『進歩と改革』に改名している。ポンと机の上に置いていた一九八九年一月号に目をやり内田洵子「高齢者と家庭」を読むことになった。高齢者問題が女性の問題であること、家庭の「崩壊」が「多様化」がひどく進んでいること、などに論及してあった。異議なしである。要は誰しも自立が必要であり、とりわけ女性にそれがいえるという。家庭内離婚という皮肉も論議されるこの頃である。直美が正月休みに帰ってきた。特に感傷はない。親子で迎える正月はいいのではないかとの私の意見に、みゆきは「平素は一しょでない方がいいという人も多い」という。二世帯同居は必ずしもいいとは限らない、との意見である。孫がいたらと思うこともあるが、みゆきはそう思わないという。私はテレビを殆んど見ない。他人が入り込んでいると痛感するのだが、彼女は全く別。家庭内離婚の実態例かもしれない。二十一世紀はどうなるだろうか。

12月26日（月）

天皇の戦争責任

長崎の本島市長が「天皇に戦争責任がある」と発言したことについて、右翼がさわいでいる。これは十二月の市議会の中から起こった事だが、今日はこれについて埼玉県知事が原爆被災市長として気持は理解できると記者会見でいったとの記事が出ている。ただ天皇重態の今その発言が適当でないともいえる云々とも。長崎市長の発言は共産党市議の質問に答えたものようだ。夕刊には飯塚の三浦某女史が記帳所設置につき、県費の不当支出として奥田知事に費用を支払えとの訴えをおこしているとか（同人は県の監査請求を出して、却下されるという経緯がある）。今日歳暮の礼で多川博氏を訪ねたとき、上ってお茶をとい

われて、上りこんで話した話題に、天皇の戦争責任に付き、ありやなしやと、今問うのはタメにする問いではないかとの私見をのべておいた。責任ありというのもいいが、極東軍事裁判もあった事だし、その前に天皇はマ元帥に、ユー　メイ　ハング　ミーといったといわれている。私は責任ありと思うという人があってもいいし、だからといって押しかけてさわぐのもよくない。

12月27日（火）

木梨忘年会

午前中庁内でゆっくり仕事をしたが早朝龍功二郎氏が来宅したのにはびっくりした。再び県庁に会い、私の揮毫してあげた「思無邪」の壁掛に表装したものを写真にして見せてくれた。午後は北九、筑豊のあいさつまわりをして夕方三井アーバンホテル地下日本亭で木梨氏が集めている彼の友人達の忘年会にとびこんだ。木梨法律事務所、木梨一家が半分占めていたろうか。それに知人の「ゆう苑」の渕上礼蔵氏のほか学者系統の石村、中尾、森、権藤それに私、船小屋温泉の樋口軒経営の樋口夫妻など集めて二十余人、木梨一家といえるつながりであった。こういった集め方をするのも忘年会の一つの方法かなと思った。「ゆう苑」の渕上氏らの話の中に天皇の病気が一月十五日（成人式）の前に問題になったら、着物の売行きが止まるといって心配があった。今年は正月のしめ縄が売れないらしい。宴会も自粛が多くて商売上ったりとの声もある。外国旅行は一段と多くなっているようだ。それよりも年末年始一週間に事のないように祈りたい。

12月28日（水）

再び、天皇の戦争責任の話題が、こんどは奥田問題に

長崎の本島発言について、福岡市長が意見を求められ新聞記事になったと思ったら、今日の記者会見で記者質問をうけ、私の答えが更に大きく報道された。昼のテレビと夕刊で、本島発言に対し、肯定かどうか問題にされ、共産党系からの私に対する批判電話は肯定しなかったとしている。むしろ否定したとさえ伝えられている。秘書室も対応に苦慮しているし、広報も突飛な発言に苦言をはく有様。革新ならば本島発言（天皇に責任あり）を肯定すべきなのに知事はそれをしていない。共産党長崎市議の質問に無理があるとして奥田は之を否定的にとっている、それは問題だ、赤旗に書くとのこと。明日の朝の赤旗にのるのだそうだ。私は長崎市長の発言を直接に反対とはいっていない。「責任あり」という場合、「責任」の中味に合意することなく「あり」「なし」を論じ、歴史の問題になっているに今なぜ問題にするのかわからないと言ったまでである。何故に今なのか、責任とは何かを私は問題にしたまでなのに、マスコミは騒いでいる。

12月29日（木）

何年ぶりだろうか佐方に行って（大石君が随行の時だったから丸三年か）

久しく見なかった佐方の養母、天皇と同じ年齢。全く腰が曲ってしまっているが、何を食べてもおいしいし、顔色も健康そうに見える。自分で用も足せるし、炊事仕事もボツボツできるという。和子（次女）が近くにいて一日に何回も見に来てくれるので助かるという。それも婿さんの倭さんがいい人だから和子が何回でも行ききするのを寛容にみてくれるため、有難く思うという。私は章君、和子夫妻と共に墓参して帰途についたのだが、別れる時に養母はるをさんは車（章の運転）の発車する所まで手押し車をおして見送りに出て来て、車内から手を振って私が別れをつけると彼女は涙ぐんでいた。表現しようのない感動が一気にこみ上げてきたのだと思う。私が佐方の奥田家に養子に行ったのは昭和十年の正月。だから五十四年前ということである。そのかんのことを考えると、私にも同じような感動がこみ上げてきた。ほんの一瞬の別れのシーンなのだが……

【「天皇問題 戦争責任 “もうすんだこと” 奥田福岡県知事発言に 批判と抗議が相次ぐ」
『赤旗』1989年12月29日）の切り抜き読み込み】

12月30日（金）

私が最長寿になったほどに短命家族だったのだ

正月餅をつくという事を口実にお互いに会おうと前回約束して今年も実行できた三人きょうだいである。長男光夫は生きていたら八〇をこえてとか、美代子が生きていたらとか話し合っ、残っている三人だけでも会おうというのであるが、それも私が提案したらしい。年取った証拠だと弟はいう。私はあと何年かわからない。来年会えるともわからないんだぞとっておいた。今の子供らは三人もの兄妹のある例は少ない。われわれ十二人もあったのが、それぞれの理由で先んじている。七二兄が三年近い春に逝き、現在のところ私が、祖父、父母、兄弟を含めて、この時点で一番長命である。これをどこまで伸ばせるかだ。祖父も、父も武男も正一も六〇そこそこで逝き、あとはもっと早い。総短命家族といえた。母も美代子も四〇代の半ばで逝ったので早死の部に属する。こんなことを考えること自体、将来に自信がない証拠なのかも知れない。これからの子はこういう事すら考えまい。

12月31日（土）

おかしいかな？里帰り行動

少し早目に起きて身支度をすませ、オモヤに行って暮れの挨拶をした。貞子さんは82歳になったという。お互い、いつ見おさめになるかも知れない。昨日挨拶に行った小林あや子さんは74歳とか。こちらは私らの仲人さんでもある。私が知事でもなかったら挨拶に行かないかも知れないし、受けてくれることもないだろう。年末に私が刀出に行くこともなかっただろうからでもある。おしかけるように、このような挨拶ゆきをする自分を変だなど

感じないわけでもないが、なり行き、自然体で考えるしかないだろう。昨日の餅つきの場合面に吉田繁太郎氏が来てくれたのも、一昨日イトコ半や甥たちを九一、和代が集めて忘年会をして歓迎してくれたのも、やはり私が知事だということと関係しているが、これもあっさり受けとるしかないだろう。このような動きをするのも、逆に又何もしないのも何か一寸不自然かなと思ってみた。天に向って、すなおな気持ちで行動しているんだから許しておくというしかない。

【欄外記入】

一年将盡夜、萬里未歸人 P.491

回顧録

除夜の鐘をきくまでもない、平凡な三十一日となった。外は雨、書齋に入るといくらでもすることがある。子どもの頃は正月が待ち遠しかった。することが少なかったのだろう。今は多忙すぎるだけではない。物余りでもある。「進歩と改革」誌に内田洵子さんが、「家庭内離婚」ということを書いている。私は強く肯定的に読んだ。この一年も、そして今日のこの暮れも、それを痛感した。姫路・佐方に行って帰ったばかりだから、みやげばなしもないわけではない。正月料理も出来上ったの夕食だから、ゆっくりと、そのみやげばなしでもすればと思って切り出しても、みゆきも（直美はもちろんといってよい）全く相槌を打たない。二人ともテレビに向って口だけ動いて共通のことをしている。私はみやげばなしを半言でやめてしまい、夕食がすむと無限に用のある書齋に引きあげた。刀出で、九一が、いみじくも指摘した、……一彦も啓二も（直美も）刀出には関心がないネ……と。佐方はみんな元気だったよと私がいうと、みゆきは「フン」といったきり、直美は全く。二日間佐方、刀出に行き、できる限りの親族と面をあわせ、言葉を交わし、二つの仏壇と墓参もした私だが、正月を明日に迎える夕食時のホットニュースでもある故郷の模様につき聞こうともしない二人、テレビの方が魅力があるらしい。

補遺

「弘法は筆を選ばず」 四月二十八日（於九州厚生年金会館六〇四号室）

そうではない、筆を選ぶんだとの意見がある。私はどちらも捉え方の側面いかんでは真であると思う。弘法はまず筆を選んだだろう。そして選んだ筆ならどれによっても弘法らしい立派な字ができただろう。選んだあとは心技であるはずだ。おそろしきまでに雄渾なあの字は、弘法でなければ書けないだろう。しかし弘法はいつもではなく、他の時は母のようなやさしい字も書いている。帰するところは心であろう。宇宙を一定の底辺とみなし、その上に成立する無数の円錐の頂点に、それぞれの心がある。その中間が万物であり、社会であり歴史である。心は宇宙、自然、社会の結晶であり、それらを通じて自己表現する。弘法はその時代に、日本に生き、筆跡の世界ではそれなりの活動をした。筆、墨、紙のい

かんが彼の書となって残っている。が所詮、彼が心技を練磨したからそうできたのであるに違いない。どの条件もみな必要な要素である。その意味で彼の心には宇宙と自然と社会が結晶していたに違いない。その意味で、心の中に宇宙があり、宇宙の中に無数の心があるといえよう。その心も動いているし、宇宙も動いている。隣合わせた心と心が人間にとっては縁であり、自己練磨の手段ともなろう。どういう縁を選ぶかもそれは自己責任に属することが大きい。

日韓親善交流フェスティバルは五月一日西日本総合展示場で大韓民国総合展で頂点に達するが、その展示の中で、日韓交流史を説明した部分に秀吉の朝鮮征伐や日韓合併のことが出てないとの批判が上っている。事務レベルでの説明では、文化・民間交流をとりあげているし、両者納得の上でそうしたのだから今は批判されてもこのまま進めるしかないとのことである。取り上げてもいいとは思いますが、表現をするのに苦慮するというのが実際だろう。朝鮮征伐も日韓合併も日本での歴史的用語であって先方からどう表現すれば納得いくか、先方の表現でこちらが OK となるかわからない。これは交流を進める中で、表現方法を探って落付点を見出す手段をかけるしかないように思うのだがどうだろう。

五月三十日「家族」の崩壊、及び「地域」の崩壊を憂うようになって久しい。が未だそれが頭に重くのしかかっている。随行の斉藤君が話していた。三人の子のうち、上と下の子は中の子を介してしかモノをいわない。子供たちは親と別の食事をする。食べたい物をいつでも引っぱり出して食べている。……昨日ふくおか会館から啓二に電話した。サリが赤ちゃんというよりは既に幼児になり六月から保育所に行くという。二歳四ヶ月である。啓二がいうには着る物や手なぐさみ物について、我を張って、親のいう事をきかないという。その啓二が、私たちに対しては実に愛想のよくない対応をする。近頃の学生は親から乞われて大学に行くといわれる。親は子に老後を託そうとしないし、子は老親を見ようとはしない。吉村裕子君が、長男が勉強しなくて困ると書いてきている。同じような手紙を何回もよこしてくる。親は祈るように進学を希望しているのに、子は勉強しない。テレビゲームに耽っているとのこと。運転手をしていた是松氏が近頃というかも一年も前に家を建て直すというから、あの家でどうしてかときくと、息子が結婚して、家屋が気に入らんから改築するといっているとのことだった。子は親の家の土地を使っても親が住んだ家屋には住みたがらないのである。何と、世代の断絶のひどいことか。「二十一世紀……」という言葉があちこちで使われるが、それは世代断絶の世紀いうべきかも知れない。それにどう対応していいか私にはよくわからない。斉藤君は、すべて個に分解されてしまいますねという。そうかも知れないが、それでいけるのかどうかなのだ。次の世代のことなんだが……

七月二十七日、昨日ソウルオリンピック宣伝隊が福岡にやって来て県庁表敬をし東公園で交歓、ホドリ君（隊）の踊りの披露があった。全隊員五〇人ほどだったと思う。若い人、はつらつたる一群である。在日韓国人だそうで、通訳は不要だった。韓国も近年は NICS 又は NIES の先頭を行く国として、その活力が注目されているが、九月のオリンピックが活力の一層の増大の契機になるだろう。踊る若い人達の熱気の中に、それが感じられる。偏見というのがあって、日韓両国人の間にはまだ根強くそれが残っている。韓国の南鮮としての北との対立も一要因だろうし、政治的な不信の諸問題も偏見払拭の障害になっているかも知れない（韓国機墜落二度の原因不審）、その他いろいろある。韓国民の中には「日帝支配」の歴史を忘れず排日感情があるという。又思考停止と関連してブラジルでは、「朝鮮人、支那人チャンコロ」という見方が未だ消えずにいる。今日のホドリ君一隊の踊りをはじめ、ソウルなど実際に見、ふれてみれば、すべての偏見は時代おくれだということがわかってくる。

七月二十八日、今朝は九段会館での総評（最後の？）大会に出て挨拶をする。昨夜は東京後援会の懇親会の席で長峰氏が総評会館内に知事後援会事務所があるのは奥田さんのだけ特例、組織改革でこの事務所がどうなるか心配ともらしていた。懇親会では三期目もという声が一般席からもしきりに出たが、総評の労戦統一組織改革で、前途は揺ぐことも考えられる。政治・選挙は又別にといい声も強いようだが、発足した「連合」の内部が、自律的にこの面の問題をさばいてくれなくてはならない。三期目に挑むかどうか私自身健康問題をはじめまだ不確定要素は少ない。推す側からすれば安定した候補が欲しいのは当然である。総評大会の成りゆきやその後の情勢推移がおのずからこれらの問題をきめていくだろう。

八月二十五日 近頃済生会福岡病院で点滴と検診をうける機会を多くとって、今日ひる前にもそれがあった。以前から指摘されていたことだが、リウマチを示す数値が非常に高いし、血糖は二三八、尿糖はプラス四で、これまたよくない数値である。小川先生はリウマチの諸兆候についていろいろ問診されたが、指の関節が痛いのと、右肩腕に若干筋肉痛を覚えるという点に私は状況説明を加えた。リウマチがどんなものなのかは今後しらべて自覚を促す必要があるだろうが、それ以外にこれといった兆候はない。糖尿の値については、今日も食後二時間半、このくらいの数値は特に問題になるといえないようだ。夕方空腹時になると、血糖も二〇〇を割り、尿糖もプラス一か二のあたりに落ちる。もちろん問題がないとはいえないけれど、なだらかな老衰の中にあるとも自分では考えている。睡眠が依然問題である。眠りにつくまで床の上で七転八倒するが、苦痛というほどではなく、いつしか眠りについてはいるが、三～四時間すると必ずトイレに行くべく目がさめる。そのあと用心して安定剤を用いて眠りにつくが、朝の目ざめは必ずしも爽快ではない。二

種類の安定剤を半分ずつ就床前とトイレに起きた時に服用する習いになっていて不十分とはいえ眠っているのに、日中は頭のさえがよろしくない。これが自覚的に一番問題な点である。

九月二十三日、一昨日の済生会病院での検診、またよくない数値が出た。午後五時半、中食後三時間半もたっているのに、血糖二五二、尿糖プラス三、血圧は一三六と八二、どれもこれもよくない。右肩上膊筋肉痛はつづいている。食餌のとり方に用心が足りないのか、この日は、中食後に何の間食、コーヒーもとってないのにこうだから小康を感じた一時とくらべ後退している。血圧もいつもは一二〇と七〇を少々上まわるのに今回は不思議なほど高い。なるべく横になるように医師の忠告はあっているがなかなか実行できるものではない。睡眠にはできるだけ多くの、八時間以上の時間を努めてとっているが、眠りの不十分さは否めない。日常の活動に活気が出ないと自覚がつづく。肝臓の数値は四〇、六〇のところでも小康を保っている。これという決め手がないので当惑する。何とかして血糖値を一五〇ぐらいに下げられないものか。これで重症ならドクターストップがかかり入院ということになるだろうが、その手前なのかも知れない。

十一月三十日 ふくおか会館で予定よりぐっと早く覚めてしまった。たしかに考え事をしていた、もっと床中にいようとしたのに、さえてしまったので離床した。それでも身支度をしていると七時になっていた。考え事というのは昨夕大牟田市長塩塚氏に会ってからの自分勝手な興奮のためである。三池炭鉱では昨年今年とつづけさまに千何百人という炭鉱労働者減があっている。職のない人のために「黒い手帳」が発給されて当面は食うだけなら事欠かないようであるが、それだけに地域社会の問題は深刻に内攻しているときく。五三歳停年という特例を規準とした人員整理に組合側も曾てのような抵抗をすることなく応じてはいるものの、この年になって他郷に生計の資を求めることもしたくないようだ。同じ人員減を提案するなら若い方から募集すれば、若人には転出の気もおこる数は多かろうに。年の上から退職させようとしている。失業者の滞留問題がおこってから半年以上経過しているのだが、三井の方はアジアランド構想を打出しながら、われわれには実効がいつ、どう現れるのやら全くわからない。昨日は新日鉄の杉山常務が来庁し、スペースワールドへの県の出資への謝辞をのべ雇用波及効果についてもふれていたが、再来年半ばにオープンしたいという早手まわしで、一〇〇〇人は雇用効果が出るだろうといていた。三井とは対照的である。昨日は又中小企業団体と知事との対話というのがあって、その時に私は、街づくりに言及し、商店街の近代化資金はあまり必要でないとの意見に対し、欧州の印象をあげてやわらかく反論したのであった。大型店舗法の規制緩和運用は反対だの、生協をもっと規制せよだの、キャッシュレス、クレジットは困るだの、保守的うしろむき姿勢の強い小商業界の考えがとび出し、やわらかく反論しておいたのだが、大牟田問題について、

思い切った生き残り作戦を展開してみてもどうかと、ゆうべは頭をめぐらせていたのである。中部有明活性化協議会も集るだけで知恵は出てこないようだし、三井のアジアランドも動きがみえず、大牟田商店街の改造もまだプランの域を出ていないのではないだろうか。コミュニティマート構想である。昨日の塩塚氏との会話で、私はヨーロッパの産炭地の視察案を出してみたのだが、彼は乗気で、知事にプランの推進をお願いするという。英、独、仏、伯あたりの産炭地、町づくり、再生計画近代化方策がどう進んでいるかを実際に目で見てきて発想を転換すべきだと思うのだが、さて、この視察旅行を組むにはどうすればよいか、考えをめぐらせていてよく眠れなかったというのが実態である。実行にうつすことができれば、大いなる革新になるだろうと胸は躍るのだが・・・

十二月五日 よく宴席で儀礼的な間柄の人が対話の中で「知事は日常健康法として何をしておられますか」ときかれる。「何もしていません、又できません」と答えるのが常である。してないのは怠慢とも不注意ともいえる。できないことはない。鉄壺鈴をふりまわしたり、ラジオ体操のようなことをしていいはずである。ブラさがり機はない。自転車踏みのような器具もおいていない。鉄壺鈴は何度かやったが意志の問題なのか長つづきはしなかった。ゼンマイバネのついたので両手で引っぱるのもどこかにおいたままである。生活にリズムが欲しいが、それがない。大変不規則なのである。「できない」というのは監視、警備というような安全配慮があるため、個人的な外廻りは慎んでいる。知事は、東京と福岡の二人が警固つきになっていると公然といわれている。散歩とかジョギングは個人の行動としては慎むほかはない。何か室内でできることをと思うが、思い立とうかなと思っている。ゴルフに行っていないじゃないですかという人もいる。しかし、そんなまとまった時間を警備つきで与えられることはないといっているし、遠慮申し上げているわけだ。今自分で行っているのは、家の中にいてもできるだけ小廻りして動いていることだ。

十二月十二日 「他人のために尽くすことによって、自己の力を量ることができる」（イブセン・・・人形の家作家）県議会の空転の待時間を利用して読んだ本の孫引きである。崇高すぎるかも知れないが、どっしり来る言葉ではないか。実のところ、昨夜中島敏子さんが久しぶりに訪ねて来て語り合った話題の中に、彼女の短歌熱にふれ、私が、そうした興味をもって毎日生きることは羨しいですねといったら、彼女は、ほかに楽しみはない、九大医学部でまだつづけている実験動物飼育の仕事も、自分がしないと他の人にはできないと思ってやっているとの自覚はあるが、他からみると、そうでないでしょう、とすれば、自分は動物を見つめてやって来た詠歌の跡を歌集に残したい、これがせめてもの願いだといっていた。私もきいていて同感であった。「他人のため」とはいうが、はたしてそういえるか？ 誰かがその役を果たすのではないか、それなら何のために毎日生きているのか、自分のためにではないか、しかし又自分のためというのが身勝手ではないのかと疑問は果て

しなくつづく。結局は「無」。でも当面は自分のために何かをしているし、せねばならぬと
思っている。私は、自己満足でいいのではないか、他人をして自由に評せしめよ、という
しかないように思うのである。

十二月二十三日、赤坂プリンスホテルで、自民党議員を招いて県と両政令市との予算要望
懇親中食会があったが、開会に先立ち、参議院の福田幸弘氏が突如死亡との報が入った。
今朝六時半心筋梗塞のため品川の通信病院でとのこと。久留米、大蔵省の出である。「税制
改革」というぶあつい本をいただいたが、私はまだ読んでない。今日は国会で消費税が自
民党のゴリ押しで成立するだろうといわれ、社会党が「牛歩」で不信任案などぶつけて
抵抗するといわれている日である。福田氏の思いはいかがであったかと思う。私的な枠内
では参院一期目でしかないのに、深く観察できてないにしろ、県政からみて、私はよくし
てもらった人だと思ふ。ていねいだし、深切にもらった。主義思想など私にぶつける
人ではなかった。年もまだ六〇を出たばかりではなかったろうか。惜しい人をなくしたも
のだ。規則どおり近々補欠選挙があるはず。(後記、六十四歳、補選は来年一月^マ日)「あ
したに紅顔、夕べに白骨」とはいわぬまでも、近頃は「ひとや先われや先」ということで、
いつ誰が逝ってもおかしくはない。自分がその仲間に入ることすらおそれることはない。
福田さんのように、出席すると予約した会に代理を出し、その会の時は逝っていたという
今回のケース、うらやましい。

【「重要記録」欄への記載】

年末姫路ゆき時間表

12月29日 8時50分出発

博多 9:33—広島^(のりかえ) 10:59—相生 12:36

章君出迎え、駅前中食 佐方へ

西相生 16:37 相生のりかえ 姫路 17:13

網干で和代乗りこむ

姫路で毅と晴久車で出迎え

飾西の富貴ずしで甥、いところ半ら集っての忘年会 西脇棟安に寄る

九一宅に泊る

12月30日 朝8時から12時頃まで餅つき

午後1時墓参(佐方でも墓参)

のち打越へ(小林あや子、前田肇訪問)

九一の案内

夕食会 於晴久宅 九一夫妻、毅も雅明も

九一宅に泊る

奥田八二日記（1988年）

12月31日 おもやに寄って帰路につく
姫路 9:45—博多 12:36

1989年

年頭所感

年明け早々にどっと多忙になる。二月はじめに参院地方区の補選があるが、北九市議選とかなり重なって騒然となるだろう。消費税法の成立過程及びリクルート疑惑をめぐる対応について国民の間に不満が鬱積しており、この補選で、市議選で、どう反映させるかが関心と呼ぶ。他方、メーデー統一について連合内の話し合いが始まるが、微妙に影響をうけるだろう。連合については、自治労、日教組は若干の分裂が予想される。北九市職労は明らかに連合に同調しない。他方で天皇の病気問題があり、これらざわめきが、県民の会に深刻な蔭を投ずること間違いない。年の前半にそのおさまり方が決まるだろう。他方、県の物産展、大ふくおか博、国際青年の村、来年の国体のリハーサル、そして福岡市の半年にわたるアジア太平洋博、久留米市の世界つつじまつり、さらに北九州市のみなと鉄道一〇〇というふうには、イベントがひしめいていて県下に活気を呼ぶチャンス年といわれている。アジア太平洋博開幕には皇太子の来福が予定されていて、対応する側は大変である。こうした中で私は諸事案に奔弄されるに違いない。健康の保持に一段と意を用いなければならない。「爽快」といえる頭をとり戻したい。

1月要記

昨年末は政府来年度予算案ができず、それがこの一月中、下旬にずれ込んだため、やはりそれに向けての陳情活動をせねばならず、それだけこの一月は多忙になる。又知事二期目の折返し点というので、二～三月の議会、四月の新年度に向けては主要施策や人事異動に向けての策をめぐらさなければならない。この時点でいうわけにはいかないが、心の中では、三期目については否定的である。七対三ぐらいで「やれ」と「やめてもいい、やめるべきだ」の声をきくし、これをすなおに受けて配慮すべきであろうかと考えている。ただ、これとは別の角度で新年度については「らしさ」といえるような施策に芽を出したいものである。役人はやはりマンネリ化しやすいし、新しい事はしたがらない、自分で余計な仕事をかぶりたくない傾向をもつ。そこを何とかやらせなければというむつかしさがある。他面、私自身何で張り切らなくてはならぬのか、疑問も湧く。

1月1日(日)

平凡に雑然たる心境での元旦

全く平凡に元旦を迎える。朝食の雑煮は小さな餅二個で十分だった。十時すぎにいたろう。ひるは茶と菓子ですませ、夜は豚肉を使っての水たき、八時半頃だった。どこに行く予定もなかったが、賀状を見るだけに三時間はかかった。書齋にこもり勝ちで、快晴の陽

光にそむいたような一日ではあった。それでも机辺がなかなか整頓できない。昨夜は昨年一年間の来翰印刷物の区分整理はしたが、その他手紙類は積んだまま、いつ思うように処理できるやら。そのように平凡に迎えてしまった元旦であった。今年一年同じように思い残しを積み重ねていくのではないかと思う。まずは、賀状をみてのアドレス整理、次が賀状対応・・・と考えていくと前途は無限の荒野である。机上雑然、それが業なのかも知れない。こうして日記を書いていると夜も十時をすぎてしまった。この頃は就床することすら追い立てられるほどの気持である。

1月2日（月）

社会主義協会や総評系の運動を顧みて今後どうするかだ

協会系の二グループが新年挨拶に来訪してくれた。安達、衣笠、大塚、高崎と岩崎・大坪の二人、後者は前者と多少馬があわないのであろうか。大坪の話によると、協会運動の継続は大変な状況下にあることは確かであるが、会員は全国的にみて微減だという。「進歩と改革」の一月号が、生活のあれこれの側面にある問題の指摘をおこなっているのは立派なことだと私が述べたら彼はうなずいていた。労働運動の中に社会主義を照射するだけでなく、今日の生活の諸側面にも社会主義を照射することの必要性を私は強調したが、そこが向坂協会と違う点だと彼もいう。ところで二グループ共通に強調していたのが年末の福田参議死亡に伴う地方区補選にはわれわれも候補を立ててたかうという点であった。消費税反対の大衆運動がなすすぎたし、リクルート汚染の批判を訴える必要からも、こんどの補選には張り切って対応するのだという。誰を候補にするかだ。

1月3日（火）

待ちもしない来客との対話に興味

できるだけ正月の来客がない事を願っていたが、昨日は協会系の二グループ、今日は徳本正彦夫妻と河野和正氏というコンビ。いやというわけではないが、部屋一ぱいにひろげて書き初めをしていたので、急ぎ片付けての対応であった。今年は初詣でもしていない。できるだけ書斎などひとけをさけての年明けを希望していたのだが、果たせなかった。でも昨日、今日の来客で平素できなかった話題に耳を傾けることができた。労働戦線や国レベル選挙の話などである。二月はじめの参院地方区補選に田中健蔵氏出馬の話が出ていたが・・・あの話は消えた。本人が断った。知事選の時は一〇〇万票以上とったのに・・・自民党は高額な資金を要求する。落ちたら悲惨なもの、あと片づけが大変。それに、あの人はひとにきかれたくないプライバシーをもち、こんど出たら又も又それがささやかれる。断るのも無理もない・・・というような話。へっ。

1月4日(水)

家庭内対話の欠如

もと秘書室にいて今は飯塚の出先機関の長をしている松永氏が年頭挨拶に来室した。語るうちに家族のことにふれ、印象に残り頷き合ったのは、家庭内対話がないということであった。年度末に退任という彼、運転手の是松さんも退任とのことだが、松永はまだ若いと思った。子供が女か男かきかなかつたが、二人か三人かいて、上は三〇歳をこえる。それら子息たちとの対話がないと彼は歎く。関心が共通でない、話しかけに応じてくれない、銘々が勝手なことを考えている。絶望的というか、期待できないというか、親が思う程には子は思わないという言葉が昔からあるが、今日はそれを何倍かに拡大している。物質的豊かさが人間の心のつながりを引き裂いていったのだろう。今日夕食を前に、先月二十五日から帰省している直美に、いつ帰京するかというと、十日頃というので、長い休暇をとったんだネというと、会社やめたんよという。私の驚きである。

1月5日(木)

乱世の徴

西日本新聞夕刊の「四季」らんに「乱世の徴」というのがあった。二三〇〇年前の中国の荀子の言葉をひき、それが今日の日本にあてはまるというのである。特徴が五点、その一は服装の華美、二は男の女性化(容姿)、三は男女関係の淫、みだれ、四は志の利、つまり私利私欲志向、五は声楽の陰、つまりとっぴょうしもない音への好みというか、そういった耳の馴れと好みである。ヤクザ、暴走族、政界の腐敗、地上げ屋、テレビのおさわぎ番組がそれをあらわしているように思える。昨日のらんにも書いたような家庭内対話の欠如もその兆候といえるかも知れない。近頃の結婚式はむしろ知らない、が今日もRKBに挨拶に行った時に出た話題に、三時間もかかる結婚式、三回も四回もある色直し。それも花嫁のみならず花婿もだ。享樂おもむくままにまかされ、個が突出して全体(社会)が顧みられない、というよりは暴走族のように、全体(社会)に迷惑をかけることが個の享樂の条件となる恐るべき状況である。報道界もこの傾向に追従、拍車をかけている。

1月6日(金)

長崎本島市長発言に対する知事発言についての共産党の問責

九時半から平和台競技場で恒例の消防出初式。寒さを防ぎえて助かった。昼は全日空ホテルでのJR九州新年会。夜は建設業協会の新年会。他は挨拶まわりの一日で疲れたあと、六時半から八時まで知事室で共産党県委県議との天皇責任をめぐる知事発言(昨年十二月二十八日の記者会見における本島長崎市長「批判」)に対する問責の会に出席することになった。副委員長、野見山、高県議の三人が次々に発言、それぞれに私が応答という形をとって時間が経過したが、とくに感じたのは共産党の感度と見る側面が私と違うという点で

あった。天皇制復活への危機感、平和への危機感、それに党という立場と知事という立場、違いは明らかである。うちに来る賀状の中にもあの知事発言は遺憾とするものがいくつかあるが、これもサイドの違いといえよう。感度とサイドだ。サイドは又玉虫色という表現もできるだろう。もう少し「怒」の心がほしい。

1月7日（土）

Xデー来る

Xデーが来た。七時半頃県からの電話連絡で起こされ、八時半には迎えに来た随行の斎藤氏と副知事の車で登庁。玄関に入るとき報道カメラの放列。九時二〇分記者会見、三〇分庁議。ここで弔旗、黙禱、歌舞音典の自粛などきめ、議会との話合いで十二時から弔問記帳所を六日間設けることになった。いち早く新聞は号外を出し、テレビはXデー番組ばかりに変わった。新天皇即位や午後には新年号（明日から平成）が発表された。議会の方では五時から代表者会議でその結論が出るまで午後私はずっと知事室で待機の長い時間をすごした。例により共産党がXデー対応に反対しているが、「臨時議会」招集で法の趣旨に合わないのに、ゴリ押しのものが多く、ゴリ押しの線で決まり、帰宅は七時すぎ、全く疲れの土曜になった。明日も弔問に上京しなければならない。どんどんふりまわされる。日程どころか「せよ」「するな」の声にもふりまわされる。町のネオン点滅は消えた。

1月8日（日）

今日から平成という新元号になるのに何だか疲れた感じ

昨夜の北九州地評新春のつどいと今日の「非核政府を求める福岡県の会（毎日新聞会館）」には両方とも予定変更で欠席。皇居に弔問記帳に行き、この日曜も終わった。新聞は天皇関係で殆んど埋められている。戦争責任についてもふれている。読んでみて一昨日共産党の人達と語り合ったことが思い出され、私としては満足できる記事に読みとれた。でも天皇に関してはもう読みたくない気持。昨日今日のテレビも全時間それに関する番組におきかえられていたはず。上京の機内では目をつむって時間をすごした。何も考えまい、頭を空にするにはどうしたらいいかの思いであった。同行した高山議長が、知事は長生きしそうだと言った。即座に私は、今年中に死ぬかも知れませんよと強くはね返した。つけ加えて、八〇の坂をこえた人ならそうだろうが、七〇近い私ですら命はそう惜しくもないですよとっておいた。悟ったようにきこえるが、ほどほどで結構なんだ。

【欄外記入】

福岡 羽田

10:35→12:00

17:00←15:30

1月9日（月）

体調悪し

年末年始、その日その日のことに追い立てられ、辛うじての毎日だと思っていたら案の定今日の済生会病院での検診の数値結果はよくなかった。四時半という時刻、血糖値は二一二、糖尿+++、GOT七九、GPT一一九。近頃睡眠不足（不眠症気味）の毎日であり、頭が重い。（痛いというほどではないが、額のところに鈍痛を覚えるほど）調子が悪いことは確かで、このような数値は無理もない。ねむれないなら、処方してもらっている安定剤をもっと多くのもんでみたらどうかと助言された。便器を寝室にもち込んでから二ヵ月はたつだろう。毎夜二回は用便に起きるようになってしまった。一回の排便量は決して多くはない二〇CCもないだろう。前立腺ですねといわれた。処置するような意見ではなかったがこの点も感じの悪い状態である。パツとしない体調をどうすればいいか自分で判断がつかないので困る。机辺は毎日物がたまっていって整理がつかずこれ又頭痛のタネ。直美上京（12月25日—1月7日）

【欄外記入】

十日戎（とをかえびす）古い歳時記によると九日が宵戎、そして十一日が残り福というところがある。福笹、戎笹をみんな参詣のしるしに持ち歩いている。県庁前はそのため八日から十一日まで通行規制があつて雑沓、夜店の列

1月10日（火）

協会系の人達の遠慮は別の形で解決できる

六日、問研が仕事はじめの日、市内行動のあいまに時間があつて一寸立ち寄ったら、中山君も来て、大坪君の手紙を私に手渡した。一寸見て、昨日ゆっくり読み返した。彼は二日に岩崎隆次郎と来宅し、協会の連中とそれが時間帯をずらして来宅した意味にふれていた。自分は黒子だ、黒子が出ることを遠慮する。協会の連中が組をなして訪問するのはよくないという意味のことも書いてあつた。だが、これは説明であつて、協会福岡の連中にして一年中遠慮して、やっと二日という日を選んで来宅したのだと思う。私はその気持は汲みたい。但し今日杉山（秘書室長補佐）を呼んで伝えたのだが、黒子だとか遠慮の心がなくてすむように、知事の日程表の中に名目を別にしてでも年に何回か入れるように工夫すべきではないだろうか。群をなして来るとかなく、どこかで何回か会って話せるようあれこれ日程を作るべきだと私は思う。

1月11日（水）

九州国立博物館への里程はまだ長い

このたびの予算編成の中で文部省は博物館建設につき、やっと二〇〇万円の概算要求をすることになったが、十九日予定の大蔵省内示でこれがどう扱われるかが問題である。今日

は新幹線建設財源につき JR の五割負担の腹がまえをしたようだ。地方負担は一〇%程度となりそうだが、もちきれるかどうか。ともあれ難工事部分の早期着工を地元は求めている。地方といっても県、市町村がどう負担するのかまだまだこれから先の議論。それよりも気になるのは博物館だ。大蔵の役人達はなぜに福岡に国立のが必要なのか、欲しければ県で、又は九州各県共同負担でやればよいというような認識水準でしかない。奈良や京都にもあるではないかともいっているとか。八世紀以降しか研究されていない「一等国」があつていいものだろうか。そんな認識の役人が大蔵に幅をきかせている。文部省だって大同小異。神話の時代をほじくらない方がいいと言う有力者がいるほどだ。九州国立博物館建設の途は長い。

1月12日（木）

社会党旗開き

小野参院議員の事務所開きには杉山氏に出席してもらい六時からの社会党県本、市本の旗開きには私も出席した。今年は政治の年といわれるように、各級の議会議員選挙があるので、党としても構えが違わねばならぬところ。福田参議死亡のあと二月に補選（地方区）があるのに社党はやっと西鉄労組出身の渕上氏を候補に決定したという曲折。今日の旗開きの最大のニュース、花となった自治労からとの声も消えた。いわく因縁をこえてこまできた。消費税、リクルートなど竹下内閣株を下げる諸問題が山積しているので、今回の参院補選は七月予定の定期選挙（ひよっとすると衆院選を又もや重ねてこられるかも知れない）の前哨戦としては面白い注目を浴びる選挙といわれている。1月末に北九州市議選があるので尚、おもしろい。党も多忙の中に新年を迎えたわけだ。

1月13日（金）

中島敏子さんの短歌

中島敏子さんがくれた賀状に二つの短歌がかいてあった。

父上は明治大正昭和と生き恙無く只今九十二歳

玄海より吹きつくる冬の風に真向き動物施設

目指す構内の道

彼女は三瀨町長木下正美と詠歌の道で知り合いらしい。年末に来宅した時に短冊を持って来てくれた

実験用小動物飼育担当の

君の推す候補が当選をしぬ

これは当然に一昨年四月の知事選における私のことを素材にしての歌である。九大医学のアニマルセンターに今も非常勤で行っている。九十二歳という彼女の父は私の龍野中学校の時の地歴の先生中島吉郎氏のことである。彼女は短歌ひとすじに、またアニマルセンタ

一を素材にして数え切れぬほどの作品を積みあげている。出版のことも考えているとか。

1月14日(土)

鉄亜鈴を振る

何か健康法を講じていますかときかれる。答はきまって何もしていないということだ。知事になる前から特段何もしてなかった。教養部の間を歩くことと、うちで何でもごそごそと動いていること、たまに自転車で天神に出るという程度である。菊づくりなど体を動かすにいいが一年でやめてしまった。立候補のためである。知事になってからも大石随行の時にすすめられゴルフに一寸手を出したのと森山随行の時車を三〇分ほど早目に出して動物園周辺を散歩した程度。佐々木随行の時は序の八階まで上り下りすることをやったが、これはかなり鍛えるのによかったが、無理するなど医者からいわれて中止した。今は何もない。それで眠れないなど愚痴をこぼすのが常である。「警備」は小さくない問題だが家に帰るだけが勤めになる。愚痴ばかりでは主体性がないと思って、この数日、小さな鉄亜鈴をふりまわしはじめた。十五分、二〇分の間である。どこまでつづくかな。

1月15日(日)

成人の日を迎えて

昨日は指導農業士、青年農業士との対話のつどい。農業の危機的諸側面が話題となったが、その一つに後継者問題があった。今日は成人式。有権者になる人県下で七二、四五三人。でもこれらの若人が政治ばなれし、農業ばなれもしている。彼らが生れた二〇年前は大学紛争があったのに、今はとても考えられぬ。昨日の話でも、農業後継者をえるのに車を買ってやるだの外国旅行させるだのの誘惑が必要だとのこと。暴走族になるのもやむなしみたいである。叱ることが許されない。「愛の鞭」ならぬ「愛の無知」。何をしても見て見ぬふりをし、一人部屋で好きなことをさせておくしかない親の無力感。学校現場でも先生はきびしさを教えるスベを知らない。全部というのではないが、こうした風潮が近時次第に拡大しつつあるように思える。農村では嫁さがしにフィリッピンまで出かけるとか。成人式といってお祝い気分を迎えられるかどうか。訓練試練、忍耐寛容を教えなくては・・・

1月16日(月)

思うように書けない揮毫は時に嫌気がさす

玄羊会の書初め会が月末の月曜日にあるので、それに出席のため作品を作るのに一日あてることにした。「千山鳥飛絶萬徑人蹤滅弧舟蓑笠翁独釣寒江雪」(柳宗元)という内容。半切の軸物とする。書くのは楽しいが、いざとなるといつものことながらなかなか思うようにはならない。いい加減に、これで仕上げということになる。いかにも・・・らしいというクセがいくら書いてもなおらない。「もう止めた」と思うのだが、何日かたつと又書こうかと

いう気になる。半切の半分の扁額用のを何枚か書いたが、この方が満足度は高い。人に贈呈することしばしば。市内の文具店で私のが、よく表装発注されるとかで知られている。恥しい限りである。先日は経済人余技展のを秘書室から扁額表装に出したが、これも知られているらしかった。色紙二枚と共に出品するようにしたのだが、この余技展の分はやや満足だった。

1月17日（火）

糖尿と慢性肝炎

	1月9日	1月12日	1月19日
血糖	212	161	106
尿糖	+++	±	±
GOT	79	65	68
GPT	119	99	90

今日又検診。明日から上京してしばらく来れないため、五日前につづいてだが・・・結果は上表のとおりで、年末と明けて九日は同じように、よくない数値だったのに、ここ一週間はまずまずの値になっている。食事後の時間で若干違いはある。今日は八時半に朝食、検診の採血採尿は九時五〇分である。あまり時間もたっていないので、悪いかなと思ったのに意外だった。何が原因だろうか。ともあれ、体調には不断の注意を忘れないようにしたい。運動不足でないかという人が多いが、何かいい知恵はないものか。ゴルフは状況にないし、あとこれという案はない。先日からやっている鉄垂鈴の振りまわしとか室内自己流体操とか、それでもやらないよりましとおもって、これからも忘れないよう、怠らないようにつづけねばならない。それはそれとして、風邪をひかないのが何よりの幸い。昔からほとんどひかない。熱を出したということもほとんどない。少年時代から鍛えられた環境だったと思っている。用心の上にも用心をしよう。

1月18日（水）

県庁舎跡地利用について裏で熱い攻防

昨日も今日も県庁舎跡地利用の問題で副知事レベルの話合いが行われているようだ。社会党の林、助信両氏が両副知事に詰めているともきく。その背後に遠賀川系統の他の県議も絡んでいるともきく。東京県人会々長の斉藤武幸氏が私に会見を求めているのをこれまで理由づけをして断わってきている。でもこの時点でも又会見が求められている。これまた跡地利用が話題になること必定とみられている。斉藤さんの背後には黒川紀章があり、設計と工事の住友建設が絡むことが読み取られている。県が今基本構想づくりを三菱総研に依頼していることでも多くの県議が絡んでいて、それが工事落札にも関係してくるということのようだ。副知事段階で詰めるだけ詰めて知事にかかわらせない方がいいとの考えがあ

るのは有難いが、その背後でさまざまな利害がかみ合っているのは事実。議会の表ではなく裏で話がきまってしまうようだ。

1月19日(木)

トップ人事について

政府予算のつき方について概要きいた後、林副知事らと東條会館の別館で夕食(中華)をとった。明日は林氏が太田政務次官(大蔵)と会うというので、現時点で一番心配される九州国立博物館への予算づけについてしっかり判ってもらえるようにしておいてくれるよう頼んでおいた。食事後事務所に帰ってしばらく林氏と所長室で話していたら、県のトップクラスの人事異動に話が移った。林氏とはほとんど会う時間がないので、こんな話になるのだが、副知事の大塚、管理者の大坪を中心に道路公社、信用保証協会など、人事をどうまわしていくかを念頭に置いておく必要があること、又それらは社会党県議の林団長に知事からおそくならない段階で相談をもちかけておくよう忠告された。「林さんは知事から頼まれるよう待っているだろう」と副知事はいう。誰もが問題を投げかけられるのを待ち、それをほこりにすると一般論がここでも見落されているのに、私はヒョッと気付いたわけである。跡地問題でわいわいやっている団長ではあるが、早速にもトップ人事について語りかけてみよう。

1月20日(金)

齒朶(裏白)のこと

虚子の歳時記(昭和四五年刊)を見ていて齒朶という季題が目にとま今年も正月の準備に、刀出で搗いてきた鏡餅を三方にのせるのに、東隣の崖に裏白齒朶がないか探したが見つからなかった。数年前から毎年見つからないのに気付く。もっと前にはあったのに、今は絶えたのであろう。類似の齒朶で形だけつくろってすませた。刀出にいた子供の頃は正月前になると、付近の山に取りに行かされ、よなべをして五枚ずつ束ね、父が早朝車力に積んで姫路まで売りに行き、榊、飾松などと共に、これが、正月用の足袋、下着、コマ、凧などの購入資金にあてられたものだ。暗い電灯が一灯だけあって、その灯の下に家族がみんな集って、夜なべ手伝いをした。六〇年前後前の話。昭和農業恐慌前後の話である。◎横火鉢暗き灯の下齒朶束ね^{ママ}ともいおうか。今の人、今の子、この種の話には関係がなくなった。正月休みは外国ですごす人がふえてきている。餅も不用という家庭もある。家族関係、子供たちの遊びの関係もぐんぐんかわっていく。

1月21日(土)

殯宮拜礼の儀

殯宮拜礼ということで、二時前後皇居に参入した。この時刻は県知事県議会議長らにあて

られたようで、長崎、大分両知事は私の前後で夫妻揃って拝礼であった。南の車寄から入り、地階中車寄から退出した。車も人も列をなした。中庭の古白梅が満開に近く、白砂利に浮き、緑青の整然とした、むしろ清冽な感じの屋根に対応して、すがすがしく美しかった。拝礼のあと中車寄に通ずる廊下で、よく見ると紅梅も蕾を揃えているのに気づいた。あと一週間もすれば、紅白対照の梅花で中庭が一そう美しくなろう。昨日とうってかわって今日は晴朗そのもの、照る陽の中で、皇居が一段と光ってみえた。大寒に入ったというのに昨日今日気温はぐっと高かった。皇居全体、自然といい建造物や庭園といい、徳川時代からの権力中枢だからであろう全く立派というしかない。他国にも誇りうる存在である。ただ残念なのは、その一般への開放部分が狭いことだ。これだけの誇るに足るものを、もっと広く、可能な最大限まで開放すべきではなかろうか。その時期が待たれる。

【欄外記入】

- 大白梅芽賞でつ進みて殯宮礼
- 松の間で紅白梅見つ殯宮礼
- 陽光に玉砂利映えて殯宮礼
- 青緑の屋根陽に映えて殯宮礼

1月22日（日）

「金印」の背景を知ろうとしてほしい

今回の政府予算案の編成は例年より一ヵ月近くおくれることになったが、県サイドから見れば、この時点で、よくつけてもらったといえる。ただ、大蔵省サイドでは、九州国立博物館建設に大きな拒否反応が消えてないのが残念である。先日も大蔵の関係主計官に陳情した際、九州・福岡のほかにも似た要望があるのに、今なぜ九州なのか、財政再建、行政改革の課題が今まなお残っているのに云々とはじき返された。六〇兆円もの予算を組み、防衛費の伸びを六%も認めており、経済大国といわれる日本で、七世紀以前の解明がなおざりにされているということの不均斉を、この主計官はわかろうとしないのである。九州以外に同じような要請があるとよくいえたものだ。六世紀までの間に、九州が果たしてきた大陸との交渉を思うなら、そういう言い分が成り立たないはずである。「金印」を受けた時の日本の社会状況を証明してみようと思わないのだろうか。お粗末な金庫番といえるだろう。

1月23日（月）

手がまわらぬ清掃

年末になるとうちの中を一通り掃除する。子供の頃は九月頃、つまり夏の期をたえぬいて後、「大掃除」の日が部落できめられていて、その日はどの家も畳を表に立てかけて大掃除をした。歳時記には十二月の季題として煤払とある。夫婦してはづれぬ戸あり煤払（乙由）、

煤払利かぬ薬を捨てにけり(北涯)、一つ箕に神も仏も煤払(奇北)というような例がたくさん出ている。今日は生活様式がかわっているし、人手をかける態度もないので、わが家でも年末にほんのマネごとぐらいしか掃除をしない。気になる箇所は換気扇その他いくらでもあるのに、棚の上の置物も、壁掛も気になりながら投げやりである。私をもっと自由な時間をとれるならもう少し手を貸してピカピカにさせるのにとすることがいくらでもある。ひとが出入りするたびごとにホコリが立ち、それが置物などに積もっていくわけだ。庭の草抜き、庭木の枝切り、鉢物整理も気になる部面である。今うちでは裏の出口のトヒが詰って雨の日はバタバタ流れ落ちる。屋根から流れる木の葉がどっさり詰っているに違いない。

1月24日(火)

凶がつづく(23日)

午後六時半頃、四泊五日の予算陳情、お礼の旅を終え帰宅した。みゆきが佗助椿を枝切りしていて誤って右手小指を脚立に挟んで大怪我をしている。繃帯巻きの手伝いをせねばならなかった。夕食後しばらくして東京から電話があり、ライヤが死産、サリがゼンソクと啓二がいう。悪いことが重ったものだ。五日間も東京にいたのに、私は一度も電話訪問しなかったのが今回の偶然である。いつもなら、つれづれのため一彦、啓二、直美と三つ電話することが例であるのに、今回はむしろ時間つぶしに読書していた。何だか面倒に思ったのである。直美は住友生命をやめて職を探しているという勝手さ、啓二は時に短気をおこすし、一彦は長女が高校受験というので「さわらぬ神に・・・」ではないにしたも、だまっていようと思ったのである。今夜の啓二の電話では東京に来ると知っていたので、私が電話するものと待機していたのということだった。アベコベというものだ。それにしても、啓二がこの難関を乗り切ってくれなければならない。みゆきの外科治療も昨日のことなのに呑気。

1月25日(水)

筆を執りつづける(24日)

坂口雅風さんが大唐三蔵聖教序と色紙書道教範の二冊を届けて下さった。福岡市今川在住の書家で、雄渾な書風には感嘆させられる。琴瑟相和五十年 家榮身健子孫賢 人生幸福何加此 亀寿鶴齡偕世縁 賀金婚式 松口月城作というのが最後書いてあった。書いても書いてもなかなか心ゆくまで満足できる作ができないのに、この人のようにすらすら書けるならどんなにいいだろうかうらやましく思う次第である。でも自分は自分、ベストを尽くすほかなかりょうし、淡々としてあるがままに、できるだけのことをやっ払いこう。坂口氏は若い毎日千字づつ書こうと決心して実行したという。要は根性だらうか、その点負けてはならないなと思う。思ったらやり抜くことが大切だろう。慎重に前を見て貫くべき

であろう。今日も私は結婚する職員のために何枚か色紙をたのまれているので書いていかなくてはならない。今年一番寒い夜だ。

1月26日（木）

人事の扱い方（25日）

安達氏が来室したので四月の人事についての配慮を話題にした。トップクラスについては少し前に相談したのが林副知事だった。安達氏の話では人材がつかみにくいということだった。亀井時代のようにかなり強引に事を運ぶとしゃしゃり出る人と逆に引っ込んでしまう人に二分するが、奥田県政ではしゃしゃり出る人が見えにくい。先を用心するというのもあろうが、そうまでしなくても乾されることもないという安心感もあるようだ。彼がいうには、知事が何か頼むという言い方で課題を与えると、誰しもよろこんで翻走するはずと。それはたしかだが、多くは仕事のふえることを嫌い逃げようとするかに見える。職員ではないが、県議になると、社会党の団長の林、幹事長の助信の二人は現在不満をもっているという。「お呼びでない」、「連絡がない」という気持の不満のようだ。この方は職員と違った扱いにくさがある。秘書の方で連絡してくれないとこまる。

1月27日（金）

再び「負の社会有」（26日）

夕方民生部の課長クラス以上の者を集ってもらい、サンヒルズホテルで懇談会夕食会をした。こんな会が各部であればいいと思うが、とりわけ民生部では必要と思い、原田次長に要請して実現したものだ。最初に私が思いをのべ、次に各課ごとに、最後に部長がしめくくったが、主題を高齢化社会にどう対応するかとした。勿論これは民生部の所轄からはみ出る二十一世紀に向けての大課題であるが、タテ割りの行政の現在、企画か民生かどちらかがイニシアを取って総括的視点から提案してほしい問題である。民生部では「負の社会有」ということを改めて基本にすえるよう私の方から要請した。「してやっている」という態度と「してくれて当たり前」という態度が、行政・住民の両方に当たり前と思っているなら間違いではないか。母親が乳児に母乳を与えるように、どちらもが欲する自然な人間行動のように家族・コミュニケーション・行政が一の方向で動いていけるように、今日行政が音頭をとる必要があるのだと思う。

1月28日（土）

土井委員長来福（27日）

土井たか子社会党委員長が北九州市議選、参院地方区補選の応援のため来福。彼女の二十五日だったか「天皇戦争責任」問題発言をめぐり、右翼がさわぎ出し、警察がピリピリした警備をしいた今日、今年一番寒い今日、私も敬意を表するため、委員長に会わねばなら

ないのだ。駅近くの漁亭というところで午後八時すぎから、県の社会党、県評系団体幹部をまじえて夕食会をした。人気上々の彼女だがその裏で疲れ気味に見えるし、本人自身過密スケジュールに辟易しているみたいだ。天皇責任問題についても、あんなに問題にされるとは思わなかったようだ。警察本部長の話では、大喪の礼(二月二十四日)までは事を起さぬように自重しているに違いないが、だから今回の土井来福では騒動しないが、そのあとどうするかわからないと思うとのことである。首相をしのぐ警備がとられているとうわさである。社会党県本部では参院補選上貞雄氏のために近々もう一度来てくれと要望していた。こう集中して乞われれば大変だろうが、それだけの価値があるというのであろう。

1月29日(日)

公明党の立場の奇妙さ (28日)

(二十九日分は巻末部分に別に書く)

参院地方区補選に自民、社会、共産、サラ新の四人が立ち、公明民社は見送り、新聞で公明はハムレットと書かれていた。だが、今日耳にした情報では、公明の県責任者権藤氏が自民と取引して、自民の合馬氏支持になったといわれる。民社は早々と自主投票を決めていたのに、公明はそれすら決めてないというのであったが、決めないでいて、そのことを換金するというよくある手口を今回も使ったらしい。昨年の消費税問題で国会が荒れ、社会党が欠席戦術を使った際、消費税反対といていた公明は議会制民主主義を守るため出席し敗れても仕方がないとして出席した。このケースでも換金の方途とされたのではないかと疑われる。公明党は政権とか一つの立場を貫くという線はとらず、どちらかを見ながら換金に供しうるとみればそれに乗るとの域を出ない党のように見える。その点、共産党は換金できても断わる党で、両党は水と油のようだ。公明という名すら政府の選挙浄化のスローガンを横取りしたもので、奇妙奇妙。

1月30日(月)

科举と名筆

玄羊会の尚文堂教室の書初め批評会があって、私は柳宗元の「千山鳥飛絶・・・」の半切ものを出した。旧知の人達とあうために出席したようなもので、書そのものは決して満足できる出来とはいえないものであった。七時半頃終って近くの「くいだおれ」に行つての新春懇親会となった。私は中国の隋から清までつづいたといわれる科举と、今日残っている漢詩との関係について話題を出した。今に伝わる名筆は中国歴代の高官や軍人のものであるといえるだろうが、科举の試練をくぐり抜けてきた人々だからこそその詩であり名筆であるといえるのではないか。何億人の中のエリートがのちの世の批評にたえて今尚高く評価できるものとなっている。今日文字文化もパソコンなど機械化され、漢字が単に表音、表意

の一手段化してしまっている状況はなげかわしいとの意見を表明した。大学入試に書を課したらという意見も出て大笑いであった。

1月31日（火）

梅と渡り鳥

どこも梅が咲きほこっている。昨日は久留米の玉井さんが直々に紅白の梅古木鉢をもって来訪、色紙を頼むといわれたのだが、この両鉢も、正月にコウ君がもってきてくれた小鉢とともにうちの中で今満開である。裏庭の紅梅も満開だが、切り枝にする気にはならなかった。東隣の梅林も白で満開、一番寒いこの時節だのに思う。人はひっこみ勝ちだが、小鳥は盛んに活動している。今日帰宅途中舞鶴城の堀に鴨だろうが群をなして遊んでいるのに気付いた。夏なら蓮の葉が一ぱいになって鴨の場ではないが今はその独壇場である。例年なら大濠池に来るのが、今は浄化工事が終わってないので、お城の堀に来たのかも知れない。魚が迷惑だろう。水があつて魚、魚があつて鳥という自然の循環であるなら、よしとしなければならぬだろう。鳥もいないということで問題の箇所があちこちにあるこの頃である。鳥がいることは環境が大丈夫という証明といえよう。梅と渡り鳥に恵まれた感想。

2月要記

二月逃ぐといわれる。またたく間に過ぎてゆく、平凡ななすべきことしかやってなくて、何かに残るほどのことをしないのに、二月は経過していく。県の仕事としては二月県議会、当初予算上程作業にほとんどの精力をとられる。できるなら問題がないように、各派にうけがいいように、気配りを十分に、難点をなくして県議会に臨まなければいけない。執行部、財政当局には重い圧力がかかっている。買って出るしかないが、よくできても殆んどほめてもらえないし、手柄にもならぬ。月給代わりの仕事だといえればそれまでだが、荷物としては重すぎる。この二月を通過せねばならないのはやはり人間が政治的側面をもっており、一つの焦点をここにおくからこそそうなるのである。二月二十四日は昭和天皇大喪の日、一般は休日だが、会場の新宿御苑には外国からの参会者を含め一万人が四、五時間つめかけ、当日の東京の交通は厳戒体制下におかれる。Xデーの一つの頂天になる。何がおこるのか、大きな政治、小さな政治。

2月1日（水）

若い主人をなくするということと遺族

八丁和生氏 没昨年三月二十五日

八丁和生氏が没して一周年近くになる。墓所を郊外に求めたので墓碑を作るのに私に揮毫してくれという。昨日県庁に注文に来られ、早速昨夜書き、今夕それを受け取りに来られ

た。次女を伴っての来宅であった。夫や父の急逝に逢った女性たちの心境はいかがばかりかと察する。彼は五十一歳という若さで他界したのだが、長わずらいとはいえなかった。私このようなケースは考え方いかんで、のみこんでうなづいていいと思う。第一長い病気でなかったことは他面からみれば幸いである。又残された母子も恐らく独立自らの強い心をそれをチャンスに固めたのではないかと思う。つまり人間が以前よりぐんと引きしまつて来たはずである。かえってよかったかも知れぬ。近頃の女性は決して男性に劣るとは限らない。娘たちは平凡な男以上の人間に育ち上がるに違いない。墓所を新造する心境はこうした家族の人達に新たに湧いて来たものであろう、宗派をこえて。

2月2日(木)

つつましい政治が望まれる

県議会の九州議長会がグランドホテルで開かれた。副議長や議会事務局長からも参加し、六〇人ほどの会議になっていた。こんなのが年四回あるという。今日の三役会議では報酬の引上げは税金がかかるだけだから視察旅費、外国出張費を引き上げる要望が出ているということだった。年四回も、好きだなどの感じがした。全国レベルのもあろうから多い感にはさらに…知事会は九州二回、そのほか全国、三県というふうにある。これも多いと思うのに…議員もカネがかかるらしい、国会議員も…リクルート問題も今日の新聞では自民党は開き直って、献金してもらってどこが悪い？といっている、渡辺美智雄など…竹下総理は政治改革をやろうと呼びかけているが、カモフラージュではないかといわれている。カネを欲しがり、手段をつくしてカネ集めをするのが当然と考えられているこの時代、異状というしかないと思う。議長会議も無駄とはいわないが、多すぎはしないか。つましい政治が要望される。

2月3日(金)

来年度予算査定

今日明日、来年度予算の知事査定にまるまる投入されるのだ。亀井時代は旅館で缶詰徹夜など当たり前だったし、知事が部長らを叱りとばすことは随所にみられたので、様変わりですよと誰かがいう。副知事は、「知事はもっと発言を」と請求するが、私はむしろ聞き役にまわることが多い。中味をきくのはいいとしても甲を捨てて乙を拾うという判断はむずかしい。「知事が訊ねてくれると関心をもってくれているのかと喜ぶ」との意見もあるが、あれこれ言っていると時間かかるし、予算をつけてくれるかも知れぬと思わせるのもまずい。それに今日の農政部は品種ごとぐらいに四〇項目以上の復活要望をしていて、時間がかかって疲れてしまう。目を閉じて「俺は休んでいる」と意識することさえある。大同小異なんだがなと思いつつ、世の人の争いを達観した気持ちできく瞬間があってもいい。

2月4日（土）

知事査定案を作る

ゆうべは帰宅が十二時すぎ。社会党県議の林、助信、長谷川、白石、豊島、の五人を前に家永参事が知事査定予算案の概要を説明し、それに基く討議を項目ごとにやったが、今日の朝からの調整の中で、それがかなり反映されたと思われる。調整の中で多くは県議の個別要請、団体要請が問題になる。少しばかりの加除でしかないが、議会対策という観点からはそれも又重要で政策というよりは政治的意味をもってくる。二期目の折返し点だから「奥田色」を出すべきだと一般にいわれるが、ほんの一寸のぞかせうるにすぎない。それよりも、大戦の時の英霊に対し慰霊巡拝だの、ハワイ、ビルマへの親善旅行だの、一議員の旅費値上げだの、数千万円の追加がそれに食われるが、政治判断で仕方がないと思ってしまう。議員というのは善悪両面をはっきり持っている。それをわきまえて、両面に適宜対処していかなければならないとすると、それ自体、善悪両面に染まることになる。

2月5日（日）

来年度当初予算出来

正午に出発、七時半帰宅まで平常勤務に同じだった。明日札幌に行くので、当初予算案をそれまでにあげてしまうということで職員には大きな迷惑がかかった。八%ほどの伸びとなるので、大いにふるまう結果になったと思う。天気がよかったので、出勤職員の遊び予定が狂ったのではないか。それがマイナスだ。教育庁、農政、商工など多めの要求が出ている。背後に県議がいて、事務系が尻たたきされている様がよく出ている。いつの世も同じかも知れないが、政治の無駄が感じられる。南海の小さい群島の一部に四四年前の戦死者の慰霊巡拝とか、植樹運動でフィリピンに行くとか等々、何千万円、何億円もの予算が、当然のような姿で出されてくる。何とかしてやりたいと思う部面は、逆に声なく手当もされないで終る。ただ、こういう「無駄」をあまりにクヨクヨ、コマゴマ考えると疲れてしまう。大きな波の中と知っているしかない。

2月6日（月）

旧知を札幌で

とつぜんの事ながら昨日中山日出子さんに連絡して札幌の鳴海氏に会えるかどうかたずねてもらったら、今日午後八時から宿所の札幌グランドホテルのレストランで、吉野、奈良田、川村の三人を伴って私を訪ね歓談するチャンスが与えられた。五年ほど会ってないかつての仲間である。北海道も石炭、造船、農漁業それに林業が構造的打撃をうけている。みんな肌で感じてわかっている。地域振興はいうまでもない、が、私は今の思いとしての家族、高齢化の問題をとりあげた。又、新聞だねになった諸問題もかぞえあげた。一つは君が代・日の丸は主戦場ではないとの発言、また筑豊の精神的風土云々の問題、第三に天

皇の戦争責任についての長崎市長本島発言へのコメントである。まだ北方領土や原発について火種がないわけではないということをつけ加えておいた。四人はよく理解してきていてくれた。時代が急にかわりつつあるので、われわれの方もそれなりに生きざまをかえるしかないということである。共産党は近頃、天皇の戦争責任問題を話題にしなくなったように思う。連合発足による統一メーデーも話題になった。

2月7日（火）

汚ない雪まつり

雪まつりが開かれて札幌の美しさを期待したのに、車公害というか新雪なく、道路脇の雪は黒く染まり、路上は泥んこで走る車はどれも車体が汚れきっていて愕然とさせられた。降雪がないのが一つの原因でもあるが、車が泥をもち込むのかときいてみたら、それよりも車輪タイヤのスパイクが舗装アスファルトを削り取り、その粉鱗がすべてを汚しているとのこと。近々スパイクタイヤは禁止されるとの話ではあるが、スノータイヤで代替できるか否か私は知らない。まあ、千歳までの遠景は雪が少いのは別にしてもやはり雪景色そのものであるには違いないが、札幌に近いほどすべてがどす黒く汚れているのにはびっくりだった。人間が天罰を受けているように思えた。「ながながと川一筋や雪の原、凡兆」「故郷へ通一筋や雪の原、渌人」、雪は少くとも、匂になるような景色に、ふれてみたかった。折角の雪まつり見物だったのに、と思われ、残念でならなかった。天罰をかみしめてみたい。

2月8日（水）

金印の大字がわかるか

「金印」が倭の国王に与えられたのが紀元〇〇五八年とか。推古朝元号がはじめて用いられたのが五九二年、だったら金印はそれより五〇〇年以上前である。倭の卑弥呼が魏に使者を送ったのが二三八年といわれるからほぼ両者の中間。このあたりの事情を日本民族の稲作のはじまりから明らかにしたいというのが私の国立博物館誘致への期待である。金印には奴国王とあり、卑弥呼にしる、又熊襲にしる、奴、卑、襲の文字が使われているのは辺境、属国の意識からあてはめた字ではないかと私は思う。それに金印の字が読めたのは当然だし、それが権威を示すものであるとの理解ができた人がいたに違いないと思うと、太古に文字の輸入がすでにあつたことを示すのではないだろうか。私がそういうと、ある高官は、誰も文字は読めなかつただろうとか、神話は神話として、それ以上せんさくしない方がいいのではないかとすら反論する。こういう人達相手では国立博物館への思いもなかなか浸透しない。歎きが残るのが現状である。中央では成金主義、美術館が大事という人もいる。

2月9日（木）

寒い書齋でふと思う

冬の日々、書齋に入るには一寸決意がいる。電気ストーブは入れるものの、坐り机がほしいがその用意がない。何となく寒々としているし、とくにここでなくても時間はすごせるのにも思ってみる。北鮮からの手紙に返信をと思いつつ、のびのびになっているが手がつかない。書棚をながめてみる。今の自分にとって用のない本があれこれ並んでいる。なぜここにこの本がと思うが、全部自分の責任でありながら、ここに置いてある理由づけはできないものの方が多い。ものいわぬ本、誰も関知せぬ本、これらはいずれ捨てられてしまうかも知れない。私が処理しないなら、他の人なら捨ててしまうだろう。どこかの海の魚、土の中の虫、道端の雑草のように、あるべくしてあるのに、抹殺されてもどうということはない。自分の存在もそうかな、と試してみたりする。そして結局、自己満足が、それだけがあるにすぎないと自答するのである。

2月10日（金）

間有趣

今日午後、二度目の三井ハイテック見学であった。社長の三井孝昭氏も多忙な身であるが、ていねいに案内し、夕食も招待、歓談してくれた。八代の出身、私より三ヶ月あと十年二月生まれで六八歳になったばかり、若くみえる。四才の時母に死にわかれたという。親なく奮発の契機になったといていた。立派な研修所（三井パーク）迎賓館（三井クラブ）が造営してあるが、庭の木も自分で手入れすることがあるとか。庭の手入れは楽しいという話であった。先日の西日本新聞にも余技をもつことの必要性を強調したコラム欄があった。余技はもとうと思わなくてはもてないだろうが、その心は生活に打ち込む状況から出てくるのではないかと思う。忙中閑という言葉があるが、閑は自分で見出すものかと思う。そして間有趣という言葉のように、余技、余暇が忙中でこそ意義をもってくる。三井氏は庭に興味があるようだ。庭の草むしりでもいい、マンション住いには又それなりの趣を見出す方途もあろう。

2月11日（土）

建国記念日

〔一九六七（昭四二）年の日記に、初の建国記念日、多くの学生が反対を叫んで同盟登校をしている例があると書いている。〕

建国記念日の今日、明日連休、めずらしいことだ。労働時間短縮が叫ばれている時代だから連休といってもかなり当り前になっているが、私にとってはそうはいかない。こんな時を目掛けて来訪する客があるし、揮毫の宿題をどっさり抱えているので半分はそれにとられてしまう。今日の建国記念日を国民一般が何と心得ているだろうかと思うと、この休日

は意味ないように思う。他の休日と違ってとくにこの日は、神道系の人にはさで知らないが、一般は何とも考えないで単に休みとしか思うまい。新聞やテレビがこれにふれているの知らない。祝いの気持はないのではないか。何故に建国なのか、どう建国なのか、ほとんど知らないだろうし、知ろうともしないであろう。自民党政府がいつ法定したのか私は忘れてる。百科事典や現代用語の基礎知識をひいても項目に出てこない。知らないのはいけないといわれればそれまでだが、主観的には何と意味なき休日かなである。

2月12日(日)

裏庭の草

参院補選投票に行ったあと、ひまができたので裏庭に出て草むしりをした。この連休中での予定の行動でもあった。歳時記が思い出されて一月のところをくってみて、感慨を借りることにした。 冬草の踏まれながらに青きかな (俳小星)

下向いていくつかあるや龍の玉 (夏山)

雑草といえども懸命に生い立とうとしている。雑草だから育てられなくても伸びるのだろう。引き抜きながら、抜かない方が……と思うのである。人間の勝手さをつくづく思う。龍の髭の玉は見えないのが当たり前なのに、草抜きをして手に当ってはじめて存在を知る謙虚さである。五〇センチもの高い萬両に、龍の玉とは違う色だが、同じ謙虚さと輝きとを発見する。大きさも似ている。どこかでこの萬両を鉢にうえて座敷にあげているのをみたが、一案であろう。わが家にはかなり立派なのがあって事欠かない。満両についてはわかりやすい句はなかった。

2月13日(月)

激震はじめた政局

参院地方区補選	
渕上貞雄	751,036
合馬 敬	564,301
藤野達善	170,778
前田宏三	160,294

昨夜は八時頃からあわただしい電話で早く出てこいという。永田室長と斉藤氏の二人が迎えに来て、早目に当確(夜九時ごろ)が出た渕上事務所に出向き、沸きに沸いた一時であった。帰宅して十一時から十二時まで、渕上圧勝のテレビ放映を見てすごした。今日は登庁しても選挙の話が主流であった。政局は大きく動きはじめる。土井たか子委員長の代表質問もこの選挙結果にふれ、竹下内閣の総辞職か解散かを求めたのに、竹下総理は予算案通過の優先を主張、総辞職も解散も否定した。福岡のこの選挙結果が国政の前途に大きな影響を及ぼし、外国のマスコミもこれを報じ、国際関係にも影響を及ぼしそうである。リ

リクルート問題については検察も今日を待っていたかのように、リ社及びNTTの関係者の逮捕にふみ切った。労働省、文部省の高級官僚に波及すること必然であり、ニュースの解説は国会議員や大臣にも及ばないなら無意味とも報じている。自民党・内閣はがんばるだけ頑張っていて、衆参同時選挙（夏）にもっていこうとしている。

2月14日（火）

衆怒不可犯

衆怒不可犯という言葉があり、一昨日の夜渕上選挙事務所へ当選祝いに行き私を書き示したのが毎日新聞に出ていた。昨日は出典はどうかと探したら左伝とある。春秋時代で二四〇〇年ほど前、孔子の論語とどちらが古いか知らぬが、ざっと、その頃らしい。筆者不詳。それにしても日本ではもちろん有史以前、衆怒といわれるようなことが、いえるようなのが不思議なほどである。人間が存在する限り「政治」があったんだろう。だったらこの言葉は決して不思議ではない、というよりは今なお政治というものは本質かわらないのだと思う。私も二度の知事選で、これを実感したし、今回の福岡参院補選でも、これが実感できた。各紙は一せいにこの補選を評して、同じ意味のことを書いている。逆にいえば自民党多数の「おごり」を評している。竹下総理とアベ幹事長は、総辞職も解散もありえないと主観をのべているが、政局はその主観どなりに動かないかも知れない。リクルート事件の進展、議会内各党の動き具合、四月以降の消費税への国民の対応、——衆怒がつづくのではなかろうか。

2月15日（水）

リクルート事件、政局、消費税対応の判断の混乱

今日もまたリクルート事件でリ社の二人が逮捕された。これは証券取引法違反ということで前の贈賄とは違う。福岡補選の結果がリ社事件で加重され、竹下内閣に圧力を増していることを外国の新聞も大きく報じているらしい。今日は公明党県議団から消費税問題で知事要請があった。県の料金引上げなど県民負担への転嫁は反対、市場での一般便乗物価値上げの監視体制、物価相談窓口を開けという内容である。いい分はよくわかるが、県として政府の圧力をはねかえすことはできないことも明らか。この頃の新聞は消費税の転嫁の仕方がさまざま四月実施をめぐって混乱が生じていることを報じている。きけばきくほどわからなくなる消費税というのが通り相場、売る者も買う者も品物のいかにとわず混乱が生じはじめてるのが消費税導入直前の現状である。県の予算編成の中でもどうなっているのか判りにくい。何%増といっても消費税をかかわらせると、実質増かどうか判断できない。

2月16日（木）

気にしない、それを自然体というのかな、

二月にげるといふ。もう半ばすぎ、霽囲気も心も三月がそこまで届くようである。余寒という状況さらさらなく、気温も春かと思わせる暖かさ。二月県議会の準備もできて今日は代表者会議、記者会議での予算案の説明もすらすらいった。気になるのは四月から施行の消費税、これがわれわれの予算案にも盛り込んである。しかし、今日も国会は荒れ気味で、暫定予算で四月に入りこむかもしれない状況。竹下首相は野党の追及に耐え、すべてつっぱりつづけている。どこでどうなるか予断を許さぬ国会の流れである。県予算にどう響くのか気になるところだが、まずは成りゆきにまかせるほかはないと思っている。病は気からという言葉は何分の一か信ずるこの頃である。記者会見の時の私の発言が、「三期目」は挑まぬといったように受け取れたと、前秘書室にいた羽根氏が廊下で私にささやいた。将来のことは考えないことにしているが、今を感謝している気持から推すと、知事を止めて楽隠居になるとガックリ来るかも知れないなと感ずる。国会、県議会、気にしないことにしよう。

2月17日（金）

幼年消防全国大会

幸い大降りではなく、朝から戸畑の北九総合体育館での幼年消防全国大会は五〇〇〇人の入りで、九時半から一時まで成功裡に終わった。笹川良一氏は粗末に扱えない権威の塊まりぶりを見せつけた。幼稚園児四組の演技が次々と夢のように過ぎ去っていった。全国からの程度集られたのかは想像はつかないが、たしかに全国大会であることは判った。以前に創価学会の池田名誉会長が隣席の世界青年平和祭もここで行われたので思い出される壮厳そのものであった。今日の子供達もよく訓練されていて秩序ある行動を展開していた。幼年消防クラブといて、幼年時から防火の躰をきちんとつけさせようとする団体をひろげ強めていくのがこの全国大会、第九回といわれる今回である。県と北九州市が後援団体となり、防火及び消防の全国協会が主催だったろう。出演幼児の母親の目が輝き、指導の先生達が大忙しの活躍であった。

2月18日（土）

新しい福岡の中心『ももち』

百道海岸の広大な埋立地が今急ピッチで変貌しつつある。人工海岸、アジア太平洋博覧会場としてタワーが建ち、博物館に予定されるメイン会場テーマ館が出来上っている。都市高速道はそこまで来ていて空港ランプとともに三月のはじめにオープンする。そうになると空港からここ会場まで十五分ほどでとんで来れるという。びっくりするような変化だ。近くには中国領事館がこれ又立派な姿を現わし、近く開館され、韓国総領事館もその隣に立

つ予定になっている。住居地と予定されている部分には公団のしゃれた住宅が建ちつつある。ダイエーが、野球場をふくめたツイン・ドームを建てる話が今財界をわかしつつある。福岡市の新しい中心が、この海岸に展開されること必至である。黒門川も大道に変化し舗装され新装成った大濠公園にこの地をつないでいく。新しいこの福岡の顔に財界が案内冷淡である。

2月19日（日）

下萌え

今年は龍建設が何回も立派な花を届けてくれて冷い空気にあてないように座敷まわりにおいているが、客が来ても具合の悪いほど鉢が並べてあるわが家である。梅は紅白とも立派な鉢をいただいたが、咲いて咲いてどんどん咲くので、今日は外へ出た。「下萌え」の実感の湧くこの頃である。ひのあたる時は外に出て萌え出ずる雑草を抜く。しぶとく真摯に萌えたとうとしている草を抜くのは「痛み」を感じ、すまんなども思う。矛盾である。野草幽花各自香の七文字を揮毫したことがあるので、私が抜いているあの草この草、名は知らないがそれぞれに懸命に花を咲かせることは知っている。それだけに「痛み」を感じるのである。「下萌えや土の裂け目の物の色」（太祇）「石一つ抜けしあとあり草萌ゆる」（伯雲）の二句を歳時記から引用して今日の気持を代弁してもらおう。筆をもってずい分時間をすごしたし、申分のない一日であった。

2月20日（月）

健康不調

どうも不調。数日前から頭がくらくらすることしばしばだし、睡眠が十分でないし、今日は頭が大変重い。すっきりしないばかりか、曇天そのもので視界きわめてせまい。どうもこの旬日、検診の結果がよくないのが気がかりである。尿も大変濁っているように思う。明日ドック入りなので、その点解明できるよう期待している。全く消極的ながら、生きていく意義も意気も感じなくなりつつあるように思う。他人はどうなんだろう、自分は以前どうだったかなと思い返してみる。そんなことを思わないで無意識なのが正常ではないだろうか。このまま消えるみたいに……とすら思う。「今日教育を考える会」の陳情で、来庁の母親たちも、さんざん注文をつけたあと別れる時に「呉々も健康に気をつけて下さい」という。同じことは事あるたびに一般県民から私の耳に入る「健康に気をつける」とか「お元気？」といわれる中味を、このからだで、どう答えていいかわからぬようになりつつあるようだ。「はい、はい」と答えはするが、正しい答えといえるかどうか。「辛うじて」というしかない。

2月21日(火)

『爽快』を無限にマイナス方向へたどって無に至る

随行の斎藤氏に、病院での人間ドック検査待ちのつれづれなる時間に話したのが「爽快」のマイナス方向への進行についてであった。頭に霧がかかったとか疲れたという表現ではどうも当てはまらない。加えて、睡眠の不十分さも、就床時間は九時間も取り、十分はずなのに、眠った感じの目覚めがないし、どの瞬間も覚醒しうる状態にあり、かすかに尿意を覚えて用便に立つと、就床して後すでに三時間も経過しており、その間眠っていたとの感覚がない。日中いつでも眠い。それでいて横になりながら、何分たっても眠るわけでもない。夜は眠らないで人を相手に、又はこまごま身のまわりの事をするとした場合、いつまでたっても眠いとは思わない。こういう状況を何とっていいか、自分でもわからない。病院のベッドの上で目をつむって、雨の音をききながら、自然とは、人間とは、意識とは、と考える。うたかた、まぼろし、無、有、歴史、ひろがり、亡失あれこれと念想が浮ぶ。言葉、文字、すべて不思議。

2月22日(水)

鳴動への局面

宮城県知事選公示直前に自民公認の代議士が突如立候補をとりやめ宣明。福岡では高石、遠藤の二人が大きく報道されるなど、依然リクルート疑惑波紋が鳴り止まない。他方、消費税の地方行政での転嫁について東京都知事が反乱、他の府県の中でもこれにつづく例が出て、福岡県をふくめ、各府県、市の対応が混乱、この問題は県議会にも、竹下内閣にもこの先大きな動揺の種となって来た。私は、昨日社会党県連から出された「転嫁反対」の申入れにしる、東京都知事の転嫁方針にしる、本県の転嫁方針は当面かえられないとして対応するしかないと考える。すべて竹下内閣の政治問題だから自分で苦悩することではないと思えば、問題の大きさほど神経にさわらない。この先、三月一ぱいは確実に全国的鳴動は止まず、県議会をふくめ、先行き予言できる人はないだろう。竹下内閣は総辞職も解散もできぬ袋小路に立たされている。二十四日の大喪の中味も問題大あり。対外信頼も揺ぎ大きく、大喪のあとの内外の展開、ほんとうに正念場に来た。

2月23日(木)

サリーらを呼んでの一夜

戒厳令下の東京に七時すぎに着き、啓二・直美を呼んで東條会館七階で中華料理による夕食会をした。ライヤ、サリ、みゆき全六人。三月中旬に満三歳になるというサリが注目の集まる場所となった。十時前にふくおか会館に戻り、十一時ごろまで喫茶室で過ごしたがサリがあいきょうをふりまき、みんなを楽しませた。言葉数もかなり多くなっている。フィンランド語も母子の間でいく分通用するようだ。"咲いた咲いたチューリップの花が、"

その他の童謡をうたいながら、手まねで動作してみせた。ジャンケンポンもできる。何が現段階の先端か私にはわからぬが、半年も前にくらべてずい分成長しているのに驚かされた。随行の藤本女史、斎藤氏（床島所長も交え）わいわいの一時間余であった。三歳児三ッ子（児）という言葉があるが、一番成長が目に見える年令といえるかも知れない。先日の電話ではスケートを習いはじめたといっていたが、小魚をどんどん食べさせてもらい、何でも習わせてもらうのが大事な時だ。

2月24日（金）

葬儀で一時代終わる

八王子の武蔵陵墓地で、夜陵所の儀が行われ、朝からの葬場殿の儀大喪の儀とあわせ（新宿御苑）昭和天皇の葬式は終わった。動員された警官その他大変だったろう。近親の人達は食事のひまさえなかったのではなかろうか。冷雨がつづき苦労は一そうつものつたろう。外国からの弔問者、記者も何千人、種々感想を懐いたであろう。失礼な事はなかったかと心配する。天皇の戦争責任、この葬式の政教分離についてマスコミは意見を拾っている。この火種があった方がいいだろう。ともかく今日の感想は一時代が去ったということと、対外的に日本の責任が重いということが実証されたの二点につきる。この葬儀、古式豊かといわれ、平素使わない字、天皇にしか用いない字も随所にあらわれ、常軌を逸しているさえ感じたのは私だけだろうか。古式という事はいい事なのか、なぜ、今回の斬新さを出せないのか、誰でもわかる字で表現できるようにしないのかといった疑問が残るのである。古式といっても始まりは新規にあったはずではないか。

2月25日（土）

大喪の総決算

今日は新宿御苑で葬場殿が一般公開され多くの観客がつめかけて見物したそう。総檜づくりで高価なものなので、後にどこかの神社に下賜されるのであろう。国費しめて一〇〇億円の葬式といわれる。警備がそのうちかなりを占めるだろう。商店交通の休業、規制による収入減効果は一日しめてかなりなものであったに違いない。葬儀粉砕を叫ぶ人もいた。逆にドラム叩いたり大さわぎをする人もいた。新聞をみていると、弔問外交で国が他国から期待され、背負った精神的負債は、測定するわけにはいかないが、今後に向け大きなコストとなろう。当然といえば当然だろう。天皇の戦争責任をむし返す国もあったし、国民もあった。平和への誓約を改めてもとめられたものと受けとらなくてはならないし、対外債務の金銭的、道義的な総計は、この先、日本の安全を自から保障することにもなる。そういうことが、賛成か否かをこえて今回の総決算だったと思う。

2月26日（日）

「前向き」の時間がとれなくなって

名古屋国際ホテル五二一号室、午後十時三十六分、身支度すべて終って、就床する手前に来ている。以前は何かしようとの欲が先に立った。ここ一年ばかり、身をととのえるのが何より先という気持の方が強い。そういう心がけがないと、肉体的に宿題が多すぎる。夕食を共にした岩本氏にも話したのだが、二、三年前までは毛筆で仮名練習をするとか、一時間でも前向きの、自分を練る時間に使ったのに、今は多忙という事を別として、睡眠を含めて、少しでも肉体的温存のための時間をとりたいと思うようになっている。日記をつけるのも決して前向きとはいえぬ。岩本桂氏が話すように、文字や哲学、宗教その他何でもいい、新しいものを吸収する時間はとれなくて、後向きの温存のための時間を割く方にむしろ力点がかかってくる。去年は八月以降四ヵ月ほど、戦記ものを読んだ。これとて後向きのものでしかない。やむをえないかなと思う。「進歩」はない。「温存」が先立っている。そういう我になってしまった。

2月27日（月）

高木二郎氏と面談

大阪のプラザホテルで三〇分近く、高木二郎マルホ社長と面談する機会にめぐまれた。同じ軍隊生活をし年齢も同じ、「八月十五日を詠む」という句集「昭和万葉句集」及びその前書集を編集し、二冊とも送呈してくれたので、謝意を表するため、大阪企業立地推進委員会に行った折に会いたいと思い、今日念願を果たしたのであった。いわば戦後彼の腕一つでマルホ製菓を作り上げたようなものである。誰しも若干の虚脱時期があり、彼も同様だったが忽ち一家をなすに至る。その意味で、われわれの世帯、戦後青春の生き残り組は今日の日本を築くための活躍の場に恵まれた世帯といってよい。「出世」という言葉は適当でないであろうが、やる気さえあれば、ぐんぐん伸びて行くことができた訳だ。文句はあるが、よき時代に生まれたともいえる。高木氏はやはり文学青年、そして大経営者。好きなように、そして思う存分の活動をしてここまで生きて来た。高木二郎氏を賞讃したい。

2月28日（火）

テープの会の女性たちから教えられる

午後二時から一時間半、福岡市福祉会館で「渡辺通りテープの会」の人達三〇人余を対象に対話集会を開いた。盲人用テープ吹込みのボランティアグループである。何百巻のテープを十数年間にわたって吹込みつけている。文学ものばかりか教科用のものいろいろである。ひとりで何回も練習し作品にし、マザーテープにまで仕上げ、コピーして使ってもらうのだそう。この福祉会館の一室にはたくさんのテープが収蔵されていた。福祉マインドが低いわが国で、こうしたグループが存在するのは福岡の誇りでもある。今日の対話

の中ではテープ吹込みに至るまで字書をひくなどすごい勉強が必要なこと、盲人と接することにより、障害者の心がいかに多様かが理解できるし、その能力が思いの外高いことがわかると話していた。白杖をついた人にわれわれがどれだけ距離ある思いをしているかといった点が指摘された。無用の同情、してはならぬ差別観、盲人の個性及び能力の無視等々、吹込み活動を通じて盲人に対する正当な見方、ゆがむことなき人権への認識。今日の対話を通じて私も多くのことを教えられた。まだまだ到達しえぬあるべき福祉マインド。

3月要記

十七日にアジア太平洋博が開幕となる。その前段からそれに向けての行事がつづく。県議会は三月一日から質問戦に入る。それが又延々とつづいて終幕が三月二十七日。消費税がらみで、予算条例の審議で共、社、公、民は反対、自民、農政はジレンマ。社には与党責任の悩みがある。公、民はきれいごとで乗り切ろうとし、共はいいっぱなしといきそうだ。二重、三重にねじれがある。私も消費税賛成といえないのに、予算条例の提案は消費税の転嫁という法の筋を前に出していかなければならない。矛盾といえば矛盾である。これを弁護する者は勿論ないがつづく方もつづくでうまくいかないこと明らかである。全く嫌な一ヵ月多忙をきわめる一ヵ月だ。四月はじめには人事の大異動がおこなわれるが、その面にも二期目折返しということでもいつも以上に気を配らねばならない。関心の高い人が少ない。とりわけ幹部異動には誰しも目を向ける。中旬には上から順に駒を動かしていく手順が見えていなければならない。県議会のさなかにである。息つくひまもない三月だ。

3月1日（水）

漢字、書道への注目

漢字というのに若干興味がでて、一寸のひまをみて平凡社の書道全集のはじめの方をペラペラ読んでみる。第一巻に殷、周、秦時代のことがあり、全二十八巻、今から三〇年前に発行された全集である。旧漢字体で書かれたものだが面白い。漢時代になって、書が芸術の対象となり、今日に至る。殷の甲骨文、周の金文、東周から六朝の古文、秦の大篆はまだ書道にはいらぬ。後漢の末期に、篆書、隸書の書体から楷書へと脱化していく。草書はすでに前漢時代に篆書から脱化したといわれる。「僕おこって草書あり」といわれ、楷書以前に草書があったのだそうだ。篆書、隸書、楷書、行書、草書といった時代の順序のような観念は訂正されねばならないようだ。なお、漢字前史に秦の始皇帝の果たした文字統一の役割は大きい。焚書坑儒は紀元前二一二年三年といわれる、二世紀はじめ、蔡倫が紙を新製し、つづいて毛筆、墨硯などが発明され、書道の発展の準備がととのったようだ。「洛陽の紙価を高める」とは後漢の始祖光武帝の都での書の発達をいい表しての言葉である。

【欄外記入】

紀元25年 後漢光武帝洛陽に都をおく

〃 58年 委奴国王の金印授く

3月2日(木)

スタンドプレー過剰の高岡新

議会での質問をみていると、社会党は遠慮して例外だが、他はみんな「我こそは」とふんずり返ってスタンドプレーに徹しているようにみえる。今日の代表質問県民クラブの高岡新など、その最たるもの。明日の公明党北原もその臭いが立ちこめている。NHKテレビの実況放送が入っているので、とくに質問者は意識するのであろうか、自分を高く背伸びすることによって視聴者に売りつける。知事をこきおろすことによって自分を高めに評価させようとする。心の貧しさを感じずし、哀れ人間という感じもする。問題でないことを問題にする。知識や教養の程が知れるのだが、平凡な立場からテレビを見ききする人には過剰評価に反響するかも知れない。議員心理というものがあるのかも知れない。高岡の県債についての質問や再質問は何だといいたい。後々に記録されるが、それを掘り出す人もなかりうけれど、恥のカキ捨てといってもよい。県債で財政再建団体に陥る…といった指摘は、とくに馬鹿みたい。

3月3日(金)

全盲者の公立普通高校への進学問題

久美が(どこなのか)公立志望校に合格したとのこと。今日の代表質問で、全盲の中学生が県立高校の受験をことわられている問題で教育長が追及された。福岡は十四日が入試らしい。受入れ体制がないということで教育長は弁明していたが、議場の空気からもこの対応に賛否両論があること明らかである。自民席からは共産党のこの質問に対し、教育長を弁護するヤジがとんでいた。点字受験だけではなく、入学校の対応も出来ないというのが県側の言い分。本人、親、身障団体、それに左翼の政党からは人権、平等の視点から県教委の対応を不当として追及をゆるめない。夕刊をみていると、法廷の争いにもなりかねない様相である。教委のいい分は点字ホンヤクや点字教材の準備が大変なので、特殊学校の高等部に進んでくれればよいとのこと。本には健全者と共に学校生活を送りたいというし、応援団側は、障害者を包んでの学校生活により健全者も学ぶ所が多いはずという。私自身にわかに軍配をあげにくい。迷いがある。

3月4日(土)

我と吾

代表質問が終って今日は休務。昨日の検診の結果はまずまずだが、血糖値はよくなく、頭に何か不透明な重みが消えない。頭、々、自分をいつも、つきつめて考える。しかし、議

会で消費税などで追及されていると、演壇に立っている自分は何なんだろうとしてみる。二つの自分がたしかにある。私とわたし、我と吾、四次元の全界の一点にいる自分と、自分の四次元的実在とがある。今の自分、その連続が四次元にひろがっている。ひろがってきた。ひとからはほめられ、そしられ、頼られ責められる自分である。辞書をひいてみた。我は自分の事にこだわる、自分の存在の中心点。吾はわが身一身についての自称とある。我執、我儘、我慾、我利我利、我田引水、吾は余、予に近く、吾人、吾輩、吾従、吾家等々と使われる。我が国という場合は他国の対応を意識せる。我忘吾（蘇軾）、吾喪我（左伝）の用法などよく考えてみる必要がある。

【欄外記入】

△豈惟主忘客、今亦、我忘吾

（陶然として自分を忘れてしまう意）

△吾喪我

（心を世俗から離れた境地に遊ばせる）

3月5日（日）

代議士に一億円

太田誠一氏が大蔵政務次官になったと、おくれれば乍ら今夕県レベルでの祝賀の招宴を行った。いろいろ話題になった中で、一つ記憶に残ったことを書きとめておこう。先日の新聞に出ていたのだが、代議士の年間政治資金は約一億円という話。くわしくは知らないのだが、太田氏がいうには、平均的なケースとして納得できる金額だろうとのこと。歳費だけで議員生活できないは明らかである。資金集めはあの手この手で行われ、すべてヤミの道である。ヤミでしかありえない。県議林氏も出席していて、県議という位置にいて四苦八苦という。しかしどの県議も私の知る限り、上級の住宅に住んでいるし、事務所を構えてやっている。土、日になるとゲートボールその他のイベント、葬式、結婚式にそれぞれ一万円を包まねばならぬ。暑中見舞状、年賀状は夏、冬の期末手当を投げ出しても足りない。どうやって資金をまかなうか、通常の人にはそれが闇の中。政治の深層だ。

3月6日（月）

吉村元秀のいやな質問 人物の程を曝露

一般質問の先陣に自民党の吉村元秀が立った。消費税一本にしぼった質問だが、三～四回立ったりひっこんだり、知事攻撃に終始。消費税法を作った自民党竹下内閣を責めるのではなく、消費税に反対するはずということで奥田を責め立てるという戦法。それも関係条例を引っこめる要求でなくて、「お前は矛盾してないか」というための攻め立てに終始してしまう。議員席からも、いい加減にしろといわんばかりのホクソ笑い。ひとをこきおろせば自分が値上がりすると錯覚している青二才の見本みたいな吉村元秀。これにくらべる

と大濠公園の今後の姿について質問した大内哲夫（公明・県民会議）の演説は際立ってすがすがしくきき耳を立てさせた。人物が違うこと歴然。吉村のように、理解に深味もなく、党根性だけが先走っているのとは違い大内は良識ある俗人が望みそうなことを演壇で浄化して県政施策に反映させようとする。吉村のように知事をこきおろしても県政の高揚、推進に何の影響も効果もない後味の悪さだけ。

3月7日（火）

公と私一人間

帰途済生会病院で点滴と検診をうけた。議会の一般質問後、牛乳をのんだせいかな血糖尿糖ともに悪い数値が出た。終って玄関付近で気付いた、数人の外出着のギャル。よく考えてみると彼女たちはこの病院の看護婦たちのようだ。ユニフォーム姿とはまるで違う街頭のギャル姿である。バッグを肩から垂らし、厚いコートに上半身を包み、今から街頭を歩く一般ギャルになるのであろう。公と私、姿の区分からはっきりと今あらためて認識させられる。誰だってそれが当たり前なのに、同じものなのに、なぜかわれわれは看護婦を看護婦として見るし、街頭ギャルを街頭ギャルとしてのみみてしまう。外見的及び瞬間的なそれをそれとしてのみ判じてしまう。同じものの変化した形象として連続的にみようとしなない。そう見る必要はないし、そう見てはいけない。だが他面、人間を人間としてみるためには、連続性、本来的なものを見てとる必要がある。かんたんに例としては看護婦も若い女だということである。逆にわれわれは街頭歩く女からOLや看護婦を忘れないことも必要なのだ。

3月8日（水）

『たかり』根性に充満している政治の世界

一般質問の三日目、下川、中村（忠）、若狭、山本（辰）、牛浜の五人。それぞれの質問をきいていると、住民福祉や地域振興の名において、誰も彼も我田引水やらたかり根性の競演みたいに見える。政治というのはこんなものかと改めて考えさせられる。中央の失敗を県に尻ぬぐいさせようとする者もあれば、県は何でもせねばならぬといい張る人もいる。かと思うと、地域のことを考えて施策を提案しても己れがきいてないということで反対を叫ぶ者もいる。農業問題は今議会で一番多くの者がとりあげた課題である。自由化で、牛肉、オレンジ、米の影響を心配するのはわかるが、われわれと議員とでは思考の角度が違うみたいだ。予算を組めというが、どうせよという提言はない。カネを出せというだけである。道路といい、北九州空港といい、用地買収や補償費取りの方が底にあるようである。ダム建設についてもそうだ。外国のことはよく知らないが、日本の政治には私権に公金を投げ出すことに多くの精力が注がれるところに特徴があるように思われるが如何。

3月9日（木）

永つづきすまい日本の繁栄

若干こうふん気味なのか、夕方の JAL で上京の機中、随同行の斎藤氏を相手に語りつづけた。斎藤氏も、今日の一般質問の井出宗夫は品がさがるだけと評価していた。相手をやっつけようとしてかえって自分の欠点をばくろするいい見本である。得る所ゼロ、時間の無駄づかいですらあると彼はいていた。旧知事公舎問題に食いついたのだが、亀井の弁護にすらなつてなかったのは哀れというほかないだろう。機中のもう一つの話は次代の国民とつか、日本の将来についてであった。今の若者の耐乏、辛抱、克己の心のなさである。大英帝国も百年、アメリカも百年、日本も今は絶頂かも知れないが、この若者たちに担われて何年つづくだろうということである。物質の豊かさと政治のかたよりが、人間をダメにしていつているということだ。政治の力に頼りすぎ過信し、タカリ、依存、腐敗もいいところ。斎藤氏は家で子供達が勝手に食餌を選ぶと歎いていた。親は子にたよらず、子は親を思わず、近隣は冷淡、高齢者は行政にたよっている。

3月10日（金）

公舎への入居にかくされた問題

東京からの帰りは多賀谷衆院副議長と一しょだった。今日の新北九空港建設促進国会議員総会にも彼は出席していた。機内での話題の中で私が公舎問題を出した。副議長公舎には入居していないとのこと。理由の中心は経費がかかるということだった。福岡の知事公舎についてもそれがあてはまる。ひとには言えないが、心情の一部にあることはかくせない。多賀谷氏の話では客の応接に思わぬ経費がいろという。随行の人達にも食事を用意しなくてはならない。接待要員を雇入れねばならない。居室が広いなら掃除も大変だろう。庭の手入れなど公費かも知れないが、気付かれない入費が多いはずである。住居の自由といういい分があればこそだが、公舎の入居を昨日の井出宗夫県議の質問の線で強要されるなら、生活に困窮するか、汚い手段でも弄して別途資金を探さねばなるまい。外向け威厳も保てようが、裏で不正をしなければ立たないだろう。井出は無鉄砲に、みっともない質問をしたものだ。

3月11日（土）

城島町の第四〇回県植樹祭モチの木をうえる

城島町で県植樹祭。酒どころで有薫とか富の寿が知られている。筑後川の曲がりくねった何千年かの洪水のあとだろう、川向うの佐賀県に飛び地のようにもなった領域がある。立ち寄るのははじめてである。全くの平坦地。誰にも見せないなげやりの農家のたたずまいは、人間の自然な諸行為のあらわれであろうが、かなり散らかって見える。軒場、庭先、畑、川溝、すべて清掃・街並みという感じがしない。ととのっていない。田舎というのは

こうなのが普通かも知れない。私もそうした中で育って来たのである。筑後川の堤防は菜の花が今や満開である。毎年菜の花摘みに行く。風の冷たさはかわらないが、今年はそのチャンスが見出せない。菜の花は塩もみにして食べると一寸残るニガ味にもかかわらず大変おいしい。ツクシがどんどん出てきているようだ。タンポポやすすい、川の土堤はもう春一ぱいである。付近の町長、各級議員、小学生も出席、約二〇〇〇人。

3月12日（日）

休務の一日

昨夜から直美が友人の結婚式出席のため帰省していて今日夕方帰京した。朝から依頼されていた書の仕事を整理した。高崎新八氏が昨夜速達で知らせてきたので、八丁氏を偲ぶ書集は「山より高きその志」とした。先日、大坪と二人で来宅して依頼されたが、題名を決めかねていた。三月下旬だったか（三月二五日）もう一周忌になる。天気がよいので裏庭に出て草取りに時間を使った。春に向けて雑草が逞しく伸びはじめた。冬の間も耐えてきたのだから、かわいそうに思うのだが仕方がない。けんめいに生きようとし、貯えているエネルギーを思うと、可憐であり、一本一本は愛すべしと思うのに抜こうという勝手な気持ちが上位になってしまう。ボケ、ヒヤシンス、椿が咲いている。水仙は終り長い葉が弱って垂れさがっている。藤棚が黒ずんで汚れているので拭きとるのに苦労した。甘夏柑は例年よりずっと少い。

3月13日（月）

アジア博始まる、古代のロマンと現代

九時からアジア博のテーマ館のオープン式があった。次いで九州館も…いよいよ九月までの長期にわたるアジア博の時期が来た。このテーマ館は後に市の博物館になるもので、多くのパピリオンの中でも本格的建造物。時代が新しく明けたように感ずる。陳列品の説明テキストをもらったが、九州、福岡、朝鮮、中国の古代、文明のクロスロードを物語る遺物の数々、それは古きロマンを語るばかりか、石炭・鉄で支えられることのなくなった今、福岡の21世紀を見定めるための技術立県と国際化を唱道している。われわれの未来像への指針も黙示している。帰庁したら森山君が魏志倭人伝の一部卷三十の（三国志）現代日本語訳と本文のコピー（中国正史現代語訳）を届けてくれた。時間があったので、これにもさっと目を通す。卑弥呼、邪馬台国のことなど、はじめて概読することができ感慨深い一日だった。三世紀まで三〇〇年、もっともっともっと知りたい。佐賀県の吉野ヶ里遺跡発掘にも注目は怠らぬこと。

【欄外記入】

テーマ館展示図録「みち であい」

3月14日（火）

見苦しい街並み

七月下旬に県が国際青年の村事業を担当するが、その下見に二七カ国の政府機関の人達が来県。夜ステーションプラザでそのレセプションがあった。「行き届いた接遇」「美しい町」といってこの人達は、われわれを褒めてくれた。だが福岡は美しいだろうか。機能主義と経済主義でマチが変わったことは確か。しかし街並みはそれぞれが勝手にやっていて、まちまちの建物で不揃い。他を顧みない、全体の中での調和を考えない建造物がほとんど。一つ一つは立派でも全体はなっていないといえる。街路は汚い。ゴミも捨てっぱなし。とくに気にいらぬのは看板と広告。はんらんと無秩序、すべて利己ばかり。電柱、電線の乱立クモの巣張りは何とかならないか。電柱は現在の交通状況からみても邪魔だし、景観としても見苦しい。日本人の心の貧しさ、成金ものの生きざまそのものである。ヨーロッパ先進諸国はきっとこのようなさまはないに違いない。二十一世紀になれば少しはまともになっていくだろうと期待をもっているのだが。

3月15日（水）

福岡市制一〇〇年記念アジア博開幕前夜

今日の「市政だより」は博覧会特集号。全八ページがカラー刷りで案内版である。昨日は会場近辺及び市協力者一万五千人に招待の日で、みゆきも三枚招待券をもらって行って来たという。ごった返していたとのことであったが、いい宣伝にもなっただろう。今日は前夜祭レセプションがニューオータニで開催された。市街のあちこちは、雨が多くておくれたのかも知れないが、もう一寸工事中といえる路傍光景があちこち見られ、まさにアジア博に突入寸前といえる雰囲気になってきた。主催はアジア太平洋博覧会協会、会期は三月十七日から九月三日まで一七一日間、会場は埋立海岸シーサイドももち。三月四日に都市高速自動車道空港一百道が開通して交通も便利になったが、予定入場者七〇〇万人というから一日四万人ほど、かなり混み合うのではないかと思われる。プレイランド、道路など事故がない事を祈るし、内外の要人の出入りもあって県警はピリピリ緊張がつづくに違いない。その間のイベントも多く、大忙しだ。

3月16日（木）

よかトピア開会式

アジア博会場内のリゾートシアターで今日は開幕式。参加各国からも来客多く二時間にわたる次第は明るさと華やぎを加えて十分に意義あるものであった。海、アジアを十分に意識し、そして九州・福岡を浮き上がらせるのに十分工夫された出し物で参加者は十分満足できたのではないかと思う。二〇〇〇人の参加という。九響も力をこめて伴奏していた。NHK アナウンサー羽佐間正雄、目加田頼子の二人の司会ぶりも見事だった。武田鉄矢と

加山雄三の演技も光っていた。三十七ヶ国から、また国内三十三館から協力者紹介コンパニオンの活躍も目をひいたし、フィナーレの西新・百道両小学校の子供たちによる万国旗を手に演壇にかけのぼっての歌「世界は一つ」はかわいい限りであった。二三〇人のこの子らは二十一世紀に入るとき二〇歳になるという。インターナショナルスクールの子供たちも同時に演壇に登ったがアジア博の意義を十分にあらわしてくれていた。堅さを全く見せず感心する演出で、夢と希望を美しくあらわしたものになった。

3月17日（金）

上昇気流が感じられる

ここ数日毎日夜食は宴席つづき。帰宅も九時になる。アジア博があるため大事に受けとらねばならぬ来客があるためだ。交通量も多いようだが、ホテルも一ぱいらしい。博覧会による経済波及効果は数字では明確にできないにしても、かなりなものであることが肌で感じられる。もちろん今の感じであって、今後の成り行きを注目したい。折を合わせて福博プロムナードの一部、県庁跡地南側中央公園、そして更に大濠池の浄化工事など懸案の県工事も終って今日から供用されることになったし、さらに、中国総領事館の新築落成式が正午から行われた。冗談ながらこれは東京の中国大使館より立派なものになったのではないかといわれるもの。こうして活気があたりに満ちたこの頃である。だがどうなるかわからぬ事案もある。それは現に審議中の県議会、そして中央の国会状況、どちらも消費税がらみ。国会はすでに年度始めにまに合わず五〇日間の暫定予算ときまり、県の方もあと十日、消費税上乘せがどう展開するか見通し立たぬ。

3月18日（土）

青少年問題協議会

十時からサンヒルズホテルで青少年問題協議会が行われた。県、県警、県教育庁の三者構成で「少年のみちびき」の発行をふくめ、種々青少年対策をしているが、非行、触法行為の発生率では本県は依然ワースト三の水準にあるという。窃盗や、いじめ、麻薬系、交通違反などであるが、以前からピークが低年齢化し十四歳前後が一番問題になっている。よく家庭、地域、学校というが、北九州小倉地区や福岡市博多区に多いというのは地域の大人達の生きざまを反映していることも明らか。大人の価値観がおかしくなっているのである。我利と瞬間的享楽の追求で家庭や地域が正常さを失っている。生活保護を親子二代でという話も今日は出た。犬鳴トンネル内での殺人、筑豊での祖母殺しも話に出た。働こうとしない親、身を崩した親から学んでいる子供たちである。学校では偏差値教育で子供達は追いまわされていて息抜きを求めてあえぐのである。経済の構造転換が背景にある。

3月19日（日）

「価値観の多様化」といってすまされまい

糸島ライオンズクラブ発足二〇周年式典に出席した。知事が来てくれたと、ひどくよろこんでくれた。中村信県議がたつての要望とのことであつた。奉仕の団体だから挨拶の中で、その気持が今日大事であることを強調した。中学生が親を殺す話は東京だけでなく、福岡でも最近例がみられた。物余り時代が進む中、心はすさび、人間関係がガタガタになってきている。校内暴力、いじめ、シンナー遊び窃盗など青少年の非行が目立ち、誰も効果ある対応を見出せないでいる。他方、昨日新装なった大濠公園池に、早やビニール袋が浮んでいるというような迷惑行動が目にあまる。ゴミのポイ捨てに麻痺した心のありようは理解に苦しむところだが、この種のことは枚挙にいとまがない。役人は「価値観の多様化」というようなことをいい方面からのみ表現するが、迷惑行動など平気というのも価値観の多様化というのでは困る。心の乱れは整頓されなければなるまい。

3月20日（月）

水質や大気汚染のこと

下水処理場のことで決済をもってきたので、先日森祐行氏がカドミウムなど重金属の人体に及ぼす影響を思い出し、決済内容についてきいてみた。係の者もよくわからないらしい。科学の発達はいいが、人間が自殺行為をやっているようにも思える。われわれの食物についても安心しておれまい。尿尿処理は以前は田畑に還元していたが、今はそれができないので分解処理している。どこで何がどうなっているのであろうか、私が無知なので仕方がないが、要は有毒物質は濃縮して、まとめて、置いてあるにすぎないらしい。ヨーロッパでは大気汚染で森林が枯れていくので、対応策が熱心にとり上げられているらしい。日本ではそういう話はきかないが、原子力発電所の事故で世界規模の放射能雨、食料汚染が問題になる。勉強してないので、この方面に今後注意をしないといけないとの自戒を持った次第。素人ながら大要は説明できるようにならなければいけない。産業廃棄物問題はさけて通れない課題である。

3月21日（火）

冗長

福岡市とマレーシア、イポ市との姉妹都市調印式と祝賀会が午後七時半からニューオータニで行われた。途中で座を立って帰宅したが、通訳がはいるので挨拶など往復時間が必要なのだが、所要時間がたいへん長かった。先日の前原町文化会館でのライオンズクラブ二〇周年式も長かった。食事を前にして長いスピーチ等々が重なるのは、出席者にいや気を誘うに違いない。ライオンズクラブでは一時間四〇分、今回の姉妹調印式は二時間余、こう長い儀式を平気でやるのは日本人の特徴ではないだろうか。式次第の項目が多すぎるし、

一項一項に時間をかけすぎる。又無用の壮厳さが尊ばれるようだ。近頃経験はないが、結婚式となると、たいてい二時間、三時間かかり、これでもか、これでもかの項目が加えられるようだ。一口に言って華美、冗費への無感覚、虚美の競争である。ひどくいえば末世的な感じさえする。物余り時代の反映であろう。心が虚になる時代なのである。

3月22日(水)

消費税転嫁の波紋

消費税の実施があと十日に迫った。波紋がずいぶん大きい。業界は諸準備に大忙。計算機関係業界は機械が売れて売れてうれしい悲鳴。便乗値上げもおこっている模様。他面、自治体の対応はさまざまそれが又大変。使用料、手数料に転嫁する件で県レベル、市町村レベルは自治省の指導にもかかわらず、対応が混乱状態である。官庁速報で、埼玉県のことがのっていた。革新といわれる知事のもとで、野党の自民が多数で転嫁案を可決した。社、共、公の与党は消費税転嫁反対を潰されたわけだ。これはわが県の状況と似て、当面の情勢の行方を予報しているかのようだ。今日は議会の委員会を見守って待機していたが、自民党野党も対応に苦慮していたのに、埼玉の先例にならって、今提案の転嫁議案を可決に踏み切るかも知れないということになってきた。明日の知事保留の委員会の転がし方で甲論乙駁であろう。この紛糾は誰も一刀両断できない。今日は消費税転嫁につき方途を決定する前夜の静けさともいうべき日であった。

3月23日(木)

中国平和の旅をした教師

議会待時間に福教祖田川市支部長内堀さんが毎日新聞の大賀さんと共に知事室に来た。中国平和の旅というのをいわゆるツアーの形に依らないで自分たちの計画として昨年八月末から九月にかけて十二日間行って写真資料を仕入れてきたのでその編集出版を行うので私に序文をかいてくれという。南京虐殺、ハルピン七三一細菌部隊、満鉄柳条湖爆破事件、平頂山三〇〇〇人虐殺事件、虎石溝万人坑事件、撫順戦犯管理所、及び日本マスコミ報道の戦争加担例など写真に集めているとのこと。学校の先生が夏休を利用してこの平和旅行を独自にやり、一人三〇万円ほどの経費だったとか。戦無派ばかりといえる先生たちは何ものにもまして戦争を追体験したわけだし、観念的な反戦論にこの追体験をおくことができたわけだ。このような旅行を何人もやってほしいし、日本では遅すぎるとも思う。南京記念碑の前には「前事不忘后事之師」と大書してあるようだ。日本の政治家の発言の「侵略なし」は空虚きわまる。

3月24日(金)

「ひとのあとに従う」

今回の議会で誰の質問だか忘れたが、答弁の中で「ひとのあとをついていく」との部分があって、今日の予算特別委の知事保留の中で、公明党の宮崎氏が、とくとくとそれを引用して、知事攻撃に利用した。考えてみると、私はやっぱりそうなので、生れつきといえることかも知れない。県会議員その他およそ政治家といえる人は、人のあとについていくような性格の者はいないようだ。九州知事会の会長に福岡でなく佐賀になったのは悔しいと意見をのべた県議がいたが、私には「そんなものかな」と思えた。私は大学教授にも、学生部長、教養部長にも、又、知事にもなったが、一度だって自選したことはないし、元来しゃしゃり出るのは好きではない。今日質問の宮崎も温厚のようだが、しゃしゃり出ないと県議にはなれない部類であろう。よしあしはいいたくないが、ひとに推されてなるという性格も許されていいと思う。しゃしゃり出たり、横暴であることをリーダーシップと取り違える向きが少くないが、そのような見方には賛成できない。ほんとうの政治家というのはこれとは一寸違う資質というのではないかと思う。選挙人はとにかくまどわされ勝ちである。

3月25日（土）

新北九空港建設 漁業補償交渉やっとはじまる

豊前海区漁連との間に新北九州空港建設に向けての漁業補償交渉がはじまった。新空港建設は県レベルでも、北九市にとっても重要課題であり、永年政府に要請してきた問題であるが、政府では、地元条件の整理、整備、が先決だと指摘していた。それは漁業補償をどうクリアーするかということにつくる。関西新空港では漁業者から大きな補償をとられて、やっとなら着工にこぎつけたという先例がある。苅田沖に展開中の四建の港湾浚渫土砂処分場を延長するという港湾問題と、空港建設用地にそれを利用するという問題とが接合しているので、漁業者たちは新しい土砂処分補償と空港建設補償とを併せ念頭においている。関係漁協は十七あるが、うち二つがなかなか補償交渉のテーブルにつかないまま月日がたっていたのであるが、ようやくテーブルにつくことになり、今日、四建を先頭に県、市、町が十七漁連と対面、話し合いをはじめたのであった。

3月26日（日）

県民春闘フェスティバル

八九春闘フェスティバルということで、労働団体関係者が平和台ラグビー場集った。花見頃で子供連れの人が多く、むしろはなやいだムードである。七～八%の賃上げ要求が実現するとはいえないが、四～五%ではがまんできないという。ここ二年、経済は活況を呈し、有効求人倍率も全国平均で一・一五という近年にない高水準。もちろん福岡県は〇・六台でやはりよくない。アジア博あり、好況ムードで福岡地区は建設業を中心に人手不足だが、大牟田の石炭は不況で大幅な人員削減、北九州市も新日鉄を先頭に人員削減の圧力

がまだつづいている。北九州は今が底だろうが、大牟田はまだまだ悪化しそうだ。全国視野で、東高西低はいぜんつづいている。春闘といえばストライキ、ストライキは私鉄からというのが、しばらく通り相場だったが、この頃はストライキもほとんどきかない。今年にはアジア博で、ストはご遠慮を、と市長がたのんでいるとか、平穏だろう。

3月27日（月）

解雇処分撤回の執念にこたえる

県職労の森静香氏の定年年齢到来による処分取消名誉回復の件で人事課、職員局がなかなか踏み切れず、否定的見解ばかり並べて一向にらちがあかないので社会党の助信幹事長は怒って総務部長、副知事らと共に私も同席して、今日の議会終了後、強い要請を最終的という意味でつきつけられた。私も決意表明をせよといわれたので、違法でない限り断乎撤回に踏み切ると言明した。人事は資料を並べ立てて不可能という理由ばかり述べるが、私は撤回が違法ということはないだろう、問題はむしろ県議会の側にあるだろうから、政治責任をもって撤回にふみ切ると述べた。知事の座にれんれんとしているのではないから議会と争うこともやぶさかではないと言い切った。県職労の側には怨念があり、労使の信頼関係の回復のためにはこの処分撤回により怨念を消す必要があるというのが私の言い分。亀井時代の異様な怨讐の名残りでもある。全国まれのケースなのである。議会から責められるが断乎立ち向うほかない問題である。

3月28日（火）

北風寒いアジア博

久美を案内すべく近所の人も誘って、アジア博に行ったみゆき、混む所は一時間余も待たされ、北風が吹きさらして寒く、長時間かかった割には楽しみはなかった様子。今日は半は雨も降り入場者も比較的少なかったのではないかと思うのに、待つ所は待つ形だったという。全体が狭いのだろうか、佐賀の吉野ヶ里が今人気を集め、連中二万人近くの見物人、アジア博は四万人欲しいのに二万五千人このところ平均、比較され、千数百億円かけたアジア博がひやかされている。アジア博は入場料のほかあれこれカネがいるが吉野ヶ里は無料とも新聞はひやかしている。それで、七〇〇万人を見込んだアジア博は五〇〇万を切るかも知れないとすら不安が既に出ている。北風がこんなに冷いとは見込み違いだったであろうし、あれこれパピリオン内の個別入場料が高すぎるともいえよう。全国に十三の博覧会が市制一〇〇年を祝して展開されている今年。客の奪い合いもある。

3月29日（水）

混迷が深まった県議会

花見の絶好びよりというのに、議会での知事保留質問のぐずつきと県職労森氏処分撤回の

件で、議会々期は延長になるし、組合側は当方の案に反撥して対応に苦慮するやらで、帰宅は九時すぎになってしまった。消費税転嫁条例をめぐって議会側に反撥強く、各党派とも着地を見定めえないまま、すくんで動かない。社会党もイニシアを取れる立場を失っている。知事は消費税転嫁の線で県の使用料、手数料値上げ案の条件、その関連税法体系で県予算を組んでいる。社会党は中央では野党の先頭に立ってリクルート、消費税で大揺れの政府自民党追及の先頭に立っている今、県では与党として消費税には沈黙を守るしかないという苦汁の選択である。社会党に似た立場にある共産党は意見だけで答弁はいらぬといっている。ひとりやかましく知事追及をしているのが公明党である。しかし、追及の仕方でも二年前の知事選の時の売上税反対の私の立場をひき出して、公約違反だというのだ。

3月30日（木）

公明党も党利優先

公明党はこのたび消費税転嫁の県条例に徹底して反対との態度を貫いた。代表質問、一般質問はもちろん、すべての委員会ですべての議案があれば「知事保留」という形で反対討論をしかけてきた。国会ではそれほどではなかったのに、県議会ではなぜなのかと思う。割り切っていえば夏に予定される参院選、さらにはいつあるかわからないほど陰悪になってきた衆院選に向けての自己宣伝のようだ。どの党派もそうであるが、今回の公明党は際立っている。二年前の知事選の時の私の公約をもち出して「お前は矛盾しているではないか」と追及してくる。他党はそうはいわない。矛盾といえば当の公明党も二年前は田中健蔵を推して、今の反消費税をいうのだから矛盾である。ひとのことをいう前に自分のことをいばいいのに、そうではない。今日の宮崎文教委員は私への追及が執拗だった。消費税がいまや国法となり、その新しい、税体系のもとで予算が組まれている限り、県予算もそうならざるをえないし、条例もそれに伴うはずである。抗を一寸でもというが、そうはいかぬ。

3月31日（金）

森静香氏の名誉回復 ギリギリの選択

深夜県議会終了後、懸案であった県職員非解雇者森静香氏の名誉回復につき、知事、橋口県職労委員長、本人の三者署名立会人白石県議、豊島議員の名において解雇を六ヵ月定職に変更するという内容の確約書に署名した。さらに内容は、解雇が亀井知事時代昭和四十二年という事であるため、その後今日まで一切の経済的負担を県に請求しないという条項、さらには人事委員会提訴を取り下げるという条項もふくまれたものであった。実の伴わない名誉条項にしてある。彼は今日を持って六〇歳定年になるという時期でギリギリの選択というしかなかった。保守系の者が知ったら問題化するに違いないものだし、法的にも少なからぬ疑義を残したままクリアーしないで強引ともいえる決着であるが、労使の信頼関

係の回復という観点からはこれ以外に取りようのない途だったといえる。副知事その他総務、人事の当局者は仕方がないと諦めてくれた次第である。「政治的判断」ということなのである。

4月要記

花の四月を迎えるのに、役所の首長の宿命か、多忙をきわめる四月である。人事異動だけでも余分の仕事である。それに「イベントの年」という新年度がスタートした。送別会、歓迎会、それ何とか会、祝賀会、竣工式、オープニングセレモニー、期成会、実行委員会、などなど、日本人は儀式が好きなのか、経済力がついて華美を競うのか、そうした何々会が一つ一つ長時間を要する。あれにもこれにも顔を出し、おつき合いをしなければならない。体力が伴うならいいがそうではない。ことわれるものならことわるのにと事々に思う。無とか無我ということを考えてみる。いい加減にしてくれ、いい加減にしたい、だのにそれは世間が許さない。でも、こうして他人様からひっぱられているからこそわが身が保てるのかも知れない。孤独になったら動けなくなる。動かなくなるかも知れないと、フト思う。四月一日から始まる平成元年度。消費税とそれへの便乗値上げで、世間はかなり騒々しくなりつつある。妙な画期、政治不安定への始動すら感じられる。

4月1日(土)

消費税元年

午前一時すぎに県議会は議了、〇時すこし前に条例予算の議了があつて、これは年度内決定ということになる。問題の焦点は消費税の転嫁にあり、四〇〇〇万円ほどに相当する各種使用料手数料だが、共産、社会、公明の三者は関連条件に反対、共産は予算案にも反対した。社会は予算に賛成して条例に反対という筋違いをあえてした。又、社会、共産、と知事側は与党という立場をこえて筋違いになった。公明は条例に反対との立場から予算にも反対しつつ知事の公約違反追及の立場を最後までゆるめなかった。今議会の保留質問で一番くいさがったのが公明だった。議会が終ったあとの記者会見では、公明がつついた公約との関係が質問された。あとで、新聞代も転嫁されるもの、と私がいうとみんな笑っていた。流通界は今日からの消費税転嫁で若干混乱がおきているようだ。便乗値上げもあっている。商品サービスのほぼ六割が、三%転嫁で流通することになる。消費税元年が始った。

4月2日(日)

春の庭

鶯が啼いて目がさめる。最高である。かなり朝寝している。空は晴れている。窓を開けると桜は満開らしい。鳥も啼く、雀も啼く。つい外に出たくなる。ボケは散りかかっている。

先日妻が植木市から買って来たという海棠が咲いている。大きなのがあったのに枯れてしまったのであった。赤芽カンナの色鮮か、レンギョーも盛りである。藤花がもう七～八センチ花房を垂らしている。地面からはいろいろな雑草が伸びてくる。できる限り取っているが、本腰すえて鉢物など手入れしないので春が来るままに放置しているのが現状である。東の土手にはシャガーが咲いている。東南隅の軒下に鉢植のままおいている君子蘭は今二本花枝をつけたくましい赤黄の花をつけているので、見やすいところに移動させねばならない。甘夏カンの緑中黄は美しいし、空にそびえる紫白こもこも見える木蓮も上品である。

【第44回国体秋季大会開会式座席番号券挟み込み】

4月3日（月）

消費税混乱我が身に

新天町マルベニでローフレンズ一〇〇回例会記念行事の実行委員会があったので久しぶりに顔を出してあいさつした。六時からだからまだ明るいうちに久しぶりに新天町を歩いてみる気になった。パチンコ屋も盛況ながら新天町を歩く人も活気がある。若い女性は喜々としているようだ。底にあった目的はオブラートを買うことだった。二五〇円、それに消費税をはじめて払って、その税が七円、計二五七円。この頃一円玉が不要から突如引っぱりだこの硬貨になったとのこと。四月一日からの消費税がさまざまな話題を読んでいる。今日の実行委員会では、パチンコ屋がどうこの話題が出ていた。帰宅してみると例の「失対首切り」「退職金増額」「要求」のハガキが十数枚、四〇円のハガキに消費税分不足四二円を払ってほしいと福岡中央郵便局の事務連絡も一しよだった。要請文すらこまるのに、郵料不足分を請求されてたまったもんじゃ無いというのが率直な感想。消費税混乱が当分つづきそうだ。

4月4日（火）

悪汗ぞくぞく

夕方、済生会病院からニューオータニでの上岡氏の受賞祝賀会の行った時、ホテルの入口付近から汗がぞくぞく出て調子が狂ったのでびっくりした。ハンカチで拭うが、そばからみておかしいという。はじめておかしいと自覚するに至った。祝賀会が始まる頃、下着がびっしょりぬれて感じられる。顔色もよくないといわれた。祝辞をのべるのが最初の部で、ずいぶん意識して声を出した。一時はどうなるかとさえ思った。昨年も今時ぶんに、研修所の開所の時だったが足がふらつき躓きそうになったし、一昨年だったかハワイに出発する時福岡空港で吐いたことが思い出される。何だか、偶発的だが、不吉な予感さえする。今日も祝賀会が始まろうとする頃、何とかなってしまいそうな予感さえした。風邪ひくこともないようなわが身ながら、いつ終点になるか知れない。そうなってもおかしくないと思うのである。死というものが、瞬間的にやってくるなら、痴呆化よりなんぼかまし

だと平素思っているのだが、バタッと倒れるのもよいのではないか。

4月5日(水)

体調依然不安

体調はいぜんよくない。睡眠の不十分なのが一番いけないようだ。運動不足がその次だろうか。からだ全体としてこわばっている。とくに膝がたよりない。執務中も運動になるような状況にないし、自分の時間も、もちろん運動にならない。昨日の済生会病院での検診では、中食後の時間がたっていたせもあり、尿糖は±、血糖は一二八、肝臓の方は七〇と九六ということで、まずまずだったのに、爽快でない。肩の筋肉が痛いので、不調が加重されているようだ。さらに、頭が重いというか、アルミ鍋をかぶったような気持ちがつづく。つまりあれこれ薄気味悪いことばかりである。今日の部長会は例のごとく稚加栄で三部長の送別会。五七～五八歳である。いわば私の教え子のうち、三一年九大卒というのがあるが二七年入学で、二十八年水害を二分校で経験したとのこと。比較して自分の年をつくづく感ずる。衛生部長に糖や肝の数値についてきてみると、大変心配とはいえないが、よくないですねという。どうしたらいいのか、食養生が足りないのか、よくわからない。わが身の近い将来についても見とおしがつかない。

4月6日(木)

旧友への弔電

毎日こんなことを書きつづけているのだが、今日は龍野中学校時代の同級生・延賀氏が死亡、弔電をとという連絡が相生の雨田氏からあった。私は電話をうけてないので、詳細わからないが、たしかにショックだ。延賀は元来頑健でない部類の男なのだが、六六歳だ。一般論としてはまだ早い。龍野は薄口醤油マル天の社長なのである。長男にあて弔電で対応したのだが、変な予感が横切る。一昨年八月の同窓会名簿があったので繰ってみると、われわれ第三九回生(昭和15年卒業)は一八九人うち死亡者五九人とある。三分の一が死亡していることになる。四〇年前の成長期の友人だったわけ。私は二年おくれだから、ちなみに二年前の名簿のページを見ると、一五六人うち死亡者六七人とあって三分の一をこしている。四三%だ。姫高の同クラスでは、五年前の名簿しかないが、三七人中六人が死んでいる。これなら一七%である。次はわが身かな?という意味のショックだ。県庁では十歳も若い人が今年の肩たたき退職の対象だが、これらは皆ピンピンだ。

4月7日(金)

世界つつじまつり 89くるめのオープン

世界つつじまつり'89 くるめは今日から四月末まで二三日間、久留米百年公園(旧みどりの広場)でくりひろげられる。第8回くるめ緑の祭典が重ねられての行事である。高速イ

ンターからおりて程近い、高良川が筑後川に注ぐところ、西鉄宮の陣駅の対岸少し上流である。二八年洪水の時は水びたしになってしまった湿地帯、市が買収し、造成したところ。世界中のつつじ一五一八品種一〇万本と寄せてはじめての快挙といえよう。つつじの鉢植で一〇メートル四方、高さ八メートルのピラミッドが作られていた。六千鉢でできているとか。つつじの盆栽もすばらしい。三五〇年という樹齢のつつじ巨木もみられた。即売会場がにぎわっていて、食指が動いたが、植える場所がないし、手入れをする能力がないので、ダメにしてしまいそうだ。つつじ以外の珍しい草花も展示してあった。何でも植物は美しく見せることができるものだと感心する、それを知り、丁寧に育てればよいのだが、年期と勉強があるだろう。感心しているだけではつまらない。

4月8日（土）

間有趣

「間有趣」という色紙を書くことが多い。大字典をひいてみると間は間の略字とある。間はスキマ、ヒマ、等々の訓があつて、閉じた戸のあいだから月光がさし入る義といわれる。ものともとのあいだともいう。間はのんびりだらりとひまな日時があるというのではなくて、多忙な毎日のなかに一寸休みがとれたというような時間帯である。今日、そして昨日の午後、一昨日のひるま、私には「間」があつた。その時間を使って揮毫したし、庭の雑草を抜き、鉢物に水をやつた。ゴルフに行った人も少なくなつただろう。しかし私のような生涯からして、ゴルフよりも揮毫や雑草抜きの方が趣がある。そのようにして一日が暮れ、明日から又いそがしい。だけど、何とかしてこうした間をもう一寸ふやしたい。時間があつたら身辺整理もしたい。刃物磨ぎをしてもいい。そしてほんとに間がきまつてあるなら「幾歳月」のつづきを書きたいのだが。

4月9日（日）

新しい用語に出くわしてドキッとする

のんびりした休務の割には昨夜はやっぱ眠れなかった。どうかしているに違いないのだが、理由がつかめないので対応できないまま過ぎていく。小倉の厚生年金会館で北九州空港新ターミナルビル会社発起人会があつて出席、帰路の車の中ではほんのちょっぴり眠つたようだ。頭の重さがそれほどではないのが若干の救いである。でもたびたび立たされ、挨拶を述べるチャンスが多いのだが、近頃、自分の発音の語尾が不明瞭だったと自覚することがよくある。今日もそれ、舌がまわらないというか、よくまわっていないと思うのである。一種の病かなと思つたり、そういうことは誰にでもよくあることだと思つたりである。よほど気をつけてないと、新しく使う言葉がどンドンぶつかってくる身分なのである。新ターミナルビル株式会社という発音は今後何回もでてくるだろうが、いわば今日初めて公衆の前で発音するのである。発起会の議長をつとめて、大変であつた。

4月10日(月)

北九州空港ターミナルビル会社着手へ

北九州空港で旅客定期便が全部なくなって五年ほどたつ。ジェット機時代になって、今の一五〇〇メートル滑走路では使用できなくなったからである。YSを最後に今日のジェットは来なくなったのである。それで苅田沖に新空港をという運動を展開しているが、周辺の軍用基地との関係で新しい着陸技術が開発されるまであと十余年、それも困難との結論が出た昨今、それまでの間、現空港の滑走路を一〇〇メートル海側に延伸する工事等を行って利用するとの計画が再浮上し、今日、そこに建設する新ターミナルビル会社の発起人会が開かれた。安川寛氏を会長に、十月を目途にビル会社をスタートさせ、新築、現空港ビルは別に利用するとの方針で取りあえず東京へ二便確保で再来年はじめには就航の線で動き出そうということになった。北九州市を中心に背後に二〇〇万の人口があるので是非必要との計算。北九州市活性化の一助になると踏まれている。国会審議のおくれで、期待より工事はおくれそうだ。

4月11日(火)

田川での白石県議の二〇年つどい

田川の白石県議活動十年を祝う会が文化ホールで開かれた。二千人近く集めていた。三〇〇円の会費という。リクルート問題で今日竹下首相が衆院で釈明する場面があったが逃げの一手、何をいっているのか理解できない。権力が背景になっているだけ、一億五千万円受けとっているという。パーティ券購入というが、白石氏の三〇〇円は質素ともいえよう。博多ニワカを呼んだり春日神社太鼓も加わったりで、有意義かつ華やかであった。市長も私もかなり長い卓話をした。田川の人達に明るさがみえており、筑豊の暗さも徐々に払拭されつつある。こんな雰囲気を感じさせられた催しであった。いつか以前に私が二〇枚色紙を書かされたが、それが今日、入場料に抽せんで額入りものとして贈呈する儀式として加えられた。集会は奥田県政の宣伝も意識されていた。両々相俟って宣伝効果を高めていたといえよう。田川では伊田の望嶽堂のことが四〇年前の記憶として残っている。伊田駅近くの料理店で市長両県議と夕食。

4月12日(水)

心の近い人達との久しぶりの対話

社会主義協会系の女性たちが、私から疑問釈明をしてほしいということで数人社問研事務所に集まり、スシをつまみながら二時間ほど歓談した。男性一人馬原が加わっていたが、これは世話役。あと、東定、今吉、教師の柳、県評の〇〇、それからもう二人、これも知っているのに名が出てこない。今吉氏が司会役で、私に消費税転嫁県条例と天皇戦争責任についての長崎の本島市長発言「批判」問題が話題の中心になった。一般には「革新」で

ありながら消費税転嫁条例を提案したり、本島発言を「批判」するのは逆ではないか、なぜその反対の態度発言をしなかったのかというのである。保守の首長ですら「逆」の態度をとる人がいたのにと。議会勢力のアンバランスは知っていながら一般には期待はあったのだという。そうはいかないといっても理解してくれない。私は根気よく釈明するしかないといった。かつこよく立ちまわる首長が多いのだ。私には良心と自己矛盾は許されぬ。

4月13日（木）

水のこと

雨が欲しいのに今日も晴れだ。カラカラではなからうか。緑は大丈夫だろうか心配である。三役と県警との懇親会の中で李鵬首相の来日の話題に関連して中国の農業、水不足への言及があった。中国にはカラカラの地域が多く、食糧供給もままならず、今はインフレが急進しており社会不安さえおこりそうだということだ。燃料用に濫伐して緑が少なくなった面もある。人間の仕業だから、この点は長期的視点に立って国民的規模で緑化に取り組むしかないだろう。福岡の大渴水から早くも十二年目になる。その苦い経験から水についてはかなり手当てをしてきた県ではあるが、やはり降らないと心配になる。生活水準が向上すると水の使用量もふえてくる。贅沢な使い方さえ普遍的になるからだ。水洗便所はまだ普及の余地が大きい。濫用の戒めと再利用をもっと真剣に考えることが行政の責務であると思う。地球的規模の砂漠化に警鐘が打たれているのだ。

4月14日（金）

吉野ヶ里遺跡を見る

大川での市長会に出て挨拶した帰りに、時間があって、思いつきのようだったが、佐賀神崎の吉野ヶ里遺跡の見学に立寄った。全国最大規模の環濠集落である。報道されているとおり、見物人は雨の中というのに、どんどん詰めかけていた。時間がなかったので、展示室しか見なかったが、よくもこんなに墳丘墓の中から出てきたもんだと驚くほど展示してあった。県の教育委員会の職員一人がおおまかに説明してくれた。私が福岡の知事だということを「お忍び」だのに、いち早く気付いての深切である。邪馬台国、卑弥呼をしのぶに十分だとのことである。内濠、外濠、物見櫓などの跡といわれる現地を見たかったが、今日は、展示室に限るしかなかった。にわか思い付きと時間のないことが残念だったので、あとでじっくり時間をとって再来するしかない。案内の刷物には二三〇〇～一七〇〇年前と書いてある。日本史の語られざる部分であるので、とくに注目される。佐賀県では工業団地の造成現場でのことであって団地にはならないが、企業誘致には願ってもない遺跡発見だったわけだ。

4月15日(土)

文字伝来についてもっと知りたい

昨日の吉野ヶ里遺跡見学の印象がまだなまなましい。今日は許された時間を利用して、蔵書である書道全集九巻を少々繰ってみた。車の中にももちこんで、それは日本に文字が用いられるようになったのはどの時代からかということへの関心からである。金印は紀元五七年といわれる。その時、金印を見た人は字が読めただろうし、そのためにこそ贈り物としての価値があったはずで、金印がネコに小判であったなら贈らなかったのではないか。しかし、私は日本で誰が文字伝来を、どう、問題にしているのか知りたいのに、問題にしているのに出くわさないのが当惑している。昨日みた吉野ヶ里でも文字の事は一片もでてこないし、日本の文字書道のはじまりを書いたこの書道全集九巻にも出てこない。論語と千字文の百済からの伝来はわかるし、仏教伝来、書経についてもわかるが、読める人がなぜいたかを説明できてない。万葉集の工夫もわかるが、もっと古い時代の何かが出てくるのを知りたいのである。

4月16日(日)

李鵬中国総理帰国

李鵬中国総理は午後四時すぎの福岡空港発で帰国の途についた。私ら県幹部、県下友好関係の四市長も見送った。見送り人に対し、とくに記者達に対し、記者会見の形で、中国民航機を前に彼は別れの挨拶をした。総理が来日するのははじめてだったので、この記者会見はかなり重要なものと思われた。戦後の日中関係に一区切りをつけ、今後の一そう深い安定した国交友好を約束できるとの意味の挨拶であった。日中間には光華寮のような小さいながら根深い問題もあり、経済援助、戦争の責任のとり方などいろいろ問題が残っているが、常に友好裏に解決に努力するという態度であった。今の中国は経済政策、農業の面でうまくいってないときく。大きい国だから何とかなっているだろう。辺地の民族問題もある。今回の李総理はおうような人、電気専門分野出身だが、今日の西区元岡での農家視察にも深い理解を示したという。

4月17日(月)

吉野ヶ里は紀元前のものをモデルに？

西日本新聞夕刊に、京大元教授の福永光司氏の指摘として別貼のような記事が出たので興味をひいた。昨日の李中国総理にも、私は考古学分野における交流も話題にもちかけたのである。吉野ヶ里遺跡について、紀元前二世紀の中国漢の武帝が行った「天の神の祭り」をモデルにして築かれたものとの考えができるようだ。この巨大墳丘墓のモデルが紀元前の中国にみられるとはびっくり。稲作が盛んになり、政治的権力の出現が緒につき、クニ、王が形をなしつつあったのであろう。墓というものが、支配者の死に対して作られるよう

になったものだということが、又それには信仰というか祈りというか、そうした宗教的な人間世界が深くかかわるといことが教えられる。葬式と宗教はこして不可分のものとして人間を支配するようになったようだ。吉野ヶ里の場合、道教的なものだと福永氏はいつている。跡地のかたち（八角形の壇）などから推理できるらしい。中国との交流のあかしをもっとどしどし明らかにしてほしいものだ。

【「吉野ヶ里遺跡・巨大墳丘墓 モデルは漢・武帝の祭壇」(『西日本新聞』1989年4月17日夕刊)の切り抜き貼付】

4月18日（火）

三選への意思表示はできないのに、

ひるま県評の松田留吉事務局長が知事室にひょっこり来ての話。一つは「連合」ができて初の統一メーデー、県のそれへの補助金のこと。関連して反対を貫いている統一労組懇（共産系）をどう扱うかである。さらに関連して私に、次期知事選に出馬することを明らかにしてほしいという。問題は、連合の方は共産党と共に動かないということだ。知事選のやり方としては県民の会はそのままにソツとしておいて、別に連合と組み、統一労組懇や共産党とはブリッジ方式をとるしかないとのことである。もう一つの問題は、彼自身県評が秋に消滅するので、「奥田三選出馬」ならその前提で自分も当面の活動の場を作るが、でないなら、秋までに働く別口を探さないといけないので、私に出馬か否か決意を決めてほしいというのである。私は、イエスともノーとも答えられないと返事したが、それでは自分が困るという。夜の嵯峨野での記者クラブとの懇談の場でもある記者から三選への意思は？ときかれた。問題視されだしたのは事実だ。

4月19日（水）

竹井教育長の高石パーティ券配布問題

竹井教育長がマスコミ界から追及をうけている。昨夜は上海から帰国したところを待ち構えての記者会見。高石前文部次官のパーティ券（衆院出馬運動）一〇〇枚を組織的に押し売りしていたとの疑いに関してである。昨年九月のパーティである。議会では三枚だけとか、自主的個人的と答弁したのがウソだという追及である。五〇枚は教育庁内で残り五〇枚は県立高校々長やそのOBにクジ引きで割り振っていたのではないかといわれている。教育長にうらみをもつ人もないではないからその方面から密告があったのであろう。県議会の答弁はウソだったといわれるのに対し、彼は否定しつづけている。自由意思で、個人的に、勤務以外の時間に、私宅から課長が郵送して云々と記者に答えていて痛烈な反撥を呼んでいる現状である。リクルート被疑者が、何かといえば秘書がとか、妻がとかの逃げ口上を使っているように、竹井は「部下が」といって逃げをおしとおそうとしている。共産、社会両党は県議会で鋭く追及する構えを示している。尾を引くだろう。

4月20日(木)

桜を見る会(新宿御苑)

十時から新宿御苑で「桜を見る会」に夫婦同伴で出席、今年は知り合いと会うことはなかった。床嶋所長が苑内を案内しつつ、スナップ写真をとってくれた。皇居ばかりか、こうした「広場」があることこそ東京のとりえであり、日本の誇りだといつもながら思うのである。日本のどこにもこうしたオアシスは今求め難い。人工的、歴史的な至宝である。吉野桜の時期は既にすぎ、八重桜やつつじの時期である。鳥や花の名をしっておれば尚いいだろうにと思うし、もっとゆっくり、もっとしばしばこうした散歩の時間とチャンスがあればと思う。一時間以上苑内を歩いたが、ゴルフの比ではないという。それでも快い疲れを覚えた。竹下首相が十一時頃面会を求める来客と握手する姿がマスコミカメラマンに取り囲まれてしばし苑の中央で人だかりの状況を作っていたが、首相にとってはまるきり休みにならないわけだ。リクルート及び消費税問題をバックに未だ国会は新年度予算案成立の目途を立てえないでいる。むしろ苦悶の絶頂なのだ。

4月21日(金)

「大ふくおか展」実現

西武百貨店で「大ふくおか展」がオープン。昨日のニューオータニでの「ふくおかの夕べ」につづいての知事挨拶には大きな心理的プレッシャーがかかったが、何とか乗り切った。昨夜は私が案内状を出した児嶋兄、岡茂男氏、田摩毅の三人が顔を見せ、今日のオープン式には岡夫人も来てくれていたのに、公的立場が多忙で対応できずじまいで心残りになっている。二年前に私が発案しての事業なのだが、昨夕のレセプションも今日から二十六日までの催しも予想をこえる華やかなものになった。プランニングは博報堂、経費は一億四千万円と大がかり、福岡、北九の両市も、県内他の市町も、「ミス」嬢の派遣以外に大変協力してくれた。商工部では森山氏が中心に奮闘してくれたし、東京事務所もよくやってくれた。昨夕の「夕べ」は千人の来客、外国公館をはじめ政、官、財、学、芸能、スポーツなど手まわしに、東京事務所がよく協力した。福岡県の過去、現在、未来にわたる物、人、技術、伝統など、もてるチャームポイントを東京から発信しようとの試みで、珍しい事といわれる。

4月22日(土)

協会三人との会談

協会のメンバーが夕方来宅するというので、不意にうちに来ないでくれとっておいた。場所は山ノ上ホテルになった。三時半から一時間半近く時間をとって当面の問題で懇談。この人達は私の休み時間をねらって時間をとろうとするので、スケジュールの中にそうした時間を組み込んでくれることを強く希望するものである。そのつもりで秘書室に返した

ら、場所を山ノ上に設定してくれたわけ。今日は問題が二つあるという。一つは消費税分の県条例での転嫁について労組、解放同盟、失対などで知事不信の声があがっているとのこと。これは集会など開いて県議など講師に呼んで県議会の成り行きなど説明してもらわないと困ると私の方から注文をつけておいた。他は、教育長辞任が問題になっているが、後任は行政側から地元の者を出すことになろうが、それについてトクと考えてほしいという点についてである。それをいうにはまだ手順が早かろうとっておいた。

4月23日（日）

無常の姿

新緑の、一ばんいい時節になった。フジ、モクレン、アザレヤなども花の盛りを終えている。後藤さん宅の大桜も緑一色。いつも思うのだが、花びらはどこから出てきてどこに消えていくのであろうか、常緑樹といわれるものは、この新芽の季節に古葉を落として姿をかえる。今東公園の楠並木が美しい。竹もまた今、葉を落としている。こうした変化があつての自然なのだが、動物一般も、人間もまたその例外ではない。どこから出てきてどこかに消えていく。吉野ガ里その他墳丘からは弥生時代のカメ棺や人骨が出てきた。王族など権力と富をもった者が、その姿をなるべく永く、残したいと努力した結果だろうが、一般の人たちは跡かたもない。カメ棺人骨だって知れている。でもそれが今、日本人の歴史を知るための鍵をなしているという。無から有へ、有から無へ、その中間にいろいろの形があり、人間には喜怒哀楽、富貴貧賤などの諸相が展開される。

4月24日（月）

雨が降ってくれた

今朝はやっと雨らしい雨が降った。新聞ではカラカラの晴天つづきで、十数年ぶりの少雨記録とか書いてあったのだが、一安心だ。中国の北の方はいつも小雨で困っていると聞いた。草木にとって必要であるばかりか、人間にとって一番に欲しいものが水である。天下を治める者は水を治めねばならぬといわれるが、洪水に備えることは勿論だが、給水をどう按配するかがもっと大事である。決壊しない堤防、それから用水路、溜池、水利権など昔からの永い歴史の積み重ねがあつて、容易に動かせられないものとなっている。現在は水の使用量が絶対的に増大した。産業用はもちろん、市民生活用の水がとくにふえている。下水道の普及はまだまだこれからである。水洗トイレが普及するとますます水の需要は高まる。雨水がこうした用に利用されるように受皿をもっと考える必要がある。近頃は水を吸い込む舗装道路が開発されている。雨は大事大事。

4月25日（火）

竹下辞意巷を沸かす

竹下総理が辞意表明したというので号外が出るやら一日沸いた。当然、遅すぎと街頭の声。だが「予算が成立すれば」との前提づきだから、与野党とも「予算」を質にして引っぱり合いとなっていることは明らかである。竹下氏は「成立すれば」といっており、成立するまで辞めないと裏でいっている。成立に誘い込んで、成立すれば辞任、新内閣で総選挙、リクルート問題には頬かむりという算用のようだ。社会党はリクルート問題の解明なしには予算はお預けといっているが、公明、民社は自民戦術に乗るかも知れない。今の野党は暫定政権でもとの思惑は共通しているものの、集めても政権担当に国民の声の支えがない。だから自民党に、竹下に乗せられるだけではないかと危惧される。短期内閣には伊藤・河本などの名もきかれるが……県内竹井教育長も辞意を表明し、竹下流の「トカゲのしっぽ切り」で逃げようとしている。「やめりゃいいんだろう？」と開き直っている点、多数の上にアグラという形で共通だ。

4月26日(水)

主に代っての自殺

国体ヨット競技リハーサルへの協力依頼のため佐世保海自総監部に十一時すぎに着いたが、すぐ、竹下首相の元秘書青木氏が自宅で自殺というニュースが耳に入った。あとで車中くわしくきき、帰宅後夕刊を読んだ。余程のことがあったとしかいいようがない。秘書が、妻が、部下が、といっただ容疑をかけられた政治家や役人が責任回避の常套語に使ってきたリクルート疑惑及びその関連が疑惑ばかり拡がり真実が全く明らかにならないまま、秘書が生命すら絶つまでに至ったのである。政治的致命傷にならねばウソだろうが、「シッポ切り」「くさいものにフタ」はまだまだつづきそうだ。こうした政治家や役人は道義的にすでに失格しているはずなのに、自分だけはその地位にしがみつこうとする図太さをもっている。だから政治家というのだといえるかも知れない。この種の自殺はすでに二〇件以上前例があるという。「思いて討ちしその首は、敵の計れる偽りか」ということで、昔から身代わりは常のことなのかも知れないが、これでは……が泣く。

4月27日(木)

県教育界も騒がしくなっている

国会では自民党が衆院予算委で予算案を単独審議強行可決した。開き直った形である。竹下首相辞意、元秘書自殺、予算案単独審議可決と激震がつづいている。どうにでもなれと多数党が開き直ったところ。他方県では竹井問題で、教育委員会は依然真相にフタをしたまま決着を先送りし県民世論から逃げようとしている。福教組は各地で抗議にたちあがり、教委にも知事にも面談を求めて動いている。教委、教育長はこれらは大衆の前にあらわれようとしな。密室教育行政の立場を貫いている。竹井は辞意を表明したものの、大鶴次長は居直りを目論んでいるようだ。私に対し、福教組の支部長たちはこの現状に対し、県

民向けに判りやすい正常化への発言をせよと求めてきている。私も機が熟するなら賭けに出ることにやぶさかではないが、賭けるからにはトビはねるわけにはいかないだろうと思う。折がくれば決意せねばならぬとは思っている。それにしても前教育長の友野も今の竹井も教委の面々も自民党県議とは密に接し、私には横着を貫いている。

4月28日（金）

浄化事業完成した大濠公園、日本一の水景公園といわれる

大濠公園浄化事業の完成祝賀会が行われ、六〇年ぶりの蘇生を祝福し合った。慶長年間黒田長政が築城の時、入り江であったこの地を外濠として利用。昭和二年東亜勸業博覧会の時に造園工事に入り四年県営公園として開園。その後四〇年、総面積四〇万平方メートル、池の部分は半分近い二一万平方メートル、池は五つの橋で結ばれた帯状の島が池水を二分している。周辺には北部東西に児童遊園二つ、北部に西東二つの進入口と公園事務所、能楽堂、駐車場、観光会館、南部には美術館、日本庭園、武道館を配し、北の簡易保険局と南の气象台が、別の用途に使われている。周遊できる池辺の緑地空間は道路として舗装されており、散歩ジョキングなどに愛用されている。公園事務所付近に浄化施設、潮溜り部分を有しこの際暗渠にした黒門川を通して博多湾の海水と連絡、他方舞鶴城濠を通じ日本庭園からの真水の供給を受ける仕組みでもある。

4月29日（土）

みどりの日

百轉千声随意移 始知鎖向金籠聽

山花紅紫樹高低 不及林間自在啼

歐陽修（北宋一〇〇七～一〇七二）〔漢詩日曆四月二十四日〕

題は画眉鳥（ほおじろ）となっている。漢字を並べて作られるとはいえ、よくもこんなふうまく字を並べられるものだと思う。春の鳥が躍動している。われわれにはわかりにくい漢詩が多いが、これならよくわかる。公用車で北九州に行くとき、縦貫道を走りながら桜の終わった新緑の山々を見ると「山花紅紫樹高低」という感じがそっくりあらわされているのがわかる。山藤の花が目につく。新緑はむしろアカ味がかかった面がある。古葉が落ちてしまったばかりの楠など、その代表だ。四月三〇日のページに「樹頭新緑未成陰」とあるが、この表現も面白い。ともあれ今は最高の自然が楽しめる時節である。天皇誕生日は今年から「みどりの日」として大型連休の初日どころもがえした。今は京都に来ている。東山の新緑のすばらしいこと！

4月30日（日）

徐福の伝説がどう解明されるだろうか

佐賀市日中友好協会などの主催で昨日今日の二日間行われる「徐福をさぐる」シンポジウムがどういう内容になるか、気にかかる。吉野ガ里遺跡にはこの連休で見物人が殺到するだろうし、このシンポの内容に多くの人が注目する。主催者の中の西日本新聞も紙面を特別にさいて特集したし、シンポの結果も報道するようだ。二十八日の特集には一六四八年(正保五年)に寄進されたという金立神社の「肥前国安富庄金立社画図縁起」(徐福が諸富に上陸して金立山に行くところをかいた絵)と、パネラー陳舜臣氏の推理がまず出てくる。その中で陳氏は「徐福は字を知っていたのですから、その行動を伝える木簡などが佐賀で出土すれば、渡来を証明できるでしょう」といっている。これは私が近頃関心を寄せている文字と政治、文化の関連にピタリとくることなのだが、なにせ話が二千二百年近くも前、日本の有史以前ともいえる頃のことなので、無理かも知れない。私も吉野ガ里で「文字」が出てくれば……と願っているのだが、未だに出てこない。政治、宗教、文化と文字のかかわりを具体的に何とか知りたいのがこの頃の思いなのだ。

5月要記

新機軸がどんどん芽を出す感じ。今年のメーデーは、福岡の中央メーデーと北九メーデーは連合メーデーとなった。労働運動がどうあるべきかについては、進言する力がないのが残念だが、何とかしたものだ。世界的視野に立っても、労働運動はかわりつつあるようだ。私は住民との結合、住民の中に入って住民との協力で目的達成の工夫をしていいのではないかと思う。労働組織が改ったからにはその運動の中味にも新機軸が欲しい。福教組など新組織に批判的なものもあるが、それだけに新しい運動を自から創出してほしい。大型連休が待っている。福岡博の入場者数に注目したい。ただ私どもにはわからないが、あのような中味で人氣が沸くのかなと首をかしげたくなる。新しがり屋という逆の疑念である。自分自身もう古い人間だからよけいわからないのであろう。博覧会ばやりで一寸食傷気味。わいわいやればいいというのかも知れないが、何か伝統的なものもあっていいのではないかと思う。カネとモノと労働を使ってするのだから何か残したい。二十一世紀への確かな社会的指標を残したい。

5月1日(月)

連合メーデーの発足

三池闘争以来福岡県のメーデーも分裂していたが、今年は昨年からの宿願がようやく結実して「連合メーデー」統一メーデーとなった。但し、福岡の県中央と北九州の二箇所だけ、他の地区労は統一に達しないまま、今後これがどうなるのかが心配。連合統一ということで統一労組懇系はややはじかれた感があり、壇上での挨拶も主催者を別とすれば知事と市長の二人だけで政党(議員)は紹介だけ。桑原、末吉両市長はメーデーで挨拶するなんてはじめてであろう。バツが悪そうだ。末吉氏はかなり騒々しくヤジられていた。尤も私も

北九での挨拶の終り方にヤジが出たかと思うが、消費税や教育長問題で、「何やってるんだ」といった感じがあるからだろう。二十六年ぶりの統一メーデーとなったが、今後、これがどう発展していくか、統一労組懇が去就をどうするかに将来が託されている。東京では分裂メーデーとなっているが「小異を捨てて」とか「大異はすてて」とか表現にはいろいろあろうが、メーデーぐらいは一しょにやろうとの声がかんたん強まっていくことを期待する。労働組合の存在すらがその意味を問われている今日なのだ。

5月2日（火）

どんたく前夜祭

どんたくアジア博が重なって町はひときわにぎわいをましている。今年のどんたくは一口にいて国際色豊かで今日の前夜祭における米豪の娘さん達（留学生）の和服での日本舞踊は私には強く好感を与えた。よく練習しているのに感心したし、フレッシュに感じた。広州（姉妹都市）からの雑技団が獅子と毬、一輪車皿積みをやった少年これも驚異というしかなかった。恒例のミス福岡選出もあったが、決定を見ないままに私は退場した。街はどんたく一色になったのだがわれわれの方は竹井教育長のことで揺れ動かされていた。田川地区労の代表と称して高教組の連中が申入れにやって来た。県教委にも同じ姿勢で行くとの事だが、竹井教育長の辞任は「一身上の都合」から「責任をとって」に表現をかえた上で受理されることとなった。その場合、責任の内容は明らかにされないままであり、後任人事をどう進めるかに問題が移る。ウヤムヤか。

5月3日（水）

どんたくパレード 竹井教育長後任人事

国際センターにおけるどんたくパレード出発式は恒例どうり行われた。今年は会長の福岡商工会議所会頭は吉本から山下にかわっている。他は同じ。昨日の前夜祭は RKB、今日の朝のは KBC と取組みの違いも昨年どおり。終着が博多駅になったは近頃、国鉄が JR になってから。駅前も民衆化して特設スタンドが設けられて人だかりが多く、駅ビルは広場に向けて鯉のぼりの群遊が目をはく。コースは天神と駅を除いて沿道の人あまり多くないが、選び方がよくないのではないか。警備上の問題があるのかも知れないが、デモンストレーション性からみると物足りないと思う。今日も又竹井教育長問題について、後任人事をどこがイニシアをとるかに議論が集った。知事に前へ出よとの注文が前からあっている。午後の憲法集会のあと、小野参議と、そのあと林副知事、林県議と、又別に大塚県議副議長とあれこれ連絡をとりあった。中央は中央で地元は社会党、両教組がそれぞれ動いている。県教委は知事部局と連絡をとりあぐんでいる。

5月4日（木）

教育長後継問題

教育長問題が県をゆり動かしている。あちこちから電話がかかってくる。県会議員も無関心ではないし、とりわけ両教組が強い関心を寄せ「知事に期待」という姿勢である。竹井の辞任は事をウヤムヤにする一手段ともなっているのが実態。文部省は、地元の要請があれば対応すると柔軟に出ているようだが、自民党筋では事をウヤムヤにした上で、できれば、竹井のような人物を送り込みたいとしているに違いない。両教組が一番嫌がる方向である。要するに教育委員会、教育長を反奥田、教組征伐の突破口にするという戦略である。亀井前知事が、中央人事を通してやって来た戦略の継承である。教組側が地元からとか知事に期待するというのはその戦略に抗するためである。ここ数日の動きは表に出ないながら、この継承か否かの抗争となって展開される。

5月5日（金）

「こどもの日」なのか

五月五日は元来男の子のための節句、鯉幟、武者人形、それに柏餅、粽、しょうぶなどがつきものである。女子は三月三日の雛人形、それを戦後の政治が五月五日に子どもの日として統一したのはおかしいではないかとの意見がある。私も何故か知らない。しらべてみる必要があるが、今は面倒でできない。ところで、昔からの端午の節句は休日ではなかったはずだが柏餅、鯉幟などそれなりに意義ある行事をそれぞれにやったと思う。今は休日でありながら、そうした行事をする風はあまりないのではないか。いわば都市化、サラリーマン化ということができよう。休みであればいい。人出でにぎわい売り上げがふえればいい。レジャーだ、旅行だ、それも外国ゆきだ、男も女も行楽に明けくれる大型の連休の一環である。子どもを生む、生んだ子を祝ってやるというのではなくて、若者サラリーマンが、カネとヒマを得て遊んでまわる日になっていないだろうか。「こどもの日」は名称を変えたいネ。

5月6日（土）

学者文化人の革新ばなれ

終日揮毫し條幅二つをまずは仕上げた。うち一つは玄洋展に出品するもの。もう一寸気に入らないのだが、しめきりが迫っているので出さぬわけにはいかない。他の一つは高原（秘書）からの注文もの。それに加えて久留米の玉井直氏が、息子に社長の座を譲るので、是非為になる色紙をと頼んで来たので、その他とあわせて二枚であった。夜、森祐行氏が藤江氏と連絡の上やって来てマージャンをしたが、藤江が早目に帰った。森氏とあと話し込んだが、「学文の会」が近頃全く動かなくなったという話題。社会党の小野明を支援する目的で集ったのに、西井と荒牧ぐらいのもので、他は興味を示さないという近頃の傾向を嘆

きあうことになったという。若者の革新ばなれはいつものことながら、年輩者でも近頃は知らん顔というのが多い。「豊かさ」の別の面がこういうふうにあらわれたのであろう。それに社会党はカネをもたない。集める能力に欠ける。勝てる選挙にも勝てないのである。

5月7日（日）

観光案内ボランティア

昨日の朝九時に姫路から一行四二人が県庁に着いた。知事室に招じ入れ貴賓室も見てもらい、議会棟も見学してもらい、十時にアジア博へ出発するので、明日おつき合いするというので、県庁玄関で写真をとってお別れした。太宰府天満宮に参し、朝食して来庁のコースがわかっただろうかと心配したが、案内ボランティアと称する和田氏がいてくれて万事助かった。彼は福銀OBとかだが、歴史や地誌にくわしく、筑紫の歴史を学ぶ会のメンバーで、著書「よかところ博多読本」を贈呈してくれた。ボランティアといってもこのようなジャンルがあるかなと感嘆した。今日は和田勇雄氏にめぐり合っただけでも収穫であった。一芸に秀でるか、こるか知らぬが、彼が単に銀行マンで退職して、あとなすことなしの「粗大ゴミ」となっているのと、思いくらべてみればよくわかる。仕事の虫で終ってはならない、それが人間の条件である。つまり、常に「吾」を磨いていなければならないということだ。和田氏には今日名刺をもらって、早速色紙を書いて贈ることにした。

【欄外記入】

能・・・野守

シテ梅津忠弘

5月8日（月）

満足してくれた姫路の一行であった

姫路からの来客四十二人とマリンワールドで十時半にお別れした。志賀島国民休暇村に二泊した一行だが、昨夜は私も秘書つきでみゆき同伴で一泊つき合った。みんなよろこんでくれた。能楽堂、大濠池、日本庭園の順で昨日は県立公園のよさを案内し知ってもらったし、今日はマリンワールドで水族館、イルカショーを見て満足してもらったし、休暇村は新改築したばかりの部屋を十室とってもらって、食事も美味しかったといってくれた。私が昨日後半から今日午前中おつき合いして満足もしてくれた。みんな疲れただろうが満足してもらえてほんとうによかった。曾左小の同級生が男女三人ずつ六人来てくれたのも印象的。同窓の中から知事が出たことを自慢に思ってくれている。刀出の主な人もかなり参加してくれていて、いい印象をもってくれたように思う。晴久と和代はこれだけの客集めに苦勞したらしい。二泊三日という旅は、だれにもそうかんたんではないらしい。四万円会費といっていたが、安いともいえるし高いかも知れない。九一、和代は夫妻で参加してくれ八万円使ったわけだ。

5月9日(火)

これからの県教育行政

御手洗康教育長が着任のあいさつに来た。文部省初等中等教育局教科書課長からの天下り四三歳、一彦と同年の生れ、東大法卒。さてさてこれからの県教育界はどうなるだろうか。竹井はしっぽ切って逃げ帰ったし、野見山は辞意を表明して御手洗を竹井のあとに選定、「首のすげ替え」と某紙が評したが、そうなりそうにも思われる。自民党など野党が教育行政面を「反奥田」の牙城にしてきたし、今後ともそう期待しているとも受けとれる今回の教育長人事。県民の期待に反するのではないかと書いている新聞もあった。文部省になめられてしまっているといってもいいかもしれぬ野見山教育委員長は、他に人材がなかったとすら豪語している。「人材」が求められているのではなく、「人物」が求められているということを野見山は理解できない。できるような人ではなかったし、この場に臨んでいよいよ無能力さをさらけ出したといえる。ロボットという言葉をあてはめていいだろう。御手洗は「人材」かも知れないが「人物」かどうかは未知数、又はすけて見えるように今日は直観した。中央で、今の教科書行政をしてきたとは、見え見え。

5月10日(水)

やっぱりよくない体調

睡眠不十分で依然体調はよくないが、毎日の公務は辛うじて消化できている。頭や肩が重く、意識はカスミの中のようにもある。昨日の済生会病院での検診では夕方五時の空腹時のせいかも知れぬが、血糖一三八、尿糖土で、血圧は八三と一三〇でやや高め。これなら心配するほどのことはないようだ。ただ、近頃は命なんて別にこだわらぬような気持ちになっているように思える。カスミのような意識が昂じてくるなら、それも当然かも知れない。睡眠不足の状況は途中での小用に起きることによるようだ。入眠は薬剤によって、それほど問題はない(それでも就寝後三〇分はかかっているだろう)。小用のあとが悶々の時間が過ぎているようだ。眠ってないようだし、ウツラウツラでもあるし、二、三年以前ならあき時間に机に向かってもっといろいろ好きなことをしたのに、近頃はそうした勤勉心が劣であり、衰である。どうにかなる、どうにでもなれ、というような気持ちが先に立っている。ただ頼まれた揮毫仕事は有難く何とか消化している。

5月11日(木)

宝珠山村での対話集会

一時から宝珠山村で、知事との対話集会が行われた。過疎地として典型的なところなのだが、産炭地であったせいもある民家のたたずまいは立派に見えた。村行政の中に自前の力はあまりなくても、国や県の補助などで、かなりうまくいっているようだ。まずは安心してみておれると思った。問題はこれからの農林業がどうかわかっていくかだ、米の減反、

林産価格の低迷、それに起因する人口減—高齢化、若者の流出、嫁問題—など過疎化現象の進行である。医療問題も生じよう。観光開発も重要課題だが、村人の発想はもう一つ活力に欠ける。福岡市城南区と姉妹締結しているようだが、他との交流、魅力あるふるさとづくりが大事な視点となるのではないかと思う。日田市とは二〇分ほどで JR 九州鉄道により結ばれているので、そのことも視点に入れた方策を考えるのもよいことだろう。今日の対話集会で感じたことは村の人達が存外に泣きごとをいわなかったことだ。活力が秘められているとみえたことだ。意を強くしたともいえる一日であった。

5月12日（金）

緑園会

六時から新宿の日本青年館東洋軒で東日本緑園会（第十一回）が行われ出席した。五年ぶりか。出席者六〇人、満州八一五部隊（新京経理学校）第八期生は八〇〇人余の入隊、四年前の昭和六〇年の数で会員数五二五、遺族五八と計五八三、そのほかに三一五が消息不明というから、八九八人というのが正確な数かも知れない。不明の中に戦死、病死もあろう。今日、六一年以降の物故者に黙禱ということをしたが、それが一〇人。幹事の報告では二八五人に案内を出し、二二二人返事があったという。関西勢も同じくらいあると思う。同じ班にいた別府、瀬川が来ていてなつかしかった。大阪からは吉田定七氏もかけつけて来ていた。みんなそれぞれに、とる年波を惜しむかのようなだった。瀬川は、君が来ると知っていたら、もっとほかに声をかけるんだったのにといった。短いながら共同体験したという事が、これほど人間を引きつけるのかと感じさせられた。東京の会の幹事も決った。何回までつづくのだろうか、すべてを超越していつまでも共同体験を共に全くしばらく二時間ほど語りかえそうとする。その意味があるといえるか、ないといえるか、各自の判断だ。

【欄外記入】

宇野宗佑（外相）は来てなかった

5月13日（土）

姫路博（シロトピア）はよかった

ひるすぎ東京から姫路駅につき、田中孝市議の案内でシロトピアを見てまわった。白鷺城の北側公園一帯が会場で、福岡博とほぼ同じ頃にオープンしたこの博覧会も目標の入場者百万人を突破したとか。かなりのにぎわいであった。城が背景にあって改めてそのよさに驚かされた次第である。福岡の場合のように、あっちもこっちも追加入場料をとらないし、こじんまり、あっさり、有意義ということだろうか。城をバックに緑の美しさがとてもいい印象を与えてくれた。福岡博はその点規模が大きく一まわり見るのに三日はかかる。三回も入場料を払わねばならない。三日も入ろうとする外来客がいるだろうか。又 $\frac{1}{3}$ を見るに

してもどこをみればいいかわからないだろう。深切さが失われる。二時間待って入場せねばならぬようなパピリオンがあるという。疲れてしまう。姫路のはそうした不深切さを感じなかった。コンパクトでねと説明したが、それがいいと思う。美術館は見れなかったが、美術館博物館を取り入れている点も姫路のよさであった。

5月14日(日)

昨夜の姫路講演会

一昨日の夕方から今日夜九時帰宅まで、長い旅だったと感じた。東京、姫路、佐方、それぞれに古き日の思い出ばかりの時間で、公用は何も入っていなかった。このような時間の使い方がはいい込むのもいいだろう。昨日の姫路商工会議所での私の講演は約一時間半もかかった。田中孝市議が「姫路の皆さんへ、福岡県知事六年をつとめて」と題する私の話を求めて開いたもので、彼の政治活動の一環ではあるにしても、私にとっては、かなり懐古的な語りかけを郷土の親しい人達相手に自由自在にできたわけで、気持ちよく引きうけ、実行することができた点、感謝しなければならないと思っている。幼い頃のことにもふれながら県政の根底においている姿勢を話したのだが、涙しながら聞いてくれた人もあり、年輩者向けとしては、「よかった」と評してもらえたのである。前田先生、広田、黒川、吉田、その他たくさん知った人が来てくれた。姫路から知事が出たというつながりも理解してもらうことができただろう。因縁と個人の努力という点に注意して話したのだった。

5月15日(月)

当面は混乱

姫路から帰って一ぺんに宿題がふえたように感ずる。何から手をつけていいかわからないし、そのひまが見つからない。何かすれば、その後始末の課題がふえるもんだということをつくづく感じている。それに痛いのは記憶が薄れてはっきり思い出せないことが多すぎるということだ。じっとしていても次々と課題が湧いてくるのに、旅行などするとそれが倍増するように思える。それらを苦しめず、コツコツ消化していくしかないと心に決める。しかし不安は蔽えない。今一番心配なのは、誰々に手紙を書けばいいか、誰々から揮毫依頼を受け記帳落しをしているのか、混乱していること。それを確信をもって秩序立てできない点である。もっとゆったりした時間を設けること、できるだけ煩雑にならないようにすることが大事であるのに、その逆のことをしているようだ。対応せずにおくのも一つではあろう。しかしそれでは気がすまないのである。もう一寸待て！ 何とかする！

5月16日(火)

どっさり手紙をかいた

七時間も手紙類を綴りつづけた。こんなことは滅多にない。あつていい、が疲れたのはた

しかだ。週末に姫路に行った御礼状が中心だが、こういうことをすると帰宅後の宿題がたまってくることを改めて感じた次第である。そのまま礼状を書かずにおく手もないではないが、省略するには良心の抵抗がある。昨日も同じことを考え、悩みながら日を越し、今日は時間がとれたので、思い切ってそれに没入した。十二時近くになったので急いで寝ることにしたが、気分はすっきりだ。机辺には旅行中に交換した名刺の束ができる。日本人は名刺を混用するほど使う。便利なこともあるが、まずはあとで邪魔になるか反故化する方が多い。礼状の中に、西日本新聞旅行の久保研介氏の紹介で八女の斎藤元さんというのがあった。茶の生産で農水相賞を受賞した人という。新茶をくれたわけ。斎藤氏はブラジル農業実習の第一回生で篤農家のような。

5月17日（水）

福岡県のとなえる「国際化」課題について

午後一時半から課長以上幹部の特別研修があつて知事講話が四〇分「県の国際化方針とは何か」について話した。石炭と鉄がなくなって技術立県をと立てて三年になるが、もう一つ県勢振興の柱があり、それが国際化であるということが力点。この二つがタテ糸となり高齢化社会対応が横糸になるということをも指摘した。その「国際化」は、したがって他県でいうのとは違う。福岡のは地理的歴史的に、福岡県ならではの「国際化」である。石炭と鉄による福岡の雄県の位置は明治以来一〇〇年だけの姿であつて、歴史的には大昔から、二十一世紀に向けて亦、アジアと日本との交流の出発点であり玄関口であるということを確認しなければならない。だから「鴻臚館時代の四〇〇年間を思いおこそう。西を向こう」を相言葉として、各課ごとに例外なく、この課題に想を改めて取り組んでほしいということを強調したのであつた。このあとの京大教授矢野暢氏の講演も同趣旨のようだった。

5月18日（木）

修身—大学

新任課長研修の知事講話の一時間の中で、よい職員になるためにはよい人でなくてはならぬということ話を話した。中国古代の「大学」のなかにある修身、齐家、治国、平天下を引用、「修身」の大切さを説いた。その中で、人材と人物を区別し、人材もさることながら人物（人のしな）のよさが必要眼目と説明した。人材は偏差値教育でえられるが、人物はそれではえられないということだ。ついでに、美人はやがて婆ちゃんになって誰しもとりえはなくなるが、人格ある女性は年をとってもかわることなく他人によるこぼれると説いた。高山女史が聴いていて、この比喩がまことに面白かったと私に報告した。今日の話の、この部分は今朝出発前一〇分ほどの間に頭にひらめいた語り方で、「大学」について一寸メモをして行った。礼記の中の一編で、宋時代に、朱子が、礼記の中の中庸と、「論語」「孟子」

と並べ、これを四書としたといわれる。ついでに五経は易、書、詩、礼及び春秋をいうそうだ。大学は「成人の学」ともいわれる。

5月19日（金）

木精画と人形展

末次和美さんが新天町おいしギャラリーでやっている個展は、何とっていいか、アイデアが踊っているといってよい。落葉や木の実、枯草など、木精画、人形展というのだそう。生け花の素材を拾うため山野を歩くとき、落葉や木の実が「私を拾って」と訴えているように思えることがあって、何かに生かせないかなと思ひ制作したものというのである。自然と語り合う人は少ないが、トータルな自然、あるがままの自然というよりは死にかけての個片としての自然、形あるものからなきものへ変わっていく自然をとらえかえして心で生かしてあげたい、別のものに再生できないかと挑戦する末次さんである。これは珍しい注目すべき「自然への対話」追求だと思ふ。末次個展で昨日つくづくそれを感じた。この人は知事室に何回も何回もその作品を届けに赴き、かげのように消えて行くローフレズの一員だが、私は昨日の個展を見、今日約束してソラリアプラザで共に中食した。

5月20日（土）

行政依存型の考え方がどうも消えない

三池炭鉱で三年連続で人員整理がおこなわれるというので、三池労組から、県に何かしてほしいとの陳情がある。北九では開就の年令線引きで就労者が困っている、ここからも集団でハガキが拙宅に舞い込む。久留米花畑地区の区画整理についても同じくハガキ直訴状がかたまって郵送されてくる。ともかくどうなっているのかよくわからないが、総じて行政へのもたれかかりが近頃ひどく目につく。三池の場合も、全国的にみて就労意思さえあればどうにかなると思われるのに、現地に居付いたままで、行政が何とかしてくれないかというのである。ここにあげた例は福岡県に特徴的な傾向だと思ふのだが、政府の側では、現時点では二〇年三〇年とくらべ就労とか失対とかの政策が退却しているので、僅かに生活保護の細い細い手段しか残されていないのである。自分で生きていこうという気構えがうせている人達の相手はしにくい。

5月21日（日）

流動しゆく政局

関西県人会が阪急ターミナルビルで行われ、二〇周年とのことで知事感謝状を創設時の人三人に贈った。司会者と来賓の人が亀井知事という言葉を使って司会者は慌てて訂正という一幕があった。一昨年県漁連会長がある壇上で同様の言い違いをしたのを思い出すが、亀井氏はそれ程に人々の頭にこびりついている人だった事がわかる。亀井氏を別にどう思

うというのではなくても、強烈な印象を残した人だったわけである。今、自民党内閣は揺れに揺れている。でも野党側に受け皿、引き継ぎの能力不足、或は結合性がないため竹下内閣は国民の信用を殆んど失っていながら居すわりつづけ、辞任までニュースで流れた前首相中曾根もやめる気はない旨昨日発表していた。国会は動きがとれないでいる。亀井時代が終わっていることは確かだし、自民も頂点から急転落をはじめたと思える。今日の関西県人会で亀井の大阪代弁者だった江崎氏（県人会副会長）も、亀井不支持が打出されてる（県農政連青年部）状況を困ったものですねと私にいった。

5月22日（月）

臨時会で一年交代の新議長副議長決する

新年度の県議会役員を決める臨時会が今日一日行われた。誰が議長、副議長になるか等々、筋と突っぱりと掛引きが何日も前からおこなわれ、今日もぎりぎりまで水面下の動きがつづいたようだ。フタをあけてみると、社会一人が入院欠席であと八八人全部出席、議長三木、副議長山中と二つのイスを自民が独占という形になった。無効五は共産党に違いない。あと八三票は申し合わせの通り一致した的にしぼられていた。いいのか、よくないのか、本会議場はそれを表に出してあらわすだけの場で、議事はすいすい一時間弱で終了ということになった。いつもそうであるが、その本会議に至る迄が時間をとるのである。議長副議長の任期が一年というのもわが福岡県の特徴ときく。交代劇のはじまりが、「議長の辞任届」から始まる重々しさ。一票一票投票の重々しさ、それが二度くりかえされる。誰もがまじめにこれを受取る。これが本会議なのである。

5月23日（火）

縦割り行政の弊害 殻を脱しえないでいる。

庁議のとき環境週間の行事計画が環境保全課から説明されたが、私はこれに大きな疑問をもった。例年のように、そのうちの一日を海岸の清掃行事に知事を引き出そうというのである。又学校の児童も何とか行事に参加するスケジュールである。教育長から何の説明もない。野鳥や昆虫観察はそれ自身いいことであるが、それがなぜ環境週間の行事なのかの説明がない。環境の問題はどの課にも付随して大事な問題であるに違いないのだから環境週間の行事は保全課がまとめるにしても、行事はどの部課からも独自に出されていいし、その中からこの週にふさわしいのは、これこれだからスケジュールはこうなると説明されていいはずなのに、ほとんどの部課は知らん顔のようである。土木部の河川課など特に河川環境の美化について年間スケジュールがあつていいはずで、環境週間にはとくにこれに力を入れるんだと説明すべきである。なのに、衛生部の環境保全課だけが環境週間に責任あるか如く振舞っている。

5月24日（水）

福岡県の国際化

内外情勢調査会福岡支部の講師として東急ホテルで一時間の講演をした。「西に向かって進もう、福岡県の国際化」というテーマ。二年前の神奈川県知事との対話で日本の軸を関東におくか九州におくかの論議を応用して札幌—横浜—福岡という構図の中心の横浜観ではなく、東京—福岡—北京という構図での福岡であるという福岡観を中心に話を切り出した。地方の国際化といっても福岡の場合は他県と異なった意味をもつ、即ち地理的歴史的に福岡は特殊な国際化を考える必要があるということも述べた。二千年の日本史の中で、鉄と石炭の近代化百年を除くと福岡は日本の玄関であり、二十一世紀にはアジアの時代といわれるそのアジアのカナメとして位置づけされうるという事も述べた。そうした国際化にふさわしい福岡たりうるにはまだ進めねばならぬ点が多い。国際化マインドの養成も県政の重要課題の一つである。町並み一つとってもまだ受皿不足とも述べた。

5月25日（木）

済生会の現状に対する危惧感明るみに。

四時から済生会の役員会があり六三年度の事業と決算、新役員の承認がおこなわれた。会長である私の挨拶の中に、昨年より「厳しい」との部分があったので、私から提起するのは不自然だが、私は審議の中で「厳しい」とはどういうことかと発言した。事務側の説明は婉曲でしかなかったが、福岡病院の名誉会長である土屋呂武氏が、全国済生会の出発時点と今では状況が全く変化し「済生」の趣旨と今の事業内容はかなり実態的に異なっており、所得の向上、生活保護制度の充実、医療保障の発達から考えると「済生」の事業といえない事をしている部分が多く事業から収益が出るのであれば、今日の免税、公的助成金支出はやめるべきだとの声が中央では強まりつつある。政府がその方針を明確に打出し法改正をするなら済生会の先行きと運営は危くなるというのである。近藤常務がその辺のことを追加説明し、問題が鮮明になった。

5月26日（金）

県民の会との話合

朝から大川市での防災訓練に出たあと、三時すぎ帰宅、県民の会からの苦情をきく会になった。社共労の三つの側から六人ばかり出席して知事室で一時間ばかりの「話し合い」である。共産党側から出された問題であることは確かで、一つ消費税対応、二つ天皇問題、三つ教育長問題、四つ今後の取組みを要する問題、この四点について問題提起とやりとりのあったあと、共産党の方から加えて、私学助成を生徒個人にわたるような施策、国民健康保険への助成策が他県より少ないこと、さらには非核県宣言をせよといったことが追加された。こうした問題はいくら説明しても県民の会のうち共産党側はわかってもらえない。

一般的に県民の側もそうだが、生活・運動・行政・政治の絡み具合がよく理解してもらえない。議会の与野党の数と執行部、それと国政の関係など考えないで、理念で判断して苦情となる。一困る。

5月27日（土）

初夏の快適さ

銚して山ほととぎすほしいまゝ 久女

新歳時記の六月の項に時鳥と題して右の句がある。雨もあがり、今日は休務で、青葉薫る外向きの草取りでもしたいのだが、揮毫の宿題があってそれに没入していると、裏の竹藪あたりで小鳥がほしいままに囀っているのが、とりわけ快くきこえる。花ざかりの春の半ばもいいが、青葉の五月から六月にかけての今頃も、それ以上にいいと私は思う。鳥も自由なら木々もその梢自由自在に伸びかつ揺れていて心にくい。和代が太く大きなソラマメのサヤを送ってくれたので、むいて早速ゆがき塩味で食べる。皮はやわらかくて口から出さずに食べられる。自然の恵みというほかない味。淡竹の筍は一寸旬がすぎたが、佃煮でもたせ、これまた特有の味である。休務の一日、在室して（世にそむいているだろうが）結構楽しかった。

5月28日（日）

楫なき舟

門司中央公民館で昨日から福教組大会があって出て挨拶。当今、労働組合運動は「北極星」を見失っているように思えてならない。黒田壮で社会主義協会県支部の総会があり、それにも出て挨拶したのだが、「協会」についても同様のことがいえるように思える。中央政局、県教育当局いずれも極度に混迷しているのに、その中で誰しも見張る旗印を立てて踏んばる力に欠けている。運動自体も亦混迷している。運動が混迷し、支配勢力が肥大化しすぎてその驕りが自壊作用をおこしているといってもいいかも知れない。立ち向う反対勢力がほとんど無力なのである。とはいえ、では「協会」をどう指導するか、労働運動はどうあるべきか、私自身こたえるすべを知らない。国会は開かれぬまま、竹下内閣は総辞職や解散もしない。疑惑の追及にも頬かむり。予算は参院審議抜きで先日自然成立。楫なき進行。

【欄外記入】

眞田義一先生逝去の報きく

5月29日（月）

過去の人となった

（中曾根も竹下も古い 自分も古い）

メーデーの日に小倉に行き、総合庁舎に寄ったが、あの時顔色が悪かったですよ、と今日中国武漢総工会の来日中の青年を案内して知事室に来た県職労の某氏が私に言った。そうでしたかと答えたものの、自覚はなかった。近頃二週間に三回ぐらい済生会病院に検診、点滴に行く。所要時間は一時間余、今日の結果は血糖一四七、尿糖マイナス、肝機能の数値も最近数ヶ月のうちで一番よいとのこと。でも睡眠が十分でないことは変わりなく、毎日頭は重い。夕食時のテレビのお笑い番組で、政治家に停年をひくとすると何歳がいいと思うかという間に若い人は六〇歳と答えていた。彼らから見ればわれわれはもう過去の人、去るべき層の人間なのである。見る人すべてが、老いぼれてと思っているに違いない。大正は遠くなりにはけり、というのが真実だろう。物余り時代の今日、若い人達に足らないことの大切さがわかってもらえない。田園で作物を仕事に老後を送る記事が新聞に出ていた。一つの途として。

5月30日（火）

青年の船帰港式

二時半から築港で、県青年の船の帰港式、池田出納長が団長、最後はお別れのしるしに、三百数十名にひとりひとり私も握手をかわした。女性が半分。感激して泣いている者も少くなかった。疲れただろうに、思い出が多く強烈だったためか、涙が出るようだ。若いから泣いていい。一生の思い出になる体験、はじめての相互の出会い、楽しかったから泣けるのであろう。私も、みて、ほろりとした。泣けるなんていいことだなと思った。羨しい限りだ。十二日間の旅の中で船内研修も、中国韓国の青年との語らいも、団員の血と肉に強くしみこむものをもって来たに違いない。若いことはいいことだし、頼もしいことだ。ひととおりの握手をして別れを告げ解散したのに、あとで多くの班がそれぞれに又肩を組み輪になって歌い別れを惜しむ形をみせていた。県のこうした行事はつづいていいと思う。

5月31日（水）

役所仕事の組織運営に待ったをかけるが……

交通事故をなくす県民運動本部の総会がサンヒルズで行われた。挨拶三人に次いで議長選出の段になって、志免町長南里氏が突如発言を求め、知事退席に関連して司会にくってかかった。彼はよく発言を求める。それも当然といえる。役所の進める組織運営はどれもシナリオ通りにすすい進められ、めでたく終るが効果はさほど期待できない。今日も南里氏は交通事故の増加を憂え、効果ある対応をとくと話し合いたいのだが、このザマでは話し合いにならないではないか、代理出席とか委任状とか、また役人の作ったシナリオ通り経過、決算、事業計画、予算、OK 可決だけでは交通事故を少なくすることができそうにないと主張する。役所仕事ではいかんというのである。交通対策課も一番痛いところを南里氏に衝かれたのである。しかし、南里氏がどのような話し合いができるかどうか、別の会

をもつしかないのではないだろうか。

6月要記

やっぱり六月もアツというまに過ぎてしまった。公用がぎっしりで、後半は議会への対応が中心だった。副知事、教育委員の人事にも気を使わねばならない。しかし東奔西走というのではなかったの、句誌「万燈」をかなり座右にしつつ読むことができた。これからもできるだけ関心を寄せようと思うが、句界が伝統を重んじ、伝統を作っていく点に驚きを覚えた。強い印象である。外からの批判になるが、それが世界を狭めていくのではないかと危惧がわく。むつかしい字が使われているのが特徴である。しかし、自らの勉強不足について不問というわけにはいきまい。「万緑」という語がよくでてくる。まさにその通り初夏梅雨期はどこも緑一ぱいで自然の恵みほど有難いものはないと思う。人間が（われわれ現代人が）それを思わないで、都市的、近代的生活におぼれてしまっているのが情ない。あくせくしないで、この緑の中にとびこみとけこんでいく時間をもっととるべきなのだ。

6月1日（木）

九州知事会招待

明日九州地方知事会がある。今日は午後、参会の知事たちをアジア太平洋博覧会に案内した。大塚副知事が案内役でテーマ館、九州館、タワー展望が主たるコース。心配したタワーも待時間を要することなく順調だったらしい。逆にいえば入場者が少なかったともいえる。夜の三光園での招宴では、福岡市は埋立ての海があつていいですねと博覧会々場の余地あることを指摘された。そういえば九州の他県ではそのような条件の県都はない。宮崎県知事は、うちは太平洋に向けて埋め立ててみても仕方がないもんねとジョークをいっていた。埋め立ての余地とは価値あるものでもあるわけだ。田園のまん中にあつても用はなさないし、深い海でもいけないわけだ。知事たちの案内に大濠公園を組み込みたかったのだが、時間がなくて、往復とも都市高速を走ったという。はじめから大濠、舞鶴城跡を組み込む知恵がなかったともいえる。折角の、何年かに一度の知事会なのに、能のない案内スケジュールを作ったものだ。夜の宴会の余興に、博多にわかを追加したのはよかつたらしい。もてなしに工夫がかんじんなのである。

6月2日（金）

情報公開審査会の人たちの心情

夜七時半からサンヒルズで情報公開審査会のメンバーとの懇親会があつた。手嶋会長が学部長になったので今は会長出雲敏夫氏あと出席者は斎藤、大屋、加来、川上、宮田、西日本の溝口氏はこの時点、竹下内閣の後継宇野内閣の組閣中で報道陣多忙とのことで欠席。県側は総務部長田中、次長大藪、秘書から八並、情報公開課から補佐係長、井上課長が来

ていた。情報公開のスタートから運営に至るまで、その六年間前半は制度発足に、後半は運営監視によく働いてくれた人達だ。当面運営の中からあれこれ問題が出ていること、個人情報保護へ踏み切らざるをえないこと、政治倫理条件に着手すべきこと、公文書の保存に意を用いるべきことなど宿題が少なからず出された。職員の意識がまだ古く、公開拒否すら問題になっている。公開コーナーが不便な場所にあるということも問題。しかし今夕はその他奥田県政へのうっぶんばらしの様相も多分にあった雰囲気だった。

6月3日（土）

書塾の縁をもって利用したらいいと思う

六時から平和樓で玄羊会書展の祝賀会が開かれた。十八回という。閉会のあいさつをした某氏が、つづけることに意義があると述べていたが、全く同感である。上手、下手はその次で、続ける根性が一番と思う。私のあいさつの時に、「ぬれ落葉」ということを思い出しつつ、身に何かつけていく根性の大切さを強調したのであった。宴席の中で私は加えて、書の練習だけではなく、同門の縁を利用して、花見とかピクニックをしたらどうかと提案した。心のふれ合いを見つめることも大事だとの主張である。今日あるのを待つ人も少くなかったようだが、それはやはり触れ合いを求めてのことではないだろうか。きまった曜日にきまった場所へ行って書の添削をうけるということの連続の中で、相互の触れ合いのほとんどないのが現実である。せっかくの縁なのだから、血縁、地縁と並べて意義あるものにするかしないかはお互いの努力にかかっている。数人の同席者にそのことを提案したが賛同してくれた。世話する人の努力は大変だが輪番制でも。……

6月4日（日）

矢作製鉄の見学

第二〇回中京福岡県人会に出席のため空路日帰り往復したが、便の都合で若干ゆとりがあるので、矢作製鉄見学を申入れていて実現した。県人会の田尻会長が、この製鉄所の会長でもあり、応諾をえたのである。二〇〇人足らずの工場というが、以前は四倍ほどの従業員だったという。港区にある、電気炉が主体で特殊なインゴットを作っている工場である。以前、同じ名古屋でブラザー産業を見学したのを思い出して今回の申入れになったのであるが、何事も見ておくに限る。粉塵と熱風の悪条件の中で、特殊な銑鉄が生産されている。鋼を作る板、型の作業というよりは、全体が装置といってよい。ここの特殊鉄が何にどう加工されていくのかは知らないが、次の工程工場を見たいものだ。それは後のこととして、これからもいろいろ機会をとらえて工場見学をする必要を今回も痛感した。身の周りのいろいろの「物」がどうして生産されるのか経路ぐらひは知っておきたいものだ。与えられたものと無条件に前提するのでなくて。

6月5日（月）

水を考える。

朝、待望の雨が降ったと思ったら午後は止んだ。夕刊には九州梅雨入りと報じてあった。中国から水資源技術交流の代表団の表敬があった。筑後大堰など視察対象になっていた。十一年前の福岡地方の大渇水、その後の水対策で福岡は有名になっている。水源の森基金も県政の一つのかわらざる課題となっている。中国は大河はあるが、北京など水と電力の不足が発展の足枷になっていると聞く。水は人間の生命ほどに大切なものでありながら、「空気の如く」ではないにしても「湯水の如く」軽く扱われがちである。県の流域下水道、浄化装置については具体的にもっと知りたいのが私の今の心境。下水道の需要は今後ますますふくらむが、その対応がどこまで可能なのか心配だ。大小河川の流水をもっと利用する途を考えたい。政府に対するダム要求は毎年しっかりやっているが、多額の予算、分担金が必要なため、両々なかなか進まない。じっくり腰をすえて、水対策に不断に取り組みたい。今はもう少し降ってほしいのだ。

6月6日（火）

体調がよくない

体調がよくない。夜の睡眠が不十分で、ひるまの執務時間はねむくて仕方がない。車の中ではなるべく目をつむっているが、ねむれる程のことはない。次々に用務がつづき、自由な時間が狭められている。日記をつけるが、何でもいから思いつき短い時間で書いてしまうだけ。根性だけでつづけているとあってよい。医師指定の薬はきまって服用している。寝る前の安定剤は二種あるが、 $\frac{11}{22}$ と半分ずつ、ずっと以前は $\frac{1}{2}$ だけだったのに、 $\frac{1}{2}$ を追加したことになるので、よほどの事がなければ途中めざめて追加服用すべきでないと思って、枕辺には用意しながら控えている。十一時に就寝、二時半、五時といった風に途中二度、小用に起きる。近頃一回ふえたようだ。三回という日も生じてきた。便が近くなったのである。睡眠不足の状況がこうしてひどくなる。便を感じずから起きるのか、眠りが浅いから便を感じずのかどちらか因果はわからない。

6月7日（水）

臨時行革審地方懇

はかた会館で、四時間、行革審から来福しての地方懇談会が行われた。今日は同時に仙台でもあっている。意見を述べたのが知事、市長、九経連会長ら一三人。それぞれもったもなことをのべる。東京一極集中の状況下、地方の自立、分散型国土形成、集中より分権が求められている。財源の確保、交通インフラの整備が不可欠であるともいわれる。官僚性、タテ割行政の弊も指摘される。権限委譲、許認可の地方分散も必要といわれる。平松大分知事は持論の九州府論をもち出す。道州制の話題も出る。でも、なかなかできそうにない。

官僚の抵抗が強い。既得権を墨守しようとする。行革審は決して独自の案を時の政権党におしつけることはできない。むしろ政府の方から答申原案を下書きしてきて、もてる作文力で、それに沿った答案を作るだろう。体にいい金屏風である。私はあまり期待せず、必要最低限しか発言しなかった。公務員制度の改革をいう人はいなかった。なぜか……

6月8日(木)

中国の事態紛糾

四月一五日 胡耀邦死去

〃 二一日 学生一〇万人天安門前でデモ 二六日 同市内デモ

五月 三日 学生二万人天安門デモ

〃 一三日 学生数百人天安門前でハンスト、数万人の群衆

〃 一五日 ゴルバチョフ書記長訪中 一七日まで

〃 一七日 ハンスト支援デモ 最大規模各界一〇〇万人

〃 二〇日 北京中心部八区に戒厳令

〃 二三日 一〇〇万人デモ 李鵬の辞職を要求

六月 三日 兵士二～四〇〇〇人長安街行進 学生らこれを阻止 軍は排除

四日 箕差別掃討(三日深夜より) 学生市民死者約三〇〇〇人

武力行使への抗議行動、上海、南京、天津、長沙らに波及

五日 軍市内中心部を制圧 威嚇射撃つづく

六月三日北京大学のカベ新聞、大虐殺の元凶を鄧小平、李鵬、楊尚昆、楊白水、李錫銘、陳稀同(北京市長)と名ざし、学生群は暴乱とよばれた。

【欄外記入】

[動いている軍車輛]

軍用トラック 一〇〇台

戦車 一〇台

装甲車 六〇台

(六月三日～四日)

6月9日(金)

六月四日北京騒乱

六月三日夜十時頃、人民解放軍二～三百人非武装で、学生市民の抵抗にあいながら天安門へ、うち一三〇人が集団から離脱、十一時民族飯店前で催涙弾が使用され学生らパニック状態に。四日〇時に装甲車二台が天壇から天安門へ、一〇〇〇人の兵士がつづく、学生投石、ロータリー西側で軍用トラック一輛炎上。〇時半天安門広場で軍側が閃光弾、催涙弾発砲、銃声も。軍用トラック一〇〇輛が東方へ、装甲車一五輛が西へ(木屋立体交差点で)、

投石多し。二時半軍は天安門に突入、長安街を横一列に並んで発砲しながら行進。二時四〇分テレビ臨時ニュースは学生たちを「反革命暴動」と呼び退却を勧告。三時二〇分北京飯店前で軍による自動小銃無差別掃射、死者多数、装甲車炎上するなど広場はパニック状態。五時「民主の女神」倒壊。五時半戦車七七輛、装甲車二一輛北京飯店前で機銃掃射。四日ひる間は軍が長安街を制圧。五日それが全市に及ぶ。——以上、二ページにわたる記事は六月七日に外務省中国課から出されたニュース記録の概要である。

6月10日（土）

ゆうべから今朝にかけての北京 強硬派で平静へ

九日夜の中国国営テレビによると、中国の最高指導者鄧小平中央軍事委主席は、九日午後中南海（政治の中枢部）で戒嚴軍部隊の幹部らと会見した。会見には李鵬首相ら主要指導者が出席したが、趙紫陽総書記と胡啓立政治局常務委員の二人は姿を見せなかった……戒嚴令下の血の弾圧によって激動をつづける中国は李鵬首相ら強硬派を中心に事態收拾を図る方向が決定的になった——西日本新聞十日朝刊トップ記事。つづく会見にはほかに楊尚昆国家主席、喬石中央検査委書記、姚依林副首相、万里全国人民代表大会常務委員長、李先念政治協商会議主席、彭真前人代常委、王震国家副主席、薄一波中央顧問委副主任、陳雲顧問委主任は参加しなかったが、戒嚴部隊への「崇高な敬意」を伝達した。……十日午前〇時すぎ長安街を約一二〇台の戦車と装甲車が市中心部から東方向へ移動するのが目撃された。北京大学は軍が進駐。

6月11日（日）

大牟田の再生を期す

六時二〇分に出発し、大牟田での「環境美化行動の日」行事に参加した。笹林公園での儀式と四班にわかれての市街地のゴミ拾いである。今日、大牟田には過去の石炭、化学、港湾を中心とした賑わいは既がない。石炭さえ氣息奄々である。人口は二十二万から一五万台へと減っている。もちろん過去に蓄積した遺産は小さくない。底力はある。それをどう活用するかが、これからの課題である。今大牟田市民は、高齢化の進行の中にはあるものの、方向づけを模索しているし、悲観してはいない。ゴミを拾いながら、気概は感じられた。外見からも、街が美しく生まれ変わろうとしていることが直感される。街並みはむしろ美しい。話によると、市内の川は、以前臭気芬々、黒ずんでへドロ堆積場といえる状況だったのに、今は魚さえいるという。新しい方向をさぐりましょうと私は市長にいった。ベルギーは石炭と鉄の国だったのに、今はダイヤモンドの国らしい。市民も古里を捨ててはならない、辛抱強くやろうと。

6月12日（月）

国体の形式主義

夜一条（料亭）で国体事務局幹部の北海道「はまなす国体」への対応と、来年の本県での国体の秋季国体入場式の内容の説明があつて、昨年京都にいった時の印象から、私自身大きな嫌悪感を禁じえないものがあつた。次年度開催県知事として、今年度は三回ほど北海道に行く必要があるという。又来年の秋季大会入場式は五時間ほどかかるという。簡単化できないかという、体協と文部省が作った型にはめられて動きが自由でないという。私にいわせれば、県主催といえないじゃないかということだ。体協も文部省も権威だけをふりかざしている。こいうチャンスにそれを発揮しないと他にないともいいたいようだ。昨年のソウルオリンピックでも体協傘下の各競技団体の成績がかえってよくなかったという事態も生じた。実力が落ち、権威だけが残るといい傾向といえるかも知れない。開催県がさわぎ、体協と文部省は得意げにこの機を利用するかも知れないが、空洞化が進み、国民が国体を注目しなくなる。かえっていいかも知れぬ。

6月13日（火）

褻のない日常

一日終ってみて何か空虚さだけが残る。夕方行橋の酪農会館で地方行政連絡会懇親会の時、酌に現れた女性が、知事さんとこんなに近く話せるなんてとよろこびを表明したあと、彼女は「晴ればっかりで褻がないのが淋しいのではないか」といった。私はその表現にびっくりした。うまい表現ですねといった。そういうことに気づく人は少なからう。あんただってそんなによそ行きに着物を一日中着ているとしたらたまらんだらうと私はいった。又、便所に行くにも監視がついているみたいな身分だから、便秘してしまっても体調によくないとも苦言をはいた。朝早く、夕方おそく、十二時間拘束の状況が毎日のようにつづく。褻がないも同然である。横にいたもう一人の女性が、よくテレビに映るといったので、そのように晴が多いのだと説明した。数日前秘書室の者に、集会その他挨拶にばかり立たせないで、現場を勉強する時間を作れよと言ったが、空念仏か。

6月14日（水）

副知事人事の詰め

大塚副知事の任期が七月上旬でできるので、後任をどうするかが前から問題になっており、県の総務部長をしていた富永はどうだろうという線で話が進み、今日最終の詰めを行うため、林県議と共に上京し、自治省持永官房長と詰めを行った。七月四日の県議会最終日に提案できる運びとせねばならない。富永も快諾してくれている。大塚氏は今のところ、みずから希望を表面に出していない。重任の希望、現地に残る、自治省に帰って関係団体に就職するというような三つの選択肢があるが、どれを希望するとはいつてない。私には、

自分のことは自分で決めるとだけいつている。自治省へ再任の希望はもてないことは判っているようだ。今日の結果はできるだけ早く本人に伝える必要がある。彼は周辺、部下には評判がよくないようだ。叱るだけ叱るが自分で答をもてないといわれる。私には婉曲にしかこうした評判はきこえないが、彼に対する共通の批判がそれで、重任されては困るというのが支配的空気なのだ。

6月15日（木）

「使い捨て」をどうにかできないか

古い動かなくなった時計に新しい電池を入れたがやはり動かない。ボールペンにデジタル時計がついているのがあって、これも作動してないので、随行の橋本氏に言ったら代えてみますというので預けていたら動くようにして返してくれた。丸鉛筆を三ミリほど輪切りした程度の電池を入れてデジタルをあわせる。私にはもうそのような手間をかける能力はなくなっている。文房具屋さんだったか抽出をかきまわしてその電池を見つけてくれ、その際、こんな筆記具は今は「買い捨て」ですよといったとか。今日の常識はそうであろうが、私には一面肯定しつつも一寸ひっかかる思いがする。「使い捨て」——これができないわけ。だから書斎といい、うちじゅう、捨てていいものがごたごたあって、とても普通の人には見せられない。先日県の公的関与のことで廃棄物処理場建設の課題が出た。「使い捨て」が「破壊捨て」になって廃棄物が何もかも一しょくたになって環境汚染へと突っ走っている今日だ。

6月16日（金）

だらだら長びいた福岡市制一〇〇周年記念

市民会館での福岡市制施行一〇〇周年記念行事があって、これには自治大臣、三外国領事館からも来ているし、県は知事、議長、九州市長会副会長、県知事会副会長ら多数来賓が出席しているのに、市制一〇〇年に功労のあった人等々の感謝状表彰状渡しに何十分も時間をかけ、来客らをうんざりさせてしまった。表彰式を別途する方法、もっと簡約化する方法を司会の方で工夫しないといけないと思う。当事者たちのひとりよがりのように見えとりわけ外国からの来賓には失礼にもあたるとは違いない。区切りというか幕引きを中で考えて帰ってもらうのもよい。いずれにせよ儀式好きの日本、そしてダラダラその儀式が長すぎる日本、これをなおした方がよい。祝辞もかんたんにする方がいい。祝電は今日は三通ほどの披露でよかったが、他のケースでは長々だらだら多すぎる。

6月17日（土）

教育行政批判

夕刊は知事が高教組大会で教育行政の「おくれ」を批判したと書いている。革新県政に対

する保守の「牙城」が教育委員会ともいう。今回の教育長問題についてもほとんど連絡はないし、国体や国立博物館誘致についても連絡がない。むしろ敵対的にすら動いている。点字受験に対する情報、外国籍教師採用にしても意に反して動いていると指摘した。（私は情報公開制度についてもいうべきであったとは思）竹井教育長など着任のあいさつのないままだったし、高石パーティ券問題についても何の報告もない。国体、国博については対応も鈍く反奥田の線で動こうとしているのは事実。スリム国体をと私がいうと、負けてもいいのかと反論する。国博誘致についてもっと予算をつけようとする、要求もしない予算をつけようとしたと反撥する。恐らく国博の理念や構想についてもほとんどみるべき形になっていないのではないかと思う。

6月18日（日）

感じのいい句（上）

万燈誌の昨年の八月号を読む。季節感を味わうにはこの頃着いたのでは無理がある。

のせられし掌に忸怩たり根切虫	山田千恵女
華やぎを地に撒き牡丹果てにけり	佐野喜代子
パラソルの女を乗せて手漕舟	近藤 竹雨
のど走る清水の生きてをりにけり	宮原喜久詩
袋掛日和に疲れ渉らず	岸川鼓虫
れんげ摘むすぐ一杯の掌の幼な	中村 太郎
こまぎれの時間つなぎて草を抜く	山本とし子
草原に夏鳥の声ちりばめて	三宅 満子
藤房の揃ふ長さに風そろひ	内堀 冬湖
人の世の穢を近づけず初牡丹	〃
道を問う声も切りゆく草刈機	稲見 佳子

いいなと思った句、これでも季節は少しおそい。

6月19日（月）

感じのいい句（下）

昨日につづいて今日はその次九月号をみて拾い出した句、少々。

新緑の彩水にあり空にあり	上野 繁子
水底の光を呼びてあめんぼう	〃
光陰を刻む水車に青田風	田隅 遊佳
代掻機およそ十ほど見ゆる景	川上 朴史
一条の滝万緑をひきしめる	宮原 りゑ
抱きみる花も日傘の影に入れ	山本とし子

点滅の火色妖しき恋ほたる	佐野 不老
ゆく雲を映し植田の落着に	長沢テイ子
突然に来て夏蝶の庭となる	藤崎美恵子
四方に向け紅を奢れるアマリリス	菊川 花仙
梅雨晴の玉の一日何からしよ	近藤 一水
片頬を紅潮させてさくらんぼ	白川 良

秘書室に山形県の宣伝隊が来て桜んぼ一箱をプレゼントしてくれた。

6月20日（火）

農業・自然から遠ざかってゆく現代人

七月の朝の放送に何を題にするか森山、安達らが来て午後おそくまで議論した。私は七月は夏、涼気を呼ぶようなものはないかと言ひ雑談になってしまった。こ理窟をいわないようにしようという趣旨だ。今日もまた昨日の句誌をみていたので、それを横においての話だった。今の若い父母たちは鉛筆削りや鋸の持ち方すら知らない人がでてきている。ましてその子たちはいうに及ばない。それでいいのだろうかということになる。カブト虫は？と子供にきくと、デパートに売っていると答えがかえってきそうなのである。ニワトリの絵をかくと四本の足をつけたとのわらいなしもある。泳ぐのはプールときまっている。母親が子に「これがソバのき」というと、子供から「うどんはどんなきななの？」の質問が返ってくるとか。蛾が窓から入ってくると、キャッとわめく人が普通になっている。都会の人にもっと農業や自然を理解させたい。理解させる必要がある。そうでないだろうか？私は問うた。俳句など老人の好みになってしまいそうだ。

6月21日（水）

高崎、中川、芳井が協会事務から退いた

高崎新八氏から四月二五日（火）の夜天神センターホテルで開かれた「八丁さんを偲ぶ文集出版会」のスナップを四枚送付してきた。夫人と次女の出席で、衣笠氏が司会している。来客はそんなに多くなかった。むしろ淋しい感じだった。彼が生存していた時はあれこれの非難もきこえたが、去ったあとは誰しも至宝を失ったように感じているこの頃である。運動の全領域については配慮が届いていたからであろう。今は一年たってみてどこも抜け目があちこちに生じ、八丁氏がいれば・・・と誰しも思っているらしい。今日の高崎氏の手紙では協会県支部を辞任したと書いてある。朝倉比良松で何をしているのであろう。先日黒田荘での大会で、中川、芳井の三人で去ることは聞いていた。協会県支部も活動領域を失い狭め、専従者を抱える力を失ったためといわれる。時代の変遷と人の対応の難しさを痛感する。

6月22日(木)

健康の心配

済生会病院における健診の結果がこの三週間つづいてよくない。今日の血糖二七四、尿糖++++である。中食は午後一時で検査が午後四時だから、以前なら前者が一五〇、後者が十か十かであった。食後は高いのが普通だが、三時間も経っているのにこれだと心配である。この数日口腔内がねばった感じで唾にねばりを感じずし、口のかわきがある。頭が以前のように少々重いし、一番気になるのは睡眠の不十分さである。二～三時間ごとに起きてトイレにゆく。尿意によって目がさめるといってよい。起きたら次にねむるまでに時間がかかる。別段精神的な心配、いら立ちがあるわけでもないのだが、若い人でもストレスのひどい例があるといわれる。気づくまでもないストレスがたまっているのであろうか。いずれにせよ糖の問題については食餌の取り方など更に気をつけなければいけないということだろう。

6月23日(金)

句誌をみてかたよりに感ずる

登庁執務のひまひまにと思って句誌万燈を開いてみるが、スカッとはいるものも少ない反面何のことやらわからないのもかなりある。前に季語の七割は死語になっていると思ったこともあったが、俳句の世界独特の又は流派独特の言葉が使われる傾向もあるようだ。素人だからわからないんだよ、ということになると句界がみずから大衆から逃げてしまうことになるのではないかと懸念する。私はリズムも大切な要素だと思うのに、それが平気で崩されている。この世界にもっと入りこんでいくなら理解できるかも知れないが、外から少しではダメのようだ。それに意識的に旧カナづかいがしてある。一般から別世界へと考えられる。それに今のライフサイクルの反映かも知れないが、投句者の多くは女性であり且つ高齢者である。これは作者名とか句の内容によってほぼ判断できる。男がもっと関心を寄せて欲しいし、若い人者が好む世界でもありたい。

6月24日(土)

華美すぎる祝賀会に思う

六時から大牟田ガーデンホテルで山中孝助氏の副議長就任祝賀会があった。千数百人の参加者である。県の副知事各部長もきているし、県議も十五人ばかり来ている。中間市の松岡氏も豊前の渡辺氏も。松岡氏はどこにでもつとめて顔を出しているようだ。立食中にそのことにふれて彼に話したら、知事のためになるならばと出して出ているという。いずれにせよ、カネがいるんだといていた。そうだろう、しかし、その、つき合いの心が私には理解しかねる。政治浄化が叫ばれている現今、このように派手なパーティはどうかと思う。演壇両脇に飾られた花輪にしても一夜にして捨て去られるのに、豪華なものだ。外国

でもこういうことをやっているのだろうか、当の山中氏にしてもやりたくてやっているとは思えないのに、世間体があって、やるしかなかったのであろうが、誰となくその雰囲気を作る。今日はバックに十一団体が動いているとのこと。ノーだ。

6月25日（日）

梅雨晴れの日

廻りや日は朗らかに晴れ上がり 大牟田 藤津 讚

この日曜日、晴れ渡って朝から日は燦々、昨日はじっくり降って大地が重くなった感じ。今日はかなり乾くだろう。東の山では小鳥がやかましい程に鳴いている。右の句は「万燈」一昨年九月号にのっている。一日休務でいると、どうしても外に出て雑草抜きがしたくなる。夕方の仕事にこれで三日目だろう。二時間ほど精出して、とうとう存分に草抜きが終わった。いつも又生えるに違いないと思いながら草抜きをする。なぜ生えるのか、考えても見る。根ではびこるのも一つだろうが、どこからか風に乗ってやってくるに違いない。生命の強さというか。無限のひろがりというか、いつのまにか所を得て生えるのである。大濠池に魚が自然に生息しているというので、あんなに空っぽにして浄化の大工事をしたのに、どうしてだろうという、石や砂の間にはいつか生き永らえたのもいるという返事だった。鳥が運ぶこともあるだろう。

6月26日（月）

写真でみる同窓生

六角の吉田氏から写真が届いた。玄庁舎玄関前で曾左小のクラスの者七人が写っている。女三人男四人、この五月六日の連休明けに、アジア博覧物に姫路からバス一台四〇余人が福岡にやって来て、案内する機会があった。七日の夜は新営の志賀島国民休暇村で夕食会をしたのだが、その前に大濠公園、泊っての帰りぎわ新設のマリンワールドに案内した。そうしたシーンの写真が数枚はいつている。彼の便りに田植も終わったと書いてあったので、今日見た句誌に

田水張り鏡のごとき千枚田

というのが重なり合った。この頃は機械植だから一気に「鏡のごとき」植田が出現するのであろう。苗も若い頃のと違って今は丈が短く、水の面から一寸しか出ていないのが普通であるから昔とは趣が違うが、肌で同様の風景を感じることができる。この真実にある同窓生はみな七〇歳に近いわけだ。梅雨の中傘や泥を相手に登校下校したことも思い出すことができる。

6月27日（火）

難読きわまる句誌（上）

県議会期間のなかなか句誌を脇においての日々である。でも、わからんわからん。五句に一句は知らん字句が使ってあることに気付く。勉強してなかったといえればそれまでだが、句界がこれほどややこしい文字づかいをするとは想像外である。前に、投句者には女性が、多いと書いたが、どうしてどうしてこのがんばりには驚かされる。時間をかけて書斎で夜の時間を利用して辞典をひくのだが、半分近くはそれでもわからない。強いてこの難解な字を使おうとしているのか。句界の常識がそれなのかは判じられないが、どうもこれでは同好者仲間だけの共有財産になってしまう感じだ。近づき難いと思う。かなをうってくれておれば救われると思うのだが、よみかなは禁物なのかどれもうってない。これでは入門者も骨が折れようし、今時の若者には近づき難い。門をとぎすつもりはないのだから、現今風に改めた方が長つづきするのではなかろうか。

6月28日(水)

難解きわまる句誌(下)

昨日のつづきで、出てくるのをランダムに並べてみると、——椽、檜、蠶、柎、蠶、蝌蚪、榎、懶、檣、鱗玫瑰、魂魄、凌霄花、葭切、燻、鷓、四葩、著莪、蚎、潦、茱萸、溽暑、木天蓼、鴟、鰓、迦陵頻迦、蝸、漣、嶋、——まだまだいくらでも——知らなすぎるようだ。講談社の草木花歳時記四季花ごよみ(夏)をていねいに見ると、この中で、姿、形がわかるのもあって、これなのかと合点できるものあり。又辞典で解明できるものもあるのだが、わからんわからんが先立つ。句歴の長い人がだんだん身につけ、与えられ、次にひとに与えるようになるように思える。カナをつけないのは方言や幼児語に左右されて客観性が薄れるからであろうか。それにしてもやっぱりカナで書くか、カナづけして、自分はこう発音すると披露した方がいいのではないだろうか。もう少し読解の労をつづけてみよう。

6月29日(木)

日本の国家統一と仏教のことを考えてみる

昨日議会が終ってからレストラン・キングで文化議員連の発足式があった時、九歴の田村館長の講話があった。三〇分足らず、彼は仏教の専門家で、七五二年東大寺大仏開眼を中心としての話だった。何かのヒントで国家権力と仏教のことが私の頭に湧いてきた。百科事典で仏教をひき、その「公伝」が五三八年(宣化天皇三年)、百濟から経典とともに、とあるのがわかった。その後の五〇年余、五九四年に仏教興隆の詔(聖徳太子)が出され、東大寺は、だからその後一五〇年以上のちである。仏教をめぐって物部と蘇我が鋭く対立、後者が勝ち、仏教は国家統一の柱となり、東大寺に至って頂点に。しかし国民を疲弊させ、国家との切断をはかるため京都への遷都となった。こうしてみると、日本では古代国家統一と仏教とが強く結びついていたことがわかる。なぜだろう?というのが今日のヒント。

アスカ奈良の時代にも、国家的統一の手段が乏しかったので、宗教を用いた（信仰による統一）。宗教に統一力を求めた、という解釈である。つまり未熟国家なのだ。

【欄外記入】

文字なしに、口伝であったものを渡来人が文書に表現化するとき、神武天皇というふうにすぐあてはめたのであろうか。日本書紀の成立についてはもっともっと解明すべき疑点が残っているようにおもえる。まちがいでないと思われるは応神、仁徳の頃からで、信用できるのは欽明のころからといわれそれ以前は推測や故意の作が多いといわれるのが日本書紀である。

6月30日（金）

日本統一期の仏教と文字

昨日の百科事典では仏教は「公伝」の前、すでに六世紀はじめは大陸文化の輸入に随伴して、主として帰化人子孫の間で相当広く伝播されていたのではないかとの推測をしている。「公伝」が教典と共に現われるように、教義は単なる抽象的なものでなく、私のいう「文字」との関係、文字の形でも入ったはずである。経典が入って来た事自体、文字への地ならしがあつたはずである。口伝一写経いずれにせよ教義の媒体は漢訳文教書であろう。漢字は応神天皇八五年王仁が論語、その直前百済王からの阿直岐が千字文としてもち込んだといわれている。これはむしろ儒学に関連するものようだ。倭の卑弥呼魏に使者をおくるといのが二三年。これは何天皇の時とは明らかでない。が、その時の様子からは儒教関係の何らかの文字が伝来しただろう。だが、これは国家統一の用には役立ち得なかったのかも知れない。六世紀になって文字、仏典が国家意思浸透の用具として働くようになったといえるのだろうか。

7月要記

下旬になって国際青年の村で皇太子、自然公園大会で常陸宮夫妻を福岡に迎える。いわば一つのビッグイベント、消化する側は事務的にも警備の面でも大変だ。うまくいって当り前、失敗すれば大変マイナスということになる。責任ということに関連する。大学時代は七月になるとすぐ夏休み気分にあつたことができたのに、県庁に身をおくと議会だの対政府陳情だの、息抜くひまもない世界の人になる。抜け出すか作りかえるか、どちらも出来ない、流されるほかはない。主体的に取り組む姿勢をとるなら自業自得というほかはない。体調が思わしくないので、どうにかしたいと思うが、病院ではゆったり休むほかないといわれる。休むるかといえば、そうはいかない。薬にたよりながら体を酷使することになってしまう。体を酷使しながらも運動不足である。この夏の入りで老化が一段ひどくなったように感ずる。もみくちゃんだから。参院選で政治情勢に新段階がくると面白い。そろそろ時代の変り目が見えてよさそうな気がする。景気はよすぎるし、日本は平和すぎ

る。

7月1日（土）

昨日で文教委のもつれはケリがついた

昨日は三時すぎ、文教委での知事釈明でケリがついた。一昨日の井出宗夫、大石正紀の二人の質問に対する答弁を全面的に取消すということで、加えて、高教組大会という場でのあのような県教委批判は場所柄不適という内容の釈明で、私の発言はすり合わせどおりでケリなのであった。この二人は高教組大会での発言まで取り消せという無茶なことを求めていたらしいが、不可能ということでことわった。「教育行政は他県にくらべおけている」「知事部局と教育委員会との間の風通しが悪い」「国体や国立博物館誘致について意思疎通が悪い」「点字受験や教員採用の国籍条項固執には問題が指摘されている」等々の部分について、悪いのは知事の方だし、問題があるというのは教育の中立性を侵し介入に当たると二人はいう。とくに井出が執拗である。程度の低い県議がいるので困るが、あっさり引き下ったわけだ。

7月2日（日）

紫陽花の句（上）

紫陽花の句（昭和六十二年万燈九月号より）

紫陽花のはじめての色の藍ぼかし	大久保橙青
決めかねている紫陽花の次の色	中野 孤城
紫陽花の彩より溢れ雨雫	秦 洋子
明日の彩秘め紫陽花の今日真白	岸川鼓虫子
紫陽花やまだ降り足りぬ雲の色	宮原 指月
紫陽花の濃きが哀しき遊女の忌	立石 月子
善女らの献華は紫陽花遊女の忌	〃
紫陽花は雨に合う花今日も降る	三好 二郎
終生を真白に終る紫陽花も	出田ミドリ
紫陽花の雨待つ心ある如く	三島かず枝
白深き紫陽花にある未知の彩	三角リクヨ
紫陽花の十軒十色今日の色	安山ハルコ
幾度の色重ねゆく濃紫陽花	木下スマ子
紫陽花の毬をつきつき蝶わたる	小島 隆保

7月3日（月）

紫陽花の句（下）

あじさいを詠む句（昭和六十三年万燈九月号より）

紫陽花を藍に染め変え雨上る	岸川鼓虫子
水音に溶けこみさうな濃紫陽花	山本とし子
船路に水漬きて額も濃紫陽花も	日野六丘子
この次は何色ならん濃紫陽花	山田千恵女
紫陽花は雨を呼ぶかに今日も降る	市橋 山斗
溢れ咲く紫陽花の色地の面に	〃
紫陽花の雨に追慕の香を焚く	足立 津遊
雪洞の影を落して濃紫陽花	安田 房江
紫陽花の彩は白より始まりぬ	西川 きせ
濃紫陽花寺領はみ出しをりにけり	川上 訓子
紫陽花も佳き隣人も引き継ぎぬ	伊佐 利子
紫陽花や塞いでしまふ勝手口	稲榊千代子
紫陽花の色まだ浅き梅雨に入る	江島 春亭

7月4日（火）

新しい区切りに向って

梅雨らしい空模様がつづいている。雲は低くたれこめ、降らぬではないが、降るでもない。土は水を一ぱいふくんでいるし、青葉もぬれている。淡竹が勢いよくぐんぐん丈をのばしている。鉢ものの手入れをしたいが、外の露地においている鉢の土はべとべとして作業に適しない。でも時間があると、つい作業したくなる。しなければならぬ外仕事は一ぱいある。月下美人の蕾が少しづつふくらんで来た。梅雨寒しという言葉があるように昨日今日ステテコだけでは足りないし靴下も必要な感じ。山笠シーズンに入り、アジア博との連動で街もだんだん動きを増している。しめった、しまった空気よりも、上ついた、開放性のある生活の方が世の中はうまく廻るような気がする。その点博多っ子は似合っている。議会も今日で終わった。山笠か参院選か、みんなそれぞれにあわただしく散ってゆく。

7月5日（水）

参院選の中農政混迷深まる

今日から参院選本番に入り街も騒々しくなってきた。二日の都議選で自民激減、社会躍進という結果が来る二十三日参院投票にどう影響するかが衆目の集るところ。又、都議には社会を先頭に女性議員が急増したのも特徴の一つ。消費税、リクルート、農政、それに宇野首相の女性問題、この四点がアピールの柱である。今日の新聞では「米価すえおき」の決定が伝えられ、見え見えの選挙対策と評され、自民政府の農政混迷ぶりが痛評されている。米価はアメリカの二・六倍だといわれる。円高の今日であり、一昔前ならこうした価

格差は誰もいかなかったのに、先行きの暗い農民こそ気の毒である。どうしろというのかといってもどの党も「それ」と賛成できる案を提示しえない。他の三点は心得一つ正せばいいが、農業問題は確かにさきが暗い。見えないのである。米価引き下げが予想されていたのに選挙目あてに「すえおき」に決定を見たのだが、政策回避と発表したにひとしい。誰が答えるのか。

7月6日(木)

訪問視察

八幡の地方行政連絡会議に出席するついでに、玄海町役場、栽培漁業センター、遠賀病院の三ヶ所を連続視察した。思った通り、どこも歓迎してくれた。玄海町では待ち構えていたように町長、助役、議長らが何項目かの対県要望をし、庁内の職員を集めて挨拶を、とまでいわれた。はじめて訪ねるこの役場、やはり高速道ばかり通って北九州に行くのではなくて、できるだけ途中の要所には立ち寄るべきだとの印象を強くした。一時間半ほど余分の時間を使うと、こうして三箇所も立寄って歓迎してもらえるのである。平素は時間の節約ばかりを考えて、高速で北九州市を訪ねるのだが、今日のような視察訪問は有効な行動であるといえる。相手はびっくりもするが、よろこびもする。何か一つ荷がおきたように相互に思うのである。要望事項なくとも訪ねるだけで相互に気持が通うのである。もちろん同じ所に何回もというは無駄であり意味はないであろう。

7月7日(金)

健康保持に努力

大塚副知事の三役与党幹部の送別会が「かわさき」で行われた。女の話はチラッとでたが、多くは日常の健康維持法実行模様、服用漢方薬、酒煙草の有害性、さらには墓所購入など、妙な方向へと進んだ。話題を盛り上げていたのは二人の社会党県議助信、林であった。まさかこんな席での話題が、この種のものになるうとは想像外であった。それにしても政治家というのか、この種の人達が健康に一層の努力を重ねているには改めて感服させられた。適度の運動とは言うは易く行うは難い。漢方薬を自分で処分服用しつづけるのも大変な努力根気が必要と思うが、これをやっている。林副知事、池田出納長は酒煙草やめなさいよとひやかされていた。議員二人とくらべると、この二人は不摂生といわれても仕方がない。私にもいい注意だった。

7月8日(土)

農相の女性蔑視発言は波紋を大きくする

堀之内農相(宮崎県都城市長歴あり)の女性蔑視発言が夕刊に報道された。昨夜三重県東員町での参院選運動の時らしい。参院新潟補選や東京都議選で社会党女性の進出があった

ことにふれ「女性は政治の世界では使い物にならない」とか「土井社会党委員長は独身で子供もなく、首相は勤まらない」といい、北条時子や淀君を例に「女性が天下を取ると国は滅びる」といったという。自民党逆風の中の参院選でこれをやったのだから、かなりな反響を呼ぶだろう。宇野首相のスキャンダルに加えてこれだから消費税問題に重なりあって、あと二週間余の参院選では女性票を追いやることになるに違いない。「もう、怒るよ」ということになる。コメ問題にしても当面する重要課題だが、農業の担い手は六割が女性なのである。自民党はますます窮地に立たされたようだ。カネのいる選挙に他党にはカネがない。自民党の強味、他党の弱味がここにある。

7月9日（日）

大塚副知事辞任挨拶に来宅

大塚副知事が昨日任期満了、今日夫妻で拙宅に挨拶にみえた。頭の回転が早い人で能吏に属すると思う。しきたりはどうなっているか知らないが、留任説はなかった。私には直に感じなかったが、他の人には比較的やかましい人に思われ留任を欲する者がいないようだった。池田出納長など嫌っていたらしい。問題の指摘はちゃんとするが自分では回答を出さず責任を強く押しつけるとの批判があった。人柄ではなく、仕事遂行の上で、柔軟性がなかったといえるかも知れぬ。人柄は硬い人ではない。自分でこつこつやり他人を思いやり寛大であることを望む人が多いわけだ。千葉県柏市に自宅をもって、自治省が探しにくれた外郭団体に再就職することになるようだが、今私にはどこかわかっていない。

7月10日（月）

六月末文教委での井出、大石発言を忘れぬように自分にいって胸にしまい込む

先週末だったか林副知事が文部省に行って国博誘致で西岡文相に陳情し、学者動員で理くつづけが必要ということをも文相からもいわれたとのことだ。六月末の県議会文教委で、小郡の井出、浮羽の大石両県議が私には詰め寄ったのを又思い出した。とくに大石は私に国博誘致対策本部の運動に知事は水をさしたとなじた。私はその力で文教委で発言を全部取消すことになったのだが、この二人には改めてウラミをもち、忘れぬものだということをここに改めて記録しておこうと思う。察するにこの二人は国博誘致は何故か、何を意図しているかわかってなくせに、単に知事攻撃としてのみあの発言をしたのだろう。彼らのいう国博はたとえば広島県だろうと岐阜県だろうとどこでもいい博物館だろうし、国立でも県立でもいいものであるに違いない。大蔵省の主計の小役人が私たち陳情に対し、県立でいいではないかといったのと同じレベルの考えではないかと思う。

7月11日（火）

国博誘致へのもう一歩（上）

どうも国立博物館誘致運動のことが気になる。昨日も県議井出、大石へのうらみは忘れな
いと書いたが、これは相手にしないとしても、これまで民間サイドでやってきた西日本新
聞が、その態度疑問である。前は坂井氏だったが、近頃は滝口から稲積に代わっているし、
県教委文化課も藤井氏が死んでから二年はたつだろうか、竹井を先頭に私の方へ顔を向け
てないし、西日本新聞も同様である。誘致が実現すると奥田に名をなさしめるというチャ
チな思いがないとはいえない。対策本部など、いつ、誰が言い出して作ったのか私にわか
らないが永倉氏を会長に、県から林副知事を副会長に、他に県議、国会議員などを役員に、
他県の国会議員も動員しているようだが、竹井教育長レベルで作ったらしいのである。活
動経費がどこからどう出てどう使われているかも知らない。知らないのが悪いという者も
いるだろうが、事実知らないのだから仕方がない。どうもチグハグで、どこからどう直せ
ば、私にとって風通しがよくなるかさっぱりわからない。

7月12日(水)

国博誘致へのもう一步(下)

国立博物館誘致には議員族や経済団体や行政マンによる「力」「形式」(運動本部)のほか
に「金屏風」としての理念、理屈づけが全国レベルのものとして必要だというのが私の今
の主張の力点なのである。つい先頭、林副知事ら財界の者と共々西岡文相に陳情して「金
屏風」の必要性を認め合ったらしいが、誰がその中核となって動くか、大蔵省の小役人
でも尤もだといわざるをえないような理くつの絵をかく仕事を誰が中心になってやるか未だ
未だ明らかでない。子供の頃政教一致ということを習ったが、力でねじふせると同時に掌
を合わせて拝礼させないと政治にならないのだ。抑圧されるだけでなく信じ込む手段も必
要だと思う。男の王ばかりが争い合い内乱していた時にマジシャンの卑弥呼が出てきて内
ようやく治まったといわれる。最先端の技術を駆使してできたと思われる刀と鏡と勾玉が
三種の神器といわれるようになったとの神話も故なしとしない。カリスマ性が力に伴わね
ばならぬ。国博誘致には「教」が必要なのだ。県議にわかる筈がない……

7月13日(木)

アロエ服用を考える

糖尿病が気になる。においがするという来客がいるとのこと。水洗便所でない時代は汲取
屋さんがいち早く指摘したらしいが、水洗であっても屋内どこかに気がこもっているらし
い。一寸がっくりするが、どうにも仕様がな。アロエが何にでもきくというので、その
服用も一法かと考え試みることにし、先ずはその繁殖をとって、東京から帰宅するや、
夕方その用意として株分けの準備をした。根気がつづくかどうか自己をためしてみるほか
ないし、繁殖も先行させねばならない。アロエに関する本がうちに既買ってあったとい
うので引き出してみると昭和五七年に出た同種のもので二冊もあった。随行の橋本氏が買

い与えてくれたのを機中で読んでのことだったのだが、七年も前にもっていたのをすっかり忘れていたのである。体力が弱っているのは確かだし困ったものだが、関連の他の自覚症状は感じられない。血糖値は高く医師は疲れないように、食を減ずるようという。その方向で努力はしているつもり。体重もひところ五三 kg あったのが今は 51kg を切りそうだ。減食のせいもあるだろう。食欲はあるのに……

7月14日（金）

総合的にとらえるべき高齢化問題

地方行政連絡会議で筑後農林事務所に行く。ここでも、企画の方では、地域づくりと高齢化を報告テーマにしていた。前例と同じである。高齢化については南筑福祉事務所長が報告した。高齢化といえば福祉であり、福祉といえば老人ホーム、ねたきり老人、愛の一声運動、介護・ホームヘルパー等々相場がきまっている。もちろんまだまだこの方面の努力は致さなければならないが、高齢化問題を教育、労働、生産、地域おこし等々との関連で論じ実践するとの感覚、とらえ方に乏しいことを痛感した。行政マンだからタテ割りです事を捉えることにならされているのは確かだが、高齢化問題を福祉の面からのみ提起するのはよくない。情報化も国際化も同じである。連絡会議なんだからヨコに拓げてみる試みをしてはどうかと思う。つまり全側面からみる必要がある。青少年教育やスポーツ、文化活動、農業生産等々の面からも、そして新規な側面からも捉えられる。溝掃除もと私はいっておいた。

7月15日（土）

追山笠成功

焼けつくような夏日二日つづき、今日はとくに蒸し暑かった。山笠は最終の追山笠、アジア博とのつながりもよく、山見物の人出も多かったようだ。満足のいくものであったに違いない。俳誌に小島隆保氏が詠んでいる昨年以前の分。

夕映えの金銀青丹飾山笠

雨しぶき天に返して山笠を昇く

山笠走り博多街並み後じさり

異国人日本の神の山笠を昇く

御宝前山笠の修羅場となりにけり

山笠果てし博多の街のがらんど

博多人山笠に育ちて山笠に老い

昨年私をはじめて櫛田神社の舞台に行った。今年も案内されたのだが、無理があってもいけないと思って断念した。

7月16日（日）

山笠の句つづく

山笠についてほかの人の句を拾ってみよう

追山笠力斜めに昇き出しぬ	秦 洋子
追山笠を見に行く家事の弾み居り	三宅 満子
清浄に徹し博多の山笠動く	井上 千鶴
山笠行事終わりにて寂し女とて	安松 咲子
追山笠や男もっとも美しき刻	中村 六郎
山笠法被鉢巻の子の肩車	鎌田いよ子
飾り山笠軍記は悲しく勇ましき	戸山 博司
帰省子の外出着とし山笠法被	磯部 芥朗
追山笠に門限解かれ博多の子	水上美代子
孫に買うやゝ大きめの山笠法被	磯辺よ志子
嫁ぎたる娘の姑御山笠案内	〃
追山笠に孫の出支度頼もしき	本田 閑秀
雨はれて日天にきらめく飾山笠	長沢テイ子

7月17日（月）

無常・無限の中で

鳥のなき声がかきまって暁に始まる。自然はおそろしい。福井でガケ崩れがありバスに直撃十数人が下敷になって死亡、昨日のことである。日曜行楽も不慮の死が待っている。海岸に出、砂浜に波が打ち寄せている。海の向うの地平線、その先は見定めえない。砂と波のたわむれは永久であり海水のつながりは果てしもない。そのような無常・無限のなかに、自分が今このようにいる。たったそれだけでとくに意味があったり他に力が及ぶようには考えられない。昨日は参院選最後の日曜のためか、街頭宣伝カーがボリュームをあげていた。やっているな、と他人ごとのようにきき取った。関係者たちは真剣だのにとったり、どちらにころんでもとったりである。こまかく考えるときりがない。鳥や海の波に思いをはせているのが一番いいように思う。でも不可避に今日、今週、今月の行事がふりかかってくる身なのである。くよくよ考えないことだ。

7月18日（火）

“赤い大地の会”と人達と能古島で対談

対話事業で夕食をはさんでの能古島だった。いつだったか一度は行った事のある能古だが、全くはじめてと同じ。これからがコスモスの花というアイランドパーク、久保田支配人も気持よく迎えてくれた。ブラジル農業研修生の団体“赤い大地の会”のメンバー四〇人ば

かりとブラジルからの研修生十人が参加、アイランドパークで二泊の集会をしているところへ乗り込んだ形だった。“赤い大地の会、”は昨年はグリーンピア八女に行ったという。彼等は福岡県の農業を支えている若い「後継者」たちで、対話する私も気分が若返った。農業を経営としてとらえ、生産だけでなく流通、投資にも目配りをというのが、今日集った人達の気構えだった。ブラジル研修は12回になるが、毎年三ヵ月、向うで依頼された農業者の中に入り、フロンティア精神を学んできたというのが共通認識である。日本の農業も将来に向けて変革される曲り角に立っているのだが、彼等はそれを十分心得ている。頼もしいと思った。が、当面の日本農業の課題には誰も「正解」をもっていない。弱音をはかずに、とはげましておいた。

7月19日（水）

非核宣言について

物理の森茂康先生らのグループと午前中二時間ほど教養部前の弁護士事務所を借りてこんだんした。非核宣言を県はどうしてしないのかということが話のポイント。原発の問題もあった。県下の多くの市町村が宣言をしているのに、県がやらないのは解せないという。誰しも知事は何しているんだという疑問をもつようだ。私は就任以来、県議会が否決した意見書案をしらべてコピーを用意しておき、その事にふれながら、与野党関係、そして野党の対知事姿勢の特殊性について説明した。59年六月議会でトマホークとSS20についてその反対意見案否決が一つの見本となっていることを指摘した。野党は知事が「革新」性を見せる場面について特に嫌う傾向が強い。この意見書は共、社、公、民四党共同提案ながら、自民と農政の多数で否決している。知事の提案となる状況にないことがわかっている県民はほとんどないのである。

7月20日（木）

鳥のように自由な子供の頃をふと思う

三日前に梅雨が明けたとのこと、カンカン照りがつづいている。外はムンムンし、クーラーのある部屋に入ってホッとす。毎年こんなこと、子供の頃は暑いながら毎日が楽しかった。水を自由に利用した。今は仕事ばかりで楽しみなどない。鳥のようにという言葉があるが子供の頃は貧しかったのに、ほんとうに自由だったと思う。空腹だったのに楽しかった。改めてしあわせとは何だろうかと思ってみる。今の子には川も海も限られた場所で有料。土用ウナギという言葉はあったし、ウナギを取る楽しみを覚えていた。見よう見まねで結構用をなした。今年の梅雨は平均の半分ほどしか降らなかったらしいが、子供の頃はよく降ったとの記憶が残っている。干魘もあったはずなのに、降った川や学校との往復に傘をもち、水たまりに足を意識的に入れて遊びながら通った県道のことが印象としては濃い。どんどん水稻が育っている。経済計算なんかしなかった子供の頃、親達は貧乏であ

れこれ案じていただろう。計算のない世界のよさを思う。

7月21日(金)

二つの数値(明るい)

一月十七日のページに済生会病院での検査結果がでていいる。今日のは血糖一三一、尿糖++、GOT 五六、GPT 七〇、これは七月に入ってから一番いい数値だが、一月とくらべると少し悪いかと思う。血糖が二八〇とか尿糖が++++とかのケースが一ヵ月にあっし、GPTが一〇〇をこえた事もあつた。だから、やや小康といえるだろうか、更に自重していかなばならない。もう一つの数値、これは読売新聞の調査で参院選予測のついでに奥田知事支持率も出している。支持五九%、不支持二一%とか。支持は女性より男性の方が高いと出ている。五九%というのは六〇年当時の三七%にくらべ大幅増と報じている。支持層は全県的にひろがっているとのことだが、女性の支持が高いと一般にいわれていることを思うと、意外ともいえる。長崎二区の太田代議士が「農民は労働する以外に能がない」と発言して農民層から酷評されているような空気を反映して奥田支持率上昇となっているともいえよう。

7月22日(土)

新皇太子の行啓を迎えて

今日から三日間、「国際青年の村'89」関係で皇太子の行啓があり、知事として、送迎、相伴もしなければならぬ。神経をとがらせていた警察はこまごま策を練っていて、まずはうまくいくのではないか。新皇太子は沿道で県民の歓迎にすがすがしくこたえておられた。重くする気分なく今回の行事が進むことが確信をもてる。皇太子はまだ独身、ソフト、フレッシュを感じさせ、ノーブルさを加えて好青年といえる。ただ予めうち合わせの細かい行動予定があり、その通りに動くとなると頭に入れておくのが正確でないので、常にカンニングペーパーのようなものを持っているか係にきくかして行動する要があるので面倒。秘書室はあれこれ多忙はしりまわって準備もしたし、よくやってくれた。今日の中食前のご進講は発言にミスがあつたものの一ヵ所にとどまり、うまくいったといつてよい。九歴は田村圓澄館長が説明し、なかなか興味深く九州の果たした古代文明上の役割を理解してもらえたと思う。福岡は二度目ということ。県庁十一階では県産の焼酎に興味をもたれた。

【欄外記入】

(新東宮太夫
 菅野弘夫
 新東宮侍従長
 山下和夫)

7月23日（日）

「国際青年の村」開村式

参院選挙の日、午前中は鴻臚館跡と市美術館、午後は「国際青年の村'89」の開会式が新スタートのホテル日航で行われた。つづいて県主催のレセプション（どちらも都久志の間）、世界22箇国からの来客合わせて約三〇〇人（半数は国外者）。これで五年目になるが、過去四回は東京・大阪で福岡は一地方としてははじめてである。一週間の日程で青年たちの交流が行われる。総務庁と青少年育成国民会議と県が主催、社会主義圏からはポーランドが初参加だという。戦後独立の国で私の知らぬのもかなりあった、はずかしいことだが。レセプションの時皇太子が終始外国の青年一人一人と短い対話をされたのが印象的であった。ロンドン生活で英語は自由だから、対話は列をなしての所望への対応。国際平和、友好交流に大きな役割が果たされていることを痛感した。反核も軍備反対も結構だが、こうしたことも平和維持友好推進の確たる力になっていくことを見落してはなるまい。ここに「平和」を見た思いである。

7月24日（月）

行く手は雲けわし。

参院選の結果が最大の話題。朝刊は与野党初逆転を報じ、夕刊は宇野首相退陣表明を報じた。選挙区、比例区の合計で自民36、社会46、公明10、共産5、民社3、そして新たに出た連合が11、無所属10その他諸派で計125、スポーツ平和党一人が最終的に決まって合計126人であった。自民と社会との得票率は選挙区で30%と26%、比例区で27%と35%、となっている。社会党は議席も得票も倍増している。公、共、民の三党はむしろ微減している。比例区では三党とも二%ずつ減っている。公、共、民は自民の減少にもかかわらず、自分たちの力が伸びないので、少々スネている。昨夜は福岡地方区で当選した公明党選挙本部に十時すぎ祝意をのべに行ったが、吉永県議が私に消費税関係で大変失礼ないやごとをわめき立てた例がある。もちろん自民も私にはヒネた態度をとった。合馬の当選祝いに行ったとき、山崎拓代議士はソッポ向いたので、それ以上である。カドを立てる態度を捨てようとはしないわけだ。今後何ヵ月か政局は激動するが、依然全体はドロンドロンとしている。

7月25日（火）

吾を失っていくように思える

今日から三日間常陸宮ご夫妻の来福につきあうことになる。迎えたり送ったり、明日の自然公園大会が主目的。私には皇室の知識がほとんどない。関心が薄いのだろうか。今日空港出迎えて、ああこの方だったと思い出した。先方がかえって私を覚えておられるのでおそれいる。花や鳥、木の名をはじめ、ひとの名前も実に忘れっぽくなっている。脳の働き

が悪いというか、細胞のどこかが欠落していくように思える。昨日日赤今津病院へ皇太子随伴で行き、痴呆性病について話をきいた。頭のCT読影室にも入って話をきいた。自分にもあてはまるかも知れないとすら思った。今日一日のことが思い出せないことがしばしばある。文字を思出せないで、字典をひくこともまれではない。自分の行動がおかしいなら誰かが注意してくれるだろうが、今のところそれはない。しかし自信をもって絶対ないとはいえない。自然にこの世から消え失せるなら幸せだのと思うことがある。医師にかかりたくないと思いつつ実はかかっているのが誰しも現実。

7月26日（水）

自然公園大会営火

自然公園大会（第31回）の行事の一環に営火祭がある。午後七時半から国民休暇村の一部外園オープンスペースで行われた。日が暮れかかりやがて暗くなる。常陸宮席が特設され、「火の神」「火の子」、そして知事も点火行事に加わる。あかあかと火柱が夜空を焦がし、いろいろの行事が展開される。暗くないとさまにならない、公式厳粛な行事に仕上げられている。この大会のスローガンは「人が好き、自然が好き、ふるさとが好き」というで、その心をこめて全国から集まった三千人の人々が、この火祭を、みんなで取り巻く形で進めていった。自然を守ろうとの気持が「火」の形をとって島の一点に凝集された瞬間であったのだが、この感激はみんなで分け合ってそれぞれに持ち帰るであろうが、実は自然を傷つけているのは他ならぬわれわれ人間であることを、私はしみじみ感じた。地元の勝馬小の子供達も演技に精一ぱい協力した。「我は海の子」をうたったが、その雰囲気、この四〇年足らずの年月でこわしてしまったわれわれなのである。

7月27日（木）

大濠公園池の浄化工事は未完了

常陸宮と日航ホテルでお別れして大濠観光会館に行ってお中食した。二時半から小島慶三氏（日本立地センター理事長）、三井孝昭（ハイテック）の両氏と鼎談（FBS 放送録画）＝ふるさと創生事業—のためこの会館を使わせてもらうことになっている。会場は大濠公園南の武道館などが背景になる。時間のゆとりがあったので、公園事務所に寄り、池水浄化について説明を求めた。三月中旬浄化工事が一年かかって完了オープンして、内外の人々によるこんでもらっている大濠ではあるが、水量が七割程度、又池水及び新設のせせらぎに早くも、水藻がたくさん生えているので気になったからである。実は今公園事務所横の池水浄化還流装置の工事が未竣工のため、との説明があった。還流装置も県民市民には見えないながらかなり大規模工事のようだ。アジア博開幕に辛うじて間に合うようへドロ固化埋去池水復元オープンしたものの、大工事は今なお進められている最中。六〇年ぶりの大浄化工事は全国的視線が向けられているわけ。

7月28日（金）

パヨン氏の逝去

パヨン・シュティクルさんが死亡との連絡を秘書室が名誉領事の中牟田さんから受けたということであった。随行の橋本氏に帰宅の時、この人よと額入りの写真を見せたのであった。彼の奥さんから昨日中牟田さんに電話があり、中楯氏にも伝えてくれということだったそうだ。アジア博に呼ぼうかとの話が私の周辺、彼の関係者のあいだで起きたこともあったが、連絡をとってみると病気とのことで思いとどまったとか。土屋呂武（前済生会福岡病院長）氏の話だったと記憶する。東中州の土屋外科（呂武さんの父）の二階にパヨンが下宿していて私が訪ねたこともあった。九大生時代、もう四十六年も昔のこと。パヨン氏は外交官として活躍、駐日大使を最後に引退した。奥さん同伴で拙宅に別れに来た時、勲一等をもらったと、私に披露してくれた。七年ほど前のことだったろうか。私も在任中に東京のタイ国大使館を訪ねたことを思い出す。詳細は知らぬが、まさか老衰ではなからう。私より二歳上と思う。思い出の多い人であった。冥福を祈る。

【「“さえわたる、全方位外交”（『毎日新聞』1989年7月28日）のコピー挟み込み】

7月29日（土）

猛夏雨後の午前

夜の稼働ということでひるま在宅、おそい朝食後横になって目をつむっていると、植木鉢の音がさかんにきこえる。さらに耳をすませると、数種の小鳥の声、蝉しぐれ、虫すだき、隣家でのピアノ、下のマンション裏の車操作の音、低くとぶ特殊飛行機などいろんな音がきこえる。あるいは境界が静かな証拠で、それらが一しょくたになると、「騒音」となってしまうのであろう。配達人の掛け声、犬のなき声もある。今日は子供の声、物売りの呼び声は今のところない。又古紙回収車のマイクもきこえない。ともかく静かといえる。台風のと湿度はかなり高く、曇り、今年はジュータンを敷いたままの形で夏をこすことになろうが、何かカビくさい。衛生上どう問題になるだろうか心配だが、手を施す面倒にも立ち向う気力がない。外に出ると蚊の猛襲をうける。線香をたきながらでも周辺の手入れをしたいが、むしろ疲れをいとうのが先んじる。夏は健康保持に重点をおくのが当然だろう。虫どもの跳梁を許すしかない。

7月30日（日）

理解してもらいにくい県政のスタンス

昨日は糸島の活動家団体の要請で文化会館（前原）で一時間も卓話した。「革新」という立場からみて、知事に期待するところと現実のギャップ、県政推進の基本とその方法についてのべ、あとでいくつかの質問に答えた。中村県議も臨席、三嶋町長は最後までいてくれた。県民党（基本的スタンス）、技術立県と国際化・高齢化・三悪追放など県政方針、これ

を推進するに当たっての県民総立ち(方法論)について語った。一時間はすぐたってしまう。ハワイ州上院議長室でみた壁のプレートを思い出しながら、民主主義とはどういうものであるかについて言及した。同一主義と同一結論とは違うということを説明し、私は知事という立場で同じ結論に達する手順、問題提起に神経を使っている旨のべた。主義をかえたことはないが、問題提起と結論に至る手順について外部の人に誤解を生みそうだということを意識してきたからである。時間として五〇分しか質問をうけられなかったので、質問は別の方向に向けられた。

7月31日(月)

日本の国家以前

東京に来るJASの機内誌に韓国特集があり、示唆に富んだ部分があった。随行の葉玉君にそれを指摘し平素からの自説を語っていたらアッという間に羽田に着いてしまった。「私たちはこれまで、『国家』という近代概念によって古代を見る目を曇らされてきた(戦前の皇国史観などその最たるものだろう)……パスポートとビザがなくてはならない現代人は、どうもこのへんがピンとこない。……日本と朝鮮半島は行き来も自由で同じ言葉話していた時期がある。渡来人がそのことを証明している。彼らは外国である日本に移住してきたわけではない。海一つ隔てた新しい土地として日本にやって来たのだ。……」サンケイ新聞ソウル支局長黒田勝弘『古代の王都を訪ねる』ARCAS 一九八九年八月号二一ページ。ずばり問題点を衝いている。同感だが、こううまく表現した文に接したのははじめてである。近頃私は文学、宗教、武力、国家統一の関連について、あれこれ考え、ひとにも考えの一端を披露してみることにしている。国家以前を考えねばならぬ。

8月要記

戦時資料の収集二年目だが、過去一年のものをももちパレスで一般展示を八月一日から十日まで行う。二五〇〇点ほど届けられたもののうち一〇〇〇点ほどの展示、中に私の名義の軍用毛布がある。運搬業者が業務中発見して県庁に知らせてくれたのが二年ほど前、大濠公園池の浄化工事のなかで池泥の中から米軍の焼夷爆弾の殻も持ち込まれている。八月は原爆忌など平和月間だ。靖国参拝で閣僚が動くのを新聞は書きたてる。十五日の戦没者慰霊祭もある。靖国もこの慰霊祭も軍人だけのもののように思っている人がまだ少ない。従軍看護婦は靖国の同僚の犠牲者がまつられず、恩給にも差別があることを問題にしている。非核宣言都市がふえるにつれ、福岡県はなぜ宣言に至らぬか、私を責める人がある。平和をめぐる思惑はこもごも。広島、長崎の原爆忌では原子力発電に反対する集団も動いている。平和への関心は拡散するばかり。

8月1日（火）

目の前のプラスのみを追求するな

早朝までの豪雨で川崎市でガケ崩れがあり、家族三人救出のためにつけつけた消防署員三人が死亡した。二度崩壊がおこったわけだ。東京都でも都心その他で浸水四千戸と報じられている。福岡は曇りらしいが、台風12号が関東一円を荒らしたわけだ。終日雨だった。ガケ崩れは乱開発で山地を無理に開発していたものとみえる。土木事業一般にもそうした傾向があって自然が怒り出した時のおそろしさがまだ十分認識していないのが人間だといえる。浸水というの、降雨が一度に下水に集中して流れ込み、極所的に噴水のようにふき出ることらしい。コンクリートやアスファルトで塗りつぶし、降雨が山地、平地に吸い込まれないようになっていて、側溝を走り流れ、つまって噴き出す。山の急斜面の開発は、いずれは崩壊になることを予知して対策をしてあるべきなのだ。人間はプラスばかりを考え、マイナスには無関心である。行政も亦同じ。

8月2日（水）

日朝関係史とはいえない古代の交流

「稲作や銅・鉄の金属、漢字や仏教などのさまざまな文化、技術は新天地を求めた彼らの移住によって日本列島にもたらされた。日本からも先進文化や技術を吸収しようと海を越えていった人たちがいたかも知れない。八世紀から九世紀にかけての遣隋使や遣唐使よりはるか以前、国という枠組みがまだなかったころ、こうした行き来が活発だったのは不思議なことではない。」「作家金達寿氏は『双方が好むと好まざるとにかかわらず、日本古代史とは古代朝鮮との関係史である。』と書いている。氏の労作「日本の中の朝鮮文化」（講談社）を見ても、また日本書紀に登場するおびただしい数の高句麗、百濟、新羅に関する記述からしても、その間柄は「関係史、以上のものであったことが十分にうかがえる」。なぜ関係史ではないのか。それは双方に、又は日本の側に個、独自のなかったからである。むしろ交流というか、「関連」の連続であったであろう。皇国史観がこびりついている日本の今の指導層には思いも及ばぬ黒田勝弘氏の指摘ではないだろうか。

8月3日（木）

平和資料展示をみて

八月一日から十日まで県の「ももちパレス」で平和資料展が開かれている。小学生の平和教育にも役立つから毎年開いてほしいとの声があるらしい。九時半から三〇分ほど一巡した。日の丸寄せ書き、軍隊手帳、捕虜の認識票、千人針、憲兵腕章、飯盒、ゲートル、軍服その他被服、軍票、鉄カブト等々。最近大濠公園池浄化工事で発見された焼夷弾の殻、防空頭巾などなど、あれやこれや貴重なものが少なくなかった。県民個人として同じく蒐集家として知られている大刀洗町の荊上、穂波町の武富さんの両氏にも応接室で面談する

ことができた。昨年から一年かかって約二五〇〇点が寄託されたものの中から二千点ほど展示したとのことだが、この展示会を機に、年輩の人達からの寄託はこれからもふえるであろう。資料館を作らざるをえなくなるかもと思う。われわれ同年輩の者は思い出深く、メモリアルとして捨てえないでいるが、世代がうつると見向きもされず、棄却されるのが知れている。だから蒐集を行政責任と感じて始めた事だったのである。

8月4日(金)

「心のおしゃれ」西瓜

「心におしゃれをしてみませんか」「無邪気な表情を心がけてみましょう」・・・武田鉄矢氏の本をよんでいて、こういう部分にくっと引きつけられた。女のおしゃれ、男のおしゃれ、地域のおしゃれ、街のおしゃれをこの頃いう私だが、心のおしゃれとはおそれ入った。今後の考え方にこれを追加したいと思う。——今日は西瓜に恵まれた。北九州市から帰ってきたら筑後から福岡農林に移ってきた奥森氏が黄西瓜をもって来てくれたということで秘書室一同わけていただいた。ミルクがかかっているような味。夜、山ノ上ホテルでの宴席から帰ったらうちでも誰かからもらったとのこと満腹するほどの西瓜を食べることとなった。そういえば子供の頃を思い出す。今が西瓜のさかりで、八月七日の七夕まつりにはつきもの。十五日のお盆の頃までで終る夏の風物。七夕の頃は川での泳ぎも、そろそろ終りに近づく。七夕笹を川に流し、それにひっかかって泳げなくなる頃は泳ぎもそろそろ関心が薄くなっていったものだ。

8月5日(土)

子育てについて

ひる前武田鉄矢氏と一時間対談した。場所はアジア博のリゾートシアターの向うの浜に出張った所のショップ。子育て問題が話題。彼も十二歳と九歳の娘があるという。一彦より一寸おそいが、似ている。話してみるとなかなかの才人であることが如実に出ていた。育ちも苦労したようだ。父が呑んべえで今年は七回忌、母がしっかり者で、近頃はあちこち講演会に出まわる程の活動家になっている。母子共に根性者。ひとは環境の動物であると同時に自分で根性をもたねばならぬ。私は子の問題は先生にもあるが、主として父母兄弟など家庭の状況にあると思う。子供は七褒め三叱る程で、なるべく特徴を引き出すように先生も親も心懸けねばならぬし、親が自分の子だけでなく近所の子にもいい目で見えてやるようになれば、立派な子が育つというのが結論だった。

8月6日(日)

暴走族のこと

暴走族で夜もねむれず、ために対抗の拳に出て問題になった人がいるし、夜間交通禁止の

措置をとる市がある。県警は暴走族対策を重点課題にし、特殊カメラでとらえ、事後処理できるよう努力している。どこもここも全国的に大きな問題になっている。二〇歳前後の者が（男だけでなく女も）グループとなり、あるいは単独ゲリラ的に自己満足にはしる結果である。彼らは単に自己満足するのではなくて、他人が迷惑に思うことを以て満足とするのだからひどいもんだ。ひとが見ているから、嫌がるから、困るから、だから快哉と思うのである。スピードを楽しむというだけなら、その場を与えても…といえるが、他人に迷惑をかけないと面白くないというのだから厄介だ。問題になりはじめて既に数年が過ぎた。有効な対策はまだ見つかっていない。「落ちこぼれ」「無職少年」がその主体といわれるが、これ亦地域や家族や学校が、そういう徒を排出したのである。直接法だけではいけないだろう。

8月7日（月）

四野党の結束は困難

夕方から西中洲小林で電気労連の堅山利文連合会長を囲む夕食会を行った。県主催の講演会に来福の彼であった。連合関係で九電の鷺津、新日鉄の江藤、安川の某委員長も出席した。堅山氏は上機嫌で吹きまくっていた。明日は四野党の党首と「連合」の立場で個別に会談するという。七月下旬の参院選で社会党は第一党になったものの、政権への準備がないということが今一番問題になっている。社会党内の意欲の統一はおろか、四野党の足並みが揃っていない。それぞれが我を主張している。堅山氏は「何だこれは」とまくし立てていた。社会党は自民党のミスで議席を伸ばしたにすぎず、公、民、共は低迷しつつ我が強すぎて大同団結の姿勢はほとんどない。連合の立場からは小我をすてて野党結束して政権担当の意欲を示し、能力を鍛えてほしいわけだ。自民党は野党にやらせてみて無能をさらけ出し、徹底的に叩き、国民の信はやはり自民党以外にないと実証してみたいと手ぐすねひいて待っているという。

8月8日（火）

夕刻の撒水

早寝早起が原則なのにその反対になってしまう。昨日は立秋、早朝は気持ちいいし、多くの仕事をその時間を使えばいいのに、出発時刻にあわせて起きる習慣になっていて、九時発なら八時起床という具合だし、夜は十一時をすぎてしまう。薄物を腹の上におくだけでは足先が寒いほどに暑気も変わっていつている。庭の花や木には蓑虫やバッタがわがもの顔に食い荒しているが、消毒とか手段を講じないので荒れ放題。草も雑草だけは健全に伸びるが、これは今夏はかなり注意して除き取っている。早朝そういう仕事をこまごまするならいいが、そうしてないのが現実である。早めに帰宅できたので鉢物はもちろん木々に放水した。土にもそうした。水は節約すべきだが、制限にならない限りは使ってよいとの

思いである。かなりの水が使われる。夕方の庭はさすがにしくなる。わが心も水をかぶったようだ。蚊が義務を帯びたように来襲するが、残念ながら叩きつづすしかない。バッタは生かしてやろう。株分けしたアロエは活着したようだ。

8月9日（水）

福岡県の悪い面

県警本部長が来室して当面の諸問題で情報をいれてくれた。暴走族は取締り強化により若干減った。衛生部の永武補佐の収賄は捜査打切りで県職員の波及はない。天神の外国人による宝石店強盗は新しい問題として今後もおこりうるが、今は迷宮入りである。久留米市議二三人の遠藤選挙、議長選出にからむ収賄問題はまた拡大するかも知れぬ。苜田町の土木工事をめぐる贈収賄は上層幹部に波及しないとはいえないが、複雑なルートでからみ合った問題でなかなか解けないでいるといったことである。七月下旬の皇太子、常陸宮の来福警備はまずは順調に推移したとのこと。福岡県は全体としてはよいイメージを与えるが、粗暴運転、麻薬、暴力団、青少年非行などマイナスイメージもあり、鉱害復旧、生活保護など炭鉱問題後遺症での問題の覆在が心配を残していることは確かだろう。よい点を強調し、もう少し長い目で県を見よう。

8月10日（木）

戦争資料展の新しい収穫

一日から「ももちパレス」で行っていた戦時資料公開展示は今日で終わった。毎日三〇〇人ほどの入館者があったという。戦争体験の物証を執念をもって保管してきた人が、たえられなくなって県に寄託したものの約二五〇〇点の中から一〇〇〇点が公示されたのである。中には大濠池浄化工事の昨年池底から出てきた米軍焼夷弾の殻もある。召集令状、戦死公報、軍票、戦時国債、捕虜認識票など、私自身知らないものも少なかった。だからこの資料蒐集は戦争体験「風化」への抵抗の、個人努力に対する公的関与ではあるが、公的関与によって、個人の保管が集合して昇華公的な財になるということもいえる。個人体験を公的体験にする。個物から公物になる。「風化」への抵抗がこのように変質をとげることがわかるのである。個人の願いを集めることが公的責任に転化する。そういう意味のことを、今日、時事通信社の「地方行政」への原稿の中に書き綴ってみた。展示会をやってみての新しい収穫である。

8月11日（金）

夕立ちもこない炎暑

夕立ちの去りて星空美しく 江口さだ

この人は西区拾六町の人。会った事はないが、住所録には記入してある方で今年の暑中見

舞状である。カンカン照りの一日、大濠公園日本庭園で「よかとおふくおか」について「ふるさと創生」関係のKBC録画に五時前後池のそばで腰掛けての鼎談をしたのだが、汗がだらだら流れた。七月の暑さよりも八月、それも立秋入り後のこの頃がとくに暑いのはどうしたことか。並木類はあえぎあえぎ、低いツツジ類は枯れたのも少なくない。鉢植えには撒水がかかせられない。コンクリートやアスファルトで道が固められていることに何か地下変化がおこりそうな予感がする。雨水はほとんど直に川や海に流してしまい地中にじんδειそうに思えない。それでは並木もかわいそうだ。庭の植木にすごく蓑虫がついてほとんど葉を食い尽くしている。殺虫剤の撒布とも思うが、私は半ばあきらめ。今夕は藤江氏が来宅撒布してくれたが・・・

8月12日（土）

ごろごろして果てる

老無聊ごろ寝して暑に耐えてをり	岸川鼓虫子
御馳走のつもりたっぷり水を打つ	井上 千鶴
クーラーより明治の媪に窓の風	森本田鶴子
もの言はぬ夫と対座盆淋し	内尾カズエ
除草剤まくこときらひ草を引く	鐘江 艶女

万燈六十三年十月号からこの頃の自分に似た感覚のを抜き書きしてみた。女性ばかりなのが気になるが、女におきかえてみると私は、この連休全くこの通りといえる。雨は全くなく蒸し暑さ極に達した感がある。ごろ寝してみたいが、性格もあろうか、なかなか横にならず、今日は来翰の暑中見舞状にどンドン返書を書いた。何か開拓になるような仕事をしたいとの底意はありながら近頃はその気力が湧いてこない。何とはなくごそごそしながら時間をつぶす。夕方は打水と草引きをする。植木は冬になると少しは植えかえたいと思うが、力量が心配。

8月13日（日）

虫の世界

一昨日鈴虫籠が秘書室からかえって来た。一・五センチほどの大きさが十尾ほど入っている。昨年、今年うちでは孵化後に手当をしそこねて種が絶えていたので久しぶりの鈴虫である。涼しい声で啼きはじめるにはあと何日かかかるが、望みがもてる。ホタルを知事室にもって来てくれた高木（組合幹部）氏のホタル籠の中で孵化したものが、分けてもらったのである。ホタルの後継者ということができよう。以前は二籠、三籠に分けて十一月に入っても啼いたものだ。やかましいほどだったのが思い出される。薬品を使っているせいか、今年はゴキブリがない。三センチ直径ほどの印肉みたいなのを部屋のあちこちに置いているので、それが殺虫に役立っているのであろう。外は今虫の世界。勝手放題に木

の葉を食べている。ほんとうにカネを破るような蟬の声、そこで啼いている。どこからあんな音がでるのか不思議でもある。時にくもの巣とたたかっている。命がけのようだ。

蟬とんで病葉落ちて来たりけり 草花清風子

8月14日（月）

県少年の船帰港式

県少年の船の帰港式24回目というから歴史がある。小学校四～六年の子供達の沖縄往復、船内研修、沖縄現地見学など実り多かったことだろう。南部戦線跡、海洋博あと、それから植物園では珍しい植物、パインアップル園、サトウキビ畑も珍しかろう。水族館グラスボートでの海底及び海魚の生態をまのあたりにして自然の美しさを再発見したに違いない。近頃の子供はファミコンや漫画に熱中する。でない塾がよい。他は学校での勉強。ほとんど横一列の社会か孤独の生活。物の不自由はないが人間や自然のあるがままの姿に接することが少い。ガキ大将がいないといわれて久しい。少産といわれるように、兄弟も少く、上下の秩序をあまり味わわない。タテ社会から教えられることも多いのに、それが乏しい。県少年の船はいささかでも少年の環境にプラスになればと思いを致す。一般論としてタテ環境、自然環境がもっとゆたかになるように努力せねばならない。

8月15日（火）

戦没者追悼式

戦没者追悼式は全国的に十二時を期して黙禱。全国のは日本武道館で六六〇〇人、全国からの遺族や閣僚や各会代表（約一〇〇〇人）がそれに加わった。戦争犠牲者三一〇万人の冥福を祈り平和への誓いを新たにすると発表された。福岡県のは武道館で一二〇〇人と報ぜられている。遺族という名称では軍人戦死者にかかわると意識する人が優勢である。追悼の意も靖国神社に祀られた「英霊」への追悼と理解又はそれを強調する人は依然多い。閣僚で靖国参拝したのが午前中に13人と発表されている。なぜに靖国なのかの説明はない。なぜに戦死軍人の霊だけを追悼するのかの説明はない。軍人と一般国民の両方を併せ「冥福」となっているが、双方が他方を利用し合っているようであり、「軍人」の側が優勢であるように見える。しかし朝鮮人はどうなるのか、戦場化して殺害された他国の人の冥福はどうかなど問題を残したままである。今日は反戦小集会も少くなかった。それでいい。

8月16日（水）

ペルーゆき夫妻同行について

今日からのペルーゆき（日本人移住九〇周年記念式典一二〇日）については私が好んで行こうとしているとの話が流れているやにきいたふしがあったが、それは私が積極的に否ばなかったからである。ブラジル八〇年記念との釣合いを考えての判断だった。もう一つ、

議長夫妻同行と私夫妻同行のアンバランスについてだが、当方は旅費をファーストクラスで自費という点に難色を示し、後退したといういきさつがある。又この暑い夏の日々、ひとにたのんで植木に打水したり、郵便受けを始末するという家事運営方針上の危惧もあった。私もそうまでして行かなくても考えた。三木議長の見る目はどうなのかには懸念は残るが、解消しないわけではなかろうということになった。夫妻出席ということについては、いつもこういう退がり勝ちの態度をとるのが、当方のクセといえるだろう。後に尾を引かなければいいと思う。三役の出張割当てには問題はない。

8月17日（木）

何を基準に考えたらよいかわからぬ別世界

福岡・成田・ロス・リマと飛ぶ。一時間半・十一時間・八時間と飛ぶだけで二〇時間、待合わせを加えるとまる一昼夜となる。そして別世界に来てしまう。昔は四〇日かかったといわれる。時間の短縮で多くの仕事ができるようになるのだが、間有趣という観点からは追いまわされて考案する時間がなくなる面もある。人間がそう進歩するはずはないのだから。はじめて着いたリマは街路が汚いと第一印象。これは観点がちがうのかもしれないと、第一印象を打消す努力はしてみたが、同じ印象が濃くなるばかりであった。そこで私は印象をどう理解するか、なお好意を残した。でもその好意を生かすにはデータが必要なのに次々に見せられるだけで、解釈を新たに加える知識の少なさを感じた。服装も言葉もバラバラ。美観基準も違う。唯一統一とりうるのが金銭。治安の悪いのは聞いていた。耳に飛び込んだのはペルー人が日本に強い批判をもっているとのことであった。

8月18日（金）

稀薄国家

午前中に HOGAR EMMANUEL という児童施設の寄付引渡し式に出席した。捨子を收容する施設、砂漠の中に宮殿が建ったようだ。日墨協会とか聞いたが正確な知識は未だない。日本人が加わって基金を集め寄贈してカトリック教会系の団体に運営をまかせるというものらしい。捨て子がふえているという。だったらこの施設も直ちに満員になろう。施設への往復の道でペルーの社会の荒廃ぶりが強く脳裏にしみ込んだ。建築物は中途半端、しかし土地所有の不可侵は崩れ、道はごみだらけ、舗装はつぎはぎ、でこぼこ。公共事業こそ大事であるのに、水も電気も道路も、恐らく学校もだろう、行政の手が届いていない。だから施設も寄付にたよるしかないのであろう。盗みもテロも多いと聞く。社会秩序がわれわれの尺度で動いていない。私は「稀薄国家」という言葉を脳裏に浮べた。国の権威、負と正との共有事務をなす行政が理想的に働いていない感じなのである。

8月19日（土）

パチャカマ遺跡に立って思う

北米から南米へ地球を縦断するという道を南に走りインカに亡されたというパチャカマ遺跡を見学。プレインカ時代のもの。砂漠の中、ルリン川がオアシスのような緑地を作っていて人気がある。ワリ文化とかきくが何のことかさっぱりわからない。人間は生きるすべての土地を求めて歩いたわけだ。砂漠の中に巨大な石畳、人骨、毛が残るが、気候の変化もあって今の様になったのであろうが、栄えたはずの跡である。日本がいつこのようにならないとの保証はない。地球にきいてみないとわからない。人の争いもそうした中では小さなものでしかないわけだ。地球の歴史にはさからえないということ。水や緑があつてはじめて人間ありということ。その人間がたえず争って来たということ。そんな感動に打たれた次第である。何だ、それくらいの事はわかっていたはずということではあるが、実際に行つて見るのと観念的にそう思っているのとの違いがわかつたのである。エジプトに行つてもそうなんだろうなと思う。

【欄外記入】

Tempo del SoL

太陽神殿

8月20日（日）

日本を誇りに思う

昨日午後八時すぎから中国レストラン LUNG FUNG（龍鳳）で開かれた日系福岡クラブ主催の知事一行歓迎会と今日一時半からユニオン運動場で開かれた日本人ペルー移住九〇周年中央記念式典は今回のペルー訪問の主な行事であった。これを通じて私は意識改革をせまられた。九〇年祭は移民二世、三世が苦心さんたんして開いたという。昨年ブラジルでの八〇年祭の時、九〇年祭はやる人がいないときいたのに、ペルー九〇年祭は二世、三世、極端には日本語日本事情に通じないが事業をしているといつてもよい。ブラジルでは郷土意識が、ペルーではむしろ祖国意識日本系プライドが、そうさせたといえるのではないだろうか。日本が経済大国だという事実がその裏にあると思える。祖国意識と郷土意識の差である。経済力を誇りに思うのと、懐旧の情を燃やすのとの差である。尤もこの差を極論し、きわ立たせてはなるまい。いずれにせよ、九〇年祭は日本の責任を痛感させたといえる。ペルーが窮乏しておればなおさらである。

8月21日（月）

インカの価値尺度

高度三四〇〇メートル、高山病にくれぐれも注意といわれたクスコに来た。休むこと、コカ茶を飲むこと、速歩などしないこと等々注意した。でも頭の、額のまん中が少々重い。

インカ帝国について勉強不足は自覚の上、弁解すれば当面し、経験してから本を読むのも一法であろう。石畳の狭い通りにホテルはあった。水はリマ同様厳に注意した。全くの異郷。石で築いた通りに面した建物は商店であれ住居であれ、今はそれでもその昔はみな大工事の産物で重要な役割を果たしたに違いない。であれば町全体が文化財であるともいえる。当時はすべての価値基準であったのだろう。そこへ黄金略奪のスペインが侵略してきた現在の経済価値基準ですべてを尺度する時代に力で切りかえたのだ。それを包むため、カトリック教会を建てたのがヨーロッパ人だ。大要の神殿は毎日三万人、六～七〇年がかりの石積みだろうという。

【欄外記入】

CSUCO

Libertador Hotel

プカプカラ 関所

サクサ ワマン 太陽の神殿

砦

8月22日（火）

マチュピチュに旅して

クスコには日系人が七〇人いるというのが今回は連絡していない。今日は山上空の要塞たる MACHUPIJCHU 往復の旅だ。二〇〇〇メートルまで下り山上へ四〇〇メートル登るとか。この遺跡はウルバンバ川の深い渓谷の左岸にそそり立つ峰に築かれた都で神殿、エリートコーナー、住居区、段々畑などから成り、泉から水をひき、自給自足できるようになっている。一九一一年アメリカ人ハイラムビンカムによって発見されるまでわからなかった所という。ここもまた石が主たる構造をなしている。自然の石を利用したり、段段に切り刻んだり、積み上げたり、コンドルの石のように彫刻したりで構成されているが、なぜここに、こんな構造を、そしてそれが社会的にどんな役割を果たしたのか、わからないまま、マチュピチュの駅まで下る時ツヅラ折を通るバスに向かって叫ぶ「さよならボーイ」の走り、叫び、駅での物売り女、ひとだかりが現実的に、妙な観光地だなどの印象を残したにすぎない。

8月23日（水）

野球器具の古物を要望される

クスコから民間航空機でリマに着いたのが午前十一時すぎ。リマは相かわらず曇り（クスコは晴れていたのに）今日は帰りの準備にあてられた一日。リマで又買物熱中の人におつき合いした。荷物はだんだんふくらみ別箇のができる。午後五時ホテル（前と同じホテル）で福岡クラブの役員達とのお別れ茶話会が開かれ、あとで、持参の色紙にそれぞれ為書を

してあげた。パーティー時間と為書き四〇分、色紙はやはり有難がってくれるので嬉しい。黒岩会長はこのパーティーには欠席だった。福岡で使い古した野球道具が集められるなら送ってほしいとの要望があった。輸入規制がきびしく、国内生産がないためというのである。ほんとうに気の毒な経済状況である。何とか協力しなければなるまい。ペルーの経済不振の原因、その打解の緒については勉強する価値があると思う。深夜にホテルを立ち、ロスに向けての旅に備える。今夜二時発なのだ。

【欄外記入】

Taucett

リマ⇄クスコ間

航空会社

8月24日(木)

ロスアンゼルスに来て爽快さを覚える

BILTMORE HOTEL

一番貧しい国から一番富んだ国に来たような日であった。午前二時発のリマ空港では席がないで団員みんな乗れない心配すらあったが、ともかく VARIG 機でロスに着いた。すぐ予定の観光をすませようということで用意された大型バスに十人ほど、街並みも海岸も美しい、水も緑も道路も十分に努力されすがすがしい。車、服、商店みんな日本の印象よりすぐれている。もっともロスは新開発、景気よさがあって全米このようなことではないと思うが、海岸のヤシの木で心なごむ。リトル東京で天ぷらソバを食べたが四五ドルといえば日本より安かろう。万事がこれで少し日本は高すぎる。ファーマーズマーケット、ハリウッドにも案内された。休み中でもあるので日本人が多い。私の顔を知ってる北九州からという若者にも逢った。(チャイニーズ劇場前) FREEROAD という片側五車線の自動車道にはおどろき。ホテルは上記。

8月25日(金)

帰国前の買物心理

ロスは二日とも晴で気持がよかった。十時半ホテルのロビーに集合し、いよいよ日本へ。何だか手持ちドルを使ってしまわないととの欲があり、昨日からみやげの買物に気が向いている自分を感じている。ほんとうは大した買物ではないのだが、妙な日本人旅心理だと思う。団員の中には、買いまくる人もいる。いくらもってき来たのか知らないが、どんどん買う。これ又日本人の現時点での一つの姿であろう。あの人この人を念頭においてのみやげ物買いであろうが、ひとによって感覚上、カネの使い方、かなりの差があるのは事実。日本人の弱点をみせているようにも思える。私の場合、自分の身边に貯える気持ちは全くないし、買いまくるような金員ももって来ていないので、控えめにみえるはずである。ま

た、日本でなら買うはずもない品物でも、アメリカでだから買ってみようとか、免税品なら買った方が、という心理も働く。ともかくあれこれ理由薄弱ながら買うわが身がはずかしい。

8月26日（土）

悄然としての帰福

ほんの短い一日。アメリカを出てアラスカを通過して二十六日となり、成田空港から始まって八時半、暗い中を副知事らの出迎えで一日が終るのである。ほんとうに疲れた。どう疲れたか表現できないが、肉体的にというよりは気持の上で、疲れた。いろいろ見たり刺激をうけたりしたが、どう解釈していいかわからないいら立ちも加わっている。たいていの事は自分なりに理屈としても整理できる。それで頭も軽くなるが、ペルーからアメリカのロスを通過して日本へというコースを終えて三国の違いがはっきりしていて、それをどう表現するか、完全に迷ってしまう。とくにペルーとアメリカ、あまりにも対照的な二つの世界を肌感じて、その違いを頭で説明できない。納得できないいら立ちを感じる。日米の差は何とか説明したい、そして自分達の努力目標もそれで定められる。しかしペルーはなぜあんなのか、わからない。肌で感じた通りを理屈にできない、悄然たる自分である。実態を数値でまずは知りたい。

8月27日（日）

時差ぼけが続いている

どうもないはずなのに、やはり時差ボケだろうか。朝は五時にめざめ、この一日書き物をして思ったようになかなかはかどらない。横になっても眠れない、気力がない。三時になって薬にたより一時間半ほど眠った。開け放つととても淋しい一日だった。台風の影響だろうか、むし暑い中の淋しさ。正装の要がないので、下着のまま自在に行きえて、旅行中のごたごた、残務はおおかた平素の姿にもどすことができた。どこよりもいいわが書斎は逆に片付きが悪く整ってない。なるがままに雑然としているが、これが一番いいのかも知れない。旅行というのは生活に新しい血を入れるのはいいが、考えてみると攪乱要素でもある。こんどのペルー行きも、ほんとうにまとめる気なら新しい勉強をかなりしないと知らぬことだらけである。やれるだろうか、インカという不思議な遺跡を見せられた刺激をどうして生かしていくか、その気力があるか、今後若干挑戦してみようかとも考えてみる。

8月28日（月）

ペルー概要

ペルーの状況につき気になるので、年鑑をくってみた。八五年推計で、人口一九七〇万人。八五年八月物価凍結を含む緊縮経済政策を発表、対外債務の支払いは輸出の一〇%を限度

とするとした。極左ゲリラ(センデロ・ルミノソ=輝く道)のテロが八〇年代に入って活発化し、死者は三〇〇〇人をこえている。同派の囚人暴動も発生、武力鎮圧で二五〇人の死者を出した。経済は鉱業(銅)と漁業が二大輸出産業。アマゾンでは石油も産出。外債は八五年十二月で一三七億ドル。インフレ率一七〇%、潜在失業率五〇%、ドル=一四インティ[以上一九八五年]県庁で今年の新しい年鑑をくってみると、インフレ率三〇二%、ドル=五一三インティとある。われわれがこんどリマで経験したのはドル=三一〇〇インティ。テロが相次ぎ、一万五〇〇〇人がそのため死亡。日本の進出企業も狙われ、八七年三月には東京銀行支店長、十一月には日産の工場が銃撃された。日系へのテロが目立つという。列車もテロ防衛のため夜間に消灯して走ったのをクスコ近くで現に体験したのを思い出す。

8月29日(火)

「負の共有」を常に心に懐いて

午後時間が余って知事室で橋本氏と雑談を交わした中で、再び「負の社会有」にふれた。先日桂川町で行った対話集会につき、地元の幹部からの礼状の中に、私が「軍の退却の時は、みんな負傷者をいたわり合い、攻撃の時はそしらぬふりをして突進する」といったことが印象的だったとふれた部分があった。その事で雑談の花が咲いたわけである。同じ家庭内では子供も年寄りも病人も、手数がかかってもいたわり合い助け合って暮している。これを拡大したのが行政で行政の中には「負の社会有」が多い。「正の社会有」もないわけではないが、「負の社会有」を忘れてはならない。川や道路、橋、公園など「正の社会有」であろうが、いわゆる福祉と称する分野は負の社会有である。人権、平等を基本とすれば、二人の世界で一人が片手がないとすれば、二人で三本の手をもつと考えねばならない。開発とか活性化とか企業誘致などプラスの社会有ばかり考えるクセが池田内閣の所得倍增政策以来、あまりにも支配的になりすぎたのだ。

8月30日(水)

衰えを自覚する

一昨日だったか済生会病院での検診で血圧が高いとの結果が出て、昨日県庁で自己検査したが、やはり高い。一七〇―一八〇をこえている。ペルーゆきと関係があるかもとの意見もありうるが、自分ではないと思っている。しかし自覚的には脈搏を感じる事が少なく、明らかに通常ではないようだ。頭の重い感じはあるにはあるが、全体として曇りといえても危機感はない。肩の痛みも少しはある。時差ボケが依然残っているのかなと思うが、そんなに残るはずはないだろう。ともかく体力がかなり衰えているし、気も晴れやかでない。睡眠は薬のおかげで何とか必要を充たしている。爽快にはなれないが、体力だけではなく、例えば記憶力はとみに弱くなっている。夜になって、その日の全体が思い浮かばないこ

とが多い。又筆記の場合、すごく間違いが多い。スペルが間違ふ。思っていない字を書いてしまう。すぐあとで訂正する。又、文字を忘れてる。字引が必要になる。杖をつくようなものというべきだろう。

8月31日（木）

非核条例を求める運動について

学者文化人のグループが、県の非核条例制定を求める直接請求署名をはじめるといふ。県下九七市町村のうち八五の自治体は何らかの形で非核の態度表明をしているのに、革新知事をもつ県が何もしてないという不満がある。前向きに取り組もうる土壌づくりをしなくてはということでの署名運動であるといふ。有難いことだし、積極的に、やってほしいとは思ふ。ただ、議会内の空気はそう簡単ではない。桑原市長のもとでは議決OKという保守勢力も奥田知事のもとではNOというのが偽わらざる空気である。どういふ内容ならOKなのかということでは白石県議らは保守側に詰めていふようだが、条件内容はそうかんたんには折れ合わぬのが実際である。秘書室でこの署名運動につきどう対応するか困惑していふようだ。帰宅後、森佑行そして石川捷治の二人に私の気持を伝えた。石川氏からは署名運動の趣旨の説明が私に伝わった。政治関係をすっきり理解できるこの二人に私の気持を伝えたのだった。

9月要記

アジア博が三日で終わり八二〇万人が入場した。市側が職員を使ってさまざま入場者増をはかったといわれるが、当初の六〇〇万から七〇〇万に目標をあげ、それが一二〇万超えたのだから、細工したからだとはいへない。あらゆる工夫をしたし、福岡の魅力が人々を引きつけることになったと思ふ。テーマをアジア、国際化に向けたということ、関連のイベントを連日工夫をこらして遂行したといふ努力を買ってやった方がいいと思ふ。福岡が注目されたことは事実だ。これが新傾向を生むに違いない。好天が続いたのもラッキー。長期の夏休みに市は学校の子供達を動員したようだ。いずれにせよ、この成功が次に繋げるといふ事はいい事だし、実行者側に自信をつけた事も評価できる。イベントばかりの中で、失敗しなかったのだから結構なことだ。好景気ということに貢献したし、青年会議所の民泊をふくめて「子ども会議イン福岡」などよい種を将来に残したと思ふ。

9月1日（金）

稀薄国家と成熟国家

講堂での幹部研修会の際の挨拶の中で、稀薄国家ということに言及した。ペルーでは学校は三部制になっているといふ。詳細は知らないが、午前、午後、夜の三部から成るといふ。日本の三校分を一校で消化しているわけだ。国民がそれで納得しているなら、土地建物の

行政負担は単純化して日本の三分の一ですむのである。昨年ブラジルで起きた事だが持物を奪われたとすると、奪った者より奪われた方が悪いというか、考え方が一般化しているという。私邸の壁は大変高い、嚴重なロック設備が施してある。行政が安全を確保してくれるのではなく、大部分は各自が自分で安全確保に努力せよということのようだ。それが常識というのであれば安全に関せる政策、施設、要員は少くてすむわけだ。これまた稀薄国家といえる例証である。北欧のような「負の共有」施策が進むなら、国は強大になり、成熟国家といえるであろう。

【欄外記入】

研修会で稀薄国家の話をした。

9月2日（土）

政治性の不足

済生会の近藤常務と山ノ上ホテルで夕食を共にした。彼は盛んに政治的発言をした。政治倫理条例は思い切って提案すべきだとか、次の知事選では今回参院に当選した合馬敬が出馬するに違いないとか。今日は別のチャンスに法学部の徳本正彦氏と話す機会があったが、彼も政倫条例や非核宣言について積極姿勢を示すべきだといっていた。外から見るとどうもはがいらしい。与党である社会党県議にそうした積極姿勢をわかってもらうための知事側の働きかけが足りぬのではないかと両人はいっている。政治スタッフの問題でもあるというのである。八丁氏がいた頃はひとから嫌われながらも彼はその線で動いたが、今はその人物がいないともいう。こうした意見はわからぬではないが、私としてはそこまで積極的にしないとイケないのだろうかとの疑問が残る。私の政治的生活の時間空間が少い事への不満はあるのだが……

9月3日（日）

アジア博閉ず

アジア博の華やかな閉会式が行われた。リゾートシアターはそれで埋めつくされ、今日も大入りの客、最後の最後まで名残り惜しそうに群衆は帰ろうとしないふうに見えた。私自身そういう答えの中にいること自体に酔ったように思えた。祭りの中に入ったみたいだった。イベントを数多く工夫して人々を酔わせたところにその成功のポイントがあったようだ。八二〇万人、予定の七〇〇万人を一二〇万人うわまわったわけだ。テーマが国際化時代にマッチしたし、アジア諸国とうまく連携がとれ、日本—九州—福岡ということで内外に関心を高めたようだ。役員や幹部、それぞれに大満足だった。今夜はおそくまで場内各所で、裏方として活躍した人達は思い出ばなしに花をさかせることだろう。いろんな意味でこの博覧会の成功の余波があらわれるだろう。福岡市が一気に注目されるようになることは確かだ。

9月4日（月）

国際交流の新しい手法を求めて・・・

アジア博は大きな成果を残したが、他面、福岡が市も県も、アジアの諸国に負う義務も亦小さくないことを自覚せざるをえない。そのことに関連して今日ふと思いついたのが、中国での発掘調査で、夜の第三分校同窓会の時に来ていた国際交流センターの中村健に、私の思いを伝えておいた。できれば来年度予算に盛りこめないだろうか。金印をめぐる問題に狙いを絞ったらと彼はいう。中国には三千年の史跡がねむっているのではないかと、発掘したいけれど費用も技術もないとのことだから、県が予算を組み技術を提供したらどうだろうか。国際交流といっても、観光、通商、スポーツなどに加えて考古学上の交流があってもいい。金印には多くのロマンがある。後漢はもちろん前漢時代にも日本との交流があったかも知れない。私個人、文字（漢字）の伝来について、もっと確かな事実を知りたい。吉野ヶ里には文字がでてこない。日本人は漢字を当然のように使っているが、そのもとを知ろうとしない。金印は紀元五七年、文字が刻んであるのだ。

9月5日（火）

函館山に登る

国体夏季大会閉会式に出席するため夕方函館にやって来た。道庁と渡島支庁の職員が迎えてくれた。早速夕食をごちそうになり、有名な夜景を見るため、函館山に案内していただいた。三三〇メートル余、一二五人乗りの東洋一のロープウェイ、この夏はとくに観光客が多く、連日満員の活況だという。できて二年目の今、目標の五割増の来客があっているとのこと。山頂の施設もあれこれ立派で観光客を満足させるにふさわしい。以前は要塞だったが、戦後開放され、そのおかげで保有された自然植物、景観が今日の函館の支えとなっているわけ。良港をかかえる形で海峡に突き出、まさに要塞にふさわしい位置。門司のメカリを思い浮かばせる。山麓には函館公園をはじめハリストス正教会堂・区公会堂など名所がひしめき合っている。自動車道も山頂までついでおり、宝の山というか、この山あって、この港、この町といえる山である。函館市が活況をなくしているのではないかと、思って来てみたところが、逆で、にぎわいを見せている。そのねうちのある自然と歴史が感じられる。

9月6日（水）

五稜郭

はまなす国体夏季大会閉会式に先立つ時間を利用して五稜郭を展望台からつくづく眺める時間が得られた。はじめてだった。港と駅を中心に発展してきた函館市も、近頃は五稜郭周辺がにぎわうようになったという。案内書によれば、世界にも珍しい様式の稜堡（城）だという。砲術の発達によって、平面的、死角をもたぬ城塞、兵糧保管や水の確保も十分

考えられているらしい。設計者は武田斐三郎、一八五七年(安政四)から着工されたのだが、その三年前に(安政元)日米和親条約が調印され、下田、箱館の開港、次いで長崎の開港があっている。五稜郭は幕府の箱館奉行役所として一八六四年にオープンしたといわれる。その四年後には箱館戦争が始まる。つまり幕府の榎本武揚が占拠、できたばかりの明治政府軍がこれを攻め、翌二年榎本は降伏する。激変の注目すべき拠点が五稜郭なのである。今は静かで美しく、往年を語っているかのようである。もちろん堀は美しさの骨格をなしているが、赤松の群(約一一五本とか)も、堂々と、その一部を構成し威厳がある。

9月7日(木)

箱館の将来に拍手

函館は漁業、造船、鉄道(JR)など活況を殺される要素のため、町が沈んでいるのではないかと私の予想は、かえって逆であった。青函トンネルの影響は観光ブームを呼んでいるし、漁業も造船もマイナス作用はクリアーしてしまったとのことである。町は次の段階に向って浮上しつつある。夜景は美しさを増しつつある。函館山は宝の山のごとき観を呈している。国体夏季大会のメイン会場であるためか、街路もすがすがしく感じられた。北海道といっても南端でその入り口「らしさ」が十分感じられないが、幕末の開港の匂いがこれほど強烈に残っているとは知らなかった。いわゆる「国際化」の先頭に立っていたわけだ。米、露、英、独の活動のあとが随所に見られると同時に、幕末、明治はじめの騒ぎの跡も色濃く残されている。トータルとしてロマンあふれる町と言っていい。清々しくもある。こういういい町だとは意識してなかった。いい勉強になったこんどの旅である。観光と漁業で今後も栄えつづけるに違いない。

9月8日(金)

県立女子大の大学院設置問題

三時から五時まで、女子大のOB(会長は城野節子)十数人と特別会議室で大学院修士課程の設置を中心課題とした対話集會が開かれた。出席者すべてから発言があった。趣旨は十分にわかるが、予算を組みましようとの返事はできない問題である。基本的な疑問は、大学院設置という問題を今の女子大が解決する力量があるかどうかである。さらに県行政当局もその力量をもっているかどうかでもある。似たことが田川の社保短についてもいえるし、北九州にある歯科大学については県行政に管理能力があるかどうかである。私はこうした大学の問題は県の行政から切りはなせるような組織を作らねばならないのではないかと思う。事実女子大、社保短とも現スタッフの中から、脱皮について熱意ある意見がなかなか出てこない。女子大についてもOBが主張しているだけのようにみえる。ただ今日の対話をきっかけとして大学院設置についての熱い、高い波がうねり出すかも知れない。私はそれを期待している。外側から支援の手が延びるのもいい。女子大には今チャンスが来

ていると思う。

9月9日（土）

心豊かな老い

死ぬまで元気で、己れの力を燃えつきるまで使うように努力すること、これが高齢社会に生きる者の努力目標である。もう九一歳になるという徳永喜久子さんが「心豊かな老い」という本を送って来て、手紙の中にそうした趣旨の事を強調していた。当然のことながら大切なポイントの指摘である。「豊かさ」をいう人は少くないが、彼女は「心豊か」を強調している。心が豊かであるための条件は、物の豊かさのほかに、付合う人々、趣味など自分で磨きつづける技、修練すべき心の目標、家族関係、社会施設等々の諸条件が満たされるということを含意している。だから単に「豊かな老い」というだけでなく、「心豊か」という必要がある。徳永さんは年金などまずまずの豊かさがあるだけでは十分でないことを強調している。この年金すら今後の政治の中で不十分になるかも知れないが、それはさておき、三〇台、四〇台の時から、近くない将来の自助努力について心懸けておく必要がある。高齢問題は若者の心懸けの問題ですらある。

9月10日（日）

秋の味覚豊富

箱館の朝市で注文したジャガイモその他が着荷した。このごろの秋の味覚といえる一部、男爵薯である。ブドウ、梨、エビ、カニ、茗荷、ふんだんに食卓をにぎわせてくれる。トウモロコシはもぎたてでないといけないとのことだったので、箱館では注文しなかった。ジャガイモは日常どこにでも見られるのだが、北海道直送との意味を込めて朝市でわざわざ買って送ってもらったのである。重すぎて宅配屋が文句をいって帰ったという。ペルーを思い出す。ここでも物は豊富にあるようだが、インフレが急進し貧乏人は求めにくいとのこと、むしろ飢えに近い。リマで、中食を煎りソラマメで過ごすという話をきいた。経済上の飢えである。わが国は「物余り」、大衆の手に届くところに物が豊かにある。有難いことだ。昨日森氏がマージャンをしに来てペルーの事に言及していた。日本から何か送っても安着する保証がないから、野球の古い道具を集めても送付にかなりの神経を使わないといけないと彼は私に忠言した。秋の味覚に酔えないのだ。

9月11日（月）

江藤氏の就任祝賀が福岡で行われる

林県議が来室しての話題で、宮崎一区選出の江藤隆美が明後日福岡で建設大臣就任祝賀の集会をもつ、その際九州の知事で、平松（大分）、松形（宮崎）、香月（佐賀）の各氏も来福して演説することになっている。江藤は奥田を敵視しているからねと。中曾根派で福岡

では山崎拓が第一の子分である。海部内閣もそう長つづきしないだろうから江藤の寿命も長くはないが、建設風を吹かせ、今のうちに福岡パーティで資金かせぎをしたいというのが本音だろうという。合馬敬(参議)が次の福岡知事選に出てくるのではないかと私がかちかけたら、山崎拓は出したがるかも知れないが、自党内はそうは許すまい。太田誠一派は承知するとは思えない。それまでに衆院選がある。わが方は太田に精神的支援をしている。松本龍を当選させうるなら、余力は太田に傾いてよいと彼はいう。松本英一が江藤と因縁をもち、こちらでは黒木一夫が一枚かんでいるようだが、英一氏には注意を喚起しておきたいという。

9月12日(火)

弱音を吐かぬこと

テレビで「夏と秋が共存する九州地方」という言葉がきこえてきた。名古屋地方は三三度というから暑いのは九州だけではないようだ。この暑さのせいか昨夜は満足できる睡眠がとれなかった。でも今日は一日中多忙そのもの。眠いなどといっておれぬ緊張がつづいた。疲れは大きい。徳永喜久子さんが送って来た「心豊かな老い」という本には、病は気からという気持ちがぐっと積み込まれていたのを思い出す。体調について弱音を吐いてはいけないと思う。今日までもって来たのも、気持のもちようが一つの因子にあると思っている。長寿社会がつづいている。敬老の日が近まり、報道もそれに関連したものがある。一〇〇歳以上の人が全国で三〇七八人、福岡県で一八七人、ふえつづけているとのこと(九月末でみた数)。戦前戦中派の頑張りがこの長寿の一因になっていると思う。細心の注意は必要だろうが弱音を吐かないようにすべきだと今日は自分にいいかかせている。仕事を自分でもち、自分でそれに全力投球する。終るなら終れ、そういうことなのだ。

【欄外記入】

昭和38年の100才以上は153人
今はその約20倍
全国3088人中、男630、女2448人
福岡県の187人は県レベルで全国2位

9月13日(水)

心に化粧を 地域に化粧を

「心にお化粧をしてみませんか」、こんな言葉が先日来私の頭の中を往来している。もっと前は「地域に化粧を」といい、その少し前は単に「化粧」であつた。おもしろいことだと思う。化粧というごく簡単な事を思いつくにも数十年かかり、それが、地域へ、心へと移動していった。単に化粧という発想に至りつくとくらべると、地域に、心にと転化していくのは距離は短かかった。もう数年前になるが、読売の小林社長、が「アイディアです

よ」といい、つづいて「デザイン」ということを強調することが私自身しばしばあった。これまたそれほどの距離なしに「化粧」という発想へと転化していった。「ものもいよいよ」ということになる。それも心のおき方である。だがさらに、ものをいうときには文字で書くと同じでも、イントネーションのおき方、言う時の姿勢によって相手に与える印象が違ってくる。人はだんだんデリケートになっていく。ある意味では競争だ。

9月14日（木）

高校教育現場の荒廃、教師の疲労

県立高校の養護担当女教師の高教組グループが夕方特別会議室で知事に物申す会が開かれた。前高教組委員長江口氏の仲介の催しである。いろいろ現況が話されたが、予想外に学校現場は荒廃している。教師と生徒・校長の関係、学校経営における業績主義、オーバーワーク教師の健康破壊、子供の家庭環境、勉学意欲の荒廃、教師の家庭自体の荒廃等々、養護教師といっても、何をもって正式の担当資格とするかということも全くまちまちだし、定員の不備不足も訴えられた。実業高校の生徒の学習意欲が、水産高校や農業高校を例に混沌し乱れていることも指摘された。福岡県の状況は他県にくらべとくに悪いという。そこには積年の労使関係からくる弊があるとも指摘された。ものいわぬ生徒、ものいわぬ教師、適任でない校長、教頭、主任の存在、問題は際限なしとさえいえる。宮崎勤の少女殺害が注目される今日の社会背景が語られた訳だ。

9月15日（金）

家屋の守りができてない

しばらくきかなかった雷と雨のはげしい音、午後はずっと寝る頃もまだゴロゴロとどろいていた。トイレがはずれていて水が裏庭にあふれる。トイレから雨水があふれ落ちる。家屋の管理がかなり抜けているのであちこち今日のような雷雨に対する容量のなさを見させられた。落葉がトイレにたまっているのが放置されている。こうした家屋の管理は自分で平素しておくのが普通であろうがそうになってない。女性は気がついて自分も手を貸して復元とはいかない。定期的に本業の人に点検してもらっておくべきだろうにそれをしていない。似たような手落が家屋のいたるところに見られる。先日休みを利用して藤棚に上り枝を切ったが、そのままでは見苦しい。かといって専門の人を頼んであれこれと正していくわけにはいかない。平素は放置しておいて、まとめ修理するしか手がないのではないかと思う。実にしんどい一日だった。

9月16日（土）

大倉山シャンツェ、雪のプラス面

札幌に着き、その足で円山公園の向うにあるスキージャンプ競技場大倉山シャンツェに案

内してもらった。テレビで見たことはあるが、はじめての現場。昭和六年に着工というから六〇年近い歴史があるわけだ。昭和四五年の札幌オリンピックを機に大改修が行われ世界的レベルのものになったといわれる。その後十余年リフトも出来て、一四〇メートルの高さまで我々も容易に登り、札幌市内を悠然と眺めることができる。福岡市のことを念頭におくと、こんな山地があるのが利点だなと思った。もちろん大地を控え道路も広く、ゆったりした感じも福岡とは違う点である。さらに違う点は降雪である。雪のマイナスもありうるが、これをプラスに転ずる努力があり、このスキー利用のスポーツ場の開設は代表的なものである。ジャンプ場の収容能力は五万人といわれ、集客による経済への貢献度は大きなものがあるに違いない。私はスキーについての知識は皆無である。経験もゼロに近い。関東以北の近頃の若い人が大胆にスキースポーツを楽しむのはうらやましい限りである。雪のプラス面がよくわかる。

9月17日（日）

沸いた札幌の一日一幕

札幌厚別公園競技場での第44回国民体育大会秋季大会開会式、会場を埋めつくした人また人、全国47県、平均四〇〇人とする入場式の選手役員はじめて一万八千八百人、スタンド及び演技出場者は二万人をこす。道、市の職員も精一ぱい動員され、全国からの来客の接遇にあたっていた。スポーツ会、学校、市の商工界、運輸関係、ホテル食堂、みやげ品店などすごい動員だったろう。天皇の行幸啓に動員された警官（交通整理にも）は三〇〇〇人といえようか。ともかくこのビッグイベントは北海道を沸かせるに足りうるものがあつたろう。施設整備にもアクセス道路にも、数年の年月がかかったろうし、リハーサル、準備行動など燃えに燃えたに違いない。インパクトは経済的なもののほか、精神的なものも大きかったと思う。言葉にあらわせない主体性への刺激もあつたであろう。大人はもちろん子供にも。誰かそんな精神的なものを表現してくれればと思う。作文、絵、短歌、俳句、文学などの形になってほしい。記録フィルムは勿論残していようが、断片の一つにすぎぬのではないか。

9月18日（月）

産卵を奪われたサケ

昨日の北海道新聞カラー刷りのページを就床しながら読んで印象的だったのでもって帰った。それは「松田忠徳、野を歩く、産卵を奪われたサケたち、管理しすぎた野生」という見出しの記事である。知床半島の付け根の根室海峡へ注ぐ薫別川についてのサケたちの悲話である。サケは本来、川上で孵化し、下って太平洋で成魚となり、産卵のために母なるもとの川にたどり着き、川上にのぼり産卵し、死地を求めて川を下るといふ。筆者は、その生態を今は人間が完全に管理し、時に一網打尽に捕えてしまう仕組みにふれ、なげいて

いるのだ。クマがサケを取るのも自然生態の一つだが、人間のやり方はひどすぎるというのだ。私は一網打尽をくわしくは知らない。が、そうだとすると残念である。この新聞には群をなして川を上る鯉、河口付近に群れる鮭を取り納めようとする漁船の写真がのっている。どれほど取りつくすのであろうか、それでよいのであろうか。私には論評の力はない。二十年も昔だろうか、脇元裕嗣氏の案内でこの川の山越えのオホーツク海側の川を歩き渡り、そのような話を思い出すがゆえに、この記事に目をひかれたのである。

9月19日（火）

三期目のこと？

杉山秘書室長補佐が、私に、三期目にそなえた後援会づくりについて、めぼしい人の名前をあげてみてくれといった。へっ！ そんなこと私ができるわけがない、と答えた。安達氏を呼んでその周辺の意見をきくことにした。杉山氏も同席しての雑談になった。いえないのは当然ながら、多くの人の常識ないし前提条件になっているとのこと。昨日、自治労の岩田委員長と面談する機会があったが、岩田は「連合」のキャップを目ざしたいので、衆院二区出馬の話は打消してくれと私にいう。彼は連合を指揮して奥田三期の方向を打出すのが自分の使命で衆院出馬（二区多賀谷氏のあと）はことわるという。だが連合の幹部たちは、共産党は排除といい、その先鋒に岩田がいる。杉山もそれは知っているし、林社会党県議団長が共産党排除はいけないといっている点も知っている。事は複雑に変化する政界である。私は杉山に、健康上のこともあり、肯定的返事は右のような事を考えてもできないという事を知っていてくれと述べた。安達も事情了解というし杉山もわかったという。だが「困ったネ」ともいう。

9月20日（水）

三期目というが否定的

きのうのつづきになるが、私の場合、総計としては否定的になる。まずは健康のこと。糖と肝の面から、又近頃は血圧についても問題があるといわれ、検診をくりかえし、毎日薬から離れられない。不眠のための安定剤を毎夜使っている。気力の方は衰えたとはいいたくないが、でも「自分のこと」を詰めてやる気にならなくなり、公務に追いまわされる限りで「動いている」のがこの頃である。第二は「外野席」からの不満や不平である。支持者たちが私の言動にとやかく非難したり文句をいっているのをきくとイヤになる。まずは地公労の人達、次は学文の人達。知事という場ではそう希望をかなえてあげられないのが実態である。理念はそうあっても現実はそういかない。第三は家庭生活。二人しか暮らしていないが、ほとんど対話がないためにゴツゴツすることが少ない。又、住宅のまわりも手抜きばかり、妻はそういう生活には淋しかろうし、不満一ぱいではないかと思う。使用人でもおれば緩和されようが、それが無い。

9月21日（木）

鮭の一網打尽

この日記の九月十八日に、サケの一網打尽はよくわからないと書いたが、今日、又千歳空港に降り立ったあと、千歳川一支笏湖で「打尽」の様子と完全人工管理された産卵という営みを奪われたサケについて、捕獲場と孵化場を見学することができた。栽培漁業、資源管理型漁業の実態を説明してもらった。生殖作用が全部人間で管理してしまう、つまり成魚が必要な数捕獲され、メスは卵を抜き取られ、オスは白子を受精用に抜き取られ、装置の中で受精され、孵化され、五センチほどの幼魚になるまで孵化後六ヶ月ほど飼育され、放流され、大海に下って三～四年して次の捕獲抜き取りの犠牲となる。サケは生まれ育った川に回帰するが、その率は約三%という。産卵のため母なる川に帰るその前後に、多くが漁獲の対象となり、又は回遊中に他のものの餌になっていく。管理養殖の対象になるのは一定量でしかない。一網打尽というのは生殖の営みのところでのことである。インディアン水車は千歳川にさかのぼるサケを見事「打尽」する作用を発揮していた。

9月22日（金）

アイヌと北海道開拓

今日は午後が国体閉会式なので、午前中は厚別の北海道開拓の村と開拓記念館の見学を案内してもらった。一九八三年オープンだから七年目になる。建造物や産業の道具、器具、機械など実に多くのものが集められた立派な野外博物館、明治村よりいいのではないかと思った。山村群、農村群、漁村群、市街地群に分かれ、北海道近代化の端緒の様子を勉強することができる。養蚕もやっていたらしい。これが開拓の村である。福岡県で何かまねられるだろうかと考えてみたが、発想が湧いてこない。意味がないというよりは、これだけの保存ができてないのではないか。意味という点でも北海道のようなロマンは福岡にはないだろう。記念館の方でも感銘が深かった。アイヌという部族の存在について考えさせられた。一ヶ月ほど前にペルーに行ったとき、インカ帝国をつくったインディオがアジアからアラスカを通過して南米までひろがったとの話を思い出し、アイヌが本州の北陸地方まで来ていたのに倭人に追いかえされ、更に倭人に北海道まで侵されたと怒っているとの話を耳にし、いろいろ考えさせられているところ。

9月23日（土）

横浜博を見学

秋分、涼しさが感じられるようになった。昨日はふくおか会館に泊り今日は横浜博に行く。経団連の花村仁八郎（東京都人会長）がこの博覧会協会長をしているので是非観覧をという要請をうけていて、今日の実現となった。一二〇〇万人の入場予定のところ、あと一週間の会期で目標達成が一寸むつかしいかなといわれている横浜博だが、今日は三六万人ほ

どの入場で、この分だと目標に達しそうだとのことだった。人、人、人のにぎわいで、主客ともに最後の追込みの気迫十分であった。会長はじめ、多くの方々に大へんお世話になった。中食もごちそうになった。私達夫妻、県の職員に運転手をふくめ他に三人、パビリオンは列をなさず裏面から入れてもらった。横浜も恒久施設として福岡美術館のように博物館を残すという。立派な、福岡の二倍もありそうな文化的施設である。博覧会用地は六者が共有、三井物産、三菱造船とか大手の所有者がいるような話。今後の都市計画の中心になるという。

9月24日（日）

三浦半島ドライブ

八時半から午後三時まで、一彦の運転で三浦市へドライブ、はじめての経験だった。油壺と城ガ島の間は観光船での往復。太平洋は光っていたが波は荒かった。浜の砂煙をかぶるほど風が強かった。鎌倉時代の三浦一門が北条に亡ぼされたところという。礼宮が来たというので若者の人気が集っている油壺である。(今彼は紀子さんとの結婚ばなしで注目されており、アベック観光したとの話)。漁村でしかない所なのに観光で脚光を浴びつつある。車も渋滞しがちだ。浜辺の植物を見ただけで、景色以外これといったものが見つかった訳ではない。昨日から目につくのはドライブ道の両側のススキの穂だ。出たばかりのススキの穂の何ともいえぬやわらかさとつや、それが、ぎっしり一面に。満月ならば、と思うが……ともかく自然の営みには頭がさがる。昨日の横浜は人間の営みばかりが前面に出すぎている感じなので三浦半島の海岸とススキは一層心をなごませてくれた。水引草、かんぞう、萩、海紅豆、それぞれに秋の趣を伝えてくれる。

【欄外記入】

かんぞう
萱草

9月25日（月）

感ずる疲労

四泊五日の旅行から帰宅し、たいへん疲れを感じた。一彦宅に二泊したが、気を使うことはいなめない。毎晩途中で用便に起き、安定剤を呑んで又睡眠をはかる生活をここでもくりかえすことになる。ホテルなら個室である限り誰にも気を使わないが、自宅以外ではそうはいかない。その意味で疲れたのかも知れない。そのようなことではどこにも行けないではないかと自嘲せざるをえない。どうして安定剤なしでは眠れないのだろうか。慢性化しているに違いないのだ。毎夜、次の日のことを考えて自分にいつてきかせるように、眠るための安定剤使用となる。それをたよって眠ることになる。医師は無害と説明される。肉体的に無害でも精神的には有害なのかも知れない。毎日、公務に追いまわされている限り、使わないで眠る「試み」は冒険になる。深刻におちこんでいると知りながら這い出る

努力ができない自分をつくづくふりかえてみるこの頃である。体重も近頃は五〇kgを越したあたりで減った感じ。53kg ぐらいないといけないと思う。ともあれ自分にむち打って頑張ろう。

9月26日(火)

若いのに古い頭をもって

九月議会の代表質問第一日、自民の井上澄和、社会の上島、農政の井上勝の三人が質問者。春日の井上澄和がえらそうな文句を並べ立てて質問をまき散らした。知事・県職組・教組の攻撃が目的であるようだし、相互に関連するようないまわしである。衛生部でおこった汚職は知事がなめられているからだ、知事をなめるのは自治労が職場に支配力をもっているからだとか、そういった論理の組み立てである。一寸時代おくれではないだろうか。まだ若いのにあんな発想しかできないとはあわれにも思える。そしてどんな利害がからんでいるのか知らないが、私立幼稚園に県の助成を増額せよとせまる。利害がらみがあることは想像に難くない。白島石油備蓄基地の工事再開なども私の「決意」をきいてみても仕様がないのではないのか。「教育現場の正常化」の質問も教組が悪いからだというが、古い、古い、いんねんづけである。悪い校長や教頭がいらないとは限らないのに、それを確かめようとはしない。まだ若いのに、自民党の悪い面だけを背負って初質問に立った澄和君であった。

【欄外記入】

井上澄和
西南大卒
昭和二十六年生れ

9月27日(水)

心理的プレッシャーが残る

きりきりまいの九月も、やっとなつまってきた。今日はその大詰めの、二十九日から十月二日までの、全国身障者スポーツ大会について札幌に行く説明があった。国体関連で九月中に四回北海道に往復する最終回の話である。日曜が一回だけ休みで、あとは二日の祝日をふくめ、土、日は全部つぶされてしまった九月である。土曜閉庁をはじめたというのに、当方にとっては何の関係もない。毎日の日記を書くのがやっとの私生活といえる。尤も二十四日は一彦宅を訪ね、三浦半島ドライブと、休みなのであったが、私自身で自由に使える時間がなくなったという形では、やはり拘束感からは逃れられなかった。追いまわされ、ホッとするひまがなかったということである。在宅し、書斎で何か好きなことができるという時間が渴望される。読んだり書いたり身边を片付けたりの時間である。とくに、手紙を書く必要を感じながら果たせなく、それがたまってどこに書くべきだったのかさえわか

らなくなってしまうのは、心理的にかなり、プレッシャーとして残る。さいなまされているような圧迫感である。

9月28日（木）

戦後の四〇年激励の中で貫く基本

総領事館で中国建国四〇周年記念祝賀会があった。挨拶も祝辞も抜きにして主な来賓の名だけ読みあげ、あとは余興だけということで進められた。こんなのがいいなと思った。近ごろよくある宴席の運び方は余りにもスピーチが多すぎる。日本人はとくに煩雑、冗長、儀式ばるを好むのではないかと腹立たしく思っていたのに、今日のスピーチなしはよかった。この夏、新制九大発足（第三分校開校）四〇周年同窓会があったのを思い出した。自治労県本部が四〇年誌を出すとも聞いている。昭和でいえば二十四年である。大戦が終って後大混乱が二～三年つづいたので、四〇年前を戦後史の新しいスタートとみなしてもおかしくはない。しかしその四〇年の間の変わりようは表現のしようもないほどはげしかった。昨日は県下のソフトウェア企業の協議会の発会があったが、「ソフト」云々が技術、経済の発展のリーダーとなる時代である。しかし今日の中国の舞踊、音曲など人間の心の表現はそう簡単にかわるものではないと自分にいきかせた次第であった。

9月29日（金）

支笏湖は美しい

千歳空港から千歳川をのぼりインディアン水車を見学、さらにのぼって源流支笏湖そこから藻岩山にのぼり札幌のホテルに着くというコースをとった。改めて秋の道南道央の美しさにうたれた。ハゼが真赤で他にも紅葉、黄葉が山を染めていた。沿道にナナカマドが赤い花を重く清楚に緑の中に垂らしていた。エド松、トド松がしゃんとそびえて青空にそのシュリエットを突き出している。支笏湖は雄大重厚に湖面を西陽にかがやかせている。湖畔の水は澄んでいる。波なしといえるほど風はない。鮭のためにこうした自然が大切に保存してあるようだ。欲をいえばもう一寸すき透った水であってほしかった。マスがたくさんとれたのに、近頃は不漁のようだ。養殖できないのだろうか。千歳川の滔々たる流れの源がみられてよかった。鮭のため、人間のためかも知れないが、豊かな自然を体験できた。恵庭山というのだったか、聳え立つ奇形の山、嶺線の美しさも格別だ。

9月30日（土）

第25回全スポ（札幌）

雲一つない快晴にめぐまれた第二五回全国身障者スポーツ大会開会式であった。国体秋季大会と同じ厚別公園競技場。陽ざしよく、風なく恵まれた暖かさ。選手は二五〇〇人ほどだったろう。県別に加え、全国の政令指定都市（広島、仙台もふくむ）それに、車椅子マ

ラソン選手も隊を別に入場行進した。今日の開会式には両陛下臨席だが、今年だけの例外で来年は皇太子ということになる。この大会には選手より多くのボランティアの応援参加が要請される。身障者特有の競技方法、種目などがあるが、健常者とかわらない内容のものもある。二五回というのに、私はこれまで全く関与しなかった。ノーマライゼーションという言葉がこの際重要であるが、それは身障者にも健常者にも、さらにその総計にも必要なことであって、それがなかなかである。考え方や暮らし方をかえなくてはならないのだが、まずスポーツを通じてということで、その全国ピークが、この全スポなのである。この際、スポーツ以外の分野についても、一そう深い関心と努力が必要であることが痛感される次第である。

【欄外記入】

はまなす大会

(9月30日)
(10月1日)

10月要記

無茶に多忙な一ヵ月だった。大阪へ日帰り旅行で三つの用件をすませるとか、毎日外で夕食する日が一週間もつづくとか、ともかくうちを出て帰りつくまで十二時間、十三時間というのが何回もある。九月から「土曜閉庁」制が導入されたが、月に二度それがあっても、閉庁のときは必ず外の用件、そして日曜も出番があるといった具合である。日曜が休みでも揮毫の宿題をたくさん抱え、休みをそれにあてねばならぬのが度々である。だから身辺雑用ができず、書類など積んだまま、机辺は雑然としている。さらに、以前はあき時間に細字の練習するなどの時間的ゆとりもあったが、九月十月はそれもなくなった。寝るのに精一ぱいといってもいい。熟睡できない健康状況なので、時間が少いとひるま眠くて活力がとみに衰えたと思うようになる。「そんなに出来ん」と断わればいいのにとひとはいう。秘書室はわかっているはずと思うので、私の方から注文せずに放置しているのであるが、ちょっと度がすぎるのではないだろうか。

【「塗り替わる労働界地図」(『フクニチ』1989年11月19日)のコピー挟み込み】

10月1日(日)

全スポ「はまなす大会」終る

夕暮れて寒くなった。北海道「はまなす大会」は終り、大通り公園での後夜祭に移り、やっと終わった感じ。解放感、やっと終ってごくろうさん、よくやったね、又会おうねこういって大通公園は賑わった。次は福岡だ。北海道はよくやってくれた、疲れたろう、気をつけてくれたね、感激したよ、満足、福岡がこれだけやれるだろうか、負けたら困るな、心配の方が大きくなって来る、そういう後味である。一生に一度だけ出場できるといわれ

る選手団たち、身体障害者がひたすらにはげんだ練習がここで一度だけ全国規模で発揮される。感激そのものだろう。二二〇〇人のこうした選手に対し、役員ボランティアなど介添した人はその三倍近い六五〇〇人という。手話ボランティアだけでない、会場の運営にも限りないボランティアが使われたようだ。集団演技も国体におとらず行われた。その数は五〇〇〇人といわぬ。人文字もすばらしかった。聾人の鼓笛隊には感服したと誰もがいう。

10月2日（月）

開拓一〇〇年とは何を意味するか恥ずかしながら納得いかない。

北海道開拓の村にまた行った。十日前に次ぎ二度目。前回の印象深いのもあれば、もう忘れていたのものもある。中に入り、そうだったと思出すと、記憶力の衰えをつくづく感じさせられる。現在四〇ほど記念建造物が集められているが、まだそれと同じくらいの余地はもっているといわれ、用地の広いのに感心させられた。一〇〇年記念塔がある。数年前にできたといわれる記念館と村と三点セットになる。何の一〇〇年ですかときいたが多分開拓庁ができてから、開拓使がおかれてからとかいわれるが、私自身それを明確にしてないのが残念である。もちろんアイヌから見て侵略者の何かの一〇〇年だろうが原住民にとっては、もちろん釈然とするものではない。漁業権とは何ですか、鮭を何故誰にでも取らせないんですか、土地は占有して誰も何も文句をいわず一定の年数がたつと所有権が設置できるというが、領有とは全く側面の違う話だし、何だか勉強の不足をはずかしく思うばかりだ。一〇〇年前どうだったというのか……

10月3日（火）

二十四時間国際新空港の必要性について

福岡に二十四時間国際空港をとの声が財界その他で高まり、県議会もこれをうけて、代表質問で取りあげ、今日の一般質問でも、これが叫ばれるに至った。名のりをあげて現実のものになるのに十数年かかるのが常識といわれるこの種の問題である。今は決して早すぎない。現福岡空港は狭いし過密度が進んでいるので、西側展開が検討されはじめているが、それが実現しても十年ほどでまた行き詰まるだろうと観測されている。問題は西日本又は九州規模の合意をどう取りつけるか、さらに、立地をどこにするかである。玄界灘、有明海、佐賀空港、新北九州空港構想など、それぞれに思いを開陳する人があるが、「場所と合意」はなかなか複雑に絡み合う。私は更に、採算などの展望又は建設価値に問題が残ると思う。二十一世紀を展望してというが、福岡に（仮定）二十四時間使用の国際便がどれほどの切実さで必要といえるのか、未知数があまりにも多い。でも尻に火がついたように叫ぶ人がふえてきた。

10月4日(水)

国立博物館の誘致について

一般質問で自民党の久保が、井出などにそそのかされ、国博誘致につき、知事は何もしてないのではないかと、口汚なくののしった。こんなのがあると、だんだんやる気が弱まってゆく。知らん癖に、という反撥感がもくもく湧いてくるが、答弁では抑えて表現しなくてはならない。この問題は、今、第二国立劇場のあとの大プロジェクト発起のチャンスなのに、失脚した元文部次官高石、さらには県教育長竹井らが組んで「奥田に名を成さしめるな」を合言葉に運動の頭を抑え、県行政の中で手抜きし、形だけ自民系の議員首長を結束させ運動体を作りひきまわしてきたもので、文部大蔵の両省も陳情を鼻にもかけぬ態度で対応してきた。六月県議文教常任委員の井出(自民)、大石(農政連)の追及ぶりをみてもわかる。西日本新聞もその一翼を担っている。だったら足のひっぱり合いみたいになって、彼等のいうように、誘致の実現はおぼつかなるのではないかと思う。「知事の実力不足」呼ばわりをしつつ事を困難にしているのだ。

10月5日(木)

ペルー旅行の写真

一般質問が終って、五時から白銀の和田伴で、夏のペルー移住九〇年祭に参加した県関係幹部の「反省会」があった。三木議長夫妻も議会事務局二人も参加した。あれこれ思い出ばなしに花が咲いた。みんなよく記憶している。当たり前だろうが、自分の忘れっぽさに驚く。あれこれ熱心に撮って焼増してくれた写真五人からいただいた。どのシーンだったかなと思ひ出せないのが少くない。私が写真機を使わなくなって何年になろうか。興味がつづかなくなったし、知事という位置では被写体になることは大変多いがカメラの主になることはない。外国旅行にあっても同じである。物忘れがひどいのとカメラの主にならないのと両々の因子で、焼増しものは多くいただくが、どこだったか、誰だったか忘れてしまっていることが多すぎる。いただいたコピーには日付、場所、人物などできるだけ書き込むことにしているが、とても追付かない。今日いただいたのも数十枚あるが、コピーの裏に書き込む作業は一寸できそうにない。一括ペルー旅行とするしかない。

10月6日(金)

職のほかに凝る対象がほしいものだ

県職労は青年部婦人部と並んで親和会というのをもっている。今日は地階の会議室でその第二八回定期総会が開かれ、私も挨拶に立った。顔見知りの人も少くないが、どこの支部の誰だったかは定かでない。五〇歳以上の者の会というので、私は「自分を大事にしよう」という趣旨のあいさつを行った。誰しも待たれている「定年」なのでそれに近づくとつれ、しみじみ自分の一生は何だったのかということを考えるようになる。県の仕事に熱心だと

いうことはいいとして、それだけでは空虚すぎる。今からでも遅くない、「六〇の手習い」ということがあるから自分で納得できる生き様を模索しておいてほしい。すでにそれは果たしているというなら結構だが、というのである。私には菊作りを習いはじめた年の秋、初作の菊が花開こうとした時期に知事に立候補ということになり投げ捨てざるをえなかったという経験がある。筆持つ心得は牧坂から誘われてもう十年の歳月が流れる。職の外に凝る対象があるとよい。

10月7日（土）

福岡市の集客つづく

来年の第45回国体のリハーサルが各地でかなり行われている。私にはなるべく参加してもらわないようにとの方針らしいが、今日は小戸公園でのヨット競技リハーサル大会開会式に呼ばれて行った。全国から実業団など二千人は来ていたらしい。市長は博覧会のあとも青年会議所全国会員大会などイベントつづきで賑わいがつづいているという。一般に福岡市への注目が全国的に高まっている今日、この賑わいはつづけたところだ。明日の大会だが開会式のために集った人達が福岡に泊る。今日は国際センターで部落解放研究の全国集会も三日間の予定で開幕した。これには一万人以上集っている。コンペンション・シティということを目標にかかげる傾向が強まっているが、福岡市はそういう意味で今後がさらに期待されるだろう。それにしても市街地の、とくに少しはいったところが、ゴミ、看板など「化粧」による地域づくりに注意してくれないだろうかとつくづく思う。田舎臭い？ひとりよがり？

10月8日（日）

DO YOU 農 おらが村のイナカーニバルに参加して

秋もなかば、赤村のDO YOU 農稲刈り会があつて、夫妻で参加した。六月に田植をしてそれを苧り取る仲間の集いである。役場の職員の耕地を提供してもらって北九州や福岡など町の人が子供達をつれて参加する。近頃有名になったのだが、世話する人達は村長ほか大変な一日だったと思う。猪が野荒しをして困るという。専門家が狩りして十数頭射とめたとのこと、今日は餅つきの次に猪の肉汁のふるまいがあり、コシヒカリ、ミネアサヒ、日本晴の三通りの新米の試食会もあつて野趣たっぷりだった。雨にさえぎられて稲苧りは午後になった。子供達に苧らせたが、見るだけにした方がよかつたのではないか。でもいも掘りと共に子供教育、親のレクレーション、都市農村の交流の諸点からとてもいい試みだと思う。参加人数を半分以下にし、各部落で一せいに同じようなことをしてくれるといいと思う。コホロギ、バッタなど虫ともたわむれ、トカゲにも相手する。自然を見直す機会なのである。

10月9日（月）

広域公園整備をめぐって知事保留した畠中氏

各常任委員会は終わったようだ。建労委で畠中氏ひとり知事保留、質問の内容は福岡以外に県立の広域公園を整備せというのである。彼は今になって県庁跡地を売れということをお願いしたので委員長が制止した。跡地に建設する国際会館のコンペに入っていることをどうみているのか気が知れんといいたい。福岡市ばかりに県の施設を作ると指摘する彼だが、もちろんそうした意見は他にもある。しかし、側面をかえてみると、県費は福岡市よりも他地方の方により多く使われている。先日も溜池工事の決裁がまわってきたし、基盤整備その他拾えばきりが無い。公園に多額の予算を投入した（大濠、中央・・・）のは事実だが、地方は公園がなくてはならないという緊迫性が福岡市よりも少いはずである。緑も水もオープンスペースも地方がまさっている。畠中氏は自民から脱出したままになっていて、議会で知事質問するチャンスを与えられないので、こんなつまらないことで保留したとの見方が強い。

10月10日（火）

秋たけなわ

秋も半ば、寒くなし暑くなし、秋の草、キクなどいよいよこれからのような生気が感じられる。うちの鈴虫は今年は寿命も短くもう消えてから十日以上になる。ピラカンサがあかい玉をつけて頭をたれた枝と、ずんずん上に伸びる枝、伸びすぎるので梯をかけてのぼりぐっと切り取った。トゲがいたるところであって痛かった。虫や菌がはびこり消毒しないのでやりっぱなし。これも自然でいいかも知れないが、見た目には汚い。天気がつづきすぎるが、今晚あたり降りそうだ。紫しきぶが色つけた玉枝をはびこらせている。椿が蕾をふくらませている。今日は体育の日、各所でイベントがあり、街にはバーゲンあり、野に山に人出が多いようだ。誰もが精一ぱい楽しんでいる。私共はむしろ陰の存在になっている。行く気もないし見る気もない。楽しみを求める気もない。そんな自分に不平もない。一日中筆と紙相手に作業ひたすらで、それが楽しみといえはいえる。殿部隊といえよう。

10月11日（水）

二〇枚の条幅揮毫

青果物販売の成績をよく達成した農協二〇組織に条幅を揮毫してくれとの注文が前からあった。半切の大きさに統一し、二〇枚をそれぞれに違った言葉で表現しようと思い、まず文案を作り、その農協になるべくふさわしい表現をと思ってそれらをあてはめ選定を終り、次は実際に紙面に試筆する。そこまでは一ヵ月も前に出来ていたのだが、九月の多忙さで進捗はなく気になっていた。それを二回目、そして今日三回目、仕上げへと努力した。だが二〇枚となると簡単ではなかった。早めに帰宅できたので、今日こそと思って書

き進んだ。だんだん疲れると共に墨がなくなって五枚残ってしまったところで作業を打止めにした。我ながら思うのだが、一寸意地を張っているという感じ。でもこの仕事は少しずつということになると面倒である。できるなら一挙にと考える。ともかく大仕事ではあるが、嫌な感をもつことなくできるからいいのだ。

10月12日（木）

県評センターの発足

福岡県評センターの発会、そして記念パーティ。大手門会館で三八年の歴史が閉じられた。そしてセンターとして残り仕事が引継がれるわけである。昨年連合福岡が発足、その連合が十二月に装いを新たに再出発するのだが、公職選挙など政治課題が連合ではまだ継承されないで、センターという形で残余の運動の受皿組織が必要だったのである。総評も同じ形で転進した。日本の労働運動史にも新しい歴史が書き加えられるのであるが、政治の側面で、連合はまだ行方不確実であることを証明したともいえる。日本には日本の労働運動があるがそれが実は総評であったし、これを政治面であらわしたのが社会党の一面であった。今後は従来の総評・社会党ブロックは許されない。けれども放置できない、中央でも県でも、だから「センター」が作られたのである。このセンターの将来展望は誰ももたない。しかし必要という人が多い。今後の楯取りが注目される。

10月13日（金）

「発言取消」が多い？

去る五日の山本議員に対する答弁のうち一部取消しという事を代表者会議で了承。二時から本会議、九月議会は終了した。代表者会議で自民の浜中氏が、一連のリストができるほど知事の発言取消がある、発言には注意してほしいと注文をつけた。もめるか取消すかは選択の問題ではなかろうか。もめるよりましと思って取消を求めたにすぎないその譲歩の気持を汲むゆとりがあってほしい。今回のもめごとは私の「個人差」発言をめぐるものだが、公明党の北原守氏が、それは許されんと主張したことによるという。ひとの感想を「けしからん」といい、「理由を正そう」とか取消せということに至ったわけである。そう感ずるのかなと思って笑ってすませておけないものなのか、知事の感想も公的な場だから許されんという。それなら、やっぱり論議した方がよかったのではないか。公明党と自民党にそうした因縁づけの分子がいるのが残念である。「攻撃」の機をうかがっている。それが政治の手法の一つと思っている。嫌なのがどこかに待ち伏せている。それが政治の現実だろうが、きもつ玉の小さいこと。

10月14日（土）

総評センターのこと

新聞「社青同」の十月五日号総評センター設立、38 単産 357 万人でスタートという見出しを引用しよう。『総評は十一月二十一日に解散することを正式に決定したが「社会党とともに進めてきた護憲、反戦、反核、反基地など平和と民主主義を守る運動の継承発展」を行う「総評センターを九月二十二日設立し、理事長に真柄栄吉総評事務局長、顧問に黒川武総評議長が就任した。総評センター新「連合」が全運動領域をカバーするまで過渡的暫定的な組織とし、これに加盟したのは、自治労、日教組、情報通信労連、私鉄総連、鉄鋼労連など総評加盟五十一単産のうち三十八単産三百五十七万人（総評三百九十六万人の九〇％）となった」このセンターは政治局、国民運動局、地方局、総括業務局（国際部を含む）の五局から成り、先日発会した。福岡県評センターは地方局に関連をもつ。政治局には「社会党を支持し強める会」が、又国民運動局には平和運動団体が関連を持つ。要するに総評的なものを残すのである。

10月15日(日)

表装を習いはじめた是松さん

金木犀が咲いている。玄関で強いにおい。少々おそいのではないかと思う。表の庭の草を取る仕事で汗を流した。西側の壁やフェンスに這い上っているツタも切った。あれもこれもしたい庭仕事は一ぱいある。もう秋も深まっているのに、さほど秋を感じない。しめっぽい暑さがあってさわやかさが足りない。近頃の私の頭も同じである。運転手で退職した是松さんが来訪して表装のことを話題にした。四月以来習いはじめ、道具もかなり揃えたという。私の書を表装してもって来てくれたので、それは彼に贈った。退職したら表装を習うよう私がすすめたと言はいう。私自身そのことを忘れていたが、いい事だと思う。他に職を求めるといよりは趣味と実益が合致するならこれほどいいことはない。この仕事はかなり運動にもなっている。一人前になるには三年かかるそうだ。色紙かけも作っていたが、カネは受け取らないという。今回だけは甘受することにした。彼も興に乗ってきたという、結構だ。

10月16日(月)

県政研究会を作ってはどうかということ

仲好旅館の隣の「うえ田」で、県の安達、杉山と大学の徳本、衣笠、六人が集って夕食しながら県政を話題にした。県民の会、清進会、仲好会など知事のバックにはあるにはあっても殆んど死に態である。八丁氏がいる間はそれでも何とかバックのつなぎはやってくれていたが、彼の亡きあとその機能をする人物がないまま、一年半が過ぎてしまった。多くの方は八丁のあとのあいた穴には気付きながら代わって出てくる人がなかった。私も敢えてひとにそれを訴えなかった。今日はこの五人が「県政研究会」のようなものを作って若い人達にも働いてもらい何かの効果をあげようじゃないかということであった。二カ

月に一度ぐらい集って地方自治について話し合う仲間を作り理解し合おうというのである。私は三期目をいう人があるが、それは既定のことではないですよと念を入れておいたが、その未定さもふくめて、常に話し合う必要があるというのである。新連合福岡は未知数、県民の会も未知数なのだ。

10月17日（火）

関門のことを考える

新聞テレビなど報道各社の責任者を集めて県側三役広報課との懇談会を三光園で開いた。雑談の中で、彼等は私が「全方位」の言動をしていることに不満をつきつけてきた。いい加減に奥田色を出すべきだ。ケンカになってもいい、リーダーシップを発揮せよと主張した。私自身思わぬことではないが、それほどかんたんではない。話の中で、「朝日」の局長が、北九市のことにふれたのを機に、私はあと十年すると北九も立派に立ち直るといい、もう一つ、北九は南を向いてはいけない。福岡市に不平をぶつけることになり、九州の端になってしまう。北を向いて下関と組んだらきっと光が見えてくる。私は「新しい心の橋を架け」て下関との共栄を模索すべく提案する——と約束した。できれば十月中に末吉市長と下関を訪問するチャンスを見付けたいものべた。下関も今はさびしい思いをしているだろうからこちらから手をさしのべよう。関門橋はいい。綱引きでもして楽しんだらどうか。何か他にないかといったのであった。

10月18日（水）

救い難い状況にある県の工業試験場

夕方、商工部長らと来年度予算編成で念頭におくべき重点施策について話合った。私は四つの工業試験場の再編が大きな課題であるとの指摘を行った。のりこえるべきハードルの高いことは承知の上であるが、この問題は県の産業構造の再編策の上でのりこえなくてはならないことなのである。中央資本による重厚長大の、素材型の産業に偏っていた県工業の枷から未だ抜け出せないでいる。下請と親会社の依存関係の支配がまだ尾をひいている。大川、福島、福岡は伝統工業の試験場だし、八幡は独立しえない下請金属企業から超然とした試験場にとどまっている。独立の、付加価値を高めうる工業、あるいは高度加工型の工業になりきれない弱さをもつ構造なのに、それに対応できる試験場となっていない。それで過去何十年もやってきて、その惰性から自己脱皮できない、そこに問題がある。四試験場とも、他の機関によって置きかえられるよう時間をかけるほかなさそうだ。

10月19日（木）

三県サミットと二四時間空港構想について

二四時間空港の建設課題について全九州の理解を求めるといふ論議がこの九月以来にわか

に福岡で沸き立ってきたが、まず、三県サミットに出してみると議会で答弁した、その日がやって来た。事前の事務的打合わせでも、難航したようだが、今日の三知事懇談会でも全九州レベルの承諾は困難ということがはっきりした。高田長崎知事は、福岡空港をどうにかするということを福岡県レベルで考えるのであれば「どうぞ」といえるが、他県に協力してくれというのは受け取れないという。関西空港の場合と違うと彼はいう。九州ではどの県も空港をもち、国際線を一本でもふやしたいと願っているのだから、福岡が新空港を作って全部すい上げるような覇権主義的発想は応諾できないという。私もそうした主張は理解できる。今月末の沖縄での九州地方知事会でも、他県は、福岡構想に反撥し、軽くいなされるであろう。この問題は福岡—中央の話として扱うしかないのである。

10月20日(金)

蘭業のこと

昨日晴れていてくれれば柳川サミット川下りもよかったのに、あいにく小雨、今日からはかりと晴れて、逆でもよかったのと思った。お花で朝食会のあと、大木町に行った。三潞郡三町は蘭草の生産で活況を呈している。全国品評会で三賞のうちに入るらしい。畳表、花筵の製造過程、苗の生産現場など見学した。全く知識のない分野だが話をきき、現場を見るとかなり理解できる。但し、欧化現象が進む今日、日本の畳生活は縮小していくので、需要の開拓産地間の競争は今後ますますはげしくなるだろう。将来に期待したいが、この点楽観は許されない。畳以外のインテリアにどの程度向くものか、よくわからない。販路開拓、用途開拓こそこれからのポイントだと思う。生産量と品質向上は誰でもわかるのだが、PR、ニーズのキャッチ、振起に気づかないことが多い。デザインなど、ソフト面を忘れないように努力することだ。三潞の人々が米作にかえて黙々とこの方面で頑張っているのに敬意を払おう。

10月21日(土)

鐘崎—城山浦両漁協の姉妹結縁

鐘崎漁村センターで、済州島城山浦水産業協同組合と鐘崎漁協との姉妹結縁調印があった。この種の「姉妹」ははじめてのことではないだろうか。大昔から海女漁法その他をまねていたらしい。姉妹結縁の合意内容は次のようになっている。

- 1、漁業技術情報の交換と生産の比較研究
- 2、漁業関係者達の相互訪問及び研修交流
- 3、組合員子女の家庭訪問と民俗伝統文化交流
- 4、漁船の遭難救助と緊急待避協力

向うは済州道という単位の行政体がこちらの県に相当するらしい。韓国に向けての交流が近頃各方面で活発になっていく。歓迎すべきことだ。先日の三県サミットでは長崎県から

韓国漁船の不法操業をやめるよう働きかけることが提案されたが、旗国主義をとっている
ので、取り締まりが容易でないという。いずれにせよ、友好関係を深めて侵犯をなくした
いものだ。

10月22日（日）

東の庭の柿の実取り

一日在宅。筆を執る仕事は進んだ。ここ数日晴天。すき透るような青空である。外に出て
何かしようと思うのは当然。その中で、東の柿の実を取るのを思いついた。危険は承知の
上、梯子を使うのだが、斜面にうまく据らない。高柴さんの奥さんが出て来て危いですよ
という。落ちたら必ずマスコミに取り上げられる。その事を誰しも気にする。それに挑戦
する。だから念には念を入れて・・・大丈夫とは絶対いわない、自分にいいきかせる。烏か雀
かヒヨか柿をどンドンつついて食べている。熟して落果している。それに挑戦もしている
のである。立派な実でもない。価値があるわけでもない。でも二つの挑戦であった。一寸
した作業なのに汗ばんだ。落ちたりけがをすることもなくまずは終わった。それだけで思い
を果して満足である。でも考えてみると、そのような冒険をする年でもない。実に価値
を見出しているわけでもない。来年はやめたがいい。

10月23日（月）

高齢化対策に向けた行政の消極性

今厚生省は高齢化社会の行政施策は市町村でやれるように法体系を整備するようだ。市町
村が責任をもってやるのは当然ながら、そのための財政用意や実態調査は必要である。政
府は消費税は高齢化対策のために必要だとも宣伝している。しかし、ほとんど具体的な政
策は見られない。その点県も似たようなものでお寒い限りである。実際に施策を考えるの
は現役の者だから実感が湧かないのであろう。市町村もまた同じである。しなければしな
いで済むということのようだ。消費税が高齢化問題に使われるという保証はない。高齢化
の施策がいい加減に放置されていても、要求する側の声は小さい。私は高齢者の実態調査
を三役に提起してみたが、手ごたえのある反応はない。役人仕事に行動計画や対策本部を
作るところまではいくが、その辺で止ってしまう。一寸絶望的ともいえる。県より国の方
がましかなとさえ思える。

10月24日（火）

中曾根の仕組んだ国鉄精算事業団の権力濫用行為

国労関係者が知事要請にやって来た。野下、手嶋両県議が立会った。家族という女性三人
をふくめ八人ほど。国鉄精算事業団所属の者は来年三月で解雇になる手筋、雇用保証につ
いては国労所属者は差別され、それが不当労働行為だと訴えている。地労委はどの県レベ

ルでも組合側の勝利となる救済命令を出しているのに、国鉄・JRはそれに不服とって従わず、問題が中労委に持ち出されている。中労委も当局に不利な裁定をするかも知れないが、当局は次は裁判で争う構えのようだ。それで何年も何年も係争中にしてしまう。三月で解雇になった者は訴訟をつづける資金もないだろうし、生活費もないということになる。そういう不当なことが国家権力を背景に強行されようとしている。原子力発電、核持込み、戦争というようなことが私には類推される。恐ろしい時代になったものだ。JRが地労委命令に従わなくて済まそうというのである。恐ろしいことだ。

10月25日(水)

心に化粧を!

今日の福岡地区を皮切りに県民大学全県四ブロックの講義をすることになっている。テーマは「福岡に生きる」、サブテーマが「心に化粧を」である。青少年問題を武田鉄矢氏と語り合ったとき、(八月五日、よかとピア)彼が「心に化粧を」と発言したからである。私はそれまで「地域に化粧を」といって来たのだが武田氏のこの表現には驚いた。「化粧論」を唱えている私である。姫路で講演したとき「七褒めて三叱る」といったのが評判を呼んだ。長所をのぼし、欠陥をなおすのに必要なことを表現したいので七三論と称しているものだが、怒りたくても抑え、褒めるほどでなくても褒めるという態度、それが「心に化粧」という事になるのである。そのように、地域も長所をPRし、欠陥のないように、かくすように努力する、それが地域づくりである。福岡の歴史的地理的特徴をよく自覚し、それを活用し、福岡に住んでよかったといえる福岡の担い手になろうというのが講義の趣旨であった。

10月26日(木)

好況と企業進出、雇用確保の見越し不安

大阪で松下電器を訪問、当社が本格的な福岡進出を企画しているとのうれしい情報にこたえるためであった。福岡市に研究開発機関をおき、飯塚市にそのサブ機関をおくとの構想らしい。この大企画をきくと、日産自動車の荻田二号地への拡張展開の報とあわせて近来に珍しい明るいニュースである。日本経済の好調を反映して関西以東の日本は至るところ投資旺盛で人手不足が顕著になっている。福岡も新規求人倍率は一をこえているが、北九州、筑豊、大牟田の失業傾向が高いため全体としては人手過剰となっている。それで福岡といえども企業が新たに立地して人手が十分集るのかどうか疑問とする向きが少くない。失業傾向があるのは働く意欲の乏しいミスマッチが多すぎるといふ需給状況による。松下が進出しても大丈夫かと問われると、地元志向のUターン、Jターンをねらう行政アクションが必要との結論に達するほかはない。それと、この景気がいつまで続くかの疑問、農業の将来展望の不透明が心配として残る。

10月27日（金）

田川社保短の四年制大学への道が見えてきた

田川の社保短の四年制昇格は私の二期目の選挙公約であり、問題協議会の答申がOKサインを出してからでも一年になるのに、学事局の事務方の動きが鈍く地元からつき上げられていた。今日はその陳情も受けた。どう答えるかが問題であったが、事務方の下準備も漸く整い、設置準備室を作る段階に来ているとの答弁をすることができたのは、やっこの思いというところだった。こんどは校地の取得について地元の協力を求めること、教授スタッフを揃える大仕事が残っている。予定では三年後の四月新入学というということになるだろう。これで田川のイメージも変わろう。企業誘致に匹敵する。飯塚に九工大情報工学部が設置されて三年になろう。町がぐんとよくなって来たし、既存の近畿大学も呼応するような形ではりきって来たのが近況だが、田川に新大学ができると、一段と筑豊のイメージがか^マり、活性化に貢献すると思われる。田川の人達の気分も違ってくる。筑豊も石炭のあと、一山こえることになるわけだ。

10月28日（土）

新連合と社共

県職労が大会で社共共闘を否定し、第三期奥田県政は新連合でいくという意味の方針を出したという新聞報道が出てややざわついている。奥田県政だけが全国的に珍しく社共になっているのは事実。新連合を土台とするよう移行すると県職労がいったとすれば、少々勇み足ということになる。社共という紐帯は大事にしないといけないという主張はまだ根強いものがある。林武彦、岩崎隆次郎、竹村社党書記長などはその代表。県職は来るべき福岡県レベルの新連合に加入する。日教組は反主流派（共産系）の反新連合の除名さわぎをおこしている。共産党は統一労組懇を引っぱって新連合を事あるごとに批判している。私の周辺の旧知の人達の考えはやはり新連合に迷いを、残しているのではないだろうか。新連合に足をかけ共産党や統一労組懇にはブリッジという考えもある。新連合は総じて共産党を切れと主張している。困難な局面である。

10月29日（日）

全スポ一年前記念式典

全国身体障害者スポーツ大会が来年十一月三～四日に行われる。福岡国体につづく、とびうめ国体と並べて、ときめきのとびうめ大会と名づけている。その一年前記念式典が今日県庁跡地で行われた。内心ぎょうぎょうしいなと思う。式典が好きな国民だなと思う。わかり切っているのに大会旗の披露もあった。ぎょうぎょうしくすることによって盛り上がりを図るのか、そうしないと盛り上がらないのか、ともかく、それだけでも人、物、カネがたくさん使われる。今日の式典ではボランティアの手話についても大学生六人が代表で

紹介された。手話はきこえない人のためであろうが、他の障害者のためのボランティアは紹介されなかった。この頃は電機字幕も発達しているのだから手話に代えられる。その試みをしていいのではないかと思う。他の障害に対するボランティアも同時に強調してほしいものだ。ともかく障害(負)の共有についての意識高揚は必要なことだ。

10月30日(月)

福岡が国際拠点らしくなってくる

オーストラリアのクワンタス航空と日航とで福岡からの直行便週二便が今日から就航という。大使が来県になり祝意を表明した。行きはブリスベーンを経由してシドニーまで、帰りはシドニーから直行という。国際化のチャンスがまた新段階を迎え、福岡はますます注目されるようになってきた。今日は又福銀の新木会長が来訪、ももち中学校地の一部にインターナショナルスクールを建設するので、県の助成をとの要請である。今箱崎にあまり立派といえぬ施設でやってはいるが新校地では立派に外国からの職員の子供達を教育できるようにする。日本で三つ目とか、これで福岡もようやく国際的に顔向けできるようになるので、財界主導のこの運動が実ることを大いに歓迎したい。来年九月から開校できるように運びたいという。幼稚園、小、中、高の各段階をもつ、今のは五〇人ほどだが、新開校になると四倍にふくらむだろうと思う。政府も知らん顔はしないでほしい。県はこれに積極的な対応をしなければならないと思う。

10月31日(火)

個性をなくしていく沖縄

これで何度目だろうか四、五回は来ている。しかし今日は改めて沖縄—琉球について考えさせられた。来るたびごとに那覇市は近代化している。いいことでもあるし、他面淋しい。日本が、その歴史ある沖縄を、その個性を削り取って行く面が淋しい。ヤマトでないものももっと伝統的に残っていてもいいのではないか、残すべきではないか。料亭那覇では音楽、絃楽、踊り、言葉、料理すべて琉球の伝統に接することができたが、これもかなり近代風にアレンジされたものであるに違いない。太陽・緑・植物・海洋などいつまでも琉球でありつづけるであろうが、町や人間や行政、生活の中味はどんどん変わっていく。独自の言葉があったに違いないのに、文化とともにどう消されどう残されていったのだろうか、その経過はどうだったのであろうか。私自身あまりにも無関心であった。今は九州地方の一部で処理されているが、言語、風習、文化などもっと伝統的なものが重んじられていいのではないか。故郷を失いゆく沖縄の人々の心中を察する。

11月要記

やたらと多事多忙な秋がつづいている。次々にスケジュールが入り込み土、日、休日など

返上するほかない周が多い。週休二日制への完全移行が模索される中で特別職は例外との考えがあるからだ。あまり強く我を主張しないので、そうされてしまうのかも知れないが、やはり周囲が考えてくれなくてはいけないと思う。場合によっては私自身心を鬼にしなければならぬと思うことすらある。パラオへ慰霊巡拝団、長として行くのだが、これも半分切り上げて一般団員より早く帰国する。考え方によっては長期の海外旅行にならない方が私個人としては、いいことだと思う。知事という仕事は形式ないし儀式的場面が実に多い。行政改革とはいうが、儀式の方はますます煩雑さと頻度を高めている。「豊かさ」の反映でもあろうが、逆にそうした傾向は先進国に距離をあげられている。簡素化に努力しなければ人間社会の自殺行為にならないかと思う。国体の「スリム化」に竹井教育長や長倉県体協会長が抗弁したのを思い出す。その連中が片方で行革をいうのだから、個人名ざしが目的ではないが、ほんとうに、いい加減にせぬかといいたい。

11月1日（水）

個性を失う沖縄（くりかえして）

沖縄を侵して行った薩摩、明治、この大戦、思えばペルーを犯したスペインの如きか。アイヌを犯したヤマトか、何だかわれわれは罪悪感におそわれる。昨夜はかせかけ、加那ヨ一才、花風、谷茶前という五種の琉球舞踊を鑑賞させてもらった。すべて哀調をふくみ人間の善意をあらわしている。解説をみるが発音がよくのみこめない。言葉は文字はどうなっているのであろうか、沖縄人の固有の言葉が漢字にあてはめてあることはわかるし、人名もそうになっている。それは伝統で名前の方だけがヤマト風になっている。自治体名、島名もそうだ。固有名詞以外にも、敢て漢字をあてはめたものが多い。宗教はときいたら料亭の人は何でも今はあるが、祖先崇拜を基本としているのではないのでしょうかといていた。強力な国家、武力もなく、侵略される一方で侵略することのない一つの民族グループだったように思える。その沖縄が今どんどん個性を失いつつある。淋しいことだ。

11月2日（木）

ソ連での叛逆者サハロフ氏の来日

ノーベル賞をもつアンドレイ・サハロフ氏が読売紙などの招聘で来日、東京、札幌、福岡などで講演。ソ連での平和運動のゆえにひどい仕打ちをうけたが、今はペレストロイカという波の中で来日、自由な意見を発表できる身になっている。ボナー夫人、ヤンケレビッチ嬢とともにホテル日航での博士歓迎晩餐会があって私も招かれた。いまソ連、東欧諸国では自由、民主の波が大きくなるとなるとなると毎日のように報道されている。中国の六・四天安門事件も同じ波の一種と考えていいかも知れない。その背後に経済不振がありこれら「東」側の指導者はよく対応してないようだ。晩餐会のとき、他の学問はそれほどでないかも知れないが、政治、経済は不可分だという意味のことをいっていた。かつてはアメ

リカが、今では日本が、世界経済に大きな影響を与えている。それでソ連にも東欧にも中国にも変革の波がうねりはじめているようだ。政治の力だけが通用しないことが証明されているといえよう。

11月3日(金)

民衆レベルの文化が根付くように

「ひまわり号」が門司から山口に行くというので見送った。六年ぶりのことらしい。お世話する人は大変だろう。八幡では昔の起業祭が市民の祭になっている。市長が主行事に出席するという。粕屋町では文化祭、志免町では町制五〇年祭、今日私がかかわっただけでもこれだけある。文化の日又は今日から三連休、みんないろんなイベントで浮かれている。文化の日らしい行事がくりひろげられるのはいいことだ。でも福岡市のような大きな町になると、粕屋町のような文化祭の地域性はなくなる。いいことなのかどうか。人口は五万人ぐらいが適当という声があった。それ以上になると地域性が失われるということであろう。志免での書展、生花展、洋裁展、盆栽展は町民がこの日のために力をあわせ自己を發揮する試みをやっている。福岡だったらチャンスは多かろうが、没し埋もれてしまう人、自己をなくしたままになっている人の率が高かろう。遠くまでドライブに出る者が多かった今日、車の事故も少なかったようだ。文化の日なのである。

11月4日(土)

寮歌

寮歌祭と「くだおれ」での姫高会。心理学の中村秀先生と陸上の長野薫怨(熊本)が来てくれて例年と違う雰囲気になった。三木、田口の二人は姫高会だけの出席、歌をうたうのはもうしんどいといっている。岡田さんもだが、用件のため歌えなかったという。寮歌祭は白陵歌だけ一〜五全部スムーズにうたい進んだ。抑えようと思ったのだがみんなやっていると、ついどら声をはりあげてしまう。一瞬吾を忘れるのである。同期の土井、山村、牧坂は常連で、われわれ四人が姫高会の芯である。野村、高本、三木の医者三人もこの地に住みついているので常連ではある。白陵歌は谷義衛作詞、南恒郎作曲となっているが、他の寮歌どれもそうだが、当時の人はよく作ったものだと感心する。むずかしい言葉を並べているが、すべて様になっている。多くの人が口ずさむにふさわしい、若者の意気を高めるにふさわしい、歌って湧き出るものを感じる。後続がないのが何ともいえぬ淋しさである。

11月5日(日)

つかえあう
仕合の心

大牟田での淡交会九州地区大会に行って挨拶した。なまの言葉の方がいいと思って原稿は

机上においてきた。千宗室「一盃のお茶から」をもって行って引用した。「はい、おはよう、おやすみ、などはみな相手を素直に立てようとする自己の心の伝達にほかならない。人を尊重し、相手を立てることを茶道では仕合という。お互いが相手の気持になって、主人側からは「この一盃を差し上げましょう、客の側からは「ちょうだいいたします」ということになり、茶道はこれに尽きる」という意味の部分（一四三ページ）を話したのである。家庭のうちでも、親と子、夫と妻がそういう気持で毎日を送るなら非行も離婚もぐっと減るであろう。この大会の今年度スローガンが「やわらぎの心をつくろう一盃で、仕え合う思いがきづく和の世界」となっている。「仕合」とはいい表現、ポイントをいいあらわしていると思う。茶の道の心得はないが、平素願っていることが茶道に通じているので同感できるのがよかった。

11月6日（月）

ボランティアの周辺

「婦人の翼」（第七回）が十月下旬に帰国し、その報告をかねて今日午後メンバーとの対話のつどいが行われた。概して感じたのは旅行先のオーストラリアで、ボランティアと公共のマインドの水準の高さだったようだ。毎年この「翼」の人達が似たような印象をもって帰国するわけだ。それほどに、日本ではボランティアがおくれているし、公共心が失われていくのを修復する努力が不足しているともいえるであろう。「個」の突出という表現を用いるのだが、逆にいえば昔から村落共同体を維持してきたムラ行事、行為が後退し、行政への依存が強まり、各人が自分のことだけを追求している日本の現状への憂いを彼女たちは共通にもって帰ったようだ。みんなそう気づきながらどうにもならぬアセリがみえる。高齢者、障害者、環境汚染・破壊、青少年問題、家族関係など、緊急に、ボランティアも行政もそちらに目を向けねばならぬのに鈍いのである。アセリを私も感ずるこの項である。

11月7日（火）

五郎兄の戦死に関する情報

明後日パラオ諸島に団長として慰霊巡拝の旅に出るので、知っておく必要を感じ、先日来、九一、和代に電話して探ったが、二人とも五郎兄の戦死についてはあいまいな情報しかもたなかった。和代が兵庫県にきくべきだ（姫路市はわかってない）と電話してきたので、今日県の援護課を通じて連絡してもらったら先方は年金課で次のように知らせてくれた。「歩兵二二一連隊として北支から転進し昭和十九年六月十五日、西部ニューギニアのピアク島で戦死した」と。和代の話では、それは俗称東部隊といい、「玉砕」だというのである。今から四十五年前のことである。五男で大正三年か四年生まれ、二十四歳といえるのであろう。陸軍少尉、下顎貫通銃創をうけ（北支で）なおるのに半年はかかったろうか、又第

一線にかえされ、南方海域に転進、西部ニューギニアに上陸しようとしてたおれたと想像する。「つわものどもの夢の跡」というべきだろうが……

11月8日(水)

気分の曇り

やっぱり健康が気になる。昨日今日、日赤紺緩会などの行事に、かなり高齢の人が目についたが、気のさかんなものには敬服させられる。小池副社長は大正八年生まれという。元気にみえる。それに比べ自分の気力、体力のなさにあわれを感じず。今日の検診の結果は血糖一五八、尿糖++でまずまずで、肝機能も危険というほどではないが、いずれにせよこれら数値はよくないし、自覚的にも毎日頭のすっきりしない状態がつづき、肩がだるい、睡眠に不十分さがある、夜なかに二度も用便に起きる。頭にくるのだが、どうにも仕様がなない。途中起きないようがまんして眠りそこなうわけにはいかない。こんなふうで、どこまでもてるのかいつも気になる。さらに、近頃作りかえた眼鏡が適合しないようで、視界も晴れやかでない。眼鏡のせいにするよりは目そのもの、頭そのものが曇っているのではないかと思ったりする。気分爽快の境に達するにはどうすればよいのだろうか。

11月9日(木)

県西(中部)太平洋戦没者慰霊巡拝に出発

県慰霊巡拝団々長としてペリリュー島での行事のためパラオへ。随行はペルーの時は川上、今日は橋本、グアムに直行、二時間ほどトランジットとして待ち、同じくコンティネンタル機でパラオへ。十一時半に福岡空港発でパラオ空港着は十九時二〇分、八時間足らずの旅。遠い国と思っていたのにそれほどでもなかった。ペリリュー島は日本海軍航空基地がおかれていて、昭和十九年三月以降日米両軍の争奪衝突があった所。玉砕に至るまで七〇余日、陸海あわせて約一万人が戦死したという。四年前に厚生省がここに「西太平洋戦没者の碑」を建立している。今回は福岡県の慰霊巡拝記念の立札を立ててくる。県関係戦没者は三九〇〇余人。米軍は十九年九月十五日にこの島の南端部にある滑走路、海軍司令部に直接攻撃を加えて来て激戦となった。県兵士は満洲から転用されたものらしい。私も兄が西部ニューギニア、ビアク島で戦死ということが判ったので(十九年六月十五日)、その弔いという気持もこめて今回の巡拝団に参加した。つまり遺族の一人という気持なのであった。

11月10日(金)

自然のなるように、人間が従うのがよいのかも……

ベラウ共和国大統領及びコロール島首長を表敬訪問。オイスカ研修所を激励に行く。ここではじめてココナツの実の水をごちそうになった。農業や養鶏養豚のため、太平洋各地

から研修生が集っているこの研修所、島にはこれという産業がないというので、研修の成果が期待されると思うのだが、もう一つこの辺の生活事情が私にはピンとこない。共和国の人口は約二万人、パンや米は別として野菜など毎日の食料品は現地でとれたものが多いと思うが、農地というものが感じとれないこの国である。野菜は白菜かトマト、果物は多いが野菜が少いホテルの食堂。平地が少いせいもあるだろうが、農業の発展には林地の開発など大変な努力が必要であろう。だが他面、豊かな自然のもとで、何故働かねばならないのかという気持ちがあるかも知れない。この暑い常夏の国では汗して働く必要があってはならないのかも知れない。オイスカの近くで喬木とツタ類のたたかひを感じた。ツタのたぐいが巻きついて強い。刈り取ってやればいいのにとと思うが、放っておくしかないだろう。

11月11日（土）

慰霊の心、平和の心

十時半にペリリュー島に着き、西太平洋戦没者の碑の前で追悼式。また、コロール島への帰途、ロックアイランド近くで洋上慰霊祭。遺族ら思い思いの品をお供えし、ローソク、線香をたく人もいた。思いを遠く四十五年前にかえして「来てよかった」と嘆息をもらす者が多かった。比島の攻防に関連した激戦地だったという。涙するかわりに私は考えさせられた。「なぜ戦争をしたのだろうか」「なぜ勝ち負けだけを目標にするのであろうか」。悲惨、残酷、非道のきわまりの戦争。しかも「シラミ潰しの攻撃」と「玉砕」、しかも何万人という犠牲、何十日という長期である。平常心ではできないことだ。負けそうなら降伏という選択がなぜできないのか、この辺で勝負ありという判断がなぜできなかったのだろうか。思想や根性の問題範囲ではないであろう。洋上慰霊祭のとき、海に注いでいた日本酒、供養にささげ投げた折鶴、そしてローソク……何を意味していただろう。折鶴がいくつも静かな波に静かに上下し、平和の二文字だけを語ろうとしていたのが印象的。

11月12日（日）

久しぶりの海水浴

六時半に起床して荷物をまとめ、部屋の外に出したのに、パラオからグアムへの便が機材故障のため欠航ということで、夜八時の便までリゾートホテルで時間を費して待つことになった。県庁には電話連絡して日程変更のやむなきを覚悟してもらった。午前中もってきたパンツにはきかえ、ホテルの前の海に入った。海水浴とはいえないが、海の水に入り泳ぐ動作をしたのは何年ぶりだろうか、十五年も二〇年も空白があったのではないだろうか、パラオの沖の水は温く、まろみを感じられた。めがねをつけて海底の足もともみた。魚が自由に泳いでいるのにびっくりした。枯れサンゴだろうか、海の底から取りあげた。小さい手ごろのものは持って帰ろうと思う。昨日はペリリュー島での慰霊祭三〇分ほど強い日照のもと、玉の汗を流した。今日は皮膚を焼かないよう用心してなるべく太陽にまともに

あたらないよう気をつけた。三〇分余りの「海水浴」だったが気分は最高、これもグアム便欠航の産物である。賜と感謝しよう。このリゾートホテルが選ばれたのがまたよかった。チャンスがあれば再び来たい。

11月13日(月)

パラオ諸島に感謝して帰福する

ペリリューまで行き、グアム経由でまる一日おくれの旅から帰ってきた慰霊巡拝団は今日から後半の日程に入る。総括的にまず感じたのはコロール共和国の人達が深切で親日的なことだった。ペリリューのオレンジ海岸近くに厚生省が慰霊碑を建てている横に福岡県の巡拝記念碑を建てたのが、その用意から現場管理までお願いしてやってもらったということだ。第二は参加者がみなこの事業に付よろこんでくれたこと。私と前後の年配の女性も少なくなかったが、これら遺族の人達は涙を流してよろこんでくれた。第三はこれらパラオ諸島の観光地としての自立発展の可能の追求である。グアムはもう日本人がほとんどを占める観光地になってしまっているが、あそこは反面で米軍基地そのものである。パラオでは漁業、農業、若干の鉱業が行われているようだが、観光は将来急に伸びる分野だろう。それに付属する第三次産業も伸びよう。世界の人がさらに注目するミクロネシアの一部として動きが出ることを期待する。

11月14日(火)

(九大石炭研十年記念企画としての)石炭絵画展を見て

九州大学石炭研究資料センターで行った「石炭からのメッセージ」炭鉱絵画・写真展(於秀巧社スペースメディア MA)を見る。炭鉱の興廃、坑内外、労働の男女何や彼やえがいた絵画がたくさん集められていた。企画の仕方によってはもっともっと集まったであろう。ヤマがその興亡の中で何を語りかけているか、私は絵画だけでなく他の炭鉱関係の物も蒐集されているのかと思ったが、絵と一部写真だけだった。むしろ炭鉱を素材として絵を通して人間と自然のかかわりを訴えようとする企画なのである。今の段階だから念頭にあるのは亡びた炭鉱である。その視角でありし日の炭鉱、廃墟となった炭鉱を比較しながら鑑賞する人が多いだろうと思う。もらった図録のあとの方には解説があり、二種類の破壊のことが書いてあった。自然の破壊と人間の破壊、歳月の仕業というよりは人間の仕業としての破壊、その方がはるかに暴力的であり完璧であるという。炭鉱は存在が大きかっただけに、人間のドラマ自然の無情を含んでいる。

11月15日(水)

直訴に類する通信

県民から突如手紙、はがきが来て、対応に困惑するケースがよくある。一昨日も今日も、

知事なら何でもできると思うのか、何に対しても責任があると思うのか、できること、できないことあれこれあるのに、オールマイティと思う人が少くないようだ。今日のは地域のために尽くした亡父の胸像を建立してくれというのであるが、これにはまいった。手紙にくどくど書いているので、読むだけでも時間がかかる。秘書室にいわせると、それだけではなく、いくらでもその種のもの、もっと暴力的ですらあるものもあるんだということだ。逆に一昨日のハガキは刃をノドに突きつけたような前後の脈略がわからないブッキラぼうなもので、イエスカノーかと問うて来ている。読むのに時間がかかるより、何のことか考えるのに時間がかかる。失礼などはいいたくないが、この種長いの、短いの、いずれにせよ直訴に類するものはイヤな感じ。失業対策関係で陳情のハガキ集団攻勢、これまた困る。原課にまわすほかない。

11月16日（木）

落葉紅葉の季節

寒くなって来たし、庭に落葉が一ぱい。街路にも落葉が一つの風情を作っている。イチヨウの木はその下を丸く黄一色に染め、これも一つの風情である。時々思うのだが、この落葉はどこにいくのだろうか、落葉かき、落葉たきで始末するのはほんの一部分、それも人間の仕業の小さいことを証明するにすぎない。自然に葉が出て、落ちて消えていく。そうした自然の営みの偉大さこそが気付かれねばならない。一部で、木を切りすぎてハゲ山にする。ゴルフ場を作りすぎて自然破壊をするということが近年問題にされている。ゴルフ場では殺虫剤撒布で水質汚濁が下流の人から問題にされる。フィリピンのミンダナオには第五回県ラブグリーンの翼が飛び、二万五千本植樹するという。濫伐に対する雀の涙ほどのお返しといわれてもいる。酸性雨、熱帯雨林の話もある。大変なようだ。砂漠化の話も、……ただ落葉や紅葉をみていると有難味が深く感ぜられる。

11月17日（金）

物忘れが急速に進む

夕方になると右肩に一寸痛みを感じず。但しこの状況はむしろ以前の悪い時よりましである。頭の重さも同様である。いずれも少し回復かなと思う程度、しかし全体として衰え進行はいなめない。やはり足に来ているようだ。三日間ほど歩いてないから、歩の運びを忘れたのではないかと思う時すらある。今日は椅子を立つ時左腿に異常を感じた。又新しくかえた眼鏡がしっくり合わないのが気になる。視力の衰えだろうか。物忘れのひどいには更に驚く。毎日の接触ならいいが、タマに夕食に出てきたホーレン草に、これ何だったかと問い直す。通常ではとても考えられないことなのだ。ペリリュー島でおぼえた花の名も繰り返さねば出てこない。レイに使われた白の香りの高い花のことである。スナップ写真を見せてもらっても、そのシーンが出てこない。能力の退歩が日に日に感じられる。

11月18日（土）

国博誘致運動と竹井前教育長

九大教養部の松友会（OB会）があり、ひる頃訪ねた。今年は第一会議室が会場、十三回目とか。私が部長の時に提唱して毎年開かれ旧友たちの顔が見られるチャンスになっている。先日、地理担当の小林茂氏に会った時に、話していたので、今日又会えるかと思っていたのだが会えなかった。小林氏は国立博物館誘致について運動に関与している人で、九州会議、ミュージアム九州の編集にも協力している。「ひどい教育長でしたね」と竹井のことを私にもらしてくれた。「知事のこと悪しざまにぬけぬけといい、誘致運動を妨害しているように感じました」という。私は、その通り、竹井は高石の命をうけて奥田の足ひっぱりを使命としていたと思うと答えた。「あれが教育長を辞任して運動が軌道に乗ったように見える。ストップしていましたからね」と彼はいう。昨日のアジア博感謝の夕べでの立ちばなしだったので、そのつづきをもう少ししたかったのだが、・・・松友会は毎年誰か逝くので、その冥福を祈る黙禱もする。

11月19日（日）

社会主義協会的前途を憂える

黒田荘で社会主義協会の全国総会が行われていて、出席が求められ、中食を共にしてのち挨拶を行った。約二〇分雑感をのべた。十月下旬だったろうか、総評が解団し、三十九年の歴史を閉じた。協会は総評社会党ブロックの中で一つの旗振りの役割を果たしてきたのに、今後はその対象の場の一つが消えたのである。中曾根内閣の手により国鉄の分割民営化が断行され総評解体への筋が決まったとあってよい。かつての国労の威力は今やないし、この動きの中で協会も目標を奪われたとあってよい。今後協会の運動を続けていくためには運動の基本方針と大衆組織の対象が必要だろう。困難な事といえる。さらに、この種運動には何らかのカリスマ的存在が必要かも知れない。それに擬せられる人物がないように思われる。だから団体名を協同文化社と改称し、発行会誌名を進歩と改革とした延命努力は買うに値するが、基本方針と場、それにカリスマ的存在を見出す点で、前途は大へん暗いというしかない。

11月20日（月）

政治色抜きの新連合は混乱なく飛び立てるか

労働界が大きく変わろうとしている。明日、官民の結合を新たに「新」連合が発足する。会長に全電通の山岸章、会長代行に電機労連の藁科、事務局長に連合の山田という顔ぶれである。政治課題は棚上げし、生活、労働条件の改善を大目標にしている。さし当り抽象的には先進国なみの生活、その内容、住宅や労働時間などが問題とされるようだ。だが政治課題（支持政党も）棚にあげてということが通用するかどうかである。行革、教育、貿

易摩擦、環境（核問題を含む）などを一寸掘り下げるだけでも、政治問題にふれざるをえなくなるだろう。軍事問題、アメリカとの安保、非武装など一寸冷淡をよそおうことはできるかも知れないが、原発や環境汚染その他、いやが応でも政治にかかわらざるをえない生活上の国民課題は少ない。それに頼かむりして生活の向上改善をいえるだろうか。新会長山岸氏がいうように、飛行機にたとえての安全離陸すら新連合には困難が予測される。政治をさけるといっても政治は生活の重大面のかかわりをもつものなのである。

11月21日（火）

労働界の新段階

労働組合のナショナルセンターが今日三極分化を明らかにした。八〇〇万人の新連合と一四〇万人の全労連とが今日発足し、社会党左派系といわれる全労協（五〇万人）は後日だが両者とは別にスタートするという。官公労とくに自治労と日教組は三つに分解したようだ。総評解散後の政治課題に不安をもつというので、中央では総評センターが、福岡県評レベルでは県評センターが政治的課題を継承するために残留するという形になる。最大の新連合がどういう政治路線をとるかは明らかでないというよりは政治的に動かない方針というのが真実のようだ。それですむのかどうか予見できない。全労連が共産党支持ときめつけることもできないんじゃないかと私は思う。まだ流動の前途を残しているのが地区労だし、未組織労働者をどこが拾うのか、零細企業労働者や本雇でない労働者の利益を直接的にどこが旗立てて守っていこうとするのか、労働界の課題は多く残ったままである。労組依存といわれた社会党の行方も、この時期だのに、混沌としてきた。

11月22日（水）

新連合発足をまとめて将来を考える

昨日、西日本新聞の夕刊から「総評解散「新連合」発足の解説を引用しよう。——総評解散は民間先行による労働戦線の統一が、総評の主力部隊である自治労、日教組など官公労組合の最終段階での合流により、新連合発足という形で完結することを受けた既定路線の結論だ。労働戦線統一の主導権をめぐる攻防は二年前にほとんどの総評系有力民間単産も加わって連合が結成された時点で既に勝負がついていたといえる。この二年間は、総評系官公労内に根強い勢力を持つ共産党系の反主流派など左派勢力を「切るか切らないか」をめぐる総評、旧同盟間の調整の過程だった。結局、自治労、日教組は組織分裂し、労働界は新連合と共産党系を軸とする全労連、社会党左派系中心の全労協という三極分化構造に再編された——一段落した労働界とは逆に、これを機に、政界は再編含みの激動期を迎えそうだ。——総評センターも五年限り、社会党総評ブロックも解体に向う。

11月23日(木)

何かに没頭できないことの再自覚

一日在宅してあれやこれや考えたり、したりの自由な時間がとれた。だがいざ特定の義務課題がないとなると、何をしようかと思っただけで迷う。それでいいと肯定する。庭に出て鉢も好きなように並べ手入れできた。身辺整理は無限をなげくしかない。考えてみると、あれもこれも手初めただけでまとまって頭に入っていないことばかりではないか。例えば旅行するとたいてい旅先のことに興味がわく。ペルー、北海道、沖縄、パラオすべてこの夏以降のことだが、その歴史や特色について、そして本も買い読む。でもすべて少しだけ読んで終わっているのではないか。次々に他件がわが肉体をとってしまうからである。何をしているんだといたいだが、どれもこれも一寸の入門でおしまいになってしまう。万事そのようなものかも知れない。今日福岡の歴史を考える会の和田勇雄氏から姫路の御着の黒田の墓所、岡山県の福岡村に行ってきたとの便りが届いた。彼の身分だと没頭でき、最良の余生がえられる。

11月24日(金)

史跡発掘について中国側に打診してみる

中日友好協会会長孫平化さんほか二人が来福、六時から広州酒家で歓迎会を開いた。七二歳の彼は日本語自由で日中交流のことは手にとるように知り、顔見知りもたくさんある。便りあれば応ずる。中国革命四〇年、松本治一郎氏とは三六年前から友好の糸をつないで来たという。国立博物館誘致運動をしている県としては有力資料史料を得る目的で漢魏時代の中国史跡の発掘事業でもやってみたいと私はかねがね思っていて、九歴の田村館長とも相談し、今日はそれを孫平化氏に申入れてみた。所が国务院文物管理局が意外にそうした日本からの申入れを断ったケースがあるらしく、孫氏はもう一度今の政策を確かめてみて返事するからしばらく待てという。田村氏の方が乗り気で「発掘」まで漕ぎつけたいと熱望している。小西平太郎氏が史料(既存)の蒐集調査からでもいいのではというが、田村氏はそれはもう判っているので興味はそこにはないという。

11月25日(土)

思わしくない健康

朝のうち検診点滴。血糖値は二〇〇、尿糖はプラス三、食後一時間半だからこのあたりの数値にも驚きはないが、いずれにせよ、高くて要注意の状況の連続である。何を食べてもおいしいが、ひるま頭の霞が依然感じられ、睡眠が十分でない。これまたつづいている。症状はだんだん悪くなっているだろうが、とくにその自覚はない。ただこのごろ、足の衰えが感じられる。運動不足であるのは確かだ。でも平素の勤めにさしきわる程ではない。近頃悪化したと思うのが左上あごの歯である。少々痛みすらある。一年ももてればという

ことで温存していたのが、意外と急に悪化したと思われる。総崩れが迫っている、正月まで持つか否かの感じ。それに眼鏡。武田めがねでレンズの度あわせをしてもらって一ヵ月、遠近両用のせいか、ぴったりとはいえぬ。意地をはるようだが、これで我慢してみるつもりでいる、——つまり、どこもここも悪くて時に「終末」すら覚える。人生とはこういうものなのかと考えてみる。あれもこれも未整理のままに過ぎてゆく。

11月26日（日）

九州場所千秋楽と「千秋」のつどい

大相撲九州場所で小錦が、千代の富士の八連覇にストップをかけ、初優勝した。印象的な瞬間だった。彼は涙が止まらなかったようだ。私の体重の四倍をこす、それでも三〇kg減量だという巨人であるが、宿願を果たした訳だ。今年もこの日を利用しての「千秋」仲間の諸君の集まり。中洲の網元で行われ、十人の集りとなった。嶋津、河野の二人が世話役。話題になったのは二〇何年ぶりに現れた大石君。河野の努力で探し当てられたのだが、京都の黄ばく病院で精神科医をしているという。曲り廻って三六歳で京大医学部に入り六年で卒業、医師としてまだ経歴は浅いという。東定宣昌君も来ていて、教養部時代同期だったとのこと。珍しい人物、それが今宵は酔客となり大騒ぎとなった。河野、東定の二人がよく面倒を見、帰京列車を断念し、ホテルに泊めたという。十人の仲間は三時間もわいわい語り、笑いこけた。中西忍氏がよく発言していた。坂梨、岩永、浅野ら珍しい人にも会えた。樺島が来たのできくと、大阪に勤めているという、日立金属だ。相原も来た。

11月27日（月）

失業対策への就労観、恒常化してしまっている

松岡県議が失対就労の女性三人を伴って来室した。この春以来、失対の人達の要請が何波にもなってハガキ戦術でわが家に押しよせる。近々、その代表者と知事が会うことになっていると係の連絡だ。高齢者の引退線引き、夏冬の「ボーナス」を物でなく金銭で（又その引上げ）、「退職金」の大幅引上げといった問題である。緊就、開就、特開といった制度の違いから要請も少しずつ違っていることはいままでもない。事務方は県も国も態度は固い。産業六法の期限切れで就労もあぶなくなっているものがある。松岡氏が伴って来た例は、「退職金」の大幅引上げである。年金はまだつかないし、ついても三万円ほどの月額では食っていけないという。今政府は年金についての財政膨張に歯止めをかけるべく検討している。失業対策には「ボーナス」や「退職金」の概念はあてはまらないといっても、世のならわしではそう解釈している。失対は職業とみなされている。福岡県はなぜ他県より安いのかという賃金論的不満がつづいている。

11月28日(火)

向田洋子原作「あ・うん」を見て思う

建設省河川局、道路局への陳情のあと、東宝映画「あ・うん」を見た。映画の雰囲気を楽しむに味わった感じだ。私はなぜかドラマというものがあまり好きではない。ストーリーの中にひたりきれないのである。ドラマの中でストーリーを進めていく対話など何とはなく白々しく思ったりさえする。言葉や表情が作り物のように、すぐ思ってしまうのである。だから平素からテレビ・ドラマは見ない。話題作がいくらでもあるようだが孤立して知らん顔で通してしまう。ドラマとはそういうものなんだと思えばいいのに、なぜか許さない。今日のはそうではないが、近頃のテレビドラマでは特に女性の振舞に意識的な反撥を感じず。強い女、「女らしく」ない女、鋭い女、強気の女が通り相場になっている。もっとすなおに女が出てくればいいのに、ことさらにひねってあるように思える。女にもいろいろあるだろうから、いろいろに表現すればいいのに殊更らしい。だから一そうテレビドラマは好きになれない。ドラマだけではなく、画面に出てくる女は概して気取りすぎと思う。

11月29日(水)

石炭対策は迷路

産炭地問題について大蔵、自治、労働の各省への陳情を行った。全国の産炭地域六団体での陳情である。北海道、山口、九州とくに福岡の各地から集まり各班に別れての行動である。大牟田三池で掘る石炭は一年分以上貯炭の山で残っている。売れないわけ。大牟田に陸揚げされる外炭は三池炭の半額といわれる。どうにもならないこの状況である。三井は掘りたくないというのが本心であろう。やめたいが、周囲がやめさせないという事情もある。三井は三池を企業群団の中から孤立化させ、政治的社会的責任をできるだけ小さい組織で逃れたがっている。縮小に縮小をかさねている。三年連続大幅な人員減がおこなわれている。失業に追い込まれた人達はそれに反撥している。政府もこの状況への対応に苦慮している。石炭対策費、失業対策費、鉱害復旧費など国はいい加減にしてくれとっている。来年度予算で、これら国費がどう削減されるかわからない。地元としては激変だけは避けたいとしている。そんなわけでの陳情であるが、陳情の側にも大義名分や勢いが無い。

11月30日(木)

揺れる周辺

今日、福岡県評の解散大会が開かれた。三八年の歴史をみずから閉ざることになった。平和三原則からスタートした運動だったかなと思う。反合理化もおのずと採用された太い背骨であった。明日の新連合に運動は継承され、残る政治運動部分は県評センターという新組織によって担われ、補完されることになる。新連合が平和三原則や反合理化をどう消化

するか、否、それはもう無用になったというのか、その辺が明らかでない。これを不満とする官公労系が一年ねばったが、結局、連合に合流することになり、最後まで新連合に不信をいだく部分が全労連（統一労組懇系—共産党系に近い）として新しい結集をするという流れである。自治労、日教組はそのため引きさかれることになったが、大部分は新連合になだれ込むのである。ソ連、東欧は揺れに揺れ、国内でも自民、社会の両党もゆれ、公明、民社は伸びなやみ、共産は固くなってゆく。誰しも、世界的、国内的なこの揺れの向う側を当面見透すことはできないのではないか。

12月要記

とうとう今年も十二月になった。秋以来今年はとくに多忙だった。自分が使う時間がほとんどない。拘束されひとから見られる時間が多い。ひちりぼっち、したい放題、わが勝手という時間がほとんどない。だから、書斎の棚、床は雑然としている。積んだまま、整頓されないままである。先年は賀状を書かなかったので文句をいわれた。今年はどうするか決めようにも決まらない。私設秘書が必要といわれる。だが私にはその気が湧かない。以前は藤江君が色紙の押印などしてくれたし、手紙の整理のいとぐちぐらいはしてくれたが、今はそれすらひとにしてもらおう気がおこらない。十二月は県議会、来年度政府予算陳情など不可避な日程を消化しなければならないし、年末の挨拶まわりもある。刀出に餅つきにも行きたい。何もかもやりっぱなしのようになってしまうだろう。身辺をもう少し整頓できないものか、それが一番気になる。衝動的に時間を作って日記を書くことだけはやめてない。意地のようなものがある。読み返すと脈絡すらあやしいのがあるのに。

12月1日（金）

労働運動の新局面

連合福岡の結成大会。五一組織二〇万という。全国八〇〇万というから福岡のシェアはまだ小さい。三〇万人欲しいところといわれる。坂本氏が会長、鷺津氏が事務局長、粘土をこねたばかりで、これからどういう型にはめられるかという表現をつかってみてはどうだろうか。共産党側からいわせると右旋回というだろうが、連合を作った主導側は共産系ははいらせないといつている。排除するといっているのであった。だから全労連を作るしかなかったと共産党系はいう。そこに今回の労働戦線の問題が残る。ただ、共産党系の堅さは九〇年代の社会構造の変化に容易に対応できそうにないと私は思う。新しい産業分野がどんどんできる。いわゆる情報化、国際化、ソフト化の時代である。かといって新連合が小企業、婦人、未組織労働者の諸問題、地域問題、長寿社会によく対応できるかといえば、何のアクションもこのままでは期待できない。民社、公明が新連合にどう臨もうとしているのか、よくわからないが、バックになってもらいたいようだ？

12月2日(土)

豊前海区のこと

今夕蓑島漁協で豊前海域の青壮年代表との対話を行った。県下三海域のうち単位漁獲高が一番低い、栽培漁業の先進地区である。今後漁業発展の行政施策(漁礁、放流その他)が急がれる。やや特別扱いを要するという。いろんな理由があるようだ。まず、外海に面していない、狭い、潮流の流れがゆるく滞留がち、漁の回遊性魚対象は望めない。人工的海浜の影響で干潟が減少している。そのため、漁貝の自然増殖力が失われている。遠浅でヘドロが深い。ビニール袋などが底に沈み魚貝が死ぬ。最近はその傾向が強い。夏場は水温の差が生じ魚の生棲を妨げている。さらに、他の海域と同様に、遊漁者との衝突が多くなっている。総じて漁業後継者が育ちにくくなっている。収入に、漁撈に魅力がなくなりつつあるからだ。近頃はノリの栽培やカキ養殖に前途を見出そうとしている。新北九州空港建設の話を機に行政の手をさしのべる必要が増大している。

12月3日(日)

雑然たる生活空間

久しぶりの休日である。庭の落ち葉をかいたり、中にしまい込んだ鉢物にも久しぶりだろう水をやる。天気は上々で、部屋で揮毫していてもつい外に出たくなってしまふ。部屋の中に入れ込んだカニバサボテンは満開の状態。正月までもたないだろう。シンビジュームが咲いたのやはまだ蕾のやいろいろだが部屋の中で寒を避けている形である。是松氏が練習台に使ったという軸をもって来てくれた。単なる紙だけの時は何だこれだけのものと見えるものでも、軸にしてみると見ばえがする。衣裳なのだ。短冊や色紙も軸にして掛けるようにしてもってきてくれた。だんだん品物がふえてくるので置き場所に困る。いつも家にはないから、時と場合によって取りかえることをしないので、ついマンネリズムになり、掛けっぱなし、しまい込みのままに過ぎることになってしまうのが、残念だ。生活時間にゆとりがないから色つやも出ない。空間もまた雑然となってしまうている。

【「金星食各地で」(『西日本新聞』1989年12月3日)、「各地の冬空に金星食」(『聖教新聞』1989年12月3日)の切り抜き挟み込み】

12月4日(月)

福岡今日会に出席して

夜ニューオータニで福岡今日会があつて鵬雲齋家元の講話をきいた。利休切腹をめぐる話も出た。近頃二種の映画が制作されているのに、どちらも見てないが、両方にアドバイスをされた由。詳しい事情にはうとい私だが、秀吉との関係が決定的になるには利休の存在があまりにも大きすぎ、石田三成その他秀吉側近に嫌われ、朝鮮征伐その他の面で利休・秀吉が衝突してしまったとのこと。会場に行く車の中で随行の橋本氏に私は仏教とキリス

ト教の違いと共通性について発言したばかりだったが、秀吉はキリスト教について前後矛盾する立場に立ち、その点でも利休が切腹に至る筋道がたどれるらしい。要は、政治の面で切腹に追いやられたわけだ。政治が文化を、宗教を衝突させるのである。文化も宗教も登りつめると形式化して政治と接するようになる。「一盃のお茶をどうぞ」といい「ありがとうございます」という根元にかえることを忘れないことが大切である。今日会に出席してそういうことを考えさせられた。

12月5日（火）

夜須高原の自然にふれて

平成四年に県担当で行われる全国植樹祭の候補地である夜須高原を視察。緑化推進機構の大矢副理事長に來福してもらい位置決定をうけ新聞発表にこぎつけた。久しぶりに山を歩いた。足が軽いですねとなかば褒められた。夜嗟峨野で招宴あり、席上、山をテーマにいろいろ語り合った。若い頃の山にまつわる様々な思い出が話題となった。イノシシはもちろん、夜須や英彦など峰づたいに見るとシカもいるという。松茸の話は私が出し席にいる人達をおどろかせた。カンピ引きも思い出される。今日は山芋掘りの穴にも出くわしその話も出た。薪取り、山桃取りなど話題は尽きない。私が農山生活をしてきたことをみんなあまり知らないので珍しがることしきりで楽しいひとときであった。先日パラオに行って海の生命源としての偉大さを感じたが、今日は山について無限の生命形態を改めて感じさせられた。私達はそれら自然に包まれ育ってきたわけだ。夜須高原は人間がまだそんなにあらしていない便利のよい地点なのだ。

12月6日（水）

やわらかい食物

県済生会の勤続表彰式が今年は場所をかえて、ニューオータニで行われた。例年同様、あとで祝賀会になった。テーブルで私の右に土屋呂武さん左に永田院長がいた。話題のなかで、近頃の若い人の食に興味に移った。固い物を食べないということだ。アゴの発達、歯並び、そして骨、体力など問題があるという。食事のときお茶で、さらにひどいのはジュースで流し込むこともある。ツバが出ないともいう。やわらかい物ばかり食べ、流動物で満腹させるくせがついているのだそう。私達子供の時は歯でかみ切ることが少なかった。ソラマメ、イリコ、イワシその他固い物を食べなれていた。柿などそのままかぶりついて食べた。太い縄をかみ切ったりした。今の子はジュース、バナナ、アイスクリーム、卵、何でもやわらかい。流動的な食物が充満する環境で育っている。ふと、自分の孫たちがどう育っているだろうか気になってきた。生活を共にしてないので、言いきかせることもできない。

12月7日(木)

気候、時期、政治

汗ばむほどの暖かさがつづいている。夕食の時報道されていたが今日は大雪といわれる日なのに全国的に降雪が少なくスキー客をあてこんでの商売はあがりとのこと。海苔漁者は打撃が大きいらしい。農作物にもひびくだろう。ぐっと冷え込む日も近いだろうに、当面こう暖かいとよくない。めぐるべきものはめぐった方がいい。昨日今日対県陳情がつづいて私はてんてこまい。これは気候ではなく時期のこと。われわれも十二月下旬には大挙して政策陳情する。来年度予算編成にむけてのつめである。今日の陳情の中で九州林政共闘という予期せざる向きがあった。全林野労組の側からである。林野庁が企業的採算のために、ひとべらし、予算べらしをするので国有林の荒廃が進んでいるという。地球規模の環境問題が云々されている今日、この独立採算制の「堅持」はいただけない。知事から政府に何とか伝えてほしいとの要望であるが、世論の盛り上げに努力する必要がある。季節問題より政治そのものである。

12月8日(金)

低級な久保発言

十二月県議会の代表質問が始まった。今日は自民久保、社会若狭、農連大石の三人。大石は今回はいや味がへったが、久保発言は頭にくる。前にフクニチにいた自民書記の橋詰が書いた原稿に依った質問という。自分をなるべく高くみせ、知事をなるべく馬鹿にきこえるように綴ってある。室長にいわせると久保九州男は門司で自動車学校をやっている、人物は悪くないとのことだが、代表質問という公的な場で根拠のないことを知ったかぶりを取りあげて知事攻撃するなら、私は人物を疑う。今、東ドイツ、チェコなど東欧が揺れているが、社会主義を美化した大学時代をもつ知事の感想如何とか、今回提案している高校授業料値上げは公約違反ではないか、公約はそんなに平気でやぶれるものなのか、知事になってこれで三回目の値上げウソつきになるとか……又県予算のなかで社会資本投下が亀井時代より減っているのは知事が中央から嫌われている証拠ではないかとか……代表して自民党の株をさげるような発言がつづいた。ウソとまことが表になり裏になりする低度な弁だった。

12月9日(土)

馬に乗って

来年は馬の年ということで、広報のための馬場での写真とりがあった。二日市の馬事公苑では土井仙吉氏が通っている馬場とわかって親近感が生じたし、楽しみに来る客の七～八割が若い女性であると知ってびっくりした。古賀は来年の国体のために新設した県営馬術競技場だが、ここでも撮影対象参加者は女性群の中に男は一人だけであった。女と馬とい

うのは合うらしい。競技は男女の別なくやる種目である。二日市では乗馬に際し、左すねの筋違をおこした。乗馬というのは軍隊のとき、二度体験したにすぎない。満洲と久留米で、久留米では落馬し、放馬となり大問題になるところだったが、唸口な馬の方が宿舎にかえってくれたので助かった。花畑で電車が来て馬が前脚を高く上げてびっくりしたとたん、私は尻の方に放り出されたのであった。そういうことも思い出された。年をとっても馬に乗るのはいい趣味だと感じた。乗るとき降りるとき馴れるまで大変だということだ。障害物を乗り越える時には瞬間的に呼吸が合わねばならないので緊張しよう。

12月10日（日）

効用なき一日

多忙なら多忙で不平がある。だといって今日のように休みだと、さて何をするかとなる。落葉かき、鉢植えの水遣りなど、一寸外に出たくなる。幸い快晴。だが、裏のマンションは午後から大きな陰を作り、書斎など寒々しくなる。日照の場をさがすほどである。体調が気になる。近頃直接的には左上奥の歯、少しうずくように思う。もう寿命がないことわかりながら一日でもということ義歯をまじえブリッジしたのだが、やはりガタガタ、もうもつまい。その手入れがいつになるか、どこまで辛抱できるかである。自分ではまだまだだと思っても体の方から期限を切ってきてさうだし、他人からみるとかなり限界に近づいているとわかるようだ。主観と客観のちがいの一つの見本である。欲を節すること、希望も遠大にしないことにつとめたい。書斎であれやこれやページをくってみたが、熱中するような本もない。でも何となしに暮れゆく一日は結構楽しいものだった。

12月11日（月）

三期目？

県議会の最中となる。今日をふくめ四日連続の質問である。興味本位といおうか、第三期目の立候補についてどういう考えかという人がでてきた。それを考える条件にないと答える。今は二期目の仕上げに全力を注ぐのみというと、では次を考えていると憶測をたくましくするわけだ。選挙にしゃしゃり出る人ならいざ知らず、私の場合はその姿勢ではない。来年の国体の秋をどうクリヤーするかの方が当面の精力をそがれる。でもひとは（とくに議会やマスコミ方面）もう今時分からそれに関心を寄せる。今日の質問も、来年早々の当初予算編成は最後のチャンスなんだから、三期目をにらんだものになるのかどうかに関心が向くのは当然だという。私が答弁でそれに付言していると、自民党席から、いい加減にやめたらどうかと小さい声でヤジがきこえてくる。やめるなら候補選びにとりかかろうという人もいるようだ。そうでないならもう少し様子を見ようと思ってもいるらしい。ひとの思惑とはこのように微妙なところであろういているものらしい。

12月12日(火)

「ぶる」演説

一般質問の第一日、トップの薦野健。これが、こまぎれの質問をして登壇したり降壇したり。「ぶる」という言葉があるが、それがあてはまりそう。えらそうぶる、知ったかぶる、等々の用法があるが何ぶるといってよいだろうか。あれもこれもあてはまりそうだ。どの議員にも多少はそれがあるが、今日六人の中で薦野氏が著しかった。他の五人はむしろ好感がもてたし、「ぶる」といえるものはかえってなかった。ただ、自民の早麻氏は一寸違った。都市高速福岡の延伸問題と県の指定金融機関の二つをとりあげたが、ふつうならもっとスナオに言いまわすだろうに、どこかいわくのありげな問題提起であった。どことなくクセをもっていて動かしにくい感じ、近よりにくい感じがする。いずれにせよ、謙虚という言葉が薦野氏らに贈りたい。ひとが、こう思うのではないかということを考えて言動するのが望ましい。でも総じて質問、問題提起は県政にとって有難いことではある。

12月13日(水)

ひとをのしる場と心得られた議場

一般質問の二日目、畠中氏が田川地域振興についてひどく執拗にきさがつて議場内を緊張させ、みんなをいやにさせた。産業振興センターを田川に作れということで何回も質問に登壇したのである。ただ、私は畠中氏の気持はわかるので嫌な思いはなかった。田川だけになぜ作れというのかという点で他の人達に納得させる内容でなかった点、畠中氏の弱味であろう。それよりも私には嫌だったのは武藤英治(自民)である。これ又昨日の薦野とは違った意味ながら若さの故か、はじめから私を敵視していること明らかな態度の発言を連発した。「再度知事の決意を聞く」などというのは余計なわずらわしさである。国体への取組みがたらぬとか、募金が予定どおり集まらなかったらどうするのかとか、知事の熱意がないとか、ひとをなじることに専念する。こんなのがいると、熱がさめる方向に作用してしまう。議会は口ばかりとの印象すら残すのである。県政が前向きに動く力にはならない。議場が避難の場になっている。畠中はしつこく我利がみえすいているが、地域への熱意もあり、うなずける。武藤は熱もなく非難の目的だけが目立つ。県民のためにもならない。

12月14日(木)

議員の種々相

諄々と自分の主張を議場の外の県民にもわかるように説く人、出身地の住民のために政策を引き出そうとする人、自分の主張をぶっつけてくるが誰を代表するというよりは知事をこきおろして満足する人、傍聴席に支持者を招き入れて自分を高く見せようとする人、その他いくつかの分類ができようが、県会議員にはあれこれの特徴がある。県政課題のポイ

ントをえぐる人、県民が自助努力でやるべき一般問題を県行政依存にもたれかかってくる人、市町村の仕事、国の仕事だのに県に出動させてみたい人、いろいろある。議員は何をいってもいいが知事が言うと言葉尻までつまみ上げようとする人もある。一般質問が今日終わったが、委員会になると、それはもっと傾向が著しくなる。これが議会というものかも知れない。程度が低いと思うと高く、高いと思うと低い、そういう感じがする。逆に現れるのである。人間の政治的側面といってしまうればそれまでであろう。むしろ政治的すぎる人といおうか。

12月15日（金）

上京陳情

陳情上京トンボ返りの一日がった。県で陳情をうけるときはウルサイと思うことがある。それを自分でこんどは中央に対してやっているわけだ。おかしいとは思いつつも避けて通るわけにはいかない。自民党の県議は議場で、私がある件につき九州の他県知事が行っているのに代理ですませたと非難したりする。行っておれば何もいわぬが、行ってないことがあるとあげ足取りに使う。そうした意味においても動かざるをえないことがある。立場変われば理くつが変わる。今日はある箇所でも、来られなくても軽く対応されたケースがあった。まだ具体案になっていないのに、早々と押しかけてこられても、諾否はいえないし、呼び込みに挙手している県も多いので奪い合いのケースなのに、何とも返答の仕方がないわけだ。あの手この手で、何回でも陳情の波をとという声が傍からきこえてくる。今日の政治の特徴的な一面であろう。主体的な意思の有無をこえて動いている自分をみる。

12月16日（土）

ローフレンズの会

ローフレンズの年末懇親会に出席した。法律友の会という同好会である。大学時代からずっと私が今でも会長という位置にある。綜合法律事務所の白垣、辻本、前田の各弁護士、江藤事務長らの顔を久しぶりにみることができた。この種の会がもっとにぎわうといいのにとと思うが、今日の出席もやや淋しい感じだった。民法契約、交通事故責任、離婚、相続など近頃はますます事柄が多いはずである。悪徳商法に泣く老人も少なくないし、親の面倒をみず行政に老人生活の面倒を見させておいて、遺産の事に及ぶと権利を主張する欲深い人も少なくない。遺産のことで兄弟争いをするケースもめずらしくない。身近かなこうしたことで気やすく法律相談するという日本人の習慣がまだ定着していない。問題になってからきびしい争いに入るのではなく、日常的に知識としても相談相手としても配慮がほしい。

12月17日（日）

中国機のハイジャック

中国民航のハイジャック、福岡空港にて犯人御用、昨日の午後のこと。天安門事件（六月四日）に関連しているともいわれるが、どちらも中国の国際信用を傷つけたといえる。ソウルに着けよと要求、乗員が連絡したらソウル側が入港拒否、福岡に着くしかなく、ここがソウルだとドアを開けて、犯人が外を見ようとしたすきに乗員が犯人を突き落とし負傷させ、一件落着きという。犯人も不用意きわまる計画の足りないことおびたしい。本国に送還される訳だが、今は負傷で入院中。夫婦子一人の三人乗込みだったというから、これまた奇妙。妻と子は犯意をもたぬといっているらしい。ポートピア事件が頻発したのを思い出すのだがこの寒い時期だから今は類似の事件はないが、どうも中国が嫌になって逃げ出そうとしたのだと説明されているが、ハイジャックするとはお粗末というしかない。実態はよくわからないが、逃げ出したくなるような中国の事情があるのだろうか。逃げうるならそれもいいのに。

12月18日（月）

井手宗夫、教育庁にはせせら笑いたい気持

「知事保留」というのをよきチャンスとして名をあげたがる議員が何人かつづく。とくに今日は文教常任委で県民クラブの蔵内、自民の井手、住吉、公明の宮崎、県立高校の授業料値上げをめぐる俺達は反対だ、値上げは知事公約違反ではないか、と喰い下がってくる。「だろうと」ってという程度の根拠でいいたい放題の知事攻撃。審議ストップをまずねらう。今日気付いたのだが、当の教育庁高級幹部はこの知事攻撃に裏で拍手を送っていて審議ストップにも冷やか。例によって井手は悪質低級、値上げについて知事は県民に、この十ヵ月具体的に、いつ、どこで、どう説得し納得を求めたのかと追及してきた。そんな具体的言動ができる訳がないのである。県民との対話をいう知事が十ヵ月間何をしてきたか、と「対話」を逆手に攻めてくる。馬鹿なと私は思うが口には出せない。授業料値上げを議会上程の前に県民に説いてまわれる筈がない。でも井手は蛇がにらむような顔つきで攻めてくる。

12月19日（火）

フクニチ朝刊報道（19日）

【「高校授業料 知事選絡み再びやり玉 値上げで知事追及」（『フクニチ』1989年12月19日）を貼付】

12月20日（水）

環境と家族の危機

ルーマニアでの軍民衝突、全国境閉鎖が報じられている。共産圏諸国といわれた国々で、相次ぐさわざである。東西ドイツでは共同体づくりが早くも論議されはじめた。社会主義

諸国では一様に自由への渴望がふき出ているようだ。東ベルリンの人が西ベルリンへ行く自由が与えられ、まず何をしたかといえばアイスクリーム、チョコレートを買ったとのこと。言論の自由などずっと向うにあるといわんばかり。チョコレートを食べる自由が今後どう発展していくか、思うに無限に欲求はひろがるであろう。逆にいえば、自由はほんの初歩的のところまで閉鎖されていて、遂に爆発、誘発したのではなかろうか。但し、放任された日本の自由が環境汚染にまで至っていることを反省せねばならない。さらに他方、家族の崩壊にもつながっていると思われる。環境と家族、これは（社会主義国ではなく）われわれが自由の裏返しに、考えてみなければならぬ課題である。何回も、どこに行っても強調したい点である。

12月21日（木）

特別職報酬引上げ審議の件で折れる

十二月県議会が順調に閉幕。反対がないとの予測がつき一括採決で議長が采配、一寸ないスムーズさであった。私の願うところであったが、他面もし漏れていて騒ぎになるといけないとの懸念もあった。それは私の特別職報酬引き上げ審議委員任命拒否の件である。議会を含め大騒ぎになっても、審議員任命はしないようにと家永参議に伝えたのが一昨日、彼は副知事にも相談してみるといって出て行った。林県議にも伝わり、大変だという事になったらしい。職員長も動きを制止された。私は月曜日の文教委における追及が頭にきたし、審議委候補の名列の中に高田源清がいることも頭にきたからである。昨日一日関係者はピリピリ動いたらしい。議会終了後林団長、林副知事が私を説得、次いで富永副知事も高田についての説明を含めて報酬引上げ問題を先送りするわけにはいかないと、私を説得しに来室した。私はケンカする気をくじかれ、説得に応ずることにした。しかい、あの文教委での追及と高田は許すわけにはいかない。知事報酬を高田が審議することは許されない。

【欄外記入】

〔高田は西日本短大・消費者協会でワンパンマンぶりを発揮、まだ県にしがみつこうと
している。消費者協会が高田を推挙してきたことに私は不信をもつ。私を敵視しては
ばからぬのが高田である。〕

12月22日（金）

ゴウゴウ

疲れてしまう日程。決起大会のとき目をつむっていたら知事は眠っていたというように見られた。新幹線の大会の形がよくない。（於赤プリ）帰りの機内でも読物をする気にもならず眠りもせず目をつむる時間が多かった。エンジンのゴウゴウたる音だけがきこえる。轟々の轟であろうが、轟々の轟だろうが、あれこれいろいろにきこえる。永劫の劫にもきこえ

る。つまりどこまでも不変につづいているようにも思えるのである。また業ともとれる。己れとエンジンだけの出会い。突如として落ちたらと何回も思う。エンジンはうなりつづけ、不思議にも平穩に着地してくれてやれやれと思う。でも高田源清のことを考えると業がわく。なぜこんな目に合わねばならんのだろうかと思う。機内で随行の橋本氏に日程がつまりすぎだと苦情をいった。一日十時間が限度と思うがそれどころでない、週40時間労働といわれる今日、一倍半は拘束されつづけている。でもこれも業かなと思ってみる。「疲れておられる」といいつつこき使うのだから。

12月23日（土）

無休の嘆き

今日も朝から晩まで、年末のあいさつまわりで、ぐるぐる南から北へと県下をかけめぐり。体がすり削られる思いである。新天皇の誕生日で祭日にかわった。昨日から小学校も休みに入ったのに、私には年末まで休みはない。明日も日曜だが同じくあいさつまわりで、あと上京となる。この激務、九月に入ってからとくにひどいと思う。土、日、祭、まるで働きづめと思うような状態。九月から土曜閉庁ということになって（週休二日制の土曜閉庁）も土、日は外で仕事という日程のくみ方である。誰が悪いのかといっても自分以外に最終の責任者はいないだろう。こんな激務は長つづきしないだろう。会議で目をつむっていると怠けているようにひとは見る。こんな損な立場はあるだろうか、非情の世界である。車の中ですいすい眠れるならいいだろうが、それができない弱みである。今日も一五〇キロは走っただろう。疲れが残って眠りがさらに足りなくなる。夜は就寝するのがやっとというほどに明日につなぐ仕事が残っていく。

12月24日（日）

句の現代化を思う

東條会館で夕食の時「花つくし」をふくおか会館で試食してもらった話から、近頃の米作、農作業に話題が移った。すっかり様子が変わった今日、考えられないような言葉がでてきた。林副知事、床嶋所長、家永参事ら皆筑後地方の農業の体験をもっているせいもあって話があう。私にも理解ができる。現在でも田植じまいの競争の風は残り、お互い機械貧乏やむなしと思っているとか。それにしても私かに思ったのだが俳句の季語のこと、田園の風習はすたれ、興味をもつ若者も少いようだ。昔の言葉は通用しない、理解されない。歳時記な改編されているはずだが、半ば廃語といってよい状況である。句誌をみても、老いたる人々の同好誌のように感じさせられる。強いて難解な語を使っているようでもある。懐旧、望郷に酔っているとすら思える。若い人はスキーやカラオケに思いをはせている。そこからは今の句界の句は生まれぬ。農作業の話をきいて、以前から脳裏に去来していた俳句のことが又浮んだ一時であった。

12月25日（月）

陳情で駆け抜ける

例によって来年度政府予算案決定に向けて各省庁への陳情の波全国からおしよせ、われわれもその波まくらの一構成分子となる。陳情書、名刺、みやげ品をさし出し、ご本人不在の時はよろしく伝えてくれといい、本人の時は概略説明する。内示に盛られておれば謝意を伝え、不十分だと積み上げを、ゼロ内示だと復活を頼むことになる。運輸、建設の両省が一番ごった返していた。課長クラスまで陳情しなくてもと思うが、この辺がキーを握っているに違いないので、避けられない。各県がやっているし、財界などもやっているだろう。廊下は一ぱい、息ぐるしいくらい。外の冷たい空気にあたるとやれやれと思う。が又次の役所におしかけていく。階段の上り下りで身もくたくたになる。陳情の趣旨を間違わぬように、ポイントを要約していうようにせねばならない。大臣、次官、官房長などには項目が盛りだくさんある中から選び抜いて説明言上せねばならない。昔、昔どうしていたのだろうか。外国はどうやっているのだろうか。日本はこれでいいのだろうか。

12月26日（火）

募金目あての行政？（肥大国家 行政依存主義）

公明党国会議員とマツヤサロンで政府予算案向けの朝食会を終え、経団連に花村相談役を訪ねた。来年の国体募金の実績が今思わしくないで、福岡に支店を持つ企業に協力してもらおうよう東京で少し動いてほしいとの趣旨である。花村氏は経団連でそうした要請をうける部署をこなしてきた経歴をもっていることで有名。現に衆院選が近いので自民党に一〇〇億投出したばかりとのこと。彼の話ではあと三〇〇億円との要望が出ているが、困ったもんだと。政府も税金を取りながら何かといえば「民活で」と近頃いうが一種の通り言葉、民活方式だと又又寄付なんだ。もう少し「民活」を考え直してほしいとの意見。今回の予算陳情の中でも、第三セクターとか特殊法人とか「方式」手法をかえて民間から資金を吸い上げ、財政支出を抑えつつ効果を高めようとの考えがあちこちに見える。寄付、募金を引き受けさせられる方はたまったものではないと彼はいう。国体のことは別に協力もするが……と。寄付目あての行政批判ひとくさり拝聴した。

12月27日（水）

兄弟子どもに電話

九一、一彦、啓二、章と四箇所に電話して私の年末スケジュール、先方の都合などきってみた。一彦らは二十九日に福岡に、啓二らは明けて一日に福岡に行くという。私の方は二十九日に佐方に、又同夜姫路に行く日程としている。お正月とはいえ、お互いに招かれざる客といってよいだろう。むしろ義理、人情の結果ともいえる。章の電話口での都合は、女手もないし、その日はゴルフに行くとのこと、笑いながら迷惑そうだった。私に秘書

随行があるから、そういうのである。仕方がないではないかと私もいった。一時間ほどお邪魔してひきあげるからと伝えておいた。啓二に、車での往復は危険だよという、否定しなかったが、福岡は遠すぎるよといていた。あるいは航空賃に費用がかかりすぎると思うのであろう。尤もなことだ。誰だってカネは使いたくないだろうに、家族ぐるみ動くとなると高いものにつく。佐方ではおばあちゃんが来年五月で米寿を迎えるとのことだ。移りゆく。

12月28日（木）

松田隆夫氏来る

晴れて今日も外気は快く、年末とは思えぬあたたかさ。国レベルでも納の杯に入るまでになっている。東京事務所の政府予算対策本部も最後まで私がいたのは珍しいことだろう。

天寒水鳥自相依　　天寒く水鳥自ら相依り
十百爲群戯落暉　　十百が群をなし落陽にたわむれるが
過盡行人都不起　　すぎつくす行人にどれもとび立たず
忽聞水響一斉飛　　忽ち水音を立てて一斉にとび立った

泰観（北宋一〇四九—一一〇〇）蘇軾の門人

夕方、もと北海道の全林野にいて友人の交通事故問題で挫折し、今は千葉県八千代市で暮している松田隆夫氏が東京事務所に訪ねて来た。ひとの保証人になることは道連れになる危険性もあることを十分察知してかかるべきだということを改めて感じた。善意と友情だけで世は渡れないことを知らされる。高校三年の次男が大学を断念しているとのこと。

12月29日（金）

五郎兄戦死について弟たちに話すことができた

年末には餅つきをするので集ろうと言い出してから四回目だろうか。九一の家の作業場で、晴久の家を集まる場として、兄弟三人と晴久らが集まる。今年も何とか日程を割くことができ、今晚到着した。正午すぎに姫路に着くことができたので、龍野中学の同窓三人と中食会をし、あと佐方に一寸立寄り、六時半からアジア博に来た人達との思い出の夕食会（於NTTしらさぎ会館）をして後、晴久宅に投宿することになったのである。この秋県の慰霊巡拝団々長としてパラオのペリリュー島に行くチャンスを得たので、その折を利用して兄五郎の戦死の様子をつかみたいと考え、県の職員に頼んでできるだけの資料を集めてもらい、ニューギニア西部のビアク島での戦死をつきとめ、周辺をできるだけコピーにして、夜寝る前だったが、九一と晴久に戦死前後の状況を説明したのであった。和代は家の都合でこなかったが、五郎兄の戦死当時の模様を伝えただけで、大仕事をしたような思いであった。

12月30日（土）

田辺（本家）を訪ねる

ふだんは全くごむさたしているのに、昨日田麿仁氏と酒の席での話から今日ひる前に田辺を訪ねることになった。利夫さんは全く無口の人ながら快く迎え入れて下さった。ツヤ子さんもまだまだ元気で口も軽かった。仏前にまいらせてもらい、若奥さんが茶をついでくれ、話のタネに過去帳をみせてもらった。くわしく点検するゆとりはなかったが、天正年間から記事がある。昨日の本家の和夫さんの話では、あの家が二〇〇年は経っていて修理に頭をなやませているとの事であったが、田辺の方は門扉も三〇〇年はたっていそうだし、門を入ると両側に作男と女中の居室が今でもある。物置に使っているとのことであるが、過去帳の中には酒井の殿様に金を奉呈し、苗字帯刀を許された家族というような記事がでていた。有為転変というか今は平凡な家庭ではあろうが昔の面影が偲ばれ、重みのあるたたずまいが気に入った。こういう古い家屋はとりこわされることのないように方法はないものだろうか。

12月31日（日）

昔をなつかしむ習性

今年の五月連休明けにアジア博にバスツアーで来福してくれた人達を中心に一昨日六時半から姫路新幹線口 NTT しらさぎ会館に二〇余人が集って私を囲む会を開いてくれた。晴久と九一が中心になって集めてくれたらしい。吉田、黒川の同級生、甥の裕一、雅明も来たし、刀出の自治会からも幹部が参加してくれた。福岡ツアーではお世話になったとよろこんでくれ、今日又二〇人も集ってくれたのである。このごろ書いた原稿に鮭の産卵川上りのことにふれたものがあつたが、人間にも歴史的探求ではないが源流に遡る習性があるように思えるので、別れの挨拶のときに、一年一年故郷がこいしくなるという意味のあいさつをしたのであつた。よいお年を迎えて下さいとってわかれたものの、みんなそれぞれに年を重ねていっている。よく集ってくれたものだ。前田先生も来てくれたが、それぞれに思いを源流にはせていたのだと思う。吉田は何回でも、学校の横に飼っていた豚の尻を叩いたなあといった。あげればきりがながい、こうしてなつかしみ楽しむのはよいことだ。

年末所感

来年度予算案の陳情で走りまわった年末はいつに変わりはないが、ここで編成された予算案があとどうなるのか。来年二月に総選挙が予定され、現議員の心ここにない。一様に選挙区に目を向け身をおく。暮れおしせまって前文部次官高石氏が、やっぱり三区から立候補すると宣言したため報道も大きわざの年末になった。いずれにせよ、自民は過半数を制すると思われるが、参議院の「逆転」が、どうはねかえってくるか依然として問題である。

すんなりと新年度政治が動き出さないだろうということだけは確実である。そのせいか、年末陳情の中でも自民・政府が柔軟な姿勢を見せるようになったことが汲みとれる。陳情中の社会党との懇談会の時ももらしていた人があるが、野党のいい分に政府の役人も耳を傾けるようになったようだ。さて他方、年末のルーマニアの民主革命、これはひどいことになったものだ。現職の大統領が人民の波の中で処刑されたのだから、暫定憲法でやっていくとはいえ、これが他国に影響を与えないとはいえない。世界的規模での政治の動揺がひろがると、当然経済交流にもひびいてくる。来年は不透明といわれるが、むしろさらに激動がつづくだろう。今年がどういう余震を生むかわかるような気がする。国体の準備は進んでいるというのに。

補遺

一月十八日 数日間の上京である。例年の新年度政府予算陳情が、今回は年末リクルート問題や売上税関連法の混乱国会のため、次年度予算政府原案が伸び伸びになったためである。数日間滞在のため、読み物の中に新歳時記を入れておいた。虚子編だが、全くといってよいほど戦前調のものであることに改めて驚かされた。よく見たら昭和九年初版、昭和四五年改訂増補二版という。本が古いのではなく、我が知恵が古いのである。近頃全く本屋に行っても見ない、近年向き歳時記があるに違いないのに、縁を求めようとしなかったのである。今の若者にはほとんど通じないしろものである。古典といえいいんだろうか、表現の仕様がな。若者の生活体験の中にないものがほとんどだからである戦前と戦後というか、都市化と農業社会というか、親自然と物余り現象というか、そうした違いがはっきりうかがえる。昨日「朝の放送」の内容についての討議の中で、「地域づくり」が問題になっていたが、「地域づくり」とは何かのコンセンサスが大変むずかしいという事実、実感を私が披瀝した。その疑問の中で私は、泳ぎを例に出して次のようにいった。私どもの子供の頃は夏の遊びの中に川での泳ぎがあり、その場が泳ぎを身につけるだけでなく、魚を取り、走りまわり、ケンカをし、大人からいろいろの自然や礼儀その他の知恵を教えられ、それら全部が忘れ難い、育ての大地、育ての故郷の一部であった。勿論そうした遊びの毎日の中で泳法にたけ、記録が伸びるというようなものではなかった。今はその故郷古里がない。泳ぎはプールで、時間は定められ、料金を支払い、泳法を身につけ、記録を伸ばすべき先生がついている。自然とか社会の諸条件はむしろなく、泳法と記録があるだけで季節すらない。あるいは水泳は体育運動という目的に絞られてしまっている。私ども子供の時は泳ぐ場所も決まっていた。今の若い人はどこであれ、施設条件のよいプールであればよい。古い歳時記から、こんなにかわった現代をいやというほど印象づけられた次第である。

二月二十六日 風強くやっとなりの上がった直方遠賀川土手での直鞍地区第三回凧上げ大会。

凧匠の石井氏の工房まで見学しての後、長靴はいて石井氏に手伝ってもらって、彼の作品ブンブン凧を私もあげた。凧が引いたり私が引きつつ走ったり約十五分間、手をすべらせて終に放凧になってしまった。何が機縁になってもいい、こうして二千人、三千人の人達が河川敷に集って一時楽しみ、賞を競うということが、地についてくると名物づくり、地域おこしになる。人々のふれ合いがあり、それから地域のリーダーも生まれるし、団結もできる。直方物産振興会も応援してくれていた。「活性化」ということがよくいわれるが、それには決った方法はない。凧上げ会もその一つだ。

四月三十日 京都の都ホテルで朝刊をみる。福岡県教委はずかっていた教育長竹井の辞表を「一身上の都合」というのではなく、「引責」という理由により二日に受理の方向だと報じている。事柄をより厳しくした訳だが、それで県民が納得するかどうかだ。高石のパーティ券を一〇〇枚教育界で組織的に購入し処理おしつけをしておきながら、「知らぬ」といい、後に「部下がしたこと」と逃げて、県議会でウソ答弁をした、これが県民の知るところである。質問した共産党の高議員の立場、それに県議会の立場はどうなるのであろうか。ウソを言ってあとでウソだとわかったらやめればよいということのようなのだ。実相は依然明かでない。竹井自身も自分が引きうけた分は一枚使ったがあとは捨てたといい、十五枚受け取った福岡市の教育職員は使わずに十五枚捨てたといっている。常識的にいって券は捨てていいものか、代金は払ったかどうか、その辺明らかにされなくてはなるまい。捨てたら責が逃がられるものではあるまい。買ったけれど捨てて行かなかったという事もありうるが、「捨てた」といって逃避しようとしているのが解せない。それが見逃がされるのが解せない。引責辞任ならあと又文部省に引きとってもらって文部役人としてつとめるのか。六月県議会でてんまつを詳しく説明する義務をまぬがれうるのか。どうも事態を闇に葬り去ろうとしているように思えてならない。

九月三日 ベトナム難民の九州への漂着が次々に報じられる。日本に行けば何とかかなるといって勧誘する仲介手引きをする人がいる。中国人がその中でかなりな役割を占めている。国境というものがどう作用するものか、島国者にはよくわからない。韓国漁船の密漁は毎度のようにきく。ペルーではアマゾン側にはかくされたヘリポートが六〇もあって、そこからどこかの国へ麻薬が運び出されているという。政府は取締らないのか、取締れないのか、密通していて中で利得をえる役人がいるのか——難民漂着を許さぬといって追及するのがよいのか、誰しもみんなに納得のいく対応は考ええないようだ。経済大国労働力不足なるが故の悩みである。国内の企業の中には低賃金を求めて外国に立地するのがある。中には日本に製品を逆輸入するのがある。外国に立地できない業種もある。原料なら安く輸入できるが、労働力は安く輸入するというわけにはいかない。企業の中にはそれが可能なようにしてほしいと国に要望する向きがある。だから密入国は国内からも糸を引いてい

るのである。すでに後継者不足、嫁不足で、フィリピン妻を受け入れている農家があるとは周知の事実で、その妻は、金がいくらか自由になれば逃げて帰るともいわれている。人的国際交流は昔とちがって今は一そうややこしい

十一月九日 からっからの十月だったが、ここ一週間は降ったり曇ったり。今朝七時に起きたが昨日から小雨がつづいている。八時四〇分出発、福岡空港からグアムへ、そしてパラオへという旅行。たった三泊だが、異国に旅立つとなると心は少しそわそわ、何か忘れてないかと自己を責めてゆすってみる。気候が違うので余分のものが必要ときかされ、それが気になる。自然の中にとび込むような気でおればいいのだが、県下から遺族が三〇人、団体役員や県、両都市など役人添乗者が二〇人加わって五〇人になる。その方の人に気を配ることの方が大変だろうと思う。県議会から監視役が数人同行するのでこれも要注意。

十二月二十七日 昨夜東京事務所に読売の記者が私を訪ねてきた。警視庁づめという。用件は私に確かめたいことがあるという。ホテルの部屋に招き入れた。昭和六十二年三月二十三日知事選告示の日、朝鮮総連の二〇人ばかりの人と会い(ニューオータニ、あやめの間)政治献金五〇〇万円(以上)受けとったそうだが事実かということなのである。この秋、国会レベルで自民社会両党間で「パチンコ疑惑」が相互応酬となり、その真否のさぐりの中から、どうやら警視庁が福岡の知事選も同様疑惑があると洩らした模様である。告示の日にそんなことがあったとの記憶は寝耳に水であるので、〇×の返事はできない、そういう記憶はない、もらした側に報道させればいいじゃないかと私は答えた。一期目の選挙の時も「お布施事件」で毎日と西日本の両氏が奥田夫妻が寺まირიした事実として報道したのだが、それは絶対ない、見ての証拠があるのかと抗議したら毎日側が「県警がそういっている」と応酬してきた。「警察がいうことは真実だということか」とつきかえしたら、毎日側は黙りこんでしまった。その後は毎日新聞の購読をやめたのだが、そのような対応をする新聞社は潰れた方がいいと思う。私は六年半前のこの例を出して、真実と思う者が書けばいいではないか、と読売の記者にもいっておいた。又来ますと帰っていったが、今日は来なかった。事のなりゆきが県秘書室の杉山に流れ、林県議にも流れたが、寄付金の受納など絶対ないからとの電話がはいった。五〇〇万円ならこの日記帳より厚いカサである。そんなのを公衆の面前で知事が受け取ったというのは、いかにも作り話ではないだろうか。警視庁はこの時期に何かをねらっていると思われる。読売の記者は仕事柄とはいえ、いやなねらいを携えている。橋本弘道、原沢敦と二つの名刺をおいて行った。パチンコ疑惑も相打ちに終わったようだが、まだ警察に根が残っているらしい。朝鮮総連は危険団体だと警視総監が庁長官がいった経過があるが、そういう目でものを見ての結果ではないだろうか。

【「出納録」への記載】

◎2月21日～22日 済生会病院での健康診断結果、摘要

- 1、体重 53kg
- 2、血圧 21日 128～88mmhg 22日 116～60
- 3、蛋白、糖 ともに(－) 早朝の糖尿値はマイナス
- 4、肝機能は異常
GOT 70
GPT 97
γGPT 21 その他等々
- 5、糖尿病は1600kcalでかなりコントロールされている。オイグルコン 1.25mg 服用中
糖尿病合併症は病歴の割に軽度といえる。
食養生を徹底したらよい。少量の経口剤内服で今後も合併症の進展を予防できるだろう。
- 6、眼底の出血、白斑は認められないが、年に2度検査の必要性がある。
視力 右 1.0、左 1.2 (自分のメガネで)
老人性白内障がごく軽度あり。
- 7、尿素素 触診上前立腺肥大は軽度
但し、定期診察を要す
- 8、胸部エコーの結果
肝臓辺縁が鈍で慢性肝炎
- 9、肝細胞ガンのマーカーであるAFP(胎児タンパク)が軽度上昇しているのが気掛り 慢性肝炎のためかも知れない
CT、エコーでは異常なし
但し、2ヵ月1回肝機能AFP、エコー検査が必要である。

自然公園大会と常陸宮^マ両^マ妃

11:38 福岡空港着、出迎え

前日 アジア博、ホテル日航晩さん会

◎7月26日(水) 志賀島国民休暇村、自然公園大会

11:00 休暇村着 中食、前視察

14:00 常陸宮両殿下休暇村着 出迎え

14:57 式典場着 出迎え 先導 県環境局長 田代

先導者、環境庁長官 山崎竜男

出迎者 自然保護局長 山内豊徳

式典 15:00 国立公園協会長 池之上容

知事、県議会 (三木)

参加者約 3000 人
次回は福井県

- 16:02 市長 桑原 市議長 山崎広太郎
見送り 本館着 16:07
- 17:32 レセプション会場(大会議室)
先導者 知事
開宴あいさつ 知事 乾杯 市長
- 18:12 レセプション(終り)退場 先導、知事
- 18:30 レセプション閉宴
- 19:38 営火行事へ 先導者 知事
営火長のことば 知事
- 19:51 営火点火 両殿下、知事、野外活動隊
歓迎のことば 市長
歓迎のつどい
- 20:34 営火引継 福岡知事→福井知事、あいさつ
結びのことば 国立公園協会長 池之上容
- 20:40 退席見送り 知事先導
翌日 ひよ子、九工大情報工学部 空港 鹿児島へ

よかトピア 171日間の決算、9月4日西日本新聞

入場者数	8,229,399	平均1日	48,125
うち夜間入場	1,011,906		14,456
自動車	698,927		4,087
うち自家用	676,898		3,958
バス	22,029		129
迷子	5,626		33
忘れ物	8,530		50

10月13日 今日はニューオータニでの田村圓澄さんとの対話の中で、私から漢字と国家統一の関係について思いをのべ意見をきいてみた。肯定的であったが、関心を寄せていたという風ではなかった。帰宅して又書道全集第9巻日本Iの冒頭の吉沢義則氏の日本書通史大和奈良の項を読みかえした。彼は漢字渡来までは日本に文字はなかったといっている。だが田村さんもいっているように私も志賀島の金印は日本人が漢字を読み理解するグループをもっていた事を物語っていると思うし、紀元57年に中国から金印を授領したとすれば、漢字について、それ以前から教養あるグループ指導層があった事を物語る。吉沢氏は渡来の時期ははっきりしないといい、その究明の姿勢は示していない。そして文中応神時代からははっきりいえるという。3世紀ながらこの時代は長い、といわれている。その前

が神功（摂政）の時代で卑弥呼魏に使者を送る（印綬の授領）は紀元238年とされる。志賀島金印との違いが170年もあって、何の研究の跡も誰からも示されていないようだ。日本に字がなかったというが、漢字の渡来は探ってしかるべきではないだろうか。285年（応神16年）百濟より王仁が論語と千字文を献じたといい、その前年百濟から阿直岐が来て稚部子王子の師となるとされそのときから日本への漢字の渡来の事実を起こすようだが、これも卑弥呼の史実より50年ほどあとである。国家形成の周辺で漢字がかなり動きをみせていたことに注目し、究明が必要とされる。田村さんにはそういっておいた。吉野ヶ里の発掘で世間は大いにさわぎ、考古学者を中心に沸いているが漢字は発見されない。稲作文化の伝来は多分中国江南地方からだろうといわれながら、漢字の跡がみえないとすれば、江南には漢字がなかったといえるのであろうか。土器、銅器、ガラス、墓制などに興味を示す学者は多いが漢字に興味を示す人はどれほどいるのだろうか。論語と千字文という古事のごとく、宗教（哲学）と漢字、又は仏教と漢字は相伴っている。それは国家統一に不可分な文化とっていいのではないか。宗教々義、文字、中央への求心力を付与する軟式武器だというべきだろうし、それなくして武力だけの統一はできないのではないか。武器・武力は日常の用具ではなく、日常は宗教的なもの、文字が武器の統一力と併存するのでなくてはならぬ。吉野ヶ里はむしろ戦乱時代で、そのあとに宗教、文字の必要が生じたはずと思うがどうであろうか。勉強の時間がないので無知のままだが、近頃以上のようなことを考えるようになった。この考えを探究してみたいと思っている。

【「贈答品控」欄への記載】

一寸した旅行日程の時、わずかな時間でも読んでみようと目加田「漢字日曆」をもちあるく

<p>百千寒雀下空庭 小集梅梢話晚晴 特地作団喧殺我 忽然驚散寂無声</p>	<p>（たくさんの寒雀が庭の空地に下りて来て そのうち何羽かが梅の梢にとまって夕暮れに鳴いている とくにここに来て集団をなしさえずってそればかりに気をとられていたが、 突然何かに驚いたように飛び散ってあと静まりかえった</p>
<p>楊 万里 作年一一七八南宋 漢詩日曆（一月二九日）</p>	<p>一九八九年一月二十九日、夕方五時、まさに暮れかかろうとする寒天、この晴れた日、雀ではないがモズがわが家の西や南に鋭い声を立てつづけに糸を引くように啼いていて、この詩と似た気分を味わうことができた。この日曜の静閑な一時であった。</p>
<p>雪晴雲散北風寒 楚水吳山道路難 今日送君須盡醉 明朝相憶路漫漫</p>	<p>雪はれ雲散して北風寒し 楚水吳山の道路は行くに苦勞す 今日君と別れの杯酔いつくせよ 明朝になってお互離れ離れへだたってしまうのだから</p>

賈至

唐七一八一七七二の人 前掲、二月二十六日、 今日は直方河川敷での凧上げ大会、
雪晴雲散北風寒の天候だった

漢詩を読んでも今は日本で使わない字が盛んに出てくる。そんな詩はやはり親しみにくい。
時代の流れを感じさせる(十二月二十四日)

{	秋叢繞舍似陶家	{	秋叢舎をめぐって陶家に似たり
	遍繞籬邊日漸斜		遍く籬邊をめぐり日漸く斜なり
	不是花中偏愛菊		是れ花中に偏に菊を愛するならず
	此花開盡更無花		此の花開きつくして更に花無し

元稹(唐七七九一八三一)白居易と親交あり

秋の残菊の時期の風景がよく出ている。いろいろな草も枯れて風にゆれているのに、
菊がわずかはなやいでいる。

春宵一刻值千金

花有清香月有陰

歌管樓台聲細細

鞦韆院落夜沈沈 鞦韆(ぶらんこ) 院落(中庭)

春夜、蘇軾(北宋一〇三六—一一〇一)

【「住所録」への記載】

悴^{かじか}む、胼^{ひび}、皸^{あかぎれ}、霜^{しもやけ}焼などの文字を虚子の歳時記から見つけ出して呆然。昔は子供や老人には寒風の中でいくらでも見られた身体状況であったが、今は見ない。被服はもちろん暖房も発達しているからである。凍傷もあったときく。今日の句には季題にならないのだ。私の記憶では皸の経験はないが、他はみなある。耳の霜焼は毎年常習だった。皸に膏薬を流し込むのを見たことがあるが、膏薬なんて今はないのではないか。それに季題に関係ないが、“青ばな、を垂らす子供が少なくなかった。これ又冬の現象。私は減多にないが、他によく例があった。チリ紙が使われない時代、袖で拭いたり、口にすすり込んだり、袖はそのため光っていた。文明の低い昭和初期の現象でもあったのだ。(1.21)

農具の分類

出土農具は開墾・開田に使用する起耕具、地均しなどに使用する整地具、収穫脱穀に使用する収穫脱穀具、そのほか除草や堆肥さらに運搬作業などに使用する補助具、水田や用水などの管理に使用する管理具に大別できる。起耕具としては鍬類、鋤類、ナスビ形木製品類などがある。整地具としては杵、杷がある〔杵エブリ、土をかきならす器：いかだ、杷は地を平にする器、えのついた器〕。収穫脱穀具として石庖丁(石製穂摘具)、木庖丁、鉄製摘鎌や堅杵、横杵、臼がある。補助具として田下駄、大足、槽、槌、薦編具(編錘、

目盛り板など）がある。管理具として用水の護岸および井堰・畦畔に用いる杭などがある
（Museum Kyushu No.31 山口譲治、杵と臼、より）

杵は水巻にある地名で珍しいと思っていた。竿の先に厚い板をつけ鋸状の凹凸をつけ穀物をまぜたり地ならしに用いた。杷も同じものをさしている。サライとも読む。